

あなたの人生を 生きる勇気

清美の物語



清美Dumont

Kiyomi

あなたの人生を 生きる勇気

清美の物語

清美 Dumont

目次

白い雲のように
アメリカ生活
最愛のひと
戦争のない国スイス
ドイツへ逃避
イタリアのサルディニア島
優しいスイス人
スイスでお産に立ち会う
木のサンダルと猫と放浪者
ジュネーブの中国人医師
スペイン自転車旅行
トイレなき家
スペインで子羊を育てる
日本帰国、何処へ帰る？
高架下の立ち食いそば
瞑想とプロポーズ
耳にピアス
コミュニケーション
ドイツの西ベルリンへ行く
ジョン・クロードとの出逢い、その2、ベルリンの壁
新たな始まり
フランス
スイスで再出発
初めてのインド
ジョン・クロードと初めての1年間旅行
・インドの火葬
・シンガポールでシャル・ウイ・ダンス！
・日本、父と温泉に行く
・日本、クレジットカードが使えない
・オーストラリアの冒険
スイスへ戻ってきたものの・・・
再びインドへ行く前に
インドで信頼を深める
・ティオマン島とラッフルズホテル
・ボンベイ発チューリヒ、ファーストクラス
スイスライフ
・何事もあきらめない
・人生、今だけ
・ドイツ語と肺炎
・盲腸で入院
・プチバカンス
・父と弟のスイス訪問
・新しい人生への出発
インドで知った弟の死
・新プロジェクト

北 インドのタージ・マハル

ワールドツアー

- ・ バリ
- ・ オーストラリア・カンタス航空でシドニーへ
- ・ フィジ、ハワイ
- ・ サンフランシスコ、ニューヨーク

イタリアのトスカーナ



白い雲のように

オフィスにしている南向きのこの部屋には、朝からトスカーナの柔らかい日差しが入ってくる。

トスカーナに住み始めてもう11年、この日差しに魅せられて、長年住み馴染んだスイスを去った。

その日差しを身体に浴びながら、長い間手にしなかったアルバムを、ふと開いてみた。

最近では写真を殆どパソコンに保存しているので、アルバム自体見ることはないが、それでも手元には4冊ほどのアルバムがある。全て、フランス生まれの伴侶ジョン・クロードと一緒にあってからの写真ばかりである。

一番大きなアルバムを開いてみた。

最初のページに、二人が初めて会ったときの写真が張ってある。もう30年前になる。

二人ともとても若く、幼い顔をして無邪気に笑っている。ジョン・クロードは髪も髭もまだ真っ黒。

この30年の間に、二人で本当に楽しくやってきた。そして様々な経験をして、それは現在も続いている。

出会ったときから、「自分自身を信じて」と私に言い続けてくれた彼に、愛と感謝の気持ちを忘れた事はない。

見上げた窓の外に、大空をスクリーンにした白い雲が漂っている。アルバムには載せきれなかった人生の数々が、ふんわりと浮かんでは消えて行く。

ジョン・クロードと出会うまでの、1973年から1983年の10年間、私は既にヨーロッパに住んでいた。

その10年間は、自分のエネルギーに背中を押されるままに初めて日本を出た私が、まずはアメリカに渡り、その後、ヨーロッパのいろんな国に住みながら、それぞれの国の伝統や習慣に触れて行った、楽しく、そして少し辛くもあった時期である。

始めて日本を出たのは、日本でスイス人の画家に出会ったのがきっかけだった。高校を卒業して勤めた銀行の仕事が好きになれずにいたところ、神戸の歯科医療器具店が秘書を探している、と知り合いの女性がわが家に話を持ってきてくれた。話はとんとん拍子に進んで、私は神戸に行くことが決まった。3年間勤めた銀行を辞めるときの、嬉しかったこと。

神戸には、幼稚園に行く前からいつも一緒に遊んだ、幼なじみが住んでいた。いつかは一緒に住んでみたいね、と二人でいつも夢見ていたが、私の神戸行でこの夢が実現した。

神戸に引っ越し日、身長が私の肩までしかない小柄な母が、ベッドを積んだトラックに乗って一緒に引っ越しを手伝う、と言いだした。母からは叱られた覚えのない私は、母と大変に仲が良かった。

「帰りはトラックに一人になるけど、いいの？」と何度も確かめたが、「平気よ〜！」と母は明るく答えた。

大阪から神戸までの数時間、トラックの運転手の横に並んで座り、観光旅行に出かけるような気分で、二人楽しく話をしながら揺られていったのを、今も覚えている。

太陽がサンサンと輝く、素晴らしいお天気の日だった。

母は、娘がどんなところに住むのか見ておきかけたのだろう。そして、手元から離れていく一人娘と少しでも長く一緒にいたかったのだろう、と今になって判る。若い頃はそんなことをちっとも考えなかった。

そして、この神戸行きを境に、私の人生が大きく回転した。

23歳の時だった。

神戸に住み始めて1年程経った頃、ある人の紹介でスイス人の画家ペーターに出会った。身長が1m80cmある人で、私より5歳年上。細身で、背中の真ん中程まである長い金髪をポニーテールにして、優雅に動く男性だった。

2〜3度一緒に食事をして、私は彼に恋をしてしまった。というか、彼の金髪に、彼の優しさに、彼のエレガントな動きに、日本の日常生活では見られない姿に、恋をしてしまったのである。

丁度ペーターは、新しい絵画技法を見つけた時であり、自分の絵を世界中に広げたい、と大きな夢を持っていた。それを先ず日本から広げたい、とある人を頼って日本へ来たらしいのだが、この世界、そう簡単に有名になれるわけがない。

知り合いにガレージを貸してもらい、そこで絵を描いているらしかったのだが、絵が売れないのでお金がない、お金がないので食べられない、という状態がずっと続いていたようだ。あまりの空腹に、木のテーブルを削って、それをチューインガムのように噛んだこともあったと聞いた。苦勞する人は、いろんな経験をする。

そんな訳で、二人のデート代はいつも私が支払ったが、私はそんなことは全く気になかった。大好きだったフランス映画の中に自分がいるようで、毎日が楽しかった。

ペーターは、お金はないけれど、お腹は空いているけれど、そんな素振りは微塵も見せず、いつも優雅に話をし、歩く人だった。ひょっとしたら、どこかの貴公子かな、なんて思ったこともある。

そんな、夢心地の日が2・3ヶ月続いたのだろうか、ある日、彼は全く予期していなかった事を私に言った。

「実は、アメリカで個展を開く予定があつて、数週間後にはアメリカへ行くことになっているんだ。航空券も既に持っている」

「……………！」

私の目の前に、映画の「The End」の文字が浮かんだ。

ああ、とうとう、この夢物語も終わりになるのか・・・。

ショックで何も言えないでいると、「一緒に、アメリカに来ないか？」と彼は更に驚くことを言いだした。

「ええ～っ？、そんなこと、出来るわけがない！」と言った瞬間、私の心の奥深くに眠り続けていた何かが沸々と沸騰し始めた。

そしてその何かに押されるように、私は「行く！ アメリカに、行きます！」と言ってしまっていた。

その日1日、私は自分の発した言葉にボーッとしていた。

私は一人娘で、2歳違いの弟がいた。いつも両親から「お姉ちゃんなのだから、しっかりしなさい」、「お姉ちゃんなのだから、お行儀良くしなさい」と言われながら育った。それが私の中に深く浸透してしまったのか、どこへ行ってもお行儀のいいお嬢ちゃんですようになった。

学生の頃も、銀行に勤めだしても、夜遊びなど殆どした事がない。

今考えると、何とももったいない事をしたものだと思うが、両親を心配させたくないと思う、いいお嬢ちゃんぶりが、いつも何処かで顔を出していたのだ。

そして遊んだ経験がない私は、23歳の歳になっても自分がどんなことをしたいのか、自分はどんなことが好きなのか、全く理解できないでいた。唯ひたすら、人形のように何も考えずに毎日を生きていた。

そんな私が、ある週末に神戸から実家に帰って、「私、アメリカに行く！」と突然伝えたのだから、どれだけ母をびっくり仰天させたことだろう。

私の中で眠っていた冒険心が、ペーターに出会ったことで突然爆発し、その炎はメラメラと燃え上がり、どんどん大きくなるばかりであった。自分で自分が信じられなかった。こんな力が、一体何処に隠れていたのだろう。

私は、もう自分を止めることができなくなっていた。

巷では、サンタナの「ブラックマジックウーマン」という曲が流行っていた。

アメリカに行きたいという件は、仲が良かった母には言い易かったが、父には母から伝えてもらうことにした。

そして、明治最後の年に生まれた父は大反対をした。

それはそうだろう、23年間大事に育てた一人娘が見知らぬ男にくっついてアメリカまで行くというのだから、何処の父親だって反対するだろう。

ペーターに一度会ってもらったら、きっと父の考えも変わるだろうと、彼に我が家まで来てもらったことがある。

ところが、父は部屋に胡座をかいて座り、断固として彼を家に入れるなど言い張った。

「わしは白人が嫌いじゃ」とまで言った。

父は第2次世界大戦で中国大陆へ出征し、戦後はシベリアに拘留された経験があるので、白人と聞けば敵、と思うのも無理はないのかもしれないが、戦争が終わってもう20数年が経つのだ、それを今言われても……………。

私は、父の前に土下座をして、「どうぞ会ってください」とお願いしたが駄目だった。

それに比べると、女は男よりも柔軟である。母は外に佇んでいるペーターの所へ出てきてくれ、言葉が通じないのに、「娘のことをお願いします」と一生懸命ジェスチャーで伝えていた。

180cmもある彼の前に150cmもない小柄な母が立っている姿は滑稽だったが、彼女の勇気ある姿に私は感動した。

それでもこの日を境に、両親は私のアメリカ行きを納得してくれた事になり、それから私は、アメリカ行きのビザ取得に走り回った。

アメリカ領事館は、神戸にあった。神戸から大阪に住む両親の家に帰っていた私は、何度、領事館に足を運んだことだろう。

行く度にこの書類が足りない、あれが足りないと言われ、何度もがっかりさせられた。一度は閉館時間1分後に到着してしまい、どんなにお願いしても門を開けてもらえなかったこともある。

しかし、ビザが貰えなかった一番の理由は、片道航空券しか手配していないことであった。

「観光ではなく、あちらにいる知り合いの所に長期間滞在するつもりなので、片道航空券しか必要ないのです」と説明すると、「それでは、滞在と帰国費用に見合う預金がある銀行通帳を見せてください」と言われた。

私は銀行勤めをしていたけれど、今から40年ほど前に女性に支払われた給料は知れており、ほどほどに買い物も好きだった私は、領事館が指定する預金額は持っていなかった。

とにかく、アメリカでの就労は認めないと言うのが領事館の立場で、アメリカに行っても十分滞在出来るだけの費用を持っている事を証明しなければいけなかったのである。

さあ、どうしよう。

往復航空券は買いたくないし、銀行通帳の金額も足りない。これでは何度領事館に足を運んでもビザは貰えない。なす術もなく、私は既にアメリカへ行っていたペーターに手紙を出して事情を伝えた。

返事を待つ間、私の口から出るのはため息ばかり。ビザ取得が難しいと、めそめそ泣いていると、「そんなに泣くなら行かなければいい」と母も泣き出した。

アメリカ行きを応援してくれていた母だが、きっとこれが本音だったのだろう。

だが、その言葉が私には反ってバネになり、「絶対ビザをとってアメリカに行くんだ」と自分に誓った。

それから2週間ほど経ったある日、「この日の、この時間にアメリカ領事館に行くように」とペーターから連絡が入った。何が起こるのか予想もつかなかったが、何かの進展があるようで嬉しかった。

指定された日、不安と期待で一杯の胸を抱えて、神戸の領事館までの長い道のりを電車で揺られていった。

神戸の領事館に入り、私の番を待っていると、カウンターから私の名前が呼ばれて奥の部屋に入るように言われた。なんだろうとドキドキしながら入ってみると、テーブルの向こう側に館長が座っていた。

緊張しながら、勧められた椅子に座ると、彼がじっと私の顔を見て、こう言った。

「実はスイス領事館の館長から連絡があり、あなたにビザを出すようになりました」私は座っているイスから転げ落ちそうになった。

「ほーっ、今までの努力が実ったあ・・・」

後で分かったことだが、神戸にあるスイス領事館の館長をペーターは良く知っており（私も一度、ペーターと一緒に館長の家へ食事に招待された事がある）、その彼に私の事情を話した所、その館長からアメリカ領事館の館長に連絡が入ったらしい。ビザを取ろうと決めたときから、既に1ヶ月ほどが経っていた。

ビザを貰ってからは、早かった。手配していた航空券を購入し、あっという間に出発の日になった。

紹介しようと連れて行ったペーターに会ってくれなかった父は、それでも私を空港まで見送りにきてくれた。

私を一番可愛がってくれた父。どこの誰とも分からない人のところへ飛び立とうとしている一人娘を見送るのだ。きっと心配で心配で、胸が張り裂けそうだったに違いない。

私だって家族との別れは寂しかった。でも、これから見るであろう新しい世界への期待感、嬉しさの方が何倍も大きくて、なんだか雲の上にいるような気分だった。出国手続きを終えて搭乗前の待合室に入るまで、みんな笑顔でさようならをしてくれたが、見送りゲートに移動したとき、父は私の乗った飛行機が遠くに飛び去り見えなくなるまで、ゲートの手すりを強く握りしめて泣いていた、とずっと後になって弟が教えてくれた。

そんな事は夢にも思わず、私は初めて乗ったJAL機に興奮して座っていた。機内食が出て、日本食がいいか、洋食がいいか、と訊かれて、「しばらく日本食は食べられないだろ」と思い、日本食にした事を覚えている。小さな蕎がつけ汁とともに出てきて、「機内食なのに、なんて粹な事をするんだろう」と初めて乗った飛行機の中で感動したことを覚えている。

1973年の7月、1ドルが360円の時だった。



アメリカライフ

私の乗った飛行機は、無事、ケネディ空港に到着した。到着出口で私を見つけたペーターは、私を高く抱きかかえて歓迎してくれた。ホッとした瞬間だ。二人は空港を出て直ぐにグレイハウンドの長距離バス乗り場へ向かった。そこで軽い食事をしながらバスが出るまでの間、再会を喜んだ。

目的地に向かうバスの中、私は睡魔に襲われてしまい、どうしても目を開けている事が出来なかった。だから目的地までの風景は全く私の記憶にない。

住む事になったのは、大学の多いニューヨーク州のオルバニーという町だった。緑や湖の多い郊外の、学生が沢山住む小さな町で、人々は親切で、付き合いやすかった。

ペーターの友達にも大学の教授が多く、度々みんなでバーベキューなどをして楽しんだ。バーベキューにはチキンとトウモロコシが絶対だ。ある初老の教授は、必ず豆の煮込みを持参した。アップルケーキも必ず登場したものの一つである。

アメリカに到着した時、ペーターのエキシビションは既に終わっていた。思う

ように絵が売れなかったようで、ペーターはいつものようにお金のない人だった。大金ではないが、私が日本から持っていったお金を少しずつ使いながら生活をした。

毎日、見るもの、触るものが新鮮で、生活の上で私は何も不便を感じなかったが、唯一、会話がスムーズに進まないのには困った。

高校時代の私は英語が好きで成績も良い方だったので、簡単に単語を並べれば理解はしてもらえだろうと容易に考えていたが、とんでもなかった。

私の話す、たった一つの単語も分かって貰えない時にはガックリきた。何が悪かったかというと発音である。簡単な単語でも、発音が悪いと、あちらの人は理解してくれない。RとL、VとBの違いだけではない。

ひょっとして、こんなことを言っているのかな、と少しでも予想をすとか、理解しようとしてくれると助かるのだが、そんな習慣は、あちら側には全くないようだ。

正確な発音をするまで、「What? What did you say? なんて言ったの？」を繰り返すのには、参った。

それが恥ずかしくて、もういい、と私は言いたいことを言わずに済ませることが多かった。その内、人との会話の際はついペーターを頼るようになっていった。間違えることが恥ずかしいと考える日本人の完璧主義が私にもあったのだ。

しかし、語学はやはりその国に住みながら学ぶのが一番いい。間違いながら覚えて行くのである。

数ヶ月後、私の英語もやっと理解してもらえる程度の発音になり、友達や教授達とも片言だが話が出来るようになった時は、嬉しかった。

アメリカに住み始めた当初、私とペーターは教授である友達の家に住まわせてもらっていた。教授と言っても、若い彼はいつもブーツを履いてカウボーイハットを被り、正にカウボーイのようだった。彼の名前はデイビッド。バイクも乗り回す頑丈な男性だったが、とても気さくで、根っから優しい人だった。

デイビッドの友達であるスイス人がカナダに近い所にロッジを持っているというので、デイビッドとペーター、そして私3人で、2・3回そのロッジへ遊びに行った事がある。

デイビッドの車は前座席に3人が悠々と座れる、大きなアメリカ車だ。それでハイウェイを飛ばし、カナダ近郊では広大な森の側を走り抜けるのである。

私はいつも真ん中の座席に座ることを許され、目の前に広がる移り行く景色とスピードを楽しんだ。

秋に行った時だ。ハイウェイを抜けて郊外の道に出た途端、鮮やかに紅葉した深い森が目に見え込んで来た。そのカラフルな森は何処までも続き、まるで私たちの車が紅葉を放映しているカラーTVの中に突っ込んだようであった。あの時の森の色は、今でも目に焼き付いている。

クリスマス時期にロッジを訪れたこともある。ロッジは正に木造建築で、ホテルとして活用しようとしていた建物なので、部屋がいくつもあった。

回りは真っ白に雪で覆われ、近くの池は凍っていた。その凍った池でスケートをし、山の斜面を利用してソリで下って遊んだ。

あまりに寒いので、友達のガールフレンドが、彼女のウールの股引を私に貸してくれたことがある。あれがなかったら私は外に出る事が出来なかったはずだ。

外は零下40度となり、歩いていると鼻毛が凍るのを私は初めて経験した。

クリスマスの夜には、ロッジで大きなターキーが焼かれた。友達10人ほどが集まってクリスマスを楽しんでいたが、その人数でも大きなターキーは一度に食べる事が出来ず、それからの数日はターキーのオンパレードだった。昼食には、しばしばターキーのサンドイッチが出た。

朝食には、アメリカらしく必ずパンケーキが焼かれた。小さなサイズなのだが、それを一人何枚も食べるのだ。焼きたてのパンケーキに、直ぐ近くの森で採れたメープルシロップをたっぷりかけて食べる本場のアメリカンパンケーキは、本当に美味しかった。

私はロッジに滞在していた間に、数キロ太ってしまった。

私は小さな頃からよくイラストを描いていた。はっきり言えば漫画である。それを知ったロッジのオーナーが、これからオープンするロッジのパンフレットの表紙絵を描いてみないかと提案して来た。ペーターが横から「やるだけやってみたら」と言っている。

私は遊びで描いているのに、とんでもないと思ったが、ばっさり断るのも悪いと思い、「じゃあ、やってみます」と言って一応引き受けた。

オーナーが持って来た色鉛筆で、私は彼らのロッジをバックにスキーヤーが立っている絵を描いてみた。

オーナーはその絵をとてとても気に入ってくれ、数週間後、実際に私の絵を使ったパンフレットが出来上がった。私は誰かの役に立てたことが素直に嬉しかった。

ペーターの絵が少しずつ売れるようになったので、私たちは古い一軒家を借りることにした。

見つけたのは、家の玄関前に階段とテラスがある、あのアメリカ風の一軒家である。その借家には生活に必要な物がほとんど揃っていた。ガスレンジ、オープン、冷蔵庫、皿から鍋、フォーク、ナイフ、スプーン一式、テーブル、イス。ベッドだけはなかったので、マットレスを買い、日本風に床に敷いて使った。

洗濯機で洗濯をしたことを覚えているので、洗濯機もあったのだろう。

階段を上った所の1階にキッチンとダイニングルームがあり、2階に2部屋、そして、大きなバスルームがあった。1階の広いキッチンには大きな窓が二つあり、そこから日がさんさんと差し込み、私のお気に入りの場所になった。

近くのスーパーで買い物をし、明るいキッチンで料理をしている時間が、私には最高の幸せだった。

ペーターは私の手料理を何でも食べたが、日本食は特別に好みではなかった。一度、私は買って来た缶詰の魚にスーパーで買った醤油を少し足して煮た事がある。正に食べたかった日本の味で、日本での生活経験があるペーターも好むだろうと思いながら料理をしていた。

急に2階で大声がして、次の瞬間、ダッ、ダッ、ダッ、・・・とペーターが階段を駆け下りて来たかと思うと、パッと私の前にあった煮魚の入った鍋を掴み、ポーンと窓の外、雪の中に放り投げた。

びっくりしていると、

「なんて臭いんだ！部屋中に臭いが充満しているじゃないか！」

と彼は怒鳴った。

私は彼の態度にもびっくりしたが、それ以上に日本の味をけなされたように思えて、涙が出て来た。

この時の事はトラウマになり、あれから私は外国で煮魚を作った事がない。

彼は画家なので毎日絵を描き、私は特にする事もなく、好きな料理をしてペーターに喜んでもらっていたが（煮魚だけは避けたが）、私もイラストを描く事は好きだったので、時間があれば彼の横で絵を描いていた。

そんなある時、私は同じ夢を何度も見るようになった。それは「世界破滅」の夢だった。

夢には2種類あり、一つは、空から大きな火の玉が降ってくるものである。

人々は恐怖に駆られ、叫び声を挙げながらあちらこちらに逃げまどい、空からは容赦なく火の玉が落ちてくる。勿論、私も夢の中で逃げまどっているのだ。

もう一つのバージョンは、地下道のような所を歩いていると、急に後ろから大洪水が押し寄せてきて、人々が一斉に逃げまどい、水に足を取られて倒れる人、溺れる人がある、という怖い夢であった。

その同じ夢を、毎日ではないが頻繁に見るのだった。あまりに同じ夢を繰り返し見るので、私はペーターに夢の絵を描いて見せた。

彼はその絵を興味深そうに見ていたが、数日後、図書館からある本を借りて帰ってきた。それは、16～17世紀頃に書かれた予言書だった。

その本に描かれている挿絵を見て、私は目が飛び出るほどびっくり仰天してしまった。そこには、私が見る夢と全く同じ絵が描かれていたのである。空から大きな火の玉がいくつも落ちてきて逃げまどう人々、大洪水が人々の後ろから迫ってきている絵。

かなり大きな本だったが、図書館に置かれるような歴史ある本の中に、画法や服装が違うとは言え、夢で見てデッサンしたものと、ほぼ同じ絵が描かれているなんて私は信じられなかった。

どうしたことだろう、夢に見た恐ろしいことが、実際に起こるのだろうか、それはいつなのか。又、過去の予言者の本に描かれた挿絵と同じ絵を、どうして私が描いたのだろう。私は気味が悪くなった。

半年ほどが過ぎ、私は同じ夢を見る事はなくなったが、そういえば、あの時描いた画は、どこへ行ってしまったのだろう・・・？

ペーターは絵を描き始めるといつも没頭し時間を忘れた。私も彼と一緒に起きてくる。ハッと気がつく朝方 1 時や 2 時、という事がよくあった。 そんな時は、そのまま、二人で真夜中のスーパーへ買い物に行った。今の日本では当たり前だが、あの当時—1973 年頃—アメリカには既に 24 時間オープンなスーパーがあった。絵を描くことに疲れた私たちは夜道を歩いて買い物に行った。こんな夜中に買い物に来る人はいないだろうと思ったら、私たちを含めて結構いるのだった。そう言えば、この時間帯のスーパーの従業員は、全員が黒人だった。

この時期、ペーターがよく飲んでいたのはアメリカのビール、バドワイザーだった。夕食か、夕食後の飲み物だったのか、私は時々一人で近所の酒屋にバドワイザーを買いに行った。

「Hello, what can I do for you?」

「6 cans Budweiser beer, please」

「こんにちは、何を差し上げましょうか？」

「バドワイザービールを 6 缶、ください」

一人で買い物をしてビールを家に持って帰れる事の嬉しさはなかった。家までの道のりをスキップして帰りたいくらい私は自分が誇らしかった。

ペーターは、知り合ったときから全身黒い服を着ていたが、ある日、私が日本から持っていった服も「全部、黒にしよう」と言いだした。私は直ぐに賛成した。早速、染め粉を買ってきて、キッチンの大鍋に水を沸騰させ、そこに染め粉と洋服を投げ込んだ。至極簡単だが、この方法でコットン生地は良く染まったものの、絹や化繊の物は縮んでしまい再び着ることは出来なかった。日本を出発する際に、京都で新しく買ったばかりのワンピースも縮んでしまったが、それはそれで良かった。普段の生活で着る事はなかったし、服の事よりも、突拍子もないアイデアのほうが私にはずっと大事だった。

洋服を黒く染めた後は、「家中を黒にしよう」とペーターが言いだした。しかし、こればかりは大家が嫌がるだろうと、大きなバスルームだけを黒に塗った。真っ黒なバスルームは、ちょっと異様だったが、これはこれで又面白かった。

お金がなくてもいろんなことを考えだし、楽しい毎日だった。日本にいと絶対に経験出来ないことを、ペーターと一緒にいるお陰で経験出来る。突拍子もないアイデアを思いつくペーターが私は本当に好きだった。

そんなある日、「エキシビションを開く際にデイビッドからお金を借りたのだけど、返済したいので君のお金を少し貸してくれないだろうか」とペーターから頼まれた。利子を付けて必ず返すから、と言われ、アメリカに住めるだけで幸せだった私は、何の躊躇もなく残っている全額を彼に渡した。

そうしてアメリカ生活が 8 ヶ月ほど経った頃、私の弟から手紙が届いた。

手紙には、母が病気で毎日通院している様子が書いてあった。私の血の気が引いた。どうしよう、どうしよう、と頭の中が混乱した。続けて来た手紙には、「日本に帰ってきて、母の看護をしてくれると助かる」と書かれていた。

帰りたい気持ちは山々だった。今すぐにでも母の側に駆けつけたい、私の大好きなお母さん。でも、そうすると、やっと手に入れた私の自由はどうなるのだろう。二つの気持ちの間で、私の心は揺れた。

昼でも夜でも、母の事を考えない日はなかった。そうしている間に、日はどんどんと過ぎていき、そして、次の手紙が届いた。

そこには「母は癌で、とうとう入院した」と書かれてあった。そして、「癌は体中に回っており、先の見込みがないので、今のうちに帰ってこい」と続いていた。

それを読んで私は直ぐに帰る決心をした。しかしなんと悲しいことか、その時、私にはもう航空券を買うお金がなかった。

「どうにかして日本へ帰らなければ、母の側へ行ってもあげなければ・・・」

恥ずかしかったが、「航空券を送ってちょうだい」と私は弟に手紙を出した。

1・2週間後、弟から片道航空券が送られて来た。



最愛のひと

大阪の空港に到着すると、待っていてくれた弟は私を病院にいる母の元へ真っ直ぐに連れて行ってくれた。

母の病室に入っていくと、親戚一同、それに、アメリカに行った後、頻繁に母を訪ねてくれた私の幼なじみまでが揃っていた。よほど母の具合が良くないのだなと直感した。

久しぶりに会う人たちばかりだったが、挨拶はそこそこに済ませて、私は真っすぐ母のベッドへ向かった。そして、母の顔を見て驚いた。

小さな顔の痩せた人だったのに、母の顔はむくんでいるように見えた。

「あまりに痩せているので、先生の薦めもあり、病気に勝つために薬で太らせたんだよ。お前の顔を見せたかったからね」と父が説明してくれた。

母の側へ行って顔を近づかせると、母の目が白く濁っていて、見えているのかどうか確かではなかった。

私は、出来る限り明るい声で、母に呼びかけた。

「帰ってきたよー」

母はゆっくりと声を出した。

「ごめんねー。せつかく、あっちに行っているのに、呼び戻すなんて可哀想と言ったんだけど、みんなが、呼んだみたいなの……。ほらっ、ここに、いつもあんたの写真を持っていたんよ」

枕の下を指すので、手を入れてみると、笑顔でポーズを取っている私の写真があった。

母の前では泣かない方がいいと思い、私は嗚咽を一生懸命こらえたが、それに反して涙はどんどん溢れ出し、胸の奥が締め付けられるように痛くなった。

その夜は私が看病するからと、父と弟には別のベッドで寝てもらう事にした。
アメリカを発ってから、ほとんど眠らずにいる私だったが、疲れは全く感じなかった。やっと母の看病が出来る喜びが大きくて、目は冴えていた。
そしてほぼ真夜中、母がうわごとを言い出した。
「ほら、清ちゃんが泣いている。何か食べるものをあげて」
「えっ、私はここにいるよ。誰も泣いていないから、心配しないで」
「ううん、泣いている。早く食べるものをあげて」
うわごとを言う母を見て、私はショックだった。そして、私を思う母の慈しみの気持ち痛みほど分かり、涙が出るばかりであった。
「分かった。でも今、真夜中でお店が開いていないから、明日の朝、買いにいくね」
涙をこらえながら母にそう話しかけ、やっと寝てもらった。私は全く眠られなかった。
母は、元々身体の強い人ではなかったけれど、寝込んだことはほとんどなく、いつも父と子供のことだけを考えて生きてきた人だった。
自分の為に新しい洋服を買う事は稀だったが、いつも身綺麗にして、近所にあった美容院だけは頻繁に行き、髪を結ったり、短く切ってパーマを掛けたりして、綺麗にしていた。美容院は母にとって唯一の社交場だったのだろう。
私と弟は母から怒られた記憶は全くない。母が声を荒げたところを見た事がない。近所の人たちにも優しくかったので沢山の人の慕われていたし、親戚の中では、こんなにいい人は滅多にいない、とも言われていた。
世間知らずで引っ込み思案の私は、母にだけはいろんな事が話せた。
銀行に勤めていた時、たまにだが、「今日は出勤したくないな」と思う日があった。母にそれを言うと、母は銀行に電話をして、「娘に熱があり、今日は休ませます」と伝え、それから二人でいそいそと支度をして電車に乗り、町で買い物を楽しみ、喫茶店に寄ったりした事がある。
銀行を辞めた後、私は勤務先である神戸に移ってしまったので、母と一緒に出かける機会は殆どなかった。
もっと一緒に出かけておけば良かった、と今更ながら悔やまれる。

父と母は歳が12歳違い、干支は同じ猪だった。
母の父親から二人の結婚を反対され、二人で駆け落ちしたのだ、と私が小さい頃に母が面白おかしく話をしてくれた。
私は、両親が喧嘩をしているところを見たことがない。
一回り歳が違うからだろうか、父は母にいつも優しくしたし、いつからか、私と弟が「お父さん、お母さん」と呼んでいるのに、母は父のことをパパと呼び始め、それに応えて父は母のことをママと呼んだ。1960年代後半の頃である。家風呂にもしばしば一緒に入っていた、仲の良い二人だった。

母の看病をした次の朝、父と弟が病室にやってきたので私は顔を洗いにトイレへ行った。帰ってくると病室から笑い声が聞こえてきた。
「看護婦に冗談を言ったのよ」と母が笑っている。
どんな冗談だったのかと訊くと、「この病院はあまりきれいじゃないので、早く家に帰りたい、と言ったのよ」と母はすっかり正気に戻って、元気な笑顔で答えてくれた。
「ああ、やっと家族全員が揃ったなあー」と父も嬉しそうだ。
「お母さんも、早く良くなって、うちに帰ろうねー」そう言っているところに、研究生のような若い男性が病室に入ってきた。
研究生は「採血です」と言い、大きな注射器を母の背中に差し込んだ。

あんなに大きな注射器で、こんな病人から、いったいどれだけの血を採るのだろう、
と思いながら見ていると、見る間に、母の顔色が白くなり、そのままふっと気を
失った。

こちらが「あーっ！」と言うのと、研究生が病室から飛び出すのが一緒だった。
先生と看護婦が慌ててやってきて、直ぐに人工呼吸を始めたが、母の意識は戻らな
い。先生が心臓を押し、胸をたたき、又人工呼吸をするのだが、母は目を閉じたま
ま、どんどんあちら側に往こうとしている。

先生も必死になっているのか、心臓をたたき動作が次第に激しくなってきた。いく
ら意識のない母でも、そこまで激しく母の胸をたたき先生を私は見ていられなかつ
た。

「止めさせて。もういいよ、お母さん、可愛そうだよ」

私は泣きながら父にお願いした。

それから数分、先生の努力は続いたが、結局、母の意識は戻らず、そのまま逝っ
てしまった。つい先ほどまで冗談を言いながら笑っていた母が、えっ？、死んでし
まったの？ホントに・・・？

ベッドの横では、お母さんっ子だった弟が、激しく泣いている。父も「何処にも連
れて行ってあげなくて、悪かったなあ」と言いながら大泣きしている。

私の大好きな母が亡くなってしまった。ああ、お母さん・・・。

まだ54歳の若さで亡くなるなんて早すぎる。子供達が成人し、やっとこれから父
と一緒に出かけられると言う時に。そしていつか孫も抱いてみたかっただろうに。
そう思った瞬間、私は彼女の魂のようなものが病室の窓からふわりと外へ飛んでい
くのを感じた。

アメリカを出発してから何時間も寝ていないし、母の死で心身ともに疲れ切ってし
まったのか、私は重力を感じなくなった妙な感覚にとらわれ、母が溶け込んで行っ
た空を、涙がぼろぼろ出る目で見上げていた。

こうして私は、最愛のひとを失くした。

母の死後、病院側から母の身体を解剖したいと要望があり、父と私と弟3人は承諾
した。そして、私たちは地下に運ばれた母のところへ行き「お家で待っているから
ね」とお別れをした。

その後、3人で病院の食堂へ向かい、私たちは並んで温かいうどんをすすった。

もう3人に涙はなかった。母も私たちも癌と言う病気から解放され、穏やかな気持
ちだった。

うどんをすすりながら、3人がそれぞれに母の事を思い出していた。

数日後、母の身体が病院から我が家に戻り、私と弟は彼女に最後のお化粧をしてあ
げた。

弟は、母の一度は抜けてしまった髪を優しく梳かし、私は母の少し硬くなった皮膚
の上にファンデーションを塗り、アイシャドーを薄くつけ、頬と唇に明るい色を塗
った。顔はたちまち明るくなったが、深く窪んだ目は、母が遠いところへ往ってし
まった事を証明していた。

その夜、ご近所の人たちが挨拶に来てくれた。遠いところへ引っ越してしまってい
たご夫婦も、わざわざ来てくれていた。

その度に、「ご挨拶しなさい」と父が私に言うのだが、私は眠くて眠くて目
も開けていられなかった。考えてみれば、私はアメリカを出てから数十時間も寝て
いない。

やっと立ち上がり、数名の方にご挨拶をして引き下がったら、私はその場で気を失ったように眠ってしまった。「いいよ、寝かせてあげなよ。可哀想に」と言う叔母の声が何処かで聞こえていた。

次の日は朝から忙しかった。特に叔母や従姉妹の女性どもは喪服の着物の着付けでワイワイとしていた。葬式の日なのに、なんだか活気があった。

私が一人で着付けをしていると、「やっぱりなあ、お母さんに似て娘は着付けがうまいわ」と叔母が言った。母は夏でも着物を着て畳を拭いていた人だった。

葬式も終わり静かになったある日、私は母のタンスを開けてみた。そこには、私と弟の結婚式の為に用意したのだろう、真新しい留袖が入っていた。そしてその側に、アメリカへ立つ前に母と一緒に買った京都で買ってあげた日傘が並んでいた。

私はそれを見て、「ひょっとしたら、母の死を早めたのは、私かもしれない」と思った。

そしてその思いは、その日から10年以上も私の胸の中に居続け、母の事を思う度に胸が一杯になり、涙が出た。

しかしその思いもいつの日か消えた。外国生活も長くなり、充実した生活を送っている自分自身が見えた時、「自分の道を進んだ事に間違いはなかった」という思いに変わった。

母がいなくなった家で、父と弟と私は、以前のような家族生活を静かに送り始めた。父も弟も、私がこれからどうするつもりなのか一度も尋ねてこなかった。多分、私がこのまま日本に居着くだろうと思っていたのだろう。

そんな私は、アメリカにいるペーターの所へ戻りたい、という気持ちをひたすら募らせていた。

ただ、私には航空券を買うお金がなかった。

手っ取り早い方法で、私は2件の喫茶店を朝夕掛け持ちで働いた。掛け持ちは禁止されていたが、そんな事は言っていられなかった。

母が仕立屋で作ってくれた仕付け糸がついたままの小紋を、私は幼なじみの友達の所へ売りに行った事もある。一度も袖を通さなかったので母に申し訳なかったが、持っていて着る事はないだろうと思った。

そんな私の行動を見て、アメリカに戻りたがっている事を察したのだろう、ある日、「これで航空券を買いなさい」と父がお金をくれた。

本当は、このまま私に残っていて欲しかったはず、母の変わりに、弟や自分の世話をし欲しかったはずなのに、早く帰りなさい、とお金をくれた父。

娘に対する父親の愛は計り知れないほど大きいことを、私はつくづく感じた。

そんな時、ペーターから「今はスイスに戻っているのです、こちらで会おう」と連絡が入った。

父と弟には心から申し訳ないと思ったが、私は直ぐにスイスへ行く準備をした。



戦争のない国スイス

格安でスイスへ向かおうと思った私は、ロシア航空会社のアエロフロートを利用した。

その日は雨だった。雨脚が次第に強くなり、飛行機は伊丹空港で足止めになった。

「外国へ行くな！」とでも言っているのかな、と私はふと思った。

古い飛行機の座席に座りながら手持ち無沙汰していると、横にも縦にも体格のいいロシアのおばさん風スチュワーデスが飴を配って来た。

笑顔も何もない、無愛想な女性だった。配られた飴を食べようと紙を剥がしにかけると、古い飴だったのか、紙が飴にくっついて剥がせなかった。

なんとかして紙を剥がし、飴を口の中であじわいながら舐めていると、窓際から風がスーッと入ってくるのに気がついた。これで標高何千メートルも飛んだら危ないのじゃないだろうか心配になり、私は先ほどのおばさんスチュワーデス呼んだ。

ところが、おばさんスチュワーデスは窓際をチラッと見ると、「ああ、大丈夫、大丈夫」と言って、さっさと行ってしまった。

しばらくすると、今度は別の乗客が「窓から雨が漏ってきている」と騒ぎ出した。

私も行って見てみたが、かなりの雨が入り込んでいた。

先ほどのおばさんスチュワーデスが騒ぎを聞いたらしく、手に紙を持ってやってきた。そして、窓から漏れている雨水をチョイ、チョイと持って来た紙で拭くと、

「ノー・プロBLEM！」と無表情だが強い口調で言い、行ってしまった。

「安いだけあって、やっぱり飛行機、古いわー！」

結局、2時間遅れで出発したアエロフロートは、しかし空気漏れや雨漏りにびくともせず、無事に我々をモスクワに運んでくれた。

ところが、そこで問題が生じた。大阪からの便が遅れたばかりに、モスクワからスイスへ行く乗り換え便が既に出てしまっていたのである。

「さあ、どうしよう。次はいつの便があるのだろう」
スイス空港ではペーターが私を待っている。彼には遅れて到着する事を伝えたい。

私の英語はまだ達者ではなかったが、そんなことを言っている場合ではなかった。私はインフォメーション・オフィスを探しに空港内を走り出した。幸いに直ぐに見つかり、カウンターにいる女性に尋ねた。

「こういう事情で私の乗る飛行機は出てしまいました。次の便はいつ出るのですか？」

「ここでは分かりません。2階のインフォメーション・オフィスで訊いてください」
カウンターの女性にそう言われた私は一気に階段を駆け上り、2階のインフォメーション・オフィスへ向かった。そして、先ほどと同じ事を尋ねた。すると、
「ここでは分かりません。1階のインフォメーション・オフィスへ行ってください」と言う。

「えっ！今、1階で、2階へ行けと言われたので来たのですが」

「いいえ、ここではありません。1階へ行ってください」

女性は無表情で、有無を言わせない。

私は今上ってきた階段を駆け足で下りて行き、先ほどのインフォメーション・オフィスへ急いだ。

少し息切れのする声で言った。

「今、2階へ行ったのですが、2階の人は、1階で訊けと言うのですが」

「いえ、いえ、先ほど言ったように、2階です」

「でも、2階の人は、下で訊けと・・・」

インフォメーション・オフィスの女性は、ただ頭を横にふり続けるだけだった。

私は言われた通りに、再度、2階へ行くしか手段がなかった。今度は、トボトボと2階へ上って行った。先ほど行ったインフォメーション・オフィスへ向かって行きながら、何処でちゃんとした答えがもらえるのだろう、と不安になった。

2階のインフォメーション・オフィスでも、やはり先ほどと同じ答えが帰って来た。

「この空港はどうなっているんだ。私は、どうしたらいいんだろう・・・？」

もう、私には1階へ降りて行く元気もなかった。ただ、スイス空港で待っているはずのペーターにだけは、どうにかして連絡をつけたかった。

1階も駄目、2階も駄目、今度は何処へ行ってみようかと思案をしている時であった。

救いの天使が私の前に現れた。

大阪からの同じ便に、若い女性達の日本人音楽会グループが乗っていたらしく、そのグループの唯一男性であるリーダーが、私に話しかけてきてくれた。

「僕たちも大阪からスイスへ行く乗り継ぎ便に乗り遅れたのです。どうも、次の便は明日出るらしいですよ。それで、今晚は提供されたホテルに宿泊するらしいですよ。一緒にいらっしゃったらいいいと思いますよ」

そうして、この男性はテキパキとインフォメーション・オフィスの女性に話しをし、私の宿泊を手配してくれた。

「ほおおお、助かったあああ！」

こんな遠いロシアの国に一人、どうなる事かと思ったが、どうにかなった。

宿泊先のホテルまで、私たちはバスに寄せられた。

バスに乗ったら絶対に写真を撮らない事、外もあまり見ない事、などと運転手に言われて、これがロシアかと緊張した。

走っている最中、窓にかかるカーテンの隙間から少しだけ外が見えた。外の風景は殺風景で、時折、道の端に止めた荷台に数本の人参と数個のジャガイモを乗せて売っている女性が見えた。風景も人びとも、とても貧しく見えた。
やっと古びたホテルに到着した私達は、4人ずつに別れて部屋に入った。
もう夕方遅かった。直ぐに夕食にしようと皆でホテルのレストランに向かったが、「遅いので何もない」とキッチンの人たちに愛想もなく言われた。

「何でもいいので」とお願いすると、焦げ茶色のスープに何かがごろんと入った正体不明なものが提供された。私は食欲を失くし、ほとんど手を付けなかった。
部屋へ戻りシャワーでも浴びようと思ったら、浴室のお湯が出なかった。なにもかかも「貧しいロシア」であった。

唯一、ホテル部屋の窓一杯に見えた、真っ赤に燃える夕日の美しさには感激した。
翌朝、私たちはホテル前から出るバスに乗り込んで空港へ向かった。
そして一日遅れの乗り継ぎ便に乗り、私も音楽会の人たちも無事にスイスへ到着した。

遅れて到着する事をペーターに連絡出来ずにいた私だが、彼はちゃんと到着出口で待っていてくれた。

前日、到着時間になっても私が現れない為、ペーターが空港のカウンターで問い合わせをした所、「雨の事情で乗れなかったお客様が出ましたが、次の日のこの時間に到着します」と情報を得たらしい。スイスは、こういうところが几帳面なので助かる。

「スイスは中立国で戦争がない」と知ったのは、小学生の時だった。それ以来、「いつかはスイスに住みたいな」と日記にも書いたことがあるくらい、私はスイスに住むことを夢みていた。

アルプスの高原、窓際に花を飾った家々、静かな水をたたえる湖。全てが夢のようで、同時に、以前どこかで見たことがあるような風景。

その夢のスイスに、私はいよいよ住むことになった。

スイスの町はどこに行っても綺麗なことに、先ず驚いた。町の何処にも紙くずなどは落ちていない。

どんなバーやレストランでも、トイレの掃除は完璧だ。アルプスにある山奥のレストランでも、トイレには安心して入れるのがいい。

到着したチューリッヒの空港は、塵一つなく、香水の匂いが漂っていた。

私とペーターはチューリッヒから列車に乗り、郊外にある大きな町の駅で降りた。

そこから更にバスに乗り、行き着いたのは閑静な田舎町だった。

その田舎町にある田舎風の一軒家に、私はペーターの知り合いである若夫婦と一緒に住むことになった。部屋だけは別だったが、後は全て共有である。

古い一軒家だったので家賃がとても安いのは良かったが、暖房設備がないので、冬になると薪でオーブンに火を焚かなければいけなかった。

昔、スイスの家のキッチンには大きなオーブンがあり、そこに火をおこして料理をした。そしてその火の熱が居間を暖めるようになっていた。家全体の暖房設備はそれだけだ。

住み始めた一軒家のキッチンにも同じシステムがあった。ただし、キッチンには新しくガスコンロが設置されていたので、オーブンで料理をする必要はなかった

が、冬はどの部屋も凍えるほど寒いので、私と女友達のベアは朝からオープンに火をおこし、彼女の子供達と一緒に一日のほとんどを温かいキッチンで過ごしていた。

一緒に住んだ友達カップルは私より5歳若かく、二人には既に幼い女の子が二人いた。

お互いにお金がないので、私とベアは度々街にある「ブロックンハウス」へ買い物に出かけた。

「ブロックンハウス」は市に属する中古品店で、家で使わなくなった物を持って行ける場所である。又、そういう風に持ち込まれた物をとても安い金額で買うことが出来る場所でもある。洋服を筆頭に、鍋や皿などのキッチングッズ、スーツケース、自転車、家具など、ありとあらゆるものを売っていた。オレンジ色の蓋付きの重い鉄鍋が500円くらいで買えた。私たちは100円くらいから手に入る鍋や皿を良く買った。

子供服も度々買ったが、時には、自分たち用に温かいウールのセーターも買った。あの頃、スイスにあったウール製品は質が良かった。アルプスの高原で飼われている羊の毛で作られたセーターで、少しごわごわとはしていたが、着るとそれは暖かいのである。何しろ冬はすっかり雪景色となるスイス。みんなウール製品を見る目は高かった。

夏になると一軒家の前にある大きな庭で、私とベアは夏野菜を沢山育てた。スイスの夏は短い、その短い期間に、ズッキーニなどは長さ50cmほどにも成長する。スイスの夏は、木いちご等のベリーもたくさん出回る時期だ。

私はベアからジャムやケーキの作り方を習い、パンの作り方を教えてもらった。パンは、キッチンにある薪のオープンで焼いた。

天気の良い日は近くの森に子供達と一緒に出かけ、週末になるとペーターとベアの旦那も加わり、森でピクニックなどをして楽しんだ。森の中では、時々目の前を鹿のグループが横切って私達を喜ばせてくれた。

春から夏にかけてスイスの森には沢山の花が咲き、深い森には木漏れ日が差し、緑濃い匂いが立ちこめる。寒い冬から解放された人びとが、森や湖に繰り出して行く時期である。

私には毎日、見る物、触る物、全てが新鮮であった。

そんなある日、警察官が二人、私達の一軒家にやってきた。私はちょうど外出していた時で、友達が応対に出たらしい。

警察官「ここに日本人女性が住んでいると通報があったが、彼女は何をしているのか、教えて貰えるだろうか」

友達「何もしていませんよ。彼女はここに住んでいるスイス人画家のガールフレンドで、彼のために料理をしたり、洗濯をしたり、それだけです」

警察官はそれをノートに控えると、黙って帰って行ったと言う。



ドイツへ逃避

警察官が家にやって来た数日後、警察から私宛に書類が届いた。
「ミス清美は違法労働者と見なし、一万スイスフラン（約 100万円）を支払うか、又は直ちにスイスを出るように」
そう勧告されていた。
「私のやっていることが違法労働・・・？」
びっくりしたが、スイス国が外国人に厳しいのは有名だ。
どちらかを選ばなければいけないのだが、答えは簡単だった。私たちには支払えるお金がないので、私がスイスを出るしかない。
ペーターと相談し、私はスイス国境にほど近い、イエシュテッテンというドイツの片田舎へ逃避することにした。
ゆっくりはしてられない。私は直ぐにペーターと一緒に列車に揺られてその町の下見に行った。
単線を走って到着したのは古い簡素な駅で、回りは木々で鬱蒼としていた。一緒に降りる客もなく、二人で一本道をゆっくりと町の方へ降りて行った。降りきったところに数件の家があり、そこから向こう側に小さな町が延びているのが見えた。ドイツと言ってもスイス国に近い為、家の造りなどはスイスに良く似ている。私たちは間もなく小さな町の奥まったところに小綺麗なホステルを1件見つけた。出て来た女性オーナーが優しく対応してくれたので、私はそこに観光ビザで3ヶ月間滞在することにした。
ただ困ったのは、部屋にキッチンがなかったことである。ホステルの一階にお湯を沸かすくらいのがス台はあったが、「料理は禁止」という張り紙がされていた。さて3ヶ月間、どうして食べよう・・・。

結局、料理をしなくても食べられるような食料をペーターが毎週スイスから私の元へ運んでくれることになった。

その日から数日後、私は着替えの入った小さなスーツケースを下げてドイツのホステルに移った。

静かな片田舎だった。ゆっくりと町の散策をして戻ってくるのに30分もかからなかった。私は、天気の良い日は回りにある森や平野を散歩し、部屋では持って来ていた画用紙と色鉛筆で絵を描き、飽きると簡単なドイツ語を勉強した。

部屋には開閉自由な大きな天窓があり、そこから明るい日差しと澄んだ空気が入って来て気持ちよかった。夜になると沢山の星が見えた。

ペーターは毎週末、律儀にスイスからいろんな食料を届けてくれた。同時に、彼は私の洗濯物を持ち帰り、次の週末に、きちんと洗濯をして持ってきてくれた。申し訳なく思うほど、彼は心から私を気遣ってくれた。

そんな生活が1ヶ月ほど続いたある日、思いもしなかった事件が起こった。

ペーターがスイスとドイツの国境で、「毎週リュックをしょって、ドイツへ入る怪しい者」としてドイツ警察に捕まってしまったのである。

スイスからドイツへ列車で行くと、国境線で列車が止まり乗客のパスポートが調べられる。その時にペーターが捕まってしまったらしい。

彼は乗っていた列車から降ろされ、駅長室のような所へ連れて行かれ、それこそ真っ裸にされて調べられたそうだ。

勿論、警察は何も見つけることができず、ペーターは直ぐに釈放されたが、その話を聞いた私は、昔から聞いているドイツ国境の恐ろしさを実感して身震いがした。

数ヶ月過ごしたドイツの田舎町は、住民も少なく平和で過ごしやすいところだった。偶然だが、私はドイツ人と結婚した日本女性とも知り合いになった。ホステルでは料理が出来ないことを知った彼女は、度々、私を彼女の家へ食事に招待してくれた。ドイツ人のご主人は、ドイツへ帰ってくる前は日本で働いていた人で、大変な親日家だった。冗談がとても好きな人で、良く私を笑わせた。

私は彼女と森や川へ散歩に行き、近くにあったご主人の小さなお城のような実家にも度々おじゃました。週末には近郊のドイツの街へ遊びにも連れて行ってくれた。まだドイツ語がよく理解出来なかった私は、この日本女性に出会えたことで、3ヶ月間のドイツ逃避を憂鬱にならずに過ごすことができた。

ある週末、私は訪ねてきてくれたペーターと一緒に田舎の郊外に出てみた。

どこまでも平野が続き、細い道が一本、ずーっと遠くまで伸びていた。

「この道を歩いてくと、どこに行き着くのかやってみようか」

二人は、素晴らしい青空の中、ぶらぶらと歩いて行った。

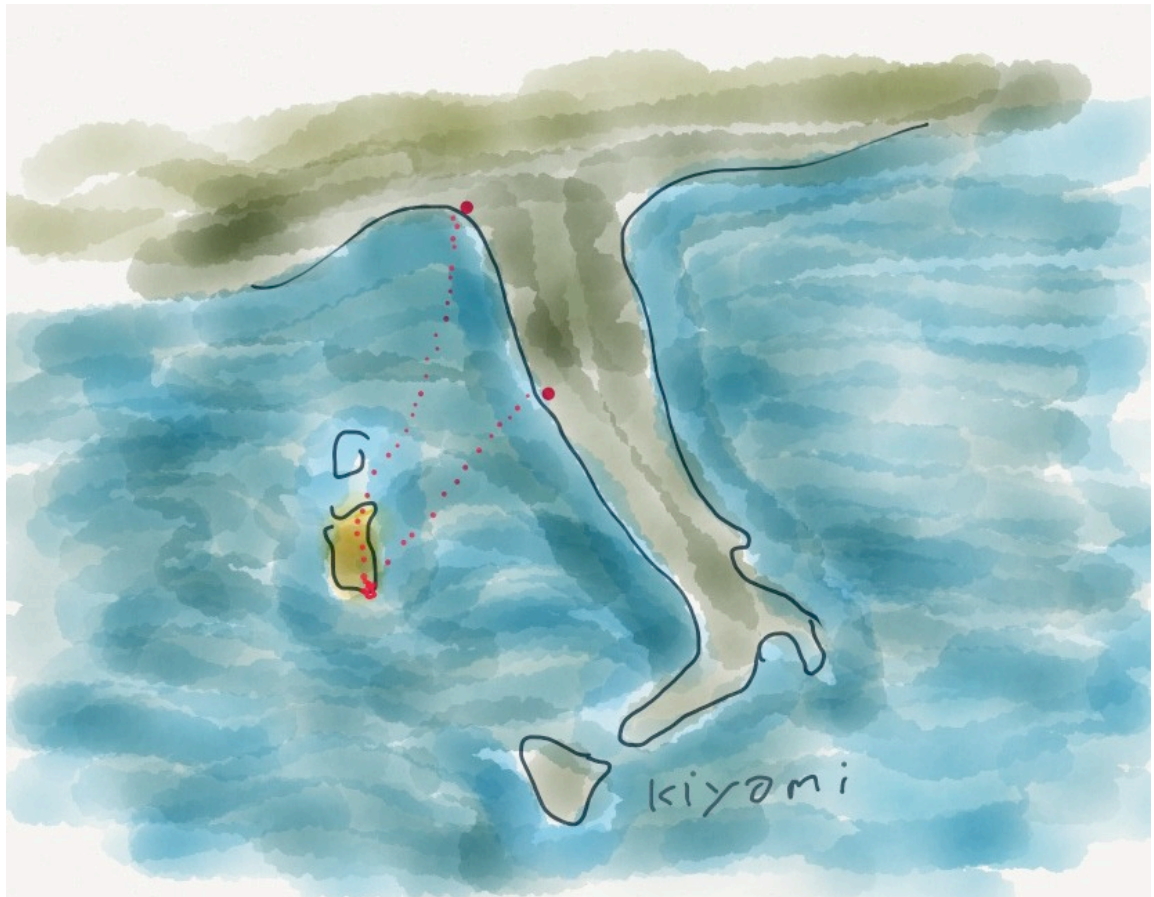
1時間ほど歩いたのだろうか、道の脇に、国境線のような標識があるのが目に入った。見てみると、こちら側はドイツ、向こう側はスイス、と書いてある。

「うわっ、監視人も誰もいないところに、国境線があるよ」

「このまま、スイスに入っていける・・・？」

「行けると思うけど、スイス側へ入った途端に機関銃が聞こえてきたりするかもしれないよ」

冗談を言いながら、二人で実際に国境線を越えてみた。・・・何も起こらなかった。回りはシーンとして、わずかな風の音だけが聞こえていた。



イタリアのサルディニア島

予想外に楽しかった3ヶ月間のドイツ逃避が終わり、私はスイスに観光客として再入国した。

一度は警察から監視された身だ。今回はきちんと市役所に滞在する旨を届けたほうがいいと、ペーターと一緒に市役所に向かった。

住民届けの係員がペーターに尋ねた。

「彼女は3ヶ月間だけ滞在できますが、住居はどこになりますか？」

「住所はここです。でも、僕たちは直ぐにイタリアへ行きますから」

「・・・うん？私たち、イタリアへ行くの？」

私はびっくりした。

私の知らないところでイタリア行きが決まっていた。

ペーターの学友だった女友達がチューリッヒの町で靴屋を経営しているのだが、その店の元オーナーは彼女の叔母で、その叔母が今イタリアのサルディニア島に家を建てて住んでいるのだそう。ペーターは、そこへ転がり込もうと考えていた。

ペーターの学友夫婦は、ペーターの新しい絵画テクニックが大変気に入り、彼の絵を何枚も買ってくれていた、言わば、良い顧客だった。

ペーターと私は何度か学友夫婦と会食をし、サルディニア島のお婆さんとも連絡をつけて貰い、とうとう私たちはイタリアへ出発することになった。

スイスに住むからにはドイツ語を話さなければと勉強を始めていた私は、急遽、イタリア語圏へ行くことになってしまった。

1976年、いよいよイタリアへ。

イタリアに移り住むといっても、私とペーターの荷物はしれていた。それぞれがスーツケース1個を持っていたと覚えている。

行き先のサルディニア島には、列車でジェノバまで行き、そこからフェリーに乗った。

フェリーで一晩過ごす長い旅だったが、フェリーは良く揺れた。

リグリア海は度々荒れることで有名だが、フェリーが揺れ始めると、じっと立ってはいられなかった。

この船旅で覚えているのは、船酔いをしたのでトイレに行こうと思ったものの、あまりの揺れにトイレまでの通路を左に右にとヨロヨロしながら進んだことだけである。

朝が来て陽が昇り、サルディニアのカリヤリと言う港に近づいたときは、早く陸に上がりたくてジリジリした。

この時代の港というものは、どこのものでも薄汚い風貌をしていたように思うが、大きなカリヤリの港も、倉庫や頑丈に作られた建物は錆びて埃っぽかった。

陸に上がった私の足はまだ揺れていたが、その足で目的地のヴィラシミアスまで行くバスの発着地を目指して埃っぽい建物の回りを歩き出した。

「今度は、どんなところへ行くのだろうか」期待感と少し不安が私の胸に湧いてきた。しかしそんな不安は、いったん目的地へ向かうバスに乗って走り出した途端、吹き飛んだ。

くねくねと曲がりくねった海岸線を走るバスの窓から、太陽に照らされたエメラルド色のティレニア海が見えて来たのである。

この海岸線は、地図上で“美しい眺めの場所”に指定されており、文字通り、目的地のヴィラシミアスまでの約2時間、私たちにドラマティックな景色を楽しませてくれた。

蒼くきらきら光る海。ずーっと遠い水平線。太陽が輝く空は、海と同じ蒼さでどこまでも広がっていた。海はエメラルド色からグリーン色に少しずつ変化していき、静かに海岸線へ波を打ちつけている。映画「グラン・ブルー」の風景そのままである。

気候的に暑い地域だからだろうか、海岸線沿いには背の低い茂みだけが続いていた。目の前に遮るものがないため、バスの中から光る海に手が届きそうだった。

海岸線に沿って造られた道はくねくねと曲がり、ひとつのカーブを曲がる度に違った風景が現れ、見ている私たちは飽きる事がなかった。

海を見るのは何年ぶりだろう。特にこんなに綺麗な海を見るのは初めてだった。

いくつもの村や小さな町を通り過ぎ、約2時間後、私たちは目的地のヴィラシミアスに到着した。小さな町の中央広場のようところでバスが止まった。

広場にはスイスでは見たことがない、中世の古い宮殿が並び、その真ん中に威厳のある教会が一つ建っていた。小さな店も数件並んでいる。

バスから降りると、アジア人を見るのは初めてなのかもしれない、地元の子供や大人達が立ち止まって私を眺めた。

「ふーっ、これから、ここに住むのだ・・・」

長旅でばーっとしてしていると、小型ジープの前に佇んでいた50歳代の男性が私たちのところへ向かって歩いてきた。彼は、これから訪ねて行くおばさんのご主人だった。彼のジープ型オープンカーに乗り、おばさんの家に行くらしい。

ご主人とペーターはスイス語で挨拶を交わし、私にも「ようこそ」と言うようなことをドイツ語で言った。

荷物をオープンカーの後ろに載せ、私たちが堅い後部座席に座ると、車は埃を立てて走り出した。

どんどん町を離れて行き、3 kmほど走ったところでメイン道路を右手にそれ、海の方角へ向かった。そこから数百メートル走ったところに、目的地である学友のお婆さんの家が見えてきた。

お婆さんの家の敷地内に入るまでに、先ず大きな鉄門がある。

私たちがジープで近づいていくと、奥から4、5匹の真っ黒な、耳のぴんと立ったドーベルマンが、「グワオ、グワオ、・・・」と吠えながら私たちの方向まで突進してきた。その勢いに、私の足がすくんだ。

この犬たちは、子供のいないお婆さんのペットだった。

私はいつまで経っても、この犬たちが好きになれなくて困った。家の中では大人しい犬達だったが、外出から帰ってくる度に鉄門のところで吠えまくるのには、心底へきえきした。毎回、私の肝がつぶれそうになるのである。

ジープで鉄門を通っていくと広い庭があり、そこを抜けると、やっと家が見えてきた。

雑誌に載っているような地中海のホリデーハウスそのままである。家の外見の一階部分にはアーチが施され、窓の外に優しい陰を作っていた。家は2階建てで、お婆さん夫婦だけが住むには部屋数の多い大きな家だった。

家は海が眺められる崖の上に立っており、そこから海まで細い道が続いていた。降りきったところには、小さなプライベートビーチもあった。

「わあ！こんなところに住むんだ・・・」

なんだか夢を見ているようだった。

よく見てみると庭もかなり広い。町の地元夫婦がこの家の世話をしていた。旦那のルイジが庭仕事や力仕事をし、奥さんが家の中を担当していた。

この二人は初めて会ったときからとても親切にしてくれた。

私とペーターは家の外に別建てしているゲストハウスのようなところに滞在できることになった。ただ、そこには暖炉付きの寝室があるだけで、料理をする場合はお婆さんのキッチンを使うことになった。そしてそれは、至極面倒であった。

私とペーターは遠慮しながら使っていたが、その内お婆さん夫婦の分も一緒に料理するようになり、何となく私とペーターは彼女たちの料理人のようになっていった。そして、その内、ゲストハウスに住むのは何かと不便だろうとお婆さんが言い出し、私たちは彼女の家の2階にある1部屋を与えられた。

ペーターは勿論そんな環境で絵を描くどころではなかった。

私たちは車がないので家にいることが多かったが、たまに、旦那のオープンカーを借りて町まで買い物に行くことがあった。時には、庭仕事をしているルイジの三輪車に乗せてもらい、3人で一緒に町まで行ったり、又彼等の家に招待されたりもした。

地元の人たちと仲良くすることは、その町に住むにはとても都合のいいことである。一人でも地元の知り合いがいると、町の中で格好がつく。

ヴィラシミア最初の夏は、ペーターの学友夫婦もスイスからやってきて一緒に遊んだりしたが、私たちとお婆さん夫婦はあまり良い関係にはなれなかった。

特に、ペーターは芸術家だからだろうか、いろんな事にこだわりがあり、お婆さん夫婦には煙たいところがあったようだ。

しかし、うまく行かなかった一番の原因は、ペーターに絵を描ける場所がなかったことだろう。絵が描けないペーターはストレスが溜まって行った。

しかし、イタリア語は勿論、おばさん夫婦とペーターが話すスイス語でさえ理解出来なかった私にこそストレスがあったのだが、それは日本人の我慢強さで乗り切った。

結局、数ヶ月後、私たちは町の中に小さな借家を見つけて、そこへ移ることになった。

「ほんとに、ペーターさえいなければ、あなたとは上手くやっていけたのに、残念だわ・・・」

おばさんの家を出るとき、彼女が私にそう言った。

スイス語もイタリア語も理解できないでいた私は、おばさんの家で何が起こっていたのか見当も付かなかったが、ペーターが嫌われていたのだけは確かだった。

しかし、正直に言うと、私はおばさんの家を出ることが嬉しかった。

おばさんのドーベルマンを見なくてもすむし、おばさん達の料理人でもなくなるし、そして好きなときに町に出られるようになる。

さらば、海辺のホリデーハウス、であった。

私たちが借りたのは、お針子さんとしてずっと一人で生活をしているマリアと言う名前の40代前半の女性の持ち家だった。彼女の仕事はお針子さんだったが、それでお金を儲けたのか、それとも両親から受け継いだのか、彼女が住んでいたのはモダンな3階建ての家だった。

2階と3階が彼女の住宅で、1階を若い夫婦に貸していた。

私たちが借りたのは、その建物の更に横にある、小さな古い家だった。

平屋が二つある感じで、一つは寝室とキッチン。もう一つは大小二つの部屋があり、それがL字型にくっついて建っていた。

寝室にもキッチンにもドア以外に窓がなく、特に小さなキッチンは隅にある暖炉の煙で中は真っ黒だった。かなりの年代物である事は確かだ。

あるのは水道の蛇口とシンクだけだったので、私たちは料理をするために小さなガスコンロを買った。冷蔵庫もなかったが、それを買う予算は私たちにはなかった。だが、一番困ったのはシャワーがなかったことである。

古い水洗トイレは家壁の外にかろうじて付いていたが、シャワーがないのは辛かった。しかたがないので、1週間に一度、マリアの家のバスタブを使わせて貰い、身体を洗った。



古い家の前には井戸があり、その横には厚みが15cmほどもある御影石で造られた洗濯板と水槽のようなものがあつた。私はそこにバケツで井戸水を汲み、洗濯石鹸を使いながら洗濯をした。

井戸水は年中温度が変わらない。夏はひんやり冷たく、冬は手に温かく感じる。

寒い冬の洗濯でもさほど辛くはなかったが、大きなものを手で洗うのは大変な仕事だった。

井戸という思い出す。

住み始めて1~2年たった頃、貰ってきた野良猫が子供を生み、合計4匹ほどの猫を飼っていたことがある。

ある日、井戸の蓋を外して水を汲みながら洗濯をしていると、ペーターが話かけてきた。私は洗濯の手を休めて、二人で井戸端会議を始めた。

しばらく話をしていたが、一瞬、二人の目の端に何か白いものがふわっと見え、そしてふわっと消えた。

私とペーターは、「えっ・・・？」と言う目でお互いを見た。そして次の瞬間、「はっ！、猫が井戸に落ちた！」と一緒に叫んでいた。

白い猫という一匹しかいない、あの、おじさん猫である。おっとりしていて、少しドジな猫であつた。

井戸の底に向かって名前を呼ぶと、「ニャ〜〜」とおじさん猫は情けない声を上げた。ああ、どうしよう、どうしよう。私はドキドキするばかりで、何をしたいのか直ぐには思いつかなかった。

「井戸の水を汲むバケツを投げ入れよう、そうしたらきっとバケツに捕まって出てくるよ」、とペーターが提案した。

そんなこと、猫がするかしら、と思ったけれど、何かを直ぐにしなければ猫が溺れ死んでしまう。

猫の頭に当たりませんようにと祈りながら、私は井戸の中にバケツをそろそろと降ろし入れた。

そしてバケツが水の中に浸かった事を確かめたら、今度はゆっくりと引っ張り上げた。

水で重くなったバケツに猫も入っているのかどうかは分からない。

かなり深い井戸で、ギリギリというロープの音がいやに長く聞こえた。

やがてバケツが入り口まで引っ張り上げられ、そこにずぶ濡れになった猫の頭が見えたときは、二人とも「ほーっ」とした。猫も必死でバケツにしがみついており、それを見て私はつい笑ってしまった。

バケツから出してあげると、ずぶ濡れのおじさん猫はヨロヨロと歩いて床下のようなところに入り込み、しばらくは出てこなかった。

私たちが住んだ古い借家の家賃がいくらだったのか、私は知らない。人とのコミュニケーションは、もっぱらペーターが一人でやり、それを私に教えてくれる事はなかった。

ただ、私たちには本当にお金がなかった。小さな漁村で彼の絵を買う人などおらず、私たちはスイスで貯めていたわずかなお金を崩しながら生活をしていた。

自分たちの家を借りることが出来たペーターは又絵を描き始めたが、それには絵の具、紙、筆等が必要だ。それが先ずは必需品。それから家賃を支払い、残ったお金が食費に回された。

私の手元にはわずかなお金しか渡されず、毎日ジャガイモを食べていた時期もある。パンを買ったら、後はメイン料理にジャガイモくらいしか買えず、それを毎日違った料理方法で食べた。ブイヨンで煮たり、天ぷらのように揚げてみたり、家主のオーブンを借りてグラタンにしてみたり、と飽きないようにいろいろ工夫を重ねてやってみた。

少し余分にお金が入るときもあり、そんなときは、肉屋へ肉を買いに行った。その中でも強烈に覚えているのは、羊の脳みそを買いに行った時だ。

ペーターの実家は肉屋で、ペーターは肉に関して知識があった。サルディニア島では、彼は好んで羊の脳みそを食べた。実家があるスイスでは高級品だそうだが、サルディニア島では安かったのだ。

私は生まれて初めて動物の脳みそと言う物を手にした。店で買う羊の脳みそはとても柔らかく、それに粉をつけて、卵にくぐらせ、パン粉をつけてカツレツのように揚げて食べた。味は淡白だが、脳みそだという事が私の頭を離れず、私はあまり好きにはなれなかった。

笑ってしまうのは、肉屋で脳みそを買うときの会話である。

「ボンジョルノ！今日は脳みそ、ありますか？」

肉屋のおばさんの顔を見ながら、私はいつも同じ台詞を吐いた。

肉屋のドアを開けて、おばさんに「今日は脳みそ、ありますか？」と、言ってみれば、おばさんの頭の事を訊いているようにも聞こえるではないか。イタリア語が下手だったとは言え、私は肉屋のおばさんに毎回失礼なことを言っていたのである。そんなおばさんは、少し笑った口になり、「ああ、あるよ！」と威勢良く言って売ってくれた。そして猫用の肉も一緒に分けてくれた。小柄ながら体格の良いおばさんには、濃い口髭が生えていた。

ついに絵を描く紙さえ買えなくなったペーターは、スイスに保管していた彼の絵の全てをスイス人で彼のマネージャー兼友達の男性に引き渡すことにした。そして、

その代わりに毎月定額のお金を送って貰うように計らった。その結果、私たちは質素だが落ち着いた生活が送れるようになった。

そんなある日、以前ペーターが売却し、まだ未収金だったらしい絵の代金を受け取る為に、私たちはスイスへ行く事になった。

スイスには数日滞在したが、その間に数名のバイヤーを訪問し、イタリアへ戻る際には、ペーターはかなりの大金を持っていた。彼の絵は想像以上に高額だった。

大金を一人で持っているのは危険だからと、ペーターは私に半分を持たせた。

私は、友達経営する靴屋で買ったばかりの革のバッグに現金を忍ばせた。

船に乗り換えるジェノバ駅までは、チューリッヒ駅から夜行列車に乗った。あの当時、イタリアの列車は本当にみすぼらしく、古かった。

長距離列車の車内は、いくつかのコンパートメントに仕切られており、私たちはその内の一つに入り、鍵のないドアを閉めた。

長距離列車の座席は、座る部分を前に引くと、殆ど寝台のように長く延びてくる。

夜が更けてもコンパートメントに誰も入ってこないのを確かめ、私たちは座席を引っ張り、窓際寄りに二つの（寝台）を作った。

現金の入ったバッグを棚に吊るそうとすると、それは危ないから頭の下に敷いて寝た方がいい、とペーターが言った。

「そうだ、これはイタリアの列車なのだ」

私は言われたようにバッグを枕代わりにし、窓際の座席に横になった。

ペーターは私の横の中央座席に横たわった。

ガタゴト、ガタゴト、と列車の振動が頭に響いたが、その内に眠ってしまったらしい。

「切符を拝見します！」と言う車掌の声で目が覚めた。

私もペーターも、びっくりして起き上がった。

「えっ！なに、切符？はい、はい、このバッグの中に・・・あれっ？・・・」

「どうしたの？」

「バッグが・・・」

私の頭の下に敷いてはずのバッグがなくなっていた。

落ちたのかもしれないと、座席の下や窓際との境を探したが、何処にも見当たらない。

私は確かに頭の下に敷いて寝た。もし、誰かがコンパートメントに入ってきたとしても、普段から音に敏感な私は直ぐに気がついたはずだ。

でも、実際には、バッグは何処にも見つからなかった。盗られた、とやっと現実に戻った。

しかし、どうして私たち二人とも気がつかなかったのだろう。不思議で仕方がなかった。

泥棒はそっとドアを開け、3人掛けの中央に寝ているペーターの体の上に覆い被さり、その向こう側に寝ている私の頭の下に手をいれてバッグを抜いた事になる。

そんな事をされて、二人とも目が覚めないなんて信じられなかった。

狐につままれたような顔をしている二人を見て、

「催眠スプレーを使ったんだな、泥棒は」

車掌がポツリと言った。

聞くとところに寄ると、夜行列車にはプロの泥棒が出るらしい。

泥棒は、客が寝ているのを確かめると、そっとコンパートメントのドアを開け、直ぐに催眠スプレーを発射して、中に居る乗客を眠らせてしまうという。

二人とも言葉がなかった。そこまでされたら、私たちがいくら注意をしても泥棒の防ぎようがないというものだ。

私たちの切符も盗られてしまったことを知った車掌は、「切符がないのなら、次の駅で降りてもらいます」と冷淡に言った。

まだ真っ暗闇の中、私たちは次の駅で降ろされた。

幸いにペーターが持っていた現金は無事で新しく切符を買う事は問題なかったが、私の盗まれたバッグには、現金の他に私のパスポートと母の形見のパールの指輪も入っていた。それがもう戻ってこないと知ると、怒りで身体が震えた。

指輪は諦めるしかなかったが、パスポートの盗難届と申請は直ぐにしなければいけなかった。

朝になるのを待って、私はミラノにある日本領事館に電話をした。

電話口に出た女性の日本語を聞いた途端、私は泣きそうになった。

「ええっと、あの・・・、うううっ・・・、あの・・・実は、あの、あの・・・」

「落ち着いて、落ち着いて・・・」

領事館の女性にそう言われ、しどろもどろになりながらも、パスポートが盗まれた事を伝えた。

私は直ぐにミラノに来るようにと言われ、サルディニアに帰る予定が、急遽二人でミラノへ行くことになった。

日本領事館に到着して日本人を見た途端、私は、ヘナヘナと座り込みそうになった。異国での緊張が、日本人を見てプツンと切れた。

パスポート再発行の手続きは早かった。ただ、パスポートが出来たらミラノまで取りにこいと言われて驚いた。

遠いサルディニア島に住んでいるので、ミラノまで取りにくるのは大変だ、郵便で送ってくれないか、と何度も頼んでみたが、結局、駄目だった。

スイスでは郵便で送ったり返送してくれたりしたものだが、盗難の多いイタリアでは、この方法は使えないようだ。

サルディニア島に帰って数ヶ月後に、パスポートが出来たので取りにこい、と日本領事館から連絡をもらい、私は一人でバスに乗ってカリアリの港まで行き、そこからフェリーに乗り替えてジェノバまで約10時間揺られ、更に列車に乗り換えて約2時間後にミラノに到着した。

私の人生の中で、最も退屈な長距離旅行であった。



ヴィラシミウスの小さな漁村で炊事、洗濯、掃除を済ませてしまうと、私は他に
なにもすることがなかった。それで夏になるとほぼ毎日の午後、私はペーターと一
緒に2 kmほどの道を歩いて海へ行った。

私は木で出来た健康サンダルを履き、カランコロンと音をさせながら長い道のりを
歩いた。夏の日差しの強い中、帽子もかぶらずにカランコロンと歩いていたので、
あの当時の私は真っ黒だった。

そういえば、外国に行ってから私はお化粧をしたことがない。

アメリカ人もヨーロッパ人も、その当時お化粧をしている人が少なく、私も自然に
化粧をしなくなった。

特にサルディニア島ではお金がなかったので、フェイスクリームさえ買ったことが
ない。

化粧をしなくなったと同時に、私はブラジャーもしなくなっていた。

サルディニア島の冬は優しく、春から秋後半まで海を楽しむことが出来る。

あの当時、サルディニア島はまだ旅行者に知られておらず、地元の人たちも海へ泳
ぎに行く人は少なかった。私たちは誰もいないビーチを目一杯楽しんだ。

碧い海はプールのように透き通り、どこまで深く入っていても足のつま先が見え
た。砂浜の白い砂は細かく足に心地よかった。

海に行く度にビーチには誰もいないので、その内、私たちは裸で水遊びをするよう
になった。水着を着けないで海に入ることが、こんなにも気持ちのいいものだと、
私は始めて知った。

ヴィラシミウスの海には美しいビーチが広がっているが、大きな岩がごろごろし
ている海岸線も有名である。海に突き出ている岩の群衆があり、私たちはそこへも
度々散策に出かけた。

私は例の木で出来た健康サンダルで、大きな岩から岩を飛び回った。木のサンダルの底には薄いゴムが付いていたが、それでも足の甲で支えるだけのサンダルで、良くあれだけ、ぴょん、ぴょん、と岩場を飛び回れたものだと、今更ながら感心する。私は本当に健康だった。

そんなある日、ある岩の影に小さな入り江を見つけた。小さな砂地もついている。見ると旅行者だろうか、数人が砂地で日光浴をし、静かに話をしている人もいる。旅行者なら私たちと同じだ、何か話が出来のかもしれないと、私たちはそこへ近づいていった。近づいてアッと驚いた。彼等達はヌーディストだった。

私の経験では、ヌーディスト達は静かな人が多い。この砂地で出会った人たちも静かに太陽を楽しんでいた。

話している言葉を聞くと、彼等はイギリス人やイタリア人のようで、カップルで来ている人、友達同士で来ている人、子供がいる家族連れもいた。

ヌーディストの中で水着を着ているとかえって変なので、私たちも水着を脱いで彼等に合流した。別に話をしなくても、そっと太陽を楽しめばいいのである。

私とペーターが空いた砂地にタオルを敷いて横になっていたら、少し離れて座っていた初老の女性が私に近寄り、話しかけてきた。英語を話していたのでアメリカ人かイギリス人か、又はどこかのヨーロッパの人だったのかもしれない。

「私は豊胸手術をする美容外科のドクターです」と彼女は話し始めた。

「もういくつもの手術を行ってきて、どのような胸の形が一番美しいのかよく知っています。胸は大きいだけじゃあ、駄目なの。形が綺麗でなくては駄目。小さくても、お椀をかぶせたようにもっこりとした形が一番美しい胸とされています。それで言うのですが、あなたの胸はとても美しい。こんなに美しい胸はあまり見ることがないわ、大事にきなさいよ」そう私に言った。

「えっ！本当ですか・・・？」

小さな胸なので、これが美しいなど私は自分で思った事もなかったが、褒められてみると、やはり嬉しかった。25か26歳の時だった。

ヴィラシミアに半年から一年も住むと、私も少しずつイタリア語を話すようになり、女家主マリアのところへ行っては話をし、その一軒向こう隣の小さな子供がいたジョバンナとも友達になった。

まだ若いジョバンナは裕福な家に住んでいた。ご主人が仕事に出かけてしまうと彼女は時間を持て余しているらしく、私は暇があると彼女の家に出向いていき、彼女の素敵なキッチンでお菓子を一緒に作り、おしゃべりをしながらサルディニア島の生活を学んでいった。彼女は私の唯一の友達であった。

私たちの家向かいには、小さな男の子と女の赤ちゃんがいる若夫婦が住んでいた。家は小さく、家族は貧しそうだった。

旦那のジアンニは小柄だが引き締まった身体をしていて、何を仕事としていたの知らなかったが、酒が大好きで、度々、奥さんのフィオナから怒鳴られていた。でも人情者で、外国人である私たちに島の生活のことを沢山教えてくれた。ワイルドアスパラガスを教えてくれたのも彼だし、冬になると暖炉用の薪を山へ一緒に集めに行ってくれたのも彼だ。

ある日、ジアンニが魚釣りに行こうというので、私はペーターと一緒にいった。

魚釣りにいくのにジアンニは釣り竿も大きな網も持たず、唯一、子供がメダカすくいをする時に持つような小さな網だけを持っていた。あれで魚を獲るのかと私は不思議だった。

ジアンニは軽い足取りで先頭を歩き、私たちが行った事のない海岸線へ向かっていった。

いよいよ私たちが人気のない海に到着すると、ジアンニはおもむろに懷から小さなダイナマイトを取り出し、それに火を付けて海にポーンと投げ入れた。

「ドーーーーーン！」

ダイナマイトが水中で爆発して大きな水柱を上げ、沢山の小さな魚たちが海面に浮いてきた。私とペーターは驚いて地面に座り込んだ。

ジアンニの魚釣りは何とも大胆だった。この方法で魚を獲ることは禁止されていたが、彼は時々やっていると言った。

ジアンニは浮いた魚を小さな網でかき集め、その場で火を焚いて、採りたての魚を焼いて私たちに食べさせてくれた。海水が塩味となり、そのワイルドな焼き魚は本当に美味しかった。

別の日の午後、ジアンニがワインを一緒に作ろうとペーターを誘いに来た。

「葡萄を取りに行くから、あんたも一緒に来たらいい」と言うので、私も行くことにした。

夜も更けた頃、「さあ、行こう」とジアンニがやって来た。

「こんなに夜遅くに葡萄を摘みに行くのか」と思ったら、何のことはない、他人が作っている葡萄を盗みに行くのであった。

歩いて行ったのか自転車で行ったのかはもう覚えていないが、真っ暗闇の中、我々は誰かさんの葡萄畑に腰を低くしながら近づいていた。

ジアンニが私に、「あそこからあそこまでの葡萄を取るように」と小声で指図して、彼はペーターと一緒に別の場所に散らばっていった。

「何で私がこんな事を・・・」と思ったが、真っ暗闇の中に一人であるこの状況ではやるしかない。私は言われたとおりに、たわわに実った葡萄をものすごいスピードで盗み始めた。

しかし、いつ人がやってくるかわからないと思うと、怖くて、怖くて、しかたがなかった。そしてその恐怖が頂点に達したとき、私は葡萄を投げ出し、葡萄畑の端の方に逃げて隠れてしまった。

ジアンニは葡萄盗みに集中していたが、私がいらないのに気がついて慌てて探しにやって来た。そして、あまりに怖っているのを見て、3人でそそくさと引き上げることにした。

あんなに怖い思いをしたのは、後にも先にもあの夜しかない。

翌日、ジアンニとペーターはワインを作るのだと盗んできた葡萄を嬉々として搾っていた。

ワイルドなジアンニは、ペーターのいい意味でも悪い意味でも唯一の友達であった。



優しいスイス人

サルディニア島では一つ悲しい思い出がある。サルディニア島に住んで2年目だった。

いつも元気だった私の身体が日増しに重く感じ始め、何をしても直ぐに疲れるようになった。そう言えば、生理が2ヶ月以上も来ない。

お金がないので病院で見てもらおうとか、薬局に行って妊娠のチェックをする器具を買うなど考えもしなかったが、ある日、私は直感で妊娠したと分かった。

25歳で初めての妊娠。赤ちゃんがお腹の中で育っていると思うと、嬉しさがこみ上げてきた。

私は早速ペーターに伝えた。だがペーターは、「今の状況で赤ちゃんは困る」とほとんど無表情で言った。

初めての赤ちゃんなのに、生めない・・・。

私の中では授かった赤ちゃんは生まれてくるものと決まっていたので、彼の言葉を聞いて一瞬戸惑った。

しかし、ペーターが反対するのに異国のサルディニア島で一人で生むわけにはいかない。

中絶するなら早くしないと、と私は思うものの、住んでいるのはイタリア国。

更にここは夫が亡くなると妻は死ぬまで黒の服を着て過ごすという、とても信仰深いサルディニア島なのだ。中絶してくれる病院など、あるはずがない。

どうしようと何日も悩んでいると、

「屋根の上に登って、あそこから飛び降りれば多分流産するんじゃないか」とペーターが言った。

赤ちゃんどころか、私の身まで危ない結果になりかねないではないか。私は彼の発した言葉が信じられなかった。

かといって、私はどうしたらいいのか皆目見当がつかず、気持ちは焦るばかりだった。

悩みに悩んだある日、私は屋根の上によじ登った。回りには誰もいない静かな午後だった。

屋根の上から下を見てみると、高さはそれほどなかったが、飛び降りるとなると少し恐怖がわいてきた。

「私は何をやっているんだろう・・・」

屋根の上に座ったまま、私は遠くを眺めた。島の平和な空気がどこの屋根の上にも流れていた。鶏がコッココッとどこかで鳴いている。次の瞬間、私はヒョイッと屋根の下に飛び降りた。

私は無事に地面に着地し、そして赤ちゃんも無事だった。私の若い身体は頑丈だった。

数日後、私はスイスにいる友達に手紙を書いた。スイスで中絶してくれる病院を知らないだろうかと相談したのである。

数週間後、嬉しい返事が来た。中絶してくれるクリニックがあるというのだ。

そして、「スイスに来た際は、私たちの所に滞在したらいいから」とも書いてあった。

私は直ぐにスイスへ行くことにした。妊娠も3ヶ月近くになっていた。1日も無駄にはできなかった。

スイスまで長い旅である。

チューリッヒまでの片道交通費はペーターがくれたが、中絶費と帰りの交通費はこの絵を売って支払うように、と彼が描いた大きな画を3枚ほど手渡された。

彼の画がスイスで簡単に売れるのだろうか。不安は大きかったが、とにかく出さなければ物事が進まない。

小さな荷物と大きな画を両手に抱えて、私はスイスへ向けて出発した。今だから笑えるが、このとき私は黄八丈の着物を着ていた。長旅に着物なんてと思うが、これが私の一番の外出着だった。

夕方のフェリーに乗るため、カリアリの港町までペーターが知り合いから借りてきた車で送ってくれた。カリアリまでの「素晴らしい眺めの道」が、この時だけは色あせて見えた。

港に着くと、私は停泊していたフェリーに直ぐに乗り込んだ。

「気をつけて行っておいで」

「オッケー、じゃあ、またね」

ペーターの顔を見るのが辛くて、私は直ぐに船内へ入って行った。しばらくして船が動き出したのを確かめて、私は甲板に出た。

町の灯りでキラキラ光るカリアリの町がどんどん遠くになり、そしてたった今、車で走ってきた海岸線が見えてきた。

「あそこに走っている車はペーターの車だろうか」

ヴィラシミアスに向かって走って行く車の小さなヘッドライトを目で追いながら、心細さがじんわりと襲って来た。

闇が降りて海もすっかり黒色になったとき、私は船底にある自分の部屋に向かった。部屋には2段ベッドがあったが、私の他には誰も入ってこないようでホッとした。一人になったら空腹を感じ、家から持ってきたバナナを袋から取り出した。ベッドの下段に座ってバナナを食べ始めたら、急に涙が溢れて来た。

せっかく生まれてこようとした赤ちゃんに申し訳なくて、初めての赤ちゃんを手に出来ない私が切なくて、一人で長旅をするのが心細くて、私はバナナを手を持ちながら泣き始めた。

誰の目を気にしなくても泣ける、この際、大声で泣いてやろうと思ったが、私の喉から出て来たのは、「ウウウー、ヒィィー」という、か細い声だけだった。それでも少し泣いたら気持ちが落ち着き、私は右手にまだ持っていた残りのバナナを食べ終わり、黄八丈の着物を脱いで、固いベッドに横になった。
「泣いてなどいられない。旅はこれから長いのだ」

翌朝、私の乗ったフェリーは広大なジェノバの港町に到着した。港の巨大さに押しつぶされそうになりながら、私は鉄道の駅までの道を何度も尋ねて、チューリッヒ行きの列車に乗った。

何時間も揺られてチューリッヒ駅に到着すると、病院を紹介してくれた友達カップルがホームで待っていてくれた。友達の旦那のほうはペーターの画家仲間で、少し名が売れたのだろう、大きな家を購入して住んでいた。

その彼らの家に車で向かい、与えられた部屋に荷物を置いて、私はやっと一息ついた。

翌日、さっそく私は友達二人と一緒にクリニックへ向かった。

あの当時、チューリッヒでも中絶をしてくれるクリニックは少ないと聞き、これから行く所は隠れ医院のような暗いところだろうかと私は勝手な想像をしていたが、到着してみると、そこは正真正銘の産婦人科医院だった。クリーム色の小規模な建物は清潔で、

看護婦とドクターも揃っていて安心した。

受付で私の名前を伝え、さっそく診察室に連れて行かれた。

診察後、私はドクターの部屋に通され、そこで初めて私は妊娠3ヶ月が過ぎていることを知った。

「とても嬉しくて喜ぶたいのですが、残念ながら私は生む事ができません」

ドクターに私はドイツ語で話し始めた。泣きそうになるのを必死でこらえた。

「生まない理由を教えてくださいか」とドクターが訊いた。

「理由は、赤ちゃんの父親であるボーイフレンドがいないと言っているからです。それに私たちにはお金がないので赤ちゃんを養うのは難しいです。現に、中絶費は彼が持たせてくれた画を売らないと払えないのです」

ドクターは私の話を静かに聞いてくれた。そして、中絶しなければいけない理由も理解してくれた。ただ、中絶をするには精神科医からの診断書が必要なのだと言った。

やはり、何かの原因がない限り中絶は簡単にできないのだ。

私はドクターに精神科医を紹介してくれるようお願いし、彼はその場で予約を入れてくれた。

翌日、私は一人で精神科医院を訪問した。

「精神科医院では、気がふれたようなそぶりを見せないと中絶許可の診断書は出ないのだろうか」等と私はバカなことを考えながら行ったが、実際は、クリニックのドクターに説明したことと同じ事を精神科医にも伝えて、私は無事に中絶許可書を貰うことができた。

あの当時、私のイタリア語も片言だったが、ドイツ語も、スイスに滞在した期間が短かっただけに本当に片言しか話せなかった。その片言ドイツ語で私はドクターと精神科医と話をし、手術をしてもらうところまで持って行っった。良くやったと思う。

数日後に手術の日となり、友達がクリニックまで付き添ってくれた。

手術は下半身麻酔ですと最初に説明があったが、手術が始まってまもなく大変な痛みが襲ってきた。

「テウッテウ・ヴェー、テウッテウ・ヴェー（痛い、痛い）」とドイツ語で言うと、看護婦が麻酔注射をもう一本してくれたが、それでも子宮の辺りが大変な痛みで、私は「痛い、痛い」と泣いた。

「3ヶ月以上も置いていて、大きくなっていたからね」と手術をしながら先生が優しく教えてくれた。

それでも痛くて、痛くて、赤ちゃんに申し訳なくて、私の目から涙がぼろぼろ流れた。

不安と悲しみで胸がいっぱいになり、息をするのが苦しくなったとき、側にいた看護婦さんが私の手をそっと握ってくれた。私は藁にでもすがりつくような気持ちで彼女の手を強く握り返した。

手術が終わるまで、看護婦さんはそうやってずっと私の手を握っていてくれた。

手術が終わり、それから1週間ほど、私は友達の家で寝ていた。

手術前、たまたま道で知り合った長期派遣の日本人の奥さんが、おむすびとお金を持ってお見舞いに来てくれた。ほんの数日前にお会いしただけなのに、わざわざ訪ねてきてくださった彼女の優しさには本当に心を打たれた。日本人が持っている他人をいたわる気持ちは世界で一番だと思う。

さて、手術から回復し始めた私は、クリニックへの支払いと旅行費を作る為、行動を起さなければいけなかった。さあ、誰にペーターの絵を買ってもらおうか。

私のようなものがどこかの画廊に持って行っても買ってくれない事は確かだろう。

頭に浮かんだのは、チューリッヒで靴屋を経営しているペーターの友達だった。以前、ペーターの画を何枚か購入してくれていたし、ペーターの画が大好きだった。

私はイタリアから持ってきた画を全部抱えて、彼らのお店を訪ねた。

彼らに事情を話すと、「以前、画を購入したときに未払いのお金があるし、今持ってきた画も全部引き取るよ」と言ってくれた。

ホッとした。これでクリニックに支払いが出来るし、イタリアに帰ることも出来る。

画の価値が分からない私には、彼らがそれ相応の金額を支払ったのか、もしくはそれ以上を支払ってくれたのか解らなかったが、とにかく、十分すぎるほどの金額が私の手に入った。

翌日、私はさっそくクリニックへ支払いに行った。

途中で花屋を見つけ、優しかった看護婦さんにあげたくてブーケを買った。

クリニックに入っていくと、見覚えのある看護婦さん達が明るく挨拶をしてくれた。

手術中、私の手を握り続けてくれた看護婦さんを見つけて、私は彼女に感謝の気持ちを伝えブーケを渡した。そして、ドクターの部屋に入っていった。

手術をしてくれたドクターが笑顔で私を迎えてくれた。

「その後の調子はどうですか、元気にしていますか」優しく尋ねてくれた。

私はすっかり元気になったと感謝し、それで支払料金はいくらになりますかと尋ねた。

「うん、いや、いいよ。お金は支払わなくていいから」

「えっ・・・支払わなくていい？」

私は自分の耳を疑った。指の切り傷を治したというのではない、あんなに大きな手術をしてくれたのだ。それなのに、お金は支払わなくていいって・・・？

信じられなくて、私は、「へっ？」というまぬけな顔をしていたと思う。

「うん、君の事情はよく分かったから、支払う必要はないよ。これからは、君の身体を大切にしてください」
横にいる看護婦さんを見ると、「良かったね!」という顔で微笑んでいる。
一瞬、夢かと思った。
子供を堕ろす辛さが大きかっただけに、ドクター達の優しさが心の傷を癒すように
溶け込んできて、私は顔をくしゃくしゃにして泣いた。
スイスにもこんなに優しい人たちがいる。



スイスでお産に立ち会う

スイスからサルディニア島に帰ってきた私は、中絶について詳しくペーターに話そうとは思わなかった。そしてペーターから尋ねられる事もなかった。

何事もなかったかのように、二人はいつものような生活を続けた。

その年の冬がやってきたある日、スイスで一緒に住んでいた友達カップルから手紙が届いた。奥さんであるベアが3人目の赤ちゃんを産む事になり、私にその手伝いをしてもらえると嬉しいのだが、と書かれていた。

ベアは、それまでの娘2人共を家で生んでいる。今回も自宅での出産を計画しているようだ。

私は、ほとんど迷う事なく「行きたい!」と思った。自分で生めなかった赤ちゃんを、抱いてみたいと思った。

スイスに行けば1ヶ月ほどは帰ってこれないだろう。ペーターに言うと、「行ってきたらいい」と直ぐに快諾してくれた。

再びフェリーに乗り、電車に乗り換えて、長い旅の末スイスのチューリッヒ駅に到着したのは、もう12月に入った時だった。

ベアの出産の日まで未だ日があった。私は、一日中、大きなお腹のベアと彼女の未だ小さかった娘二人と一緒にキッチンの暖炉の前に座り、おしゃべりをし、パンやクリスマスクッキーを焼いて過ごした。

キッチンの窓から差し込む柔らかい光の中で、子供達の笑顔がキラキラ輝き、その優しい雰囲気の中で、私はどんどん癒されていった。

いよいよクリスマスも近づき、私とベアはベアの旦那が居間に運び込んだクリスマスツリーに飾りをつけた。綺麗に飾られたクリスマスツリーを夢見るような目で見上げる子供達が可愛かった。

クリスマスの夜は自分たちで焼いたクリスマスクッキーをかじりながら、日本でも良く知られているクリスマスキャロルをみんなで一緒に歌った。クリスマスキャロルは中学生の時に習ったと思うが、メロディーを覚えていて助かった。

クリスマスが過ぎるとベアは殆ど動けなくなり、私は家事一切を一人でまかなうようになった。以前、ベア家族と一つ屋根の下に住んでいた私には、彼等のまかないは簡単だった。

ベアの2歳になる次女ルーは、オムツをいつも取り替えてあげていたので、私に良く懐いた。白い肌でポッチャリ気味の彼女は、性格も動作も柔らかく、波打つ金髪の下から覗く天使のような目で見つめられると、私は完全にノックアウトされた。

クリスマスも過ぎ、12月も下旬になったとき、とうとうベアの陣痛が始まった。ベアの旦那が電話で産婆さんと呼ぶと、やってきたのは若い女性だったので私は驚いた。

産婆さんではなく助産婦さんだった。

次女のルーも、この助産婦さんが取り上げたそう。

ベアはキッチンの隣にある居間の床に布団を敷いて寝ていた。古い家なので、寝室は凍り付くように寒いのである。

若い助産婦さんは、「お湯を沸かすように、タオルを用意するように」と私と旦那にてきぱきと指図した。

そして、ベアがトイレに行きたいと立ち上がった途端、彼女は破水した。

さあ、いよいよだ。今まで笑っていたベアが、うめき声を出し始めた。

家での出産経験がもう3回目になる旦那は、出産の手順を良く知っていた。彼はうめき声を出すベアの右側に行って座り、私に彼女の左側に座るように手招きした。

私は転がるようにベアの左側に寄り添った。

陣痛が激しくなったようで、ベアは右腕で旦那、左腕で私の首にすがりついてきた。ベアがうめき声を上げる度に、私の首はきつく締め付けられた。

助産婦さんは妊婦の足元に座り、「プッシュ、プッシュ」と妊婦を励ましている。初めての出産立ち会いで私はかなり動揺していた。何をしたいのかさっぱり分からず、頭の中が真っ白だった。ただただ、ベアに私の首を貸してあげられるだけだった。

と同時に、今この瞬間、新しい生命が生まれようとしているのだと思うと、とても神秘的で不思議な気持ちになった。

「ほら、ほら、見てご覧、見ないといけないよ！」

私は急に旦那にそう言われて、何の事なのか一瞬理解出来なかった。

うん、うん唸っているベアさえ、「清美、ほら、見て！今よ、今！」と絞り出すような声で言っている。

何だろうと首をあげてみると、赤ん坊を取り上げようと構えている助産婦さんが私に手招きをしている。慌てて助産婦の方に移動すると、突如、赤ん坊の出口が私の目の中に飛び込んで来た。5・6cmほど開いた出口から、赤ん坊の髪の毛も見えている。

「あーっ・・！」

私はものすごい衝撃を受けた。

女性の股間をもろに目の前にしたのも初めてだが、これから世に出ようとしている赤ん坊の頭を見たことは、はっきり言ってショックだった。

「見たかい、ええ、すごいだろう！」

旦那は、私にいいものを見せてあげられたと思っているようで得意そうな顔で私を見る。

「うん、すごい、すごい！」

一応そう言ったが、正直、私は愕然としていた。

妻の出産につき合ったご主人が分娩室で気を失う事があると聞いた事があるが、その気持ちが良く分かる。女性の私にでさえかなり衝撃な場面であるから、男性にとってはどれほどだろう。

ショックな気持ちを抑えながら、私は又ベアの横に駆け寄った。

うん、うん、唸る彼女の支えになりながら、「女はすごいなあ」と私は考えていた。

そして間もなく三女が生まれ、私はベアの腕から解放された。

旦那が赤ちゃんのヘソの緒を切るのを、私はボーッと見ていた。途端に、

「産湯は用意出来ているか？」

と旦那に訊かれ、私はキッチンへすっ飛んで行った。

用意していた大きなやかん一杯の湯とバケツに入った冷水を持って居間に引き返し、置いてあったタライの中へ流し込んだ。浮かべていた温度計で正確なお湯の温度を測り、そこへ旦那がそっと生まれたての赤ちゃんを入れた。私は初めて生まれたての赤ちゃんを目にした。

小さな、小さな生命が、ムギユ、ムギユと手を揉みながらこれから生きて行こうとしている。

旦那が慣れた手つきで産湯を使い、私にもやってみろ、と赤ちゃんを手渡してくれた。私は、片手でしっかりと赤ちゃんの身体を抱え、もう一つの手でゆっくりと洗ってみた。赤ちゃんは気持ち良さそうだった。

「すごいなあ・・・」

9ヶ月も小さなお腹の中にいた生命が、窮屈な産道を通して、大きな世界に飛び出し、そして一人で息をし始めた。彼女の人生が今始まった。

産湯が終わり赤ちゃんは暖かい産着に包まれたが、ベアは、しかし、まだ出産した当時の姿で横たわっていた。

「これから、胎盤をはがすのよ」

助産婦さんがそう言った。そして、股間からズルッとそれを引き抜いた。

「へえー——、そんなものですかー！」

私はひっくり返りそうなくらい驚いた。

「ベアはかなりのスモーカーだけど、胎盤が綺麗だわ」

引き抜いた胎盤を見ながら、助産婦さんがそう言った。普通、喫煙者の胎盤には斑点が出来ているらしい。妊娠中もずっと煙草を吸い続けていたベアが、得意そうな顔で、にやっと笑った。

私たちの見守る中で生まれてきた三女はリーナと名付けられた。

ベアの産後に始めて作ってあげたのは、肉じゃがに似た料理だった。

「これよ、これ。これと全く同じ味の料理が食べたかったのよ。ああ、おいしい・・・」ベアはシンプルな料理に感激してくれた。

できれば私はもっと沢山の時間、ベアや子供達と接していたかったし、そしてそれは不可能ではなかった。だが、私はペーターの事を考え、それから2週間後、サルディニア島へ帰っていった。

木のサンダルと猫と放浪者

ベアのお産の手伝いから帰ってきて数週間が過ぎた頃、ペーターが時々理解し兼ねる行動を起こすようになった。

ある日の朝は、マーガリンの蓋が汚れていると言って、テラスに用意した朝食を重いテーブルごとひっくり返した。私は「彼は気がふれてしまった」と思った。

またある時は、私が側にいないかのように1日中ずっと無口で行動していた。

この頃、彼は正気と狂気の境目をいつも綱渡りしているように見えた。

私は、とにかく彼を怒らせないようにと常に気を配りながら過ごした。

そんなある日、ペーターが風邪を引いて寝込んだ。私は冷たいタオルを彼の額に当てながら世話をしていたが、その私にペーターが「こういう薬を買ってきて欲しい」と説明をし始めた。

「こういう症状なので、こいう名前関係のこういう薬をください、と言うように」とペーターからかなり詳しく教えられ、私は言われた事を何度も頭の中で繰り返しながら薬局に向かった。

ところが、私のイタリア語が未熟だったので説明が行き届かなかったのか、それとも薬局の人が勘違いをしたのか、私は間違った薬を買ってきてしまったらしい。

買ってきた薬をベッドに寝ているペーターに見せた途端、彼の顔が鬼のように真っ赤になり、「僕を殺すきか!」と怒鳴って私につばを吐いた。

そして勢いよくベッドから起き上がると、私の身体を揺さぶりながら私の着ていたこけし模様のティーシャツをビリビリに裂き始めた。

私は一目散に逃げた。ペーターから暴力を受けたのはこれが初めてだった。

あんなに優しくエレガントだった男性が、全く別の人になっていた。

何が彼をこんなに変えたのだろう。私は全く見当がつかなかった。ところが、しばらくして、はっと思う事があった。

「ひょっとしたら私の中絶がクリスチャンであるペーターに何かしらの影響を与えたのかもしれない」

普段からカントやフロイト、ユング等の哲学書を読んでいたペーターは、聖書もしばしば読んでいた。教会自体を話題にする事はあまりなかったが、根は完全なクリスチャンであった。

ペーターの言葉を受け入れて中絶をした私は、その時の悲しみを彼にぶつけることもなく、一人静かに心の中にしまい込んでいたが、それがかえってペーターに罪悪感のようなものを与えたのだろうか。

あの当時の日本女性の我慢強さだったが、ペーターには理解できなかったのかもしれない。

この騒ぎがあった後、ペーターが私に宣告をした。

「僕は、これから君の身体に指一本触れることはない」

「寝るのも別々にする、行動も別々にする。それが嫌なら君は日本に帰ったらいい。ここに居たいのなら居てもいいが、僕たちは以前のように恋人同士でも何でもなくなる」

ショックで私は血の気が引いた。しかし、そこまで言われても私は日本へ帰る気にはならなかった。

それからの毎日、私の存在が見えないかのように行動するペーターを見ながら、この先どうなるのだろうと不安になったが、それも、日に日に慣れて行っただけ心配だったのは、セックスである。

私はまだ若い。これからの毎日、セックスなしで生活出来るだろうか。しかし、それも慣れてしまえば、ちっとも必要としなくなるのには自分でも驚いた。これが禅で言う「無の境地」かと真剣に思ったりもした。

とにかく、私はこの事件でふさぎ込むこともなく、以前と同じように二人分の料理をし、掃除洗濯をして毎日を過ごした。勿論、辛い気持ちは何処かにあったはずだが、ヨーロッパに住んでいるというだけで私は十分に満たされていた。

そんな私に感化されたのか、ペーターも次第に優しくなっていた。

いつしか、私たち二人は仲の良いルームメイトのように、喧嘩もせず、さばさばとした関係で生活を続けていった。

サルディニア島の新しい生活様式にも慣れ、私はいつものように井戸の横にある御影石の洗濯岩で洗濯をしている時であった。

ペーターが汚れきった服を何枚も重ね着している放浪者風の男を連れて帰ってきた。顔も汚れていて実際の年齢は解らなかったが、30代だろうと想像した。

何を思って、こんな汚い放浪者を連れて帰ってきたのだろう、と驚いていると、「僕のズボンとシャツを彼に渡すから、彼が今着ているものを洗ってあげて」とペーターが私に言った。

洗うと言うより、彼が着ているものはもう捨てた方がいいのではないかというような服ばかりであった。

放浪者風の男は、自分が置かれている立場が分かっているのかどうか、ただボーッと御影石の側に立っていた。

驚いたことに、ペーターがさっそく放浪者風の男の世話をし始めた。汚い服を脱がせ、井戸水で男の身体や頭を洗っている。未だ少し寒い時期だったけれど、とにかく身体を洗わないと家のどこにも連れて入れないくらい男は汚れていた。

普段は画を描く事しかしないペーターが、せっせと男の世話を焼いている。

「この放浪者風の男の何が魅力的だったのだろう・・・」

私は、何枚も積み重ねられた汚い服を御影石の洗濯液に浸けては洗い始めた。一枚一枚が分厚い生地で出来ていて、手で洗うのは大変だったが、その中でも、男が何度も鼻をかんだであろうハンカチを洗うときは、思わず「うっ」と吐きそうになってしまった。

この放浪者風の男、ペーターが歩いている時に道端に座っているのを見つけ、少し話をすると、どうもインテリジェントらしいので、道端においておくのはもったいないと思い、家に連れ帰ったらしい。

それからの毎日、二人一緒に座っては、あれやこれやと話をしていた。哲学的な話もしていたようで、時には二人の声が大きくなることもあった。

サルディニア島の小さな漁村に来てからは哲学的な会話をする事もなくなっていた

ペーターは、この知識豊富だったのだろう放浪者風の男との会話をとても楽しんでいるようにみえた。

私たちは慎ましい食事をこの男と分け合い、男2人と女1人のルームメイト的な生活がしばらく続いた

それから数ヶ月後、突然、私とペーターはスイスへ帰国することになった。

それを男に伝え、彼も一緒に付いてくるという。

「まさかスイスでも一緒に生活をしたいというのではないよね」

私は心配したが、男は北イタリアで仕事を探して、ちゃんとした生活がしたいようなことを言った。

彼は放浪者なのに、いろんな物をため込んでいた。そして、それをスイスに行くときに全部持って行きたいのでスーツケースが必要だと言いだした。

旅費は払ってあげるけど、スーツケースまでは買ってあげられないと伝え、ペーターはどこからか大きな段ボール箱を探してきて、「これに入れて縄で縛って持って行けばいい」と男に手渡した。

ところが、男は一人前に文句を言うのであった。

「こんなの格好悪い、駅員から止められる」

買ってあげられないものはどうしようもないとつぶねると、やっと諦めたように大きな段ボール箱に荷造りを始めた。

私自身、あんな大きな段ボール箱を列車内に持ち込めるのだろうかと心配だったが、あの当時のイタリアでは全く問題がなかった。

3年間過ごしたサルディニア島を後にして、私たち3人はスイスへ向かって列車に乗った。

一緒に長旅をした男は、イタリアとスイスの国境手前で列車を降りていった。

私とペーターは窓から彼を見送ったが、大きな段ボールを抱えた男は呆気ないほどさっさと私たちから離れていった。

3年間過ごしたサルディニア島での生活はインテンシブだったけれど、特に私の記憶に残っているのは、暑い真夏の日中、海まで伸びる真っ直ぐなアスファルトの路を私は帽子もかぶらず木のサンダルを引っかけてカランコロンと歩いて行った事、それから、ある夏の日の午後、井戸に落ちたずぶ濡れのおじさん猫のこと、そして、この放浪者風の男のことである。

ジュネーブの中国人医師

1979年、イタリアのサルディニア島からスイスへ戻った私たちは、ドイツ国境近くの小さな田舎町に住んだ。

大きな農家が町の中心に数件建つ村落のようなところで、少し離れたところに2階建てのアパートが一棟建っていたが、後は小さなスーパーマーケットと小さなバー、レストランが道の端にあるだけだった。

農家では牛を飼っているところも多く、牛舎から牛の顔が覗いていたりして、本当にのどかなところだった。

その大きな農家を改築した一件に昔の友達がガールフレンドと一緒に住んでいたのので、私たちはその1階を間借りした。

以前住んでいたスイスの家もそうだったが、古い農家なので暖房設備がなく、冬は起き抜けに暖炉に火をおこす仕事が私を待っていたが、サルディニア島に住んでいた時に比べると、家の中にトイレとシャワーがあるだけで幸せだった。

同居人の友達は静かな男性だったが、ガールフレンドはポルトガル人で気が強く、何かと私と衝突した。

彼女は、それまで一人で使っていたキッチンを私と共有しなければいけなくなったのが気に入らなかったらしい。キッチンだけではなく物干し台も共有する事になり、そこで彼女は完全に頭にきたようだ。

一度は二人でつかみ合いの喧嘩をした。彼女は私が首につけていたパールのネックレスを引き千切り、私も負けずに彼女を殴った。まもなくペーターが仲裁に入ってくれて落ち着いた。

そんな田舎町に住んでいた時、70歳前の私の父が一人でスイスへやってきた。父にとって初めての海外旅行である。一人旅は出来ないで、日本からの往復はコンダクター付きのツアーを利用したようだ。

私は電車に乗って、父をチューリッヒ空港まで迎えに行った。

初めての飛行機での長旅で父はかなり疲れた様子だったが、私を見てホッとしたのだろう、懐かしい笑顔を見せてくれた。疲れている父には申し訳なかったが、車のない私は空港から電車に乗り、バスに乗り換えて家に着いた。

家に着くなり、父は少し横になりたいとベッドに横たわってしまい、挨拶に出て来たペーターには「こんにちは」と言っただけだった。

夕方になり、父が日本から来るというので準備していたパーティーに友達10人ほどが集まってくれた。父は「ありがとうございます」と頭を下げながら出て来たが、食べるものがピッツアやラザーニアだったので父の口には合わず、私は急いでみそ汁や卵焼きを作ってあげたが、疲れているからと父はさっさと床についてしまった。しかし、翌朝は元気に起きだし、改めてペーターとのご対面となった。

日本では会う事を拒絶したペーターとのお対面に、父は少し落ち着かないようだったが、私と一緒に暮らしている男性だ、親しくしなければ、と努めている様子が良く分かった。

私の感だが、父はどうしてもペーターに好感が持てないようだった。

父がスイスまで来てくれたのは本当に嬉しかったが、悲しいかな、私たちには父を観光巡りに連れて行ってあげるお金がなかった。

嘘をついてもしょうがないので、私はこのことを父に正直に話した。

父は「うん、いいから、いいから」と言いながらバッグからお金を出し、「これでレンタカーをして」と私に渡してくれた。恥ずかしかったが、これで父にスイスを観て貰えると思うと嬉しかった。

早速レンタカーをし、ペーターの運転で私たちはスイスの各地を巡った。
父は特にアルプスが気に入ったようだ。山の上の岩に座り、目の前に高くそびえる山々をじっと見ていた。お金はないけれど、健康に過ごしている私を見て少しは安心してくれただろうか、と父の背中を見ながら私は思った。
短期間だが父のスイス訪問が終わり、ツアーが出発するというパリの空港まで私たちは電車で送って行った。
「次回は必ず私の車でスイスを案内するから。又必ず来てね」
わたしは父にそう誓って見送った。

スイスの田舎町に住み始めた私たちは、サルディニア島での喧嘩を忘れ、又以前のような恋人の仲に戻っていた。そして、私は再び妊娠した。
「お金がなくてもどうにかなる、今度こそは生んでみたい」
私はそう願ったが、ペーターは相変わらず子供を望まなかった。
ペーターは若い頃に一度結婚していた。幼馴染みの女性で、彼女は薬剤師の免許を取り薬局を経営していた。
ペーターの両親は大きな土地を持つ裕福な人たちだと言う事はスイスに来てから判ったのだが、そんな家庭で育ったペーターと薬局を経営するまでになった女性との結婚は、どんな理由があったのか知らないが長く続かなかったようだ。
クリスチャン精神なのだろうか、一度離婚をした者は2度と結婚出来ないとペーターは信じ、私にもそう言っていた。
結婚出来ない私はスイスで働く事は出来ず、働かなければ自分一人で子供を育てる事はそれこそ不可能であった。
何事も両親に頼らないで生きて行くつもりでいるペーターに、金銭面の援助を彼の両親に求める事は、私には勿論出来なかった。
私は心の中で泣きながら中絶を決めた。

住んでいた田舎町の周辺では中絶をしてくれる病院がないというので、ジュネーブにあるクリニックへ行くことになった。
ペーターは友達から車を借りて、私をジュネーブまで連れて行ってくれた。
ジュネーブのクリニックは想像以上にきちんとした病院で、先生はなんと中国人だった。
予約をした時間に先生との面接があり、どうして妊娠したのか、どうして中絶したいのかなどを訊かれ、私は正直に答えた。
中国人の先生は「これからちゃんとピルかコンドームを使いなさいよ。又ここに来ることのないようにね」と英語で優しく言ってくれた。
それから私は6ベッドほどある病室に連れて行かれ、そこで手術を待った。
待っている間に3～4名の若い女性達が同じ病室に入ってきた。入ってくる度に挨拶をしたが、その後はみんな言葉少なく、じっと自分の番が来るのを待っていた。
「みんなはどんな事情でやって来たのだろう・・・」
20歳前後の彼女達を見ながら、私はそんな事を思いめぐらしていた。
看護婦がやって来て一人ずつの名前を読み上げ、名前を読まれた人から順番に手術室へ向かっていった。
手術が終わった人は又同じ部屋に戻ってくるのだが、つい先ほどまで目の前で静かに座っていた女性が、麻酔でもうろうとした顔や姿で戻ってくるのを見て、私もあんな姿で戻ってくるのかと思うと情けなかった。
そして、いよいよ私の名前が呼ばれた。
どのくらいで麻酔が覚めたのだろう、気がつくと、数名の女性はもう病室を後にしていた。

私もまだ麻酔から覚めきらない重い身体を引きずりながら、受付で料金を支払い、クリニックを後にした。

ところが、私は又1ヶ月後に妊娠してしまった。
そろそろ不妊のピルを買って飲み続けなければ、と思っている矢先だった。まさか、中絶1ヶ月後に妊娠するとは思ひもしなかった。
同じ家に住んでいるポルトガル人のガールフレンドも同じ時期に妊娠した。彼女はとても子供を欲しがったが、結婚していない彼女とボーイフレンドも私たちとほぼ同じ状況にあり、子供を持てるような経済的余裕はなかった。
私たちは一緒にジュネーブの中国人医師の所へ行くことになった。
友達の小さな車に友達とガールフレンド、そして私とペーターが乗り込み、スイス南部のジュネーブを目指した。スイスを縦断するには3時間もあれば十分だ。
いつもは口さえ聞かない私と彼女だが、二人とも同じ状況にあるということで、この日ばかりは仲良しだった。
友達の小さな車の中で誰かが冗談を言っではみんなで笑い、ジュネーブまでの道中は観光旅行のようだった。
クリニックに到着して中国人先生のいる部屋に入った途端、先生が驚いた。
「あれ～、君、この間来たばかりじゃないの！ピルやコンドームを使いなさいと言ったのに使わなかったの？」
「ええ、すみません」
「ちゃんと気をつけないと身体に悪いよ」
「はい、これからは気をつけます」
先生にも自分自身にも申し訳ない気持ちで一杯になりながら、私は病室へ向かった。
数時間後、私と友達のガールフレンドは無事に手術を済ませ、男性二人が待っている車に乗り込んだ。中絶した女性二人を乗せた帰りの車中は沈んでいた。



スペイン自転車旅行

スイスとドイツ国境近くの田舎町の生活は毎日静かに過ぎていく。とても平和で、少し退屈で。

そんなある日、突然ペーターからスペイン行きの話が出た。

どこからそんなアイデアが浮かんできたのか知らないが、今度は全く知人も居ない未知の国へ行くという。旅行ではなく、スペインに行って住む家を探し、そこで絵を描いて生活しようとペーターは言った。

突拍子もない話だが、これはスイスに長期滞在出来ない私の為に彼が考えだした対策であることは明らだったので、私は直ぐに話に乗った。田舎町の生活に退屈していることも後押しをした。

驚いたのは、スペインには自転車で行くという彼のアイデアだった。

あの、広い、広い、バカでっかい面積のスペインを自転車で回る！

考えただけで頭がくらくらしたが、まあ、こんな冒険も今だからできるのだと思い、私は賛成した。

とにかく私たちには時間だけはたっぷりあるのだ。

スペイン自転車旅行は、先ずは自転車を買うことから始まった。新品は高すぎて買えない私たちは、新聞広告でセカンドハンドの自転車を見つけ、その持ち主が住む遠い郊外までバスを乗り継いで買いに行った。

あの当時の自転車にはギアが3つしかついていなかった。

長い旅行中はホテルなどに泊まれるはずもなく、私たちは品質がいいスイス軍の寝袋を購入した。ダウンの本体と、それをすっぽり包み込むナイロンのカバーが付いており、小さい私が二人は入れそうな、大きく、しっかりした、カーキ色の寝袋だった。

その他に、自転車後輪の両脇に付けるバッグ、水筒、キャンピングセット、レインコート、そして勿論スイスのアーミーナイフもスイス軍で調達した。中立国と言っているスイスには徴兵制度があり、男性は18歳になると兵役を務められるかどうかの身体検査がある。その検査を通ると20歳で初めての訓練があり、そして軍隊個人装備一式が支給される。だからスイスのどの家にも銃があり、同時に、必要な物はいつでも軍で購入出来るようになっている。持っていく着替えなどを最小限にしても、私たちの自転車に積む荷物はかなりの量になった。それを自転車の後ろに積むと、その重さで前輪が浮いてしかたがなかった。自転車にはもう何年も乗っていなかった私は、こんなに重い荷物を積んだ自転車を操作できるのだろうかと不安になった。

いよいよ出発の日。

私たちはフランスとスペインの国境にあるペルピニオンの町へ向けて自転車と共に夜行列車に乗った。

夕暮れ時の列車を私は好きになれない。コトコトと走る列車の窓の外にオレンジの光を灯した家が流れて行くと、私は暖かい家庭で過ごした子供時代を思いだして、なぜかメランコリックになる。

特にこうして住む場所を探す旅に出ている時に見た闇の風景は、私の心の奥まで暗くした。

翌朝、長い列車の旅を終えた私たちは、太陽の輝く中、ペルピニオンの構内に降り立った。構内はラテンの匂いがした。

ペルピニオンの駅前賑やかな商店街で、人や車がひっきりなしに通っている。あの賑やかな通りの中を、この重い自転車を漕いで通り抜けなければいけないのかと思うと、私は尻込みした。

真っ直ぐに持つだけでも大変な自転車なのに、その上に乗って両足でペダルを漕ぐなんて、まるでサーカスではないか。

案の定、構内を出かかったところで私の自転車の前輪が浮かび上がり私をオロオロさせた。

長身のペーターは慣れたもので、スイスイと自転車を漕いでいく。見失っては大変と、私も自転車にかろうじて乗り、あちらにヨロヨロ、こちらにヨロヨロしながら前進していった。

町を出ると直ぐに郊外が広がり私をホッとさせたが、それもつかの間だった。私たちが走っているアスファルトの細い路を大型トラックが勢いよく走り、その度に、路の脇を走っている私の自転車を大きく揺らし、私に冷や汗をかかせた。

一度は、トラックが私の帽子を吹き飛ばしたこともある。私たちのスペイン旅行の始まり、始まりである。

私たちは毎日スペインの田舎道をギーコ、ギーコと自転車を漕いで行った。途中で小さな町に出くわすと、そこでパンや食材を買い込む。それから又ギーコ、ギーコと漕いで、夕方近くになると町外れの雑木林や人気のない静かな場所を探して寝床を作った。

寝床が出来ると、先ずはその側でコンロに火を焚いて簡単な夕食である。インスタントスープとパンの日が多かったが、時々パスタを茹でてインスタントソースと共に食べることもあり、それは大変なごちそうであった。

私たちはパン屋が存在しない小さな町にも出くわした。パン屋がなくて住民達はどうするのかと思ったら、そういう町には毎朝パン屋が車でパンを運んでくるらしい。

そんな小さな町に通るかかると、私たちはパンのかけらさえ目にする事ができなかった。

パンが手に入らないと、その日の夕食と翌朝の朝食には主食がないことになるが、別にそれでお腹がすいて困る事はなかった。

食事が終わって周りが薄暗くなってくると、私たちは寝袋を開いて滑り込んだ。最初の頃は「誰かが襲ってくるのではないか」と外で寝るのが怖かったが、それもその内に慣れてしまった。というか、私たちは1日の自転車漕ぎの疲れで寝袋に入ると瞬く間に眠りに落ちてしまった。

1週間ほど平地を走ったところで、ピレネー山脈が迫って来た。あの山脈をギアがたった3つしかない自転車で越えなければいけないのか。いや、自転車を漕いで上がるのは無理だろう。ギアが沢山付いていたとしても、プロの自転車漕ぎの人にしか頂上まで登ることは出来ないだろう。思った通り、最初の小さな坂を上り始めたところで私たちはギブアップした。そして、そこからずっと自転車を押して登った。何月に旅行をしたのかももうはっきりとは覚えていないのだが、日が昇るとかなり暑くなったので、秋口だったと思う。坂はきつい、荷物は重い、もう何も考えられずにひたすら自転車を押した。昼時はかなり暑くなり、木陰で短い昼寝もした。少し涼しくなると又自転車を押し、夕方近くになると路からそれて誰にも見つからないような場所に野宿の準備をする、そんな毎日だった。

ピレネー山脈は3000m級のかかなり高い山である。自転車で頂上まで行けるはずはなく、私たちはいくつもある道の中でも一番低い道を選んで通っていった。それでも、私たちはかなり高く登ったようで、岩肌が見える場所に野宿をしたときは、朝、目が覚めてみると寝袋の足元部分が凍っていて驚いた。品質の良いスイス製寝袋を使っていなければ、二人とも凍え死んでいたかもしれない。山を下り始めたら、今度は寒くて大変だった。下りだから自転車の勢いもあるが、更に雨が降りだし、気温が急に下がった。持っている服を全部着ても寒く、二人は新聞紙を四角く折って胸の所に当てて下った。

上りも大変だが、急カーブの続く下りも大変だ。寒くて疲れていたのだろう、私はある急カーブを曲がる事ができず、下ってきた勢いでそのまま道の反対側にある壁に「ドンッ！」とぶつかったことがある。先を走っていたペーターがはっと振り返った。幸いな事に私は擦り傷さえ追わなかったが、「壁があって良かった、そして車が反対側から一台も走ってこなくて本当に助かった」と自分の運に感謝した。

私たちは野宿なので朝夕は水筒の水で歯を磨いて顔を洗った。週に一度、川を見つけた時にはそこでシャンプーし、身体を洗い、洗濯もした。ある時、歯を磨いて口をゆすいだ川の水が汚れていたのだろう、私は大変な下痢をしてしまった。もう水のような下痢で、何も食べることが出来ない。それでも病院に行くとか、薬を買うことはなかった。更に、下痢だからと行って野宿の場所に留まることは出来ず、私はいつものように自転車に乗った。乗って必死に漕いでいるのだが、下痢ですっかり力を失った私はペーターからどんどん引き離されていった。そんな日が数日続いた。ある日の夕方、野宿の場所で夕食の支度を始めていると、突然「痩せたなあ・・・」とペーターが言った。

体力を使う自転車こぎと下痢で、私は自分で気がつかないうちに肩の骨が浮き出るほど痩せていた。でも、痩せたら痩せたでいいや、と私は以外に元気だった。

スペインは非常に大きな国だと自転車で旅をしていると実感する。想像を絶するような風景も沢山ある。

私たちは大きな都会を横切り、小さな田舎町を通り抜け、後はただひたすらだっ広い平野を走り続けた。

そんな平野を自転車でツーッと走っていた時である。急に目の前に広大な麦畑が広がった。刈り入れ時だったのだろう、黄金色に輝く畑は野球場が二つも三つも入りそうな大きさだった。

木陰で自転車を降り。休憩がてらにその麦畑を眺めていると、金色の畑の隅の方におもちゃのようなトラクターが煙を上げながら麦を刈っているのが見えた。

その豆粒のようなトラクターの小ささ、そして海原のような麦畑の大きさに私は呆然とした。

この日、夕方が近づいているのに、私たちは野宿をする場所をなかなか見つけられなかった。闇が迫り、私たちは少し焦った。早く見つけないと寝床も作れないし夕食も摂れない。

もうどこでもいいや、と道ばたからさほど離れていない、川沿いにある藪の横に寝袋をしいた。

まずは夕食を摂ってしまおうと火の準備を始めていると、なんだか蚊がブンブンと邪魔をする。最初は気にしなかったのだが、その内に蚊の数が多くなり、夕食もおちおち摂っていられなくなった。

手にチクリ、首筋にチクリ、顔をチクリとやられ始めた。刺された所を手でパチッとやると、手には真っ赤な血がついた。

これは大変だ、私たちは蚊の住処の真ん中に寝床を作ってしまったようだ、と気づいた時はもう遅かった。夕食どころではなくなった。

外は真っ暗闇で別の場所へ移ることもできない。こうなったら、まっすぐ寝袋へ逃げ込んで朝を待つしかない。二人ともスイス製の頑丈な寝袋に体を滑り込ませた。ただ、顔が出ている。それをどうにかして隠さないと、明日の朝には二人共、蚊に刺し殺されているだろう。

とっさに頭に浮かんだのは、スイスの軍隊が使っているレインコートだった。このレインコートの背中部分は通気性を考えて網になっており、その上にカバーが掛かっていた。このレインコートをすっぽりと頭から上半身にかけ、網の部分を顔の所に持ってくれば窒息することもなく、蚊も避けられるだろう。二人はすぐに実行に移した。

寝袋とレインコートでしっかりと体を保護した事を確かめた後は、静かに、動かないように、身体を横たえる事だけに集中した。蚊との戦いである。

じっと横になっていると、「ヴ〜ン、ヴ〜ン」と蚊の飛び回る騒音が聞こえてきた。

私たちの周りは蚊の大群が飛び交っているようだ。

閉め切った寝袋と恐怖とが一緒になり、体全体がじっとりと汗をかいてきた。

これが蚊の興味をそそったのか、目をそっと開けて見てみると、今度は顔の部分にある網の目まで抜けて入ってくる蚊がいる。やっと動かせる手を使ってパチッと顔をたたいた。数匹はかまわないが、大群に入ってこられてはたまらない。私はひたすら動かずじっと朝を待った。

眠ったのかどうか分からない。レインコートを通して外が明るくなっていくのが分かった。「朝だ！」

ペーターの名前を呼んでみると、彼も答えた。そして、二人は一斉に寝袋から跳ね起きた。

あんなに沢山いた蚊は殆どいなくなっていたが、私たちは朝食も摂らずに、さっさとその場を立ち去った。

「ヒステリーにならずに、よく我慢して寝ていたね」

ペーターはそう言って私を褒めた。日本人は我慢強いのである。

スペインの荒野のようなところを走っていた時である。車も殆ど通らず、木々の背も低く、石ころの多い赤土の高台だった。

道路の両側とも切り立ち、ずっと向こうまで見渡す景色が続いていた。

そんな時、左手にコンドル（ハゲワシ）の一羽がふわっと浮いたかと思うとスーッと沈んでいくのが見えた。

「あっ、コンドルだ！」と言っていると、又一羽ふわっと浮いて沈んでいった。

「ちょっと行って見てみよう！」

私たちは自転車を道路の脇に止め、コンドルが浮いて来た崖の方へゆっくりと歩いていった。崖近くになると更に物音を立てないように、低姿勢で進んだ。崖の真上ではもう腹ばいだった。

そして崖下を覗いて驚いた。頭がはげてクビの周りだけに羽毛がある、あのコンドルが群れを成して集まっていた。30羽ほどいたのだろうか、私は少し恐怖を覚えた。

別に何かを食べているところではなかったが、家族会議でもやっていたのか、静かに地面を歩き回っていた。

私とペーターは目だけで「すごいね～」と言い合い、じっと観察していた。

回りは全くの静寂だ。

とその時、

「パーンッ」

と、どこからか銃のような音がし、その途端、バサ、バサ、バサ・・・とコンドルが一斉に飛び立った。

崖下を覗いていた私たちの直ぐ目の前を、翼幅の長さが3m以上はありそうなコン

ドルが群れを成して飛び上がって来た。そのコンドルの大きかったこと。

私とペーターはとっさに頭を両腕で囲い、うつ伏せになってコンドルが飛び去るのを待った。

全てが飛去った後は又静寂がやって来たが、私はあまりの興奮でしばらく動けなかった。

スペインにはシエスタといって昼食が終わると昼寝をする人が多い。暑い夏の日中は暑すぎて何も出来ないの、こういう習慣が出来たのだろう。

殆どの店も閉めてしまい、涼しい夕方になってからしか開かない。そんな時間帯に町に到着すると、町はまるで死んだように静かだ。バーが一軒ほど開いているだけで、私たちも木陰を見つけて休憩するしかない。

町の中心にある広場に座っていると痩せた犬が一匹ひょろりと歩いている。

暑い日差しの中に立ち並ぶ真っ白に塗られた家々がまぶしかった。

スペインの旅行中、そんな景色を何度も見た。

少し大きな町の広場で休憩をしていると、その町の若い神父と出会った。

話好きな神父は私たちに話しかけてきて、私たちがスペインに住居を探しているのだと知ると、一件借家を知っているから紹介する、ここで待っているようにと言って去っていった。

どんな所なのだろうと期待しながら待っていたが、待てど暮らせど、その神父は戻ってこなかった。
私はしびれを切らして、「彼は戻ってこないよ、もう先に進もうよ」とペーターを誘うのだが、クリスチャンであるペーターは神父の言葉を疑うなんてとんでもない、と私を叱った。
それから更に待ってみたが、外が暗くなっても、とうとう神父は私たちの所へ戻ってこなかった。
ペーターは信ずる者から裏切られて言葉もなく、しごく落ち込んだ顔をしていた。神に仕える人でも、まあ、いろんな人がいるものだ。
スペインを旅行中、こういう人たちに何度か出会った。その度にペーターはその人を信じて待ち、結局、待ちぼうけを食わされた。

スペインの大きな平野には、しばしば強い風が吹いた。
そんな風の日の野宿は大変だった。森を見つければ少しは風を避けられたが、大きく開けた平野には風を防ぐものが何もない。私たちは2本の木が立ち並んでいる場所や柵、藪などをみつけると、そこにレインコートを巻き付けて壁代わりにした。その日も強い風が吹いていた。
夕方にも近づいていたので、早めに野宿の準備をしようと私たちは道路から抜け、平野の方へ自転車を押していった。
しばらく歩いていると、沢山の羊と羊飼いのおじさんに出くわした。見ていると、そこから直ぐ近くに小さな藪がある。私たちは、そこで一晩を過ごす事に決めた。
「風が強いねえ」
「強いですねえ」
私たちは羊飼いのおじさんと挨拶を交わしながら、自転車から荷物を降ろし、さあ、どうやって風を防ごうかと相談し始めた。
「こんなに風が強いのに、ここで野宿するの？」
羊飼いのおじさんが訊いてきた。
「この辺りに泊まれそうな家もないし、はい、どうにかして野宿をします」
ペーターがそう返事をする、と、羊飼いのおじさんが、「わしの所に泊まったらいい」と思いがけない事を言ってくれた。
嬉しかった。こんな風の強いところに野宿しなくてもいいのなら、どんな所でもかまわない。
「はい、ではお願いします」
羊飼いのおじさんはうまい具合に羊を集め、「さあ、行こうか」と私たちに言って前を歩き出した。
私たちは羊の後を付いていった。

到着したのは羊飼いのおじさんの家と言うより、羊たちの小屋だった。
羊たちは到着するなり慣れた様子でさっさと自分たちの小屋に入ってしまったが、それを今度は羊飼いのおじさんがどんどん外に押し出し始めた。
私とペーターは何が始まるのかと不思議に思いながら見ていると、
「さあ、ここで寝たらいい、風は入ってこないよ」
おじさんは、すっかり空になった羊たちの小屋の前で、私たちを招き入れた。
二人ともびっくりしたが、風に煽られないだけでも幸いだ、とおそろおそろ小屋の中に入ってみた。
ムワーンと羊の匂いが鼻を突いた。
「これは寝るのになかなか勇気がいるな」

早く寝てしまおうと、寝袋を敷く地面を見て又驚いた。地面の上には羊の黒くて丸い糞がびっしりだった。そりゃあ、当たり前だ、ここは羊たちの小屋なのだ。

しかし糞の上に寝袋を上げるには、更に勇気がいった。

なるべく糞の少ない場所は・・・、と小屋の中を探していると、隅の方に少しの糞を見つけた。その少しの糞を集めて糞の上にばらまき、そして「エイヤッ」と思い切って寝袋を敷いた。

「なんだか、キリストを家畜小屋で生んだマリア様のような」

そんな風に考えたら気が少し楽になり、私はその内に眠ってしまった。

翌朝、私とペーターが羊小屋から起き出すと、羊飼いのおじさんが「朝食を食べていったらいい」と言ってくれた。

朝食は田舎風のパンにソーセージだ。そして飲み物は絞った羊のミルクだった。私は朝からソーセージには手が出なかった。

「ミルクは栄養がたっぷりだから沢山飲めよ」

おじさんが言ってくれたが、絞った羊の泡が出来たミルクは、羊独特の強い匂いがした。

「こんな新鮮なミルクはなかなか飲めるものではないし、断るのはおじさんに悪い」そう思った私は、鼻で息をしないようにして飲んでみたが、生暖かいミルクの感触がもう駄目で、それ以上は飲めなかった。

ペーターは義理堅い人なので、一生懸命に飲んでくれた。

羊飼いのおじさんのような親切な人に今度はいつ出会えるのだろう。

「グラシヤス、グラシヤス」

「有り難う」と覚えてたスペイン語を何度も繰り返して、私たちは羊飼いのおじさんの家を後にした。

数日後の昼下がり、私たちは広大な桃畑の横を通っていた。この地方は桃の産地なのだろう、桃畑は見渡す限り何処までも続いていた。

木になる桃に引きつけられて、私たちは道路から小さな砂利道に入ってしまった。

昼下がり作業をしている人は殆どいなかったが、一組だけ桃の収穫をしているグループを見つけた。

「あの一、その桃、ここでも買う事が出来ますか？」

私は訊いてみた。

「ああ、いいよ。いくつ欲しいの？」

作業をしていた女性が気軽に答えてくれて、採りたての大きな桃を沢山、信じられないような安値で売ってくれた。

その場でひとつガブリとかぶりついたら桃の甘みとジュースが口の中に広がり、疲れている身体に染み渡っていった。

残りの桃を自転車の後輪脇のバッグにしまい込み、私たちは先へ進んだ。

おいしい桃が手に入って良かったね、と二人で話しながら自転車を漕いでいると、

「ちょっと用を足したいから」、とペーターが道端で自転車を降りた。

桃を一杯積んだ彼の自転車を、「ちょっと支えて」と私に手渡して行ったが、私自身も山のような荷物と桃が詰まった自分の自転車を支えている。片手で彼の自転車をヨロヨロと支えていたら、急にグラッとバランスを崩し、そのままガッシャーンと音を立てて倒れてしまった。

「しまった！」と思ったが遅かった。ペーターはものすごい勢いで怒ってきた。

まるでわざと倒したかのように文句を言い、美味しい桃が潰れるじゃあないか、と大声で私を怒鳴った。

「なんだこの人は、私よりも桃の方が大事なのか？」

いつもは静かで穏やかなペーターは、時々こうした人を蔑むような怒りを表した。それは、どこから来ていたのだろうか・・・？

家探しの旅行だ。スペインの有名な町の大半を私たちは自転車で通り過ぎたはずだが、思い出として残しておく訳でもなく、町の名前はほとんど覚えていない。大きな闘牛場のある街に行った事は覚えている。この街で知り合いになった人に招待されて、興味半分、怖さ半分で闘牛を見に行った。感想としては、残酷すぎて2度と見たくない競技である。しかしスペイン人はこの競技に大興奮するのが強烈だった。

闘牛場というと、最古の闘牛場があるという街ロンダにも行った。闘牛場が目当てで行ったのではないが、セビリアからマラガへ行く途中に出くわした崖の上の街だった。

街までの長い長い坂を自転車で上って行った事は、後々何度も夢に見た。観光旅行をしている訳ではない私たちはガイドブックも持たず、どの街にどんな観光名所があるのか、全く知りもしなかった。

人里離れた小さな村では、年配の女性たちが家の前に並んで座り、ボビンレースをやっていた。

小さい頃にボビンレースが流行り、私も買ってもらってやったことがあるが、それは小さな棒状の上に6本のかぎ針がついていて、その回りをいろんな色のついた糸で星形に引っ掛けていくだけの簡単なものであった。それでも、その棒の下からカラフルなロープが出てくるのだから、ちょっとした手工芸であった

スペインのボビンレースは、小さな台の上に型紙を貼り、その型紙にそっていくつもの針を刺し、その針の下に糸を巻いた小さな棒を針の数だけぶら下げる形だ。レースの作り手はその棒を両手に持ち、右へ左へ、左へ右へと糸を針に絡ませていくのである。

カラコロ、カラコロと音をさせながら糸を絡ませていく女性たちの手先は驚くほど早く、出来上がるレースは繊細で美しかった。

彼女達はこのレースをテーブルクロスや縁飾りにし、洋服の襟として使い、小さなカーテンとして窓に飾ったようだが、大変な手作業の為、現在この種のレースを作る人は少ないらしい。

何処をどの順序で通って行ったのか定かではないが、私たちが通り過ぎた大きな町は、サラゴサ、タラゴナ、バレンシア、アリカンテ、バリャドリード、サラマンカ、マドリード、トレド（ラ・マンチャ州）、セビリア、マラガ、コルドバ、そしてエストレマデウラ州にあるメリダの街などだ。小さな町や村は数知れない。

トレドに滞在していたとき、私はたまたまセルバンテスの小説「ドン・キホーテ」を読んでいた。本の中に書かれている町や風景がそのまま目の前にあって面白かった。

トレドの美術館では、絵全体が斜めにひしゃげた特徴のあるエル・グレコの絵も見た。

町を離れて平野に戻ると、私たちは放置されたハニーメロンや葡萄を食べ、荒地では自然に育ったアーモンドやイチジクの実を食べた。

アーモンドは石で殻を割って実を取り出し、熟したイチジクの実と一緒に食べると美味しい。旅人の大事な自然栄養補助食だ。



トイレなき家

自転車旅行100日目に向かえた昼下がり、私たちはエストレマデゥーラ州のバダホス県にあるメリダという街に入った。メリダは比較的大きな街で、中世の街並に古い遺跡がとけ込んでいる。

調べてみると、紀元前何十年という古い歴史のあるバダホス県は、スペイン国の中で一番大きな県であり、メリダはそこにある古い町の一つのようだ。

私たちは自転車を押して街の中を歩いてみた。街の至る所に、古代ローマ劇場を筆頭にローマ時代の建築物が残り、その間に延びる道路の脇にはヤシの木が立ち並び、南国の風情を漂わせていた。

街を歩いている人たちは体型や髪の色が一見イタリア人に似ているが、でも何処か深刻そうで、何か寂しそうで、あっけらかんの明るいイタリア人とは違っていた。大きな袋から殻付きのヒマワリの種を一つ二つ出しては口に入れ、もぐもぐとした後、器用に殻だけをペッと吐き出しながら歩いている人が沢山いた。「器用だなあ〜」と私は見とれていた。私も後で試してみたことがあるが、舌を噛みそうになったのでやめた。

さて、ペーターはこの歴史ある大きな町が気に入ったようで、私たちはここで借家を探すことになった。街では野宿ができないので、私たちは小さなホテルに部屋を取った。

「わーい、ホテルだー」

100日ぶりにベッドに寝られるし、暖かいシャワーも浴びられる。私は子供のようにはしゃいだ。

ただし、ホテルに滞在していても、食事は自分たちで作らなければいけない。まさか野宿をしていたときのように部屋でキャンピング用のガスコンロを使うわけにはいかないだろう。火事にでもなったら大変だ。

私たちは電気屋で小さな電気コンロを買った。それでも火を使うのには変わりはなく、私たちはホテルのオーナーに見つからないように、そっとコンロを部屋に持ち込んだ。

「さあ、料理をしよう！」

材料は整った。あとはコンロを繋ぐコンセントを見つけるだけだ。

ところが、このホテルの部屋にはコンセントが一つもなかった。

部屋の掃除をする時にどうやって掃除機を繋ぐんだろう、と二人で言いながら探しまわったが、いくら探しても部屋の中には見当たらなかった。

ただ一つ、洗面台の上に設置されている蛍光灯の横に小さなコンセントがあった。

しかし、これはひげ剃り機用のコンセントであって、電気製品を繋げるものではない。かといって、これを使わないと料理ができない、食事が出来ない。

結局、私たちは無理矢理にそのコンセントに電気コンロを繋ぎ、簡単なスープを作って食べた。

ホテル滞在も1週間を過ぎた頃、いつものように、掃除のおばさんが入ってこないか、ホテルのオーナーがいないかと探りを入れた後、私たちは部屋で電気コンロを使い始めた。

しばらくすると、焦げ臭い匂いが鼻を突いてきた。それもプラスチックが焼けるような嫌な匂いだ。

「あっ！」

私は急いで洗面台の上にある蛍光灯を見た。

ああああっ、電気コンロを繋いだ所から煙が出ている……。慌てて電気コンロを抜くと、既に遅かりし。蛍光灯の横のプラスチック部分が真っ黒になって焼けただれていた。

「大変だ……！」

私は先ず、ホテルの人に臭いを嗅ぎ取られないように部屋の窓を大きく開け放した。漏電していないだろうかと心配したが、それは大丈夫だった。

「ふうう、危ない、危ない、火事にならなくてよかった……」

ホッとしたものの、真っ黒に焼けただれた蛍光灯をどうにかしなければいけない。

ペーターは直ぐに白いラッカーを買いに走った。

ラッカーと筆を買って戻ってきたペーターは、早速、蛍光灯の横の真っ黒に焼けただれた場所を手慣れた様子できれいに白く塗り始めた。さすが絵描きさんだと感心した。

その日から、私たちはホテルの部屋で料理をする事は諦め、パンやハム、缶詰だけを食べて過ごした。

何処でどういう経緯があったのか知らないが、町のどこかでペーターが地元の人と親しくなり、メリダからほど近い村に借家があることを聞き出して来た。その村は、メリダから10km離れた小高い山の上にあるという。

翌日、私たちは借家の持ち主というアントニオの車に乗り込み、その借家を見に村へ向かった。

アントニオの車でメリダの街を出ると、そこは見渡す限りの乾燥地帯だった。寒さや暑さに強い樫の木だけが、その広大な土地にぽつん、ぽつんと立っていた。

その乾燥地帯をアントニオの車は走り抜け、間もなく小高い山の坂をどんどん登って行った。

やっと到着した山のとっぺんに、その村はあった。村の名前は Don Alvaro ドン・アルバロと言った。

村はこじんまりとして、しかしその中心には小さな教会と広場があり、その回りに白い壁の家々がくっつき合って建っていた。

住民は合計すると数百人はいたのだろうか。若い人たちはメリダの町へ仕事に行き、年配者は村の回りで羊を飼ったり、オリーブを作ったりして住んでいるとアントニオが教えてくれた。

アントニオは彼の家の前に車を止め、私たちを中に招き入れてくれた。

アントニオの奥さんと小さな息子が出て来てお互いに挨拶をし、それからアントニオ手作りのワインとコップ一杯の水をもらって私たちは一息入れた。

質素な家だったが、中はタイル張りでひんやりと気持ちがよかった。でも、冬は寒いだろうなと思った。居間にある大きな暖炉に火を焚くのだろうか、と私は考えたりした。

一息ついた後、アントニオと私たちは借家を見に出かけた。

アントニオの家から歩いて行くと、村はずれのような所にその借家はあった。目の前に壁続きの長屋があり、借家はその一番端っこだった。

アントニオに促されて、舗装されていない道に面したメインドア、といっても10cmほどの厚みのある木で作られた、窓も何もない納屋に用いるようなドアだったが、そこから家に入っていった。

ドアから一歩足を踏み入れると、そこから歩いて10歩ほどの正面に裏庭に出るドアがあった。途中に部屋が左右に一つずつ、裏庭に面したドアの前にはセメントの広い床があった。

「キッチンは？、トイレは？」

私はアントニオに尋ねた。

「あっ、ない」

「・・・ない？」

借家となったこの家は元々住居ではなく、羊小屋として使ったり、納屋だったりした場所なのだとアントニオが言った。

しかし、キッチンもトイレもないと言うことは、家の中には水道も通っていないのか！ 私は信じられなくて、しばらく言葉もなかった。

それを見たアントニオが裏庭に通じるドアを開けて、ほら、ここに井戸があるよと教えてくれた。

そこには、ロープで水を汲む大きな井戸があり、その後ろに家よりも大きな庭が広がっていた。庭の端の方に牛か羊小屋があり、そして真ん中に鶏小屋がドンと建っていた。

「100日も旅行をして見つけたのがこんな家！？キッチンもトイレもない所で生活は無理でしょう！」

ペーターも同じ考えでいると思い、彼の方をふり向くと、なんと彼は既にアントニオに借りる交渉をしていた。

「彼はもう探す気力もなくなったのか、それとも本当にこんな小さな村の、そして不便な家に住むのが面白いのか？」

私は、もうどうにでもしてくれと言う気持ちだった。ただ一つだけ不安が残った。

「キッチンはどうにかなるとしても、トイレがないとはどういう事だろう？」

数日あればベッドや家庭用のガスコンロを家に入れておくから、とアントニオに言われ、私たちはいったんホテルに引き返した。

数日後、ホテルをチェックアウトした私たちは、今度は自転車に乗ってドン・アルバロへ向かった。ところが、これが想像以上に大変だったのである。

村までの10 kmは少しずつだが昇りになっている。車だと簡単だったが、自転車で

昇るにはきつい傾斜だった。

「こんなに辛い思いをしてたどり着く家がキッチンもトイレもない家とは、私たちは何をやっているのだろう・・・」

私は情けなくて、ペダルを漕ぐ足に力が入らなかった。

借家に到着してみると、アントニオがいろんな物を設置している所だった。

座ってみるとキュン、キュンと音がするスプリングが付いたメタルベッド、その上に昔風の薫入りの固いマットレス、小さなテーブルと椅子2脚、そして裏庭に面するドア前のコンクリート床の上にガスコンロがドカンと置かれていた。すべて何処かで使われていたらしい古いものだった。

「どうだい、これでちょっとは家らしくなっただろう」

アントニオが自慢たらしく、でも人懐っこい顔で言った。

私は最後の不安をアントニオに向けた。

「・・・それで、トイレはどうしたらいいの？」

「ああ、裏庭だな」

アントニオがそっけなく答えた。

「裏庭・・・？外・・・？」

私は開いた口が塞がらなかった。

アントニオが帰ってしまい、私とペーターが借家に持ち運ばれた物を片付けていると、間もなく私はトイレに行きたくなった。

「ああ、どうしよう・・・」

トイレのない家を借りるなんて、と今更悔やんでもしょうがない。アントニオの言う通り、裏庭でするしか方法がないのだ。

自転車で旅行中、自然の中でトイレをすませることには慣れていたが、ここはちょっと様子が違う。壁があると言っても隣には人が住んでいるし、裏庭には木戸があり、そこから誰でも出入り出来るようになっている。落ち着かないではないか。しかし、何を言ってみても用を足すには裏庭しか場所がないのだ。私はそーっと裏庭に出てみた。

排水のためか、庭を突っ切るようにセメントの細い道が作られていた。私はそこで用を足す事にした。ただし、そこは庭の隅というより、かなり庭のど真ん中であつた。

いつ人がやってくるか分からない。私は用を足しながら「誰もやってきませんように」と祈った。

何度かそうやって用を足し、一度だけ、祈りを忘れて用を足していたことがある。

途端に、裏庭の木戸から急にアントニオが現れ、私はとっさに下着を上げながら中腰になる、アントニオもあわてて身体を翻す、ということがあった。おちおち用も足していられないのである。

さて、大きい方はどうするか。二人でさんざん考えた挙げ句、庭の隅にある羊小屋として使っていたらしい屋根付きの場所に穴を掘り、その上に板を2枚渡した上ですることにした。一回使用する度に消石灰を撒き、臭いを消す事も考えた。

これは良かった。少なくとも誰かが急に入ってきて驚く事はない。

穴がいっぱいになったらどうするのか、というところまでは、その時はまだ考えていなかった。当面は快適なトイレだった。大雨が降るまでは・・・。

あれはスペインの雨期だったのか、雨が何日も降り続けていた。

トイレは外なので傘をさしながら用を足さないといけないし、大きい方になると羊小屋まで歩くことになる。しごく面倒だった。

しかし、もっと面倒なことが、ある日起こってしまった。

この日も強い雨の中、私は傘をさして用を足す為に羊小屋へ向かった。小屋にたどり着き、傘をたたんでひょっと穴の方を見て、私の目が点になった。

降り続いた雨が地面深くまで浸透したのだろう、私たちの掘ったトイレの穴から水が溢れ出し、そしてなんと、穴に溜まっていた汚物がプカプカと浮き始めていたのである。

私は愕然とした。

「ペーター！」

私は彼の名前を叫びながら雨の中へ飛び出した。

使えなくなったトイレの後始末をどうしたのか、私は何も覚えていない。あまりのショックに気が動転してしまい、私の記憶は飛んでしまっている。

とにかく、この穴掘式のトイレは没になり、私たちは直ぐに別の方法を考えなければいけなかった。

しかし、いつもトイレが身近にある生活をしてきた私たちには、別の方法など簡単に浮かぶものではなかった。どうしよう、どうしよう、と一日中考えた末にやっと浮かんだアイデアがこれであった。

大きい方をする場所は以前と同じ羊小屋の屋根の下。そして方法は、まず新聞紙を土の上に置き、その上に用を足して消石灰を撒く。そして、その新聞紙を包みのように丸めたら横にある大きなゴミ袋に入れる。ゴミ袋がいっぱいになったら何処かへ捨てに行く。

ものすごく原始的だが、私たちにはこれしか方法が浮かばなかった。

そうしていっぱいになったゴミ袋を、ペーターは定期的に自転車に積んで山奥に捨てにいくてくれた。

その姿を見ながら、ありがたいなあ、と思ったが、トイレのない家を選んだのは彼なのだ。申し訳ないが、やってもらうしかなかった。

裏庭にあった井戸水は命の次に大切な物であった。日に何度も利用するのだが、毎回綱を引いて水を引き上げるのは大変な力仕事だった。

駄目元で、スイッチ一つで水が出てくるモーターをつけてほしいとアントニオをお願いして見たら、彼も井戸の不便さが良く分かっていたのだろう、直ぐにつけてくれた。これは便利だった。

ついでにシンクも欲しいと言ってみると、石のシンクをガスコンロの横に置いた。シンクと言っても洗い場の石があるだけで、配管などはもちろんない。私は自分で工夫してみた。

まずはバケツで水を運び、栓をしたシンクに入れる。そこに溜めた水で野菜などを洗い、使用済みの水はシンクの栓を抜いて下に置いた別のバケツに溜まるようにする。それが一杯になったら外に運んで捨てるか、庭の野菜畑に撒く。

この方法で、野菜を洗って料理が終わるまで、私は井戸まで頻繁に往復する必要がなくなった。

シャワーは週に一度だけ浴びた。

ガスコンロでお湯を沸かし、水の入ったバケツに入れて適温にし、ガスコンロの前のコンクリート床に座り髪と身体を洗った。

シャワーはペーターと一緒に浴びるようにして、お互いの髪にお湯の掛け合いをやった。

暑い時期はこれで結構面白かったが、寒い時期になるとコンクリートの床が冷たくて縮み上がった。それでも1週間に一度のお湯のシャワーは楽しみで、心身共にスッキリしたものである。

こうして、私たちのスペイン田舎生活が始まった。
アントニオを通して私たちは村の住民たちとも直ぐに仲良くなった。ドン・アルバロは小さな村なので、住民全員が親戚のような仲だった。
あの時代、村に旅行者が来ることはほとんどなかっただろうし、特に私のようなアジア人が来たのは初めてだったのだろう、私はどこへ行ってもみんなから親切にされた。
その中でも、アントニオのお姉さんであるオラジャは特に親切で、私たちに村の生活習慣をいろいろと教えてくれた。お菓子やスペイン料理を作っては、私たちにごちそうしてくれたのもオラジャである。
彼女はツナ缶等に入っている油を捨てずに取っておき、それで石けんを作っていた。私にも作り方を教えてくれたが、。私はどうも魚缶の残り油で石けんを作ることにあまり興味が持てず、やってみたことはない。

私たちの住んでいた州は「エストレマデウーラ」と言う名前前で、それには「特に厳しい」という意味がある。そしてその名の通り、エストレマデウーラの冬はとても厳しく、夏もかなり暑くなった。
私たちが借りていた家は住居として造られたものではなかった為、家の中に暖炉は造られていなかった。寒い冬、どうして過ごそうかと思っていた矢先、私はこの町でとても懐かしいものに出会った。それは炬燵である。
テーブル式の炬燵とでもいおうか、日本のように床に座る代わりにスペインでは椅子に座るのだが、後は日本の炬燵と全く一緒だった。初めて見たときは、あまりの懐かしさに感動したものだ。
テーブルの四つ足の下に板敷きがあり、真ん中に大きな穴があいている。外で火を起こして出来た火種をメタルのウオックのような鍋に入れ、それをこのテーブル下の穴にポコッと収める。そして、テーブルの上から布団やブランケットを乗せて床まで囲み、更にその上に木のテーブルを置いたらスペイン式炬燵の出来上がりである。
ブランケットの中を覗いてみると、足元の木の回りに猫が寝ていたりして、日本の炬燵と一緒にあった。
何処の家庭にもこの炬燵があり、冬の寒い日々は家族がくっついて過ごすのである。私たちも早速アントニオに頼み、炬燵を家に入れてもらった。この炬燵なしではエストレマデウーラの冬は超えられなかったと思う。
反対に日差しがガラガラ照りつける夏は、年に一度、家の外壁を白く塗り、太陽の強い日差しを遮る習慣がこの村にあった。
我が家と隣の区別がつかないように続いている外壁の白塗りは、お隣さん達と一緒にやるのが通常だ。
暑い夏、家の中でうだっていたという記憶が私にはないので、この外壁の白塗りは結構効果があったようだ。



スペインで子羊を育てる

ドン・アルバロには羊で生計を立てている人が多かった。村外れに散歩に出ると、そこにはいつも沢山の羊が放牧されていた。

この日も、私はペーターと一緒に散歩に出かけた。

少し歩いて景色のいい小高い場所に着いた時、そこで煙草をくゆらせながら、おとなしい牧羊犬と一緒に佇んでいる羊飼いのおじさんに出逢った。おじさんの眼下には沢山の羊が群れをなしていた。

「ボエナスディ阿斯」私たちはおじさんに挨拶をした。

「おお、あんた達は外国人かい？」

「そうです。スイスから来て、今ここに住んでいます」

「ああ、アントニオのとこだね。聞いてるよ」

おじさんは静かな口調で、気さくに私たちに話かけてくれた。私とペーターも知っている限りのスペイン語を使い、おじさんと会話をした。イタリア語を上手に話したペーターは、この頃、スペイン語もうまく操れるようになっていた。

そんな私たちが気に入ったのか、「一緒に家に行こうよ。コーヒーでも飲もう」とおじさんは私たちを彼の家に招待してくれた。

「家に娘が二人いるんだ。きっとあんた達の話聞いたがるよ」

おじさんはそう言いながら先頭を歩いていった。

「ここだよ」

おじさんが止まったのは、立派な家の玄関先だった。羊飼いのおじさんだと思って着いて行った私たちは驚いた。

家の中には綺麗にした奥さんと年頃の娘二人がおり、どの部屋もきれいに飾られ、かなり裕福な家だと直ぐに判った。
おじさんは羊飼いをしていたけれど、村の地主のようでもあった。
私たちは、刺繍が施されたテーブルクロスのかかったテーブルに座り、花柄の陶器のカップでコーヒーを飲んだ。
おじさんの娘二人がペーターに話しかけている。
優雅な雰囲気だなあ、と私はコーヒーを飲み終わったテーブルで思っていた。
そして、この家にはきっとトイレがあるに違いない、とも思っていた。
この日を境に私たちはおじさん家族と親しくなり、しばしば彼らと一緒に遊ぶようになった。
おじさんの年頃の娘二人は、若くて背が高い金髪のペーターが大変に気に入った様子だった。キッチンもトイレもない我が家を訪ねて来るときでさえ、二人は綺麗に着飾って来た。

ある朝、裏庭の木戸をコンコンとたたく音がした。
アントニオ以外は訪問客のいない我が家に誰だろうと思いながら木戸を開けてみると、あの羊飼いのおじさんが、未だへその緒をつけたままの子羊を腕に抱えて立っていた。
「ブエナスディアス！」
私が挨拶をすると、おじさんはひょいと子羊を私の腕に渡し、
「昨日、生まれたんだ。ミルクを買って育てるんだよ」
そう言って、そのまま去って行ってしまった。
ポカンとしている私の腕の中で、子羊は速い呼吸をしながらじっと抱えられていた。
「大変だ！ミルクを買いにいかないと。哺乳瓶も必要だ」
私は子羊をペーターに預け、自転車を出すと一気に村の中心部にある何でも屋店へ向かった。
羊のミルクは簡単に買えるのだろうかと思ったが、さすがに羊で生計を立てている人が多い村だ、店には量り売りのミルクが売られていた。私はミルク缶と哺乳瓶を買い、そこにミルクを入れてもらって家に戻った。
家に帰ってミルクを鍋で少し温め、一度何処かで見たことがあるように、ミルクを腕にちょっとたらしめて温度を確かめた。
哺乳瓶に入れて子羊の口に近づけると、子羊はうまい具合にちゅぱちゅぱと飲んでくれた。
通常、子羊がお母さん羊からミルクを飲むときは、前足を祈るようにひぎまずき、乳首を口に含んで、高くあげたお尻の上の小さなしっぽをクルクルクルと振る。
ミルクをあげている子羊も、哺乳瓶から飲んでいるのに同じ格好をするのが愛らしかった。
私はその日から羊のお母さんになった。私は子羊に「シャーフリ」という名前を付けた。ドイツ語で子羊という意味である。

最初の2日ほどは子羊を家の中で箱に入れていたが、直ぐに飛び跳ねるようになり、それから家の中を走り回って大変だった。
いつも私の後をついてきて、お腹が空くとお乳を探すように私の太ももを濡れた鼻で突つくので、くすぐったくて、私はしばらくスカートを履く事が出来なかった。
1週間後、私とペーターは子羊を外にある羊小屋に入れた。
お母さんである私と離れるのが寂しいのか、子羊は小屋の中で「メ〜、メ〜」と泣き続けたが、その内に慣れてくれたようで、おとなしくなった。

それから毎朝、私は起きると先ずは子羊のミルクを用意した。出来上がると羊小屋に向かって「シャーフリー！」と大声で名前を呼ぶ。そうすると子羊は、「メ〜、メ〜」と力一杯答えてきた。我が家の一日の始まりである。

私とペーターは、殆ど毎日のようにシャーフリを連れて散歩に出かけた。羊なのに犬のように人の後をついてくるのには驚いたが、これが羊の習性であろう。特にミルクをくれる私は彼女のお母さんなので、子羊は何処までも一緒についてきた。羊にもいろんな種類があるが、シャーフリは毛がクルクルと縮れた羊だった。そんな体毛をなでていると、手が油をつけたようにギシギシしてくる。この油を含んだ縮れ毛が、羊達を雨や風から守っているのだろう。ただし顔の所には産毛ほどこしくなく、メスのシャーフリは細面の優しい顔をしていた。散歩に出るとき、私はシャーフリの為に必ずミルクを用意し、それを黄八丈の着物の残り布で作った袋に忍ばせて家を出た。散歩の途中で休憩すると、黄八丈の袋にミルクが入っていることを学んだシャーフリは、トコトコとやってきて鼻で袋を突いた。動物の一番の関心ごととは食べ物だと言うが、それにしても良く覚えているものだとは私は感心して見ていた。ミルクを飲み終わったシャーフリは、座っている私の体に寄り添って横になった。立っている時は、彼女の頭を私の足の甲の上に置いて寝そべった。お母さんに甘える子供そのままである。

シャーフリと散歩をしていると、どうしても葡萄畑を横切ることになる。春になり、葡萄の幹に葉が出始める時期になると、シャーフリがその葉を食べるので困った。私たちは早足で通り過ぎようとするのだが、一旦、葉を見つけて食べ始めたシャーフリは、そこから動こうとしなかった。私たちがいくら呼んでも、引っ張っても駄目だった。もっと困ったのは、葡萄の実まで食べ始めたことである。そりゃ、葉よりも実の方が美味しいに違いないが、他人のブドウを食べてはいけない。私たちは必死でシャーフリを葡萄畑から引き離そうとしたが、身体の高いシャーフリは一步も動かなかった。仕方がない、私たちはトリックを使うことにした。まず、食べる事に夢中になっているシャーフリをそのまま置いて私たちは先を急ぐ。かなり離れたところまで行ったら、私たちはサッと陰に隠れ、そこからシャーフリの名前を呼ぶのである。そうすると、声はすれど姿が見えない私たちを捜して、シャーフリが猛ダッシュで私たちの方へ走って来る、という具合である。この方法で、私たちは葡萄畑の持ち主から苦情を言われる事を免れた。

我が家に飛び込んで来た動物というと、もう一匹、猫がいた。この猫は大嵐の夜に我が家へやって来た。ザーザー、と降る大雨の中で、時々「ミャ〜、ミャ〜」という声が外から聞こえていた。あまりにその声が続くので、ドアの窓の部分を開けてみると、その真下に、片手に入りそうな、それは小さなずぶ濡れの猫が、「中に入れてよ〜」というふうにドアに向かって泣いていた。

アッ、と驚いて慌ててドアを開けると、子猫はビョンと家の中に飛び込んで、濡れた小さな足跡を付けながらトコトコと真っ直ぐに家の奥へ入って行った。
小皿にミルクを入れてあげると、美味しそうにびちゃびちゃと飲み干した。
その夜から、この子猫も我が家の一員となった。

ドン・アルバロのシンプルな生活は、シャーフリや猫の仲間達と共に静かに過ぎて行った。ペーターはあまり絵を描くことはなかったが、スイスにいる彼のマネージャーとうまく行っているようで、私たちの生活は質素だが安定していた。
そんなある日、ペーターがとんでもない話を持ち出して来た。

「村で聞いてきたんだけど、第3次世界大戦が始まるみたいなんだ。それで、君は外国人だから直ぐに日本へ帰った方がいい。君がこのままここに居続けると、村の人たちから迫害を受けるかもしれない」

最初、私はペーターが冗談を言っているのだろうと思った。

「そんなバカな話・・・」と言ってみたが、どうもペーターは本気らしかった。

「第3次世界大戦...? そんなこと起こるはずがない」

いくら言っても、ペーターは村の人が言う事を信じて疑わなかった。

「私はそんな理由でこの町を去りたくない、ヨーロッパを離れたくない」

私は必死でペーターに自分の気持ちを伝えたが、彼は聞く耳を持たなかった。

日本に帰ったとして、その理由を「第3次世界大戦が始まるから」なんて言ったら回りから笑いものにされるだろう。

一人で居残る事も考えたが、こんな田舎で外国人の私が独り立ち出来るはずもなく、自分の力なさをつくづく感じた。

私は悲しかった。スペインのこの不便な田舎町には未練も何もなかったが、ヨーロッパを離れてしまうのは心の底から悲しかった。

日本が嫌いではない。しかし私はヨーロッパに古い故郷を憶い、落ち着くのである。こんな理由でヨーロッパを出ることになるとは、想像さえしなかった。

しかし結局、私は日本へ帰る事を受け入れ、同時にペーターも私と一緒にスペインを出ることになった。

スペイン生活3年目の後半だった。

私たちがスペインを離れると決まった時、動物達との分かれが待っていた。

大きくなった猫の方は、普段から勝手に入り浸っているお隣さんに引き取ってもらうことにした。

そして一人では生きて行けないシャーフリは、羊飼いのおじさんに返そうと私は考えた。

何も知らずに後をついてくるシャーフリと共に、私とペーターはおじさんの農家を尋ねた。

「こういう事情でシャーフリを置いて行かなければいけないのです」

「そうかい、しょうがないな」

「お願い、殺さないでね」

「種羊に使うから殺さないよ。心配しないでいいよ」

おじさんは約束してくれた。

それから私たちは、おじさんと一緒にシャーフリを羊の群れの中に入れてみた。初めて他の羊たちの中に混じったシャーフリは驚いたように逃げ惑った。

それを見て私の心が痛んだが、慣れてもらうしかなかった。スイスには連れて帰れない。私たちはシャーフリをそこに置いて、家に帰った。

私たちが1週間後に戻ってみると、どの羊がシャーフリなのか区別がつかないほど、彼女は他の羊に混じってえさを食べていた。

私は一度だけ、「シャーフリー！」と呼んでみた。すると彼女はキッと頭を上げて、私の方をじーっと見ていたが、その内に群れの中に戻って行った。

シャーフリは羊に戻った。これでいいのだ。私はほっとしたが、泣きそうになった。



日本帰国、何処へ帰る？

3年間過ごしたスペインからスイスへ戻ってきた私とペーターは、スペインへ行く前に同居していた友達の家には先ずは落ち着いた。ペーターはしばらくここに滞在するようだ。

友達と再会し、久しぶりにスイスの空気に触れた私はホッとしたが、心から落ち着く事はできなかった。私には、ペーターの希望通りに日本へ帰る準備が待っていたのだ。

スペインから持ち帰った荷物をゆっくりと整理する間もなく、これから先の事を話す為に私はペーターと向かい合った。先ずは航空券を購入するなどの資金が必要だ。するとペーターが、

「これで日本での新しい生活を始めるように」

と封筒に入ったお金を私に差し出した。中を見て、私はその金額の多さに驚いた。いつも金欠でやって来た私たちである、彼はこんな大金をどこで工面したのだろうか。ペーターに資金作りで無理をさせてしまったのだろうか、それとも、スペインにいたときからお金はあったのだろうか？

アメリカで彼の借金の返済にお金を渡してあげた時、利子を付けて返すからと彼は言ったが、それをまだ覚えていてくれたのだろうか。

どちらにしても、これから一人で日本に帰ろうとしている私には必要な資金だった。私は素直に彼に感謝し、それを受け取った。

いよいよ航空券も手に入り、出発日が決まった。

私は家族に手紙を書き、日本へ帰ることを知らせた。ところが、数日後、出した手紙が住所不定で戻ってきてしまった。

どうやら私の家族は、私に知らせる事なく住む場所を変えてしまったようだ。

母が生きていればこんなことはなかったのかもしれないが、父と弟の男二人では私に連絡する事まで考えが及ばなかったのだろう。

これは困った。私はいったい何処へ帰ればいいのか。

一応、航空券は大阪国際（伊丹）空港まで買っている。しかし、そこから私はどこへ行けばいいのか。私の足が急に宙に浮いたように感じた。

それでも、私の出発日は容赦なく近づいて来た。

日本へ帰る私を不憫にでも思ったのか、ペーターが新しい服とお揃いの帽子を買ってくれた。ありがとうと感謝したが、実際は、「こんな物をもらうより、ヨーロッパに残りたい」という気持ちの方が私には遥かに大きかった。しかし、それはもう言う時ではなかった。

スペインからスイスへ帰って来てからのペーターは、私に何かと優しく、その度に、私は本当に日本へ帰らなければいけないのか、と不思議に思ったものだが、最後まで二人で私の帰国について深く話し合う事はなかった。

考えてみれば、私はペーターと腹を割って話し合う機会がなかった。結果、お互いを深く理解する事はできなかった。

言いたい事が言えなかった私の言語の問題もあるが、それだけではなかったように思う。

二人がとことん話し合うには、お互いにそれに向けての積極的な姿勢が必要だが、私たち二人にはそれが欠けていた。

二人は愛し合っていたのか、それとも一緒にいるのが快適だっただけなのか。

多分、後半だろう。

ペーターが私の事をどう思っていたのか分からないが、私はヨーロッパに住めるだけで幸せに感じていたのだから。

もちろん、私は彼が好きだった。彼と一緒にいろんな経験をし、共に笑いあい、幸せを感じる瞬間は一杯あった。

ところが、愛し合っていたのかどうかと訊かれると、それは分からないのである。愛し合っていないくても、一緒にいるだけで快適に感じる人はいるのだ。ペーターは正にそんな人だった。

滞在先が分かり次第、荷造りした船使用の大きな缶を日本に送ってもらうという約束をペーターと交わし、私は買ってもらったばかりの服を身に着け、スーツケース一つでチューリッヒ空港に向かった。

ペーターとの別れはさすがに悲しかった。これで彼ともヨーロッパとも繋がりがなくなるのかと思うと、胸が締め付けられるようだった。

しかし、その悲しみよりも、私にはもっと心に重くのしかかっている心配事があった。それは、これから行こうとしている家族の居場所が分からない事だった。

何処へ行くのか分からないまま、私は飛行機に乗ろうとしている。不安で一杯なのに、身体は前へ前へと進んで行く。未知の不安と、どうにかなるだろうという信頼がごちゃ混ぜになり、私の頭は麻痺したようだった。

そして私は機内の人となり、ヨーロッパを飛び立った。

飛行機はシンガポール航空だった。

ヨーロッパから日本へ向かうには、今でもそうなのだろうか、シンガポールで1泊しなければいけなかった。私は空港内のインフォメーションカウンターでホテルを見つけ、タクシーに乗ってシンガポールの町の中へ入っていった。

たどり着いた安ホテルはチャイナタウンにあった。

ホテルのレセプションカウンターに座っている男性が怪しく見え、案内された部屋のドアがきちんと閉まらないことに私は不安を覚えた。

ドアの前に何か物を置いて身を守ろうか、そんなことを考えていると、急に下腹が差し込んできた。あれっ？、と思っている間に痛みはどんどん激しくなり冷や汗が出てきた。あわててトイレに駆け込んだら生理だった。

ああ、生理かと一瞬ホッとしたものの、痛みはキリキリと増してくる。私は便器に座ったまま「うん、うん」と唸り続けた。

このまま死ぬのかなと本気に思ったくらい痛みは激しく、私は気を失いそうだった。

どのくらい便座に座っていたのだろうか、痛みはまだ強く残っていたが、私は力を振り絞ってトイレから立ち上がり、そのままベッドに倒れ込んだ。

「はっ」と気がついたら、数時間が経っていた。私は眠ってしまったらしい。

嬉しいことに下腹の痛みはすっかりなくなっていた。私はあまり生理痛がある方ではないが、一人旅のストレス、日本の家族の居場所が分からない不安などが一緒になり、あのような痛みをもたらしたのかもしれない。

痛みがなくなると私は急に空腹を覚えた。そうだ、気分転換にどこかで夕食でも食べよう、と私はホテルの外に出て行った。

シンガポールにはチャイナタウン、インド街、マレーシア街など地区ごとに分かれ、それぞれの国の人々が集まって住んでいる。そして、あの当時、沢山の屋台が道路に出ていた。

私はカレーが食べたくなり、少し歩いてインド街まで行ってみることにした。

たどり着いた路上には屋台はなかったが、道路の脇には小さなレストランがいくつも並んでいた。何処もカレーのいい匂いをさせている。

入りやすそうな店はないかと、私は一件ずつ覗いていった。その中で、一番シンプルなレストランだが、数人のインド人客がおいしそうに食べている店があり、そこに入る事にした。

テーブル席に座り、何があるのか分からないので、私はチキンカレーを注文してみた。すると、ウェイターがレストランの入り口に置いてあった大きな鍋からカレーをすくってライスと共に持ってきてくれた。インド人は米とカレーをうまい具合に指で混ぜて口に運ぶが、私にはスプーンが用意された。

私の目の前に置かれたカレーからは香辛料のいい匂いが立ち上り、数時間も煮込んだらしいチキンはちょうどいい具合に柔らかくて美味しくて、空腹だった私は一気に食べてしまった。

下腹の痛みが嘘のようになくなり、美味しいカレーを食べてすっかり気分が良かった私は、さあ、この後は屋台の果物でも食べてみようかと、ホテルに向かいなが

ら道路脇に立ち並ぶ屋台を冷やかし始めた。裸電球の下でパパイヤやマンゴ等のトロピカルフルーツがおいしそうに光り輝いている。

どれを買おうかな、と果物の上に身を乗り出して眺めていると、ふっと、誰かがじーっとこちらを見ている気配を感じた。私はとっさに身を起こして周りを見回してみたが、そんな気配の人は見当たらなかった。

気のせいかと、私は先に進み始めたが、しかし今度こそはハッキリと、ある男が私の後をつけてくるのが判った。私の心臓が「ドクッ！」と鳴った。

外は屋台の電気が赤々と輝いているが、ホテル近くは道が暗くなる。なんと言っても町外れにある安ホテルだ。このままホテルに向かい、何処に滞在しているかを悟られてしまうのも嫌だった。

「よし、こうなったら彼を巻いてしまうしかない」私はとっさにそう考えた。

私は屋台の道から少し離れ、人通りはあるが、しかしこっそりと隠れられるような暗くなっている場所を探した。

男が後をつけてくるのを頭の後ろで感じながら、私の目は薄暗い場所を注意深く探した。しばらく歩くと、道路の反対側に歩行者専用通路があるのを見つけた。その数メートル先には 柱が数メートル間隔で立っている回廊がある。回廊の奥は影のように暗くなっていた。

「あそこだ！あそこがこの男を巻くのいい場所だ！」

私は小さな店舗を見物しているかのようにゆっくりと歩きながら、横目で男の様子をうかがった。男は確かに私の後をついて来ている。

「男に知られないように、早くあの回廊の影に隠れないと・・・」

回廊は殆ど私の真横に近づいていた。このチャンスを逃すと、今度はどんなチャンスがあるのか分からない。

その時、車が数台、緩やかなスピートで私の目の前の道路を横切ってきた。

「今だ！」

私は最初の車をやり過ごし、次の車の直ぐ前を横切って道路の反対側にある回廊へ一気に走った。そして、サッと一本の柱の影に隠れた。

ドキドキしながら男がいる方を探してみると、「やった！」男は私を見失ってキョロキョロしている。

逃げるのは今だ。私は男に見つからないように、暗闇の中を一目散で今来た道に戻って行った。

「男を巻いてしまおう大作戦」は大成功に終わった。人生初めての経験だ。

作戦に成功したその夜は、レセプションの男が怪しい事や、ホテルの部屋のドアがしっかり閉まらないことなど全く気にならず、私はすぐに深い眠りについた。

翌朝、いよいよ日本へ向けて出発である。

これから飛行機に乗って日本へ向かうが、そこからどこへ行くのか分からない状況に私の心は重かった。

気がつくと、私は日本まで運んでくれる飛行機の座席に座っていた。

長い旅でペーターが買ってくれたワンピースをしわくちやにしてはいけないと、機内に入ると直ぐに鞆に用意していたスカートとブラウスに着替えた。それを見たシンガポール人スチュワーデスが、私は日本航空のスチュワーデスカ、と訊いてきた。

違うと答えたのだが、それから飛んでいる間中、私はスチュワーデス達から親切にされた。私の座席がドアのすぐ横で前に座席のない場所だった為か、スチュワーデスが横を通りかかる度に立ち止まり、私に何かと話しかけてきてくれた。

私の沈んでいた気持ちが少しずつだが晴れていった。

「何を考えても答えが出ない。もうこうなったら、なるしかない。ケセラセラで行こう！」

私は腹をくくって、大きく深呼吸をした。

一人、特に親切なシンガポール人スチュワートがいた。彼もチャンスがあると私に話しかけてきた。

気が紛れるので私も話に乗り、うっかり、「日本の家族の居所が分からないので、日本に到着した後、どうしたらいいのか思案中なのだ」と言ってしまった。

それからの彼は、更に親切になった。

「日本に到着したら一緒に家族の居場所を探してあげるから、到着ゲートで待っていて。僕はこういう職業柄いろんなコネクションがあるんだ。君の助けになれるよ」男性を知る機会があまりなかった私は、見るからに真面目そうでハンサムな彼の言う言葉を信用した。これで家族が探せるとほっとしたが、同時に、彼を信用してもいいのか、という疑心が直感的に湧いた。

長い旅を終えて、私たちはいよいよ大阪国際空港に近づいた。

着陸のためシートベルトを締めるサインが出ると、例のスチュワートが私の所にやってきた。

「僕はこのホテルに宿泊することになっているから、君も同じホテルに宿泊したらいい、到着ゲートで合流しよう、待っていてくれ」

彼はそう言うと、着陸体勢の為に彼の座席に戻っていった。

「む～～、彼の言うことを信用してもいいのだろうか？」

小さな胸騒ぎを感じながら私はシートベルトを締めた。

飛行機が大阪国際空港に到着し、機内から出ると、そこは日本だった。

久しぶりの日本なのに、私は外国へやって来たように感じた。

私を待つ人などいない到着ゲートへ出ると、さすがに不安が押し寄せてきた。

私はゲートの端に立ち、あの親切なスチュワートを待つことにした。

大きなスーツケースを前にして、到着ゲートから出てくる乗客を見ていると、

「親切に言ってきたスチュワートを待ってはいけない、一人で行動するべきだ！」

そんな言葉が急に私の腹の底からわき上がってきた。

その言葉につき押されるように、私は後ろも見ずにさっさとその場を離れていった。

ひょっとしたら、あのスチュワートはいい人だったのかもしれない。いい出会いだったのかもしれない。でも、私は彼よりも自分の直感の方を信じた。

あのスチュワートが私を捜しにきませんように、とひたすら願いながら、私は空港近くのホテルに部屋を取った。

部屋に案内されながら、ここに何泊しなければいけないのだろうか、と一瞬不安になった。

「さあ、何処から家族探しを始めよう。警察に電話をしてみようか、いやいや、警察では分からないだろう。市役所か？しかし、何処の市役所に電話をしたらいいのだろう。よし、こうなったら私の電話帳に載っている番号を片っ端からかけてみよう」

電話帳を開いて見ると、私の家族の居場所を知っていそうな人は、数えるほどしかいなかった。

まずは母方の親戚で、子供の頃から仲良く遊んだ従兄弟に電話をしてみることにした。

「ツー、ツー、ツー」

誰も出ない。少し間を置いてかけてみたが、やはり誰も出ない。

従兄弟は2家族いたが、どちらに電話をしても返答はなかった。

もう少し頻繁に連絡を取っていたら良かったのかなあ、と考えたが、もう遅すぎる。

「困ったなあ〜」私は天井を見上げた。

そうだ、高槻市という所に父のお兄さん家族が住んでいたっけ、と思い出した。

母方とは仲良くして付き合いも多かったが、父方とは殆ど付き合いがなかった。それでも、数回、家族全員で訪問している。まだ私のことを覚えてくれているかもしれない。

伯父さんの名字しか分からなかったが、電話局で聞いてみることにした。

ホテルから電話番号案内へ繋いでもらった。

「はい、電話交換です」

「こんにちは。私は阿部清美と言いますが、実は、私、叔父を探しています。高槻市に住んでいる中田という名字なのですが、電話番号か何か教えていただけるでしょうか」

「お名前の方はお分かりですか？」

「いいえ、分かりません」

「分かりました。探してみますので少々お待ちください」

「はい・・・」

「・・・お待たせしました。高槻市には中田という名前の方が6名いらっしゃいます」

「あっ、その6名の電話番号をすべて教えてください」

数分後、私の手元には6つの電話番号があった。

「この番号から私のおじさんが見つかりますように」

見つからなければ、この後、私はどうしていいのか全く見当がつかなかった。

私は最初にもらった番号を祈りながらダイヤルした。

「ツー、ツー、ツー、はい、中田です」

「あっ、今晚は。私、阿部清美と申します。高槻市に住んでいる伯父さん宅を探しているのですが」

「あーっ、清美ちゃん？わあ、久しぶり！元気にしている？僕、息子の正雄です。今、何処にいるの？」

「ああ、正雄さんですか！良かったー。今スイスから日本に到着した所なんです。実は、私の家族が私に知らせないまま住所変更してしまって居所が分からないのですよ。正雄さん、何かご存知ですか？」

「ああ、何処かに引っ越したとは聞いていたよ。ちょっと待って、はがきを探してみるから」

「ああ、なんとかあった・・・」

数分後、私は家族の電話番号を手にしていて。

僕が迎えにいかうかという正雄さんの心遣いをお断りし、私は家族の電話番号を回した。

「ツー、ツー、はい、阿部です」

「あっ、龍っちゃん？私、清美です。良かったー。やっと見つけた！手紙を出したけど、住所不定で帰ってきたので探していたのよ」

「あっ、お姉ちゃん？今、何処？」

「大阪国際空港近くのホテルにいるのよ。迎えにきてくれる？」

「分かった。明日の朝、直ぐに迎えに行くよ」

さほどびっくりした様子もなく、私の滞在しているホテルを聞いて、弟は電話を切った。

「やったーっ、見つかったああああ！！」

私はベッドの上に倒れ込んだ。

ああ、このホテルに長く滞在することにならなくて本当に良かった。

筆無精の私もいけないが、住所を知らせずに居場所を変えるなんて、のんびりした家族である。

心配も消え失せ、ヨーロッパからの長旅も手伝って、その夜、私はホテルの柔らかいベッドで気を失ったように眠った。

翌朝、「コン、コン、コン」と誰かが部屋のドアをノックした。

ホテルの人だろうと思いドアを開けてみると、「お姉ちゃん、元気そうだね！」と言う懐かしい笑顔の弟が立っていた。

どうなる事かと世界の果てにいるような気持ちでいたが、久しぶりに弟の顔を見て私の心は一気に和んだ。

弟の運転する車の助手席に座りながら、私は指の先までリラックスして行くのを感じた。昔のように屈託なく私に接してくれる弟の笑顔が嬉しかった。

「ねえ、どうして新住所を教えてくれなかったの？」

「ああ、ごめん、ごめん、気がつかなかった」

弟が笑いながら答えて、私もそれで納得した。これが家族だ。しばらくして私たちは新しい家に到着した。

「どうしたんだ？」と父が家の中から出て来た。弟の、私には初対面の奥さんも出て来て挨拶を交わした。

第3次世界大戦が始まるから帰ってきた、なんて私はとても言えなかったの、勉強するために帰ってきたと言ったが、きっと父も弟も嘘だなと分かっていたと思う。でも、深く訊ねてこなかったのは嬉しかった。父は久しぶりに帰って来た私を見て嬉しそうだった。



高架下の立ち食いそば

日本を離れて7年が経っていた。短いようでもあり、長いようでもある。帰国すれば日本の生活には直ぐに馴染めると思っていたが、実際は違った。たった7年間離れていただけなのに、日本が、日本の生活習慣が、そして日本人までもが私の目には外国のように映った。

ヨーロッパで毎日悪戦苦闘しながら英語やイタリア語、スペイン語を使いながら過ごした日々はインテンシブで、その分、私は日本を思い出す暇がなかったようだ。しかし、帰国すればそんな事を言っている場合ではなかった。早く感覚を取り戻さなければ、と私は自分に言い聞かせた。

父と弟家族の所にずっと同居させてもらう気持ちも私にはなかった。私は早速仕事探しを始めた。

新聞の求人欄を見ていると、英語の先生を育成している会社の求人広告を見つけた。会社は大阪にあるらしい。

さっそく電話をしてみると、面接に来てくださいと言われた。行ってみると、直ぐに採用された。

仕事は、この会社の教材や機材を使って各町で個人英語教室を開いている先生達の育成をすることであった。

そんなに流暢な英語を話すわけでもない私だ、先生達の育成をするなんてとんでもないと最初は思ったが、会社の指導を受けてみると、私に求められているのは英語

力だけではなく、今の先生達に欠けている表現力、想像力、コミュニケーション力だということが判った。

7年間外国生活をしてきた私に少なからずも身に付いた表現力やコミュニケーション力が、この会社を買われたようだ。

仕事も見つかり、探し出したアパートの敷金もペーターからもらったお金で支払った私は、弟の家から出た。父が少し寂しそうだった。

アパートは私の全く知らない地域にあった。6畳一間に小さな台所が隅っこについているだけの簡素なもので、風呂は外、トイレは共同だった。

住んできたヨーロッパの家々も同じように簡素だったが、部屋の一つ一つが広々とし、圧迫感はなかった。

だが日本のアパートは信じられないほど狭く、私は息が詰まりそうだった。さらに馴染みのない地域での生活は私をいっそう憂鬱にした。

それでも、私はアパートが見つかったとペーターに手紙を書き、スイスに残してきた私の荷物を送ってもらうことにした。

1ヶ月後、スイスから船便で大きな茶筒のような赤いメタルの箱が一つ届いた。私の持ち物がすべてその中に入っていたが、手にしてみるとどれも大した物ではなかった。

アパートの管理人とも親しくなれず、悶々としながらこの小さなアパートに住んでいたが、英語教室にしていたアパートが空くことになり、私は早速そちらの方へ移ることにした。

今度は、神戸三宮の山手側にあるアパートで、日本を出る前に勤めていた三宮駅近くの歯科医療器具店にも近く、地域には馴染みがあった。

移ったアパートも6畳一間と小さかったが、入り口を入ったところに板間の小さな台所があり、トイレもちゃんと中にあった。

銭湯は近所に3件もあり、今日は何処へ行こうかと迷うくらいだった。

洗濯機がなかったので洗濯物はいつも手で洗ったが、スペインやイタリアでも同じような生活を送ってきた私には全く苦にならなかった。

三宮から大阪市内にある英語教室の会社までは、毎日、陽が差し込む阪神電車で通った。

朝陽を浴びながら電車に揺られているのが、私は大好きだった。

夜、暗くなって帰って来た時は、高架下のそば屋さんで他のおじさん達に混じって立ち食いそばを食べた。

ああ、あの時のそばの美味しかったこと。そばをすすっているとき、私は日本人だった。

三宮の小さなアパートで生活を受けながら、しかし私の心は、いつもヨーロッパだった。何ヶ月経っても私には日本の地が異国のように思えて、どうも落ち着かなかった。

私は時間があれば絵を描き、スイスにいるペーターに手紙と一緒に送った。

彼からは私の絵の感想が届き、かろうじて私とヨーロッパは繋がっていた。

あの頃は、ヨーロッパから届く手紙を10日以上も待つ時代だった。今とは時間の流れる早さが違っていた。

英語教師育成の会社に勤め始めてから半年が経とうとしていた。そろそろタイプライターでも練習して何処か別の会社に就職しようか、とタイプライターを買って数週間したころだった。ペーターから手紙が届いた。

手紙には、又スイスへ帰ってこないか、という内容が書かれてあった。

「戦争が起こるから日本へ帰れ」と私に言ったペーターだが、考えが変わったかなと、私は素直に嬉しかった。又ヨーロッパに行くことが出来る！

私は小学生の頃から、いつかは中立国のスイスに住みたい、きっと住めるようになると、漠然だが思っていた。スイスだけではなく、ヨーロッパ国に大変愛着があった。

20歳の頃、勤めていた銀行の支店で国内旅行があり、どこかの観光地ホテルに宿泊した。

到着した夜、全員でホテルのホールに集まり、夕食前の雑談をしていたのだが、その時、私はふと、壁にかかっている小さな絵に目が止まった。そこにはヨーロッパ風の窓と鉄製のバルコニーが描かれており、バルコニーには緑のツタがからみ、ポットに入れられた花々が飾られていた。

それを見たたん、私の目から涙が溢れ出した。決して悲しいわけではなかった。ただ、このバルコニーは何処かで見たことがある、何処かに忘れてきた思い出という懐かしさで胸が一杯になったのだ。

回りには同僚が沢山いたが私の涙はなかなか止まらなかった。

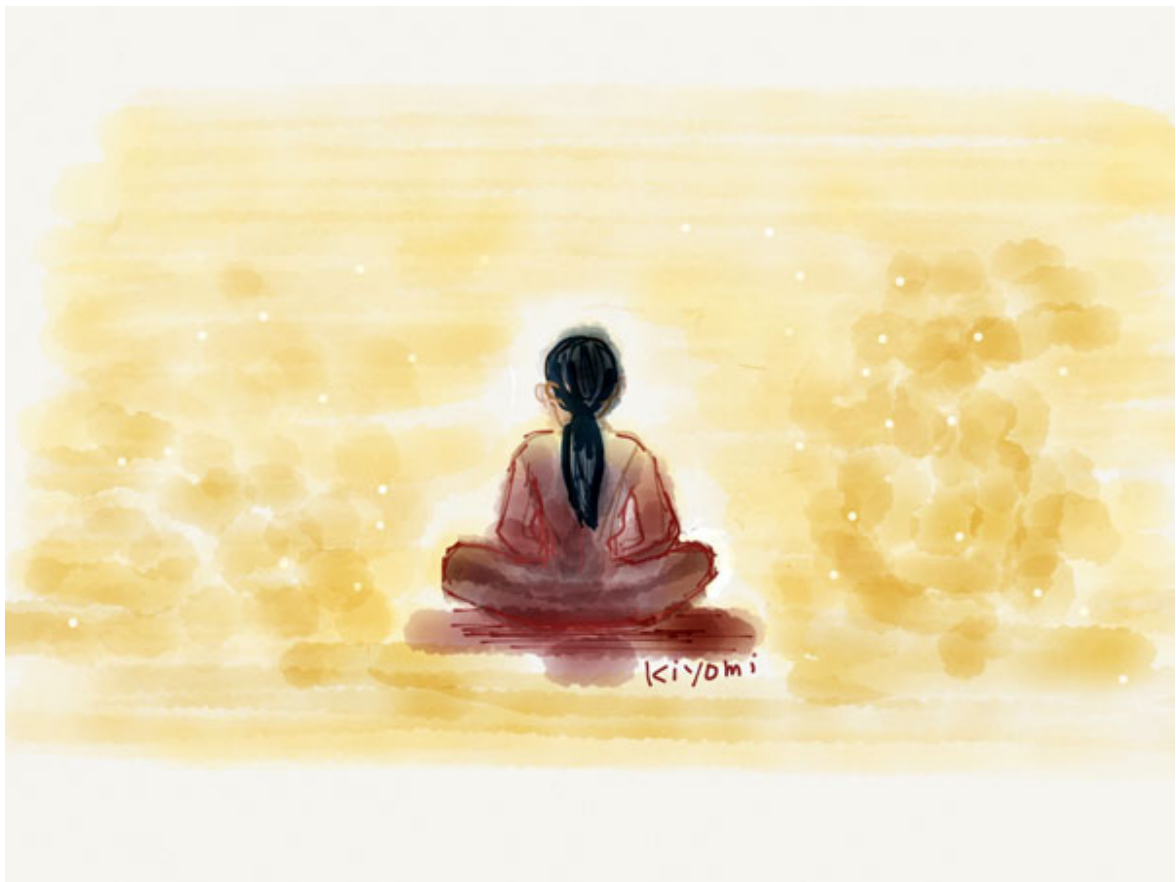
小さい頃から私を知っている幼なじみは、私はいつかきっと外国に住むようになるというも思っていたと言う。

そういう不思議な事がいくつかあり、私の前世はヨーロッパ人だったのではないか、と思う事がある。

とにかく、私の心はヨーロッパに惹かれ、ヨーロッパにいと心地よかった。

私は迷う事なく、「直ぐにスイスへ向かいます」と書いてペーターに送った。

三宮のアパートからスイスへ戻るまでの期間、どうやって過ごしたのか、家族とはどうやって別れたのか全く記憶に残っていない。ヨーロッパに戻る喜びだけが私の頭を支配していたようだ。



瞑想とプロポーズ

1982年、私は再びスイスへ戻って来た。

チューリッヒ空港でペーターが私を待っていてくれた。私にはもうラブラブな感情はなかったが、久しぶりに彼の顔を見て、やはり嬉しかった。

彼は以前にも増して優しく私を迎えてくれた。

空港を出て、スイスの地につけた私は、「ただいま」と胸の中でつぶやいた。

私たちは空港から列車に乗り、15分ほどで Winterthur(ウインターテュール)という大きな町に着いた。そこから更に10分ほどバスに乗り、到着したのは静かな郊外の住宅地だった。

今までいつも二人で片田舎にある農家に住んでいた。今度はどんな家で暮らすのだろうと思っていたら、ペーターが案内してくれたのは2階建てのアパートの一室だったので驚いた。

私の為に用意をしたらしく、アパートの中には最小限だが必要なものが全て揃っていた。

そして、安定した収入を得る為に、彼は警備員の仕事を見つけていた。

今までのペーターとは、がらりと雰囲気が変わっていた。

「一度離婚の経験があるので君とは結婚できない、家族を持つなんてガラではない、社会に縛られずに自由奔放に生きたい」そう言い続けてきたペーターが、今回はこのスイスの住宅地で私と家族を持ちたいと言った。

どんな変化が彼に起こったのか私には見当もつかなかったが、生真面目な顔つきで近寄りがたかった彼の表情が和らぎ、冗談を言っては少年のような目で笑う彼を見るのは素直に嬉しかった。

ペーターの警備員の仕事は日中もあれば夜もあった。真面目に仕事へ出かけて行くペーターを見る度に私は不思議な気持ちでいたが、その変化がどこから来ているのか、間もなく分かった。

ペーターは時間を見つけては隣町にある瞑想センターに通っていたのである。バスに乗って電車に乗り換え、可能な限り通っていた。

私にも一緒に来ないかと誘ってくれたが、私は瞑想センターと聞いただけで変な宗教の集りではないかと恐れをなし、行かないと返事をした。

だが、毎回出かけて行く彼の後ろ姿を見ながら、彼をこんなに変えた瞑想とはどんなものだろうと、好奇心は日増しにわいてきた。

ついにある日、「私も一緒に行ってみる」と私は思い切ってペーターに言った。

口に出して言ってみると、今まで喉に引っかかっていた何かが急に取れたようでスッキリした。

実際の所、私は瞑想センターでどんなことが起こっているのかを知るよりも、瞑想によって自分の殻を壊され、隠れていた本当の自分の姿を見つけることの方が怖かったのだ。私は昔から、臆病な人だった。

「汗をかくから着替えと、そしてシャワーを浴びるからタオルを持って行くといいよ」

ペーターからアドバイスを受け、私は少し震えながら瞑想センターに向かった。

未知の事に挑戦するとき、何が起こるのか判らないという緊張感が高まり、恐怖にさえなる。

私たちは電車で隣町まで行き、そこから瞑想センターのある方向へ歩いて行った。

駅からさほど遠くないところに大きな建物があり、1階が郵便局で、その上に瞑想センターがあった。

私たちは郵便局の横の階段を上り、瞑想センターの正面にたどり着いた。

センターのドアを押してみると、中は想像以上に明るくて、瞑想センターというよりも、どこにでもあるスポーツクラブのような雰囲気、私は少しホッとした。

私たちはまずカウンターで料金を支払い、その後、それぞれの更衣室に入って着替えをした。

瞑想センターでは時間ごとに瞑想の種類が異なり、私たちが通った午後の時間帯は、クンダリーニという半分アクティブ、半分静寂な1時間の瞑想が行われていた。

瞑想は、日本人がよく知っている座禅という静かな瞑想からアクティブな瞑想まで約100種類はあるそうだ。

ヨーロッパでは、最初から座禅が出来る人は少ないようで、まずはアクティブな瞑想で心身のテンションを除き、それから座って静かな境地に入る、という方法がセンターにやってくるメンバー達にも好まれていた。

1時間好きなように踊る、という瞑想方法もあった。ただただ、音楽に合わせて身体の中から突き上げるエネルギーで踊るだけの瞑想だ。時には激しく、時には静かに流れる音楽に合わせて躍る。ディスコ風でもなく、クラシック風でもない、どちらかと言うとアフリカダンスのような動きになる。45分間踊った後は15分間の座禅をして気持ちを落ち着かせる。この瞑想は誰にでも人気があった。

もう一つ好きだったのは、クンダリーニメディテーションである。

両足を肩幅に開いて膝の力を抜き、足の底に感じるリズムに合わせて15分間身体を蛇のようにくねらせる。そうやって身体の中のテンションを出した後、次の15分間はダンスだ。力強いドラムの音に合わせて身体が動く。そして次の15分間は座禅の姿勢で床に座

り、息を整え気持ちを落ち着かせる。最後の15分間で床に身体を横たえて自分の内を観る。私はこの瞑想が大好きで、1ヶ月間、毎日続けた。

「瞑想」という言葉は知っていたが、自分でやってみるのは生まれて初めてだった。瞑想センターには恐る恐る行った私だが、いつの間にか自分から進んでいくようになっていた。私の心は日増しに軽くなっていった。

各種の瞑想以外に、このセンターには面白い物があつた。

高さ1.5m、幅1.5m、奥行き2.5mほどのメタルで出来た釜のような箱である。片方だけに小さな入り口があり、中は光も音も完全に遮断され、30cmほどの深さの濃い塩水が入っている。

この釜の中に入り塩水に身体を横たえると、濃い塩分のために身体が浮き、まるで母親のお腹の中にいるような状態になるのだという。

そうやって塩水の中に浮きながら1時間、母親のお腹にいたときのことや、頭の中を巡りめくる人生の走馬灯をひたすら観察するのがこの釜の瞑想である。

特に難産で生まれてきたばかりに、それがトラウマになり、人生に悪影響を与え続けている人などは、この釜に入ることによってトラウマから抜け出られるという。

私にそんなトラウマがあつたことなど聞いたことはないが、母親のお腹の中にいた状態になることは、記憶が全くないだけに、ちょっと興味があつた。

ただ、真っ暗闇の中に1時間、ただひたすら自分自身と向き合うこの瞑想にチャレンジする人は少なく、私にも勇気がなかった。

一度は試さなければ、と思えば思うほど尻込みをしてしまい、私はいつも釜の横を避けて通った。

ところがある日、避け続けている自分自身が嫌になり、私はとうとう釜に入る決心をした。

センターの女性に釜の入り口を開けてもらい、私は身体に巻き付けていたタオルを取り去り、裸で中に入った。

釜の中は天井が低く、入って直ぐに生暖かい塩水が足を濡らした。

センターの女性に横になるように言われ、私はぎこちなく塩水の中に身体を横たえてみた。身体が左右に揺れて、船酔いになったらどうしようと、既に不安が頭を横切った。私は直ぐに船酔いをする人なのだ。

そんな私に気がついたのか、

「身体から力を抜いて、リラックスするように」

と女性が言ってくれた。

「あなたの内部で起こる不安、恐怖、悲しみ、喜び、全てを良い悪いと評価することなく、ただひたすら観察するように。いいですか、じゃあ閉めますよ！1時間後に会いましょう」女性が言うと、ガチャンと釜のドアが閉まった。

目の前が真っ暗闇になった。同時に、不安が押し寄せた。

「いやいや、ここでパニックになってはいけない。大声で叫んでも、誰も私の声は聞こえないのだから」

私は自分にそう言い聞かせたが、心臓はドキドキ高鳴った。

「観察、観察、それに集中すること。私は釜の中の塩水に浮かんでいるだけ。怖くも何ともない。リラックス、リラックス・・・」

私は大きな深呼吸を何度も続けながら自分に言い聞かせた。すると間もなく、すーっと恐怖が遠のいた。

恐怖がなくなると、途端に身体はリラックスした。リラックスすると、頭の中でいろんな思考が飛び交っているのが判った。

「それでいい。映画を見るように飛び交う様を観察すればいいのだ。悪い、良い、と判断しない事。観察、観察・・・」

ガチャン！と釜のドアが開き、「大丈夫ー？」とセンターの女性の声がした。1時間が過ぎたようだ。

私はすっかりリラックスしていた。眠ってしまったのかな、と思ったが、そうではない事を私は知っている。

私は釜からゆっくりと出て、シャワー室に入った。濃い塩水を洗い流す為、丁寧にシャワーを浴びた。熱いシャワーを浴びていると、この釜の瞑想にチャレンジ出来た自分が急に誇らしくなり、私は一人でハイタッチをした。

瞑想を知り、それをし続けた事は、私にとっても良い影響を与えた。

仏教の国、日本にいる時には瞑想など考えもしなかったのに、外国で瞑想に目覚めたのだから、人生、面白いものである。

瞑想を始めてから、私の中から恥ずかしいという気持ちが薄らいだ。

本当に、何に恥ずかしかったのか分からないが、恥ずかしくて他人に自分の意志をはっきり伝えられなという、変な所が私にはあった。

多分、私は自分自身を信じていなかったのだろう。学校でも、他人を敬いなさいとは教えられたが、自分を信じなさい、とは教えてくれなかったように思う。

瞑想をしたお陰で、それが随分と改善された。

私はペーターにさえ、はっきりと自分の意思を伝えられるようになっていた。

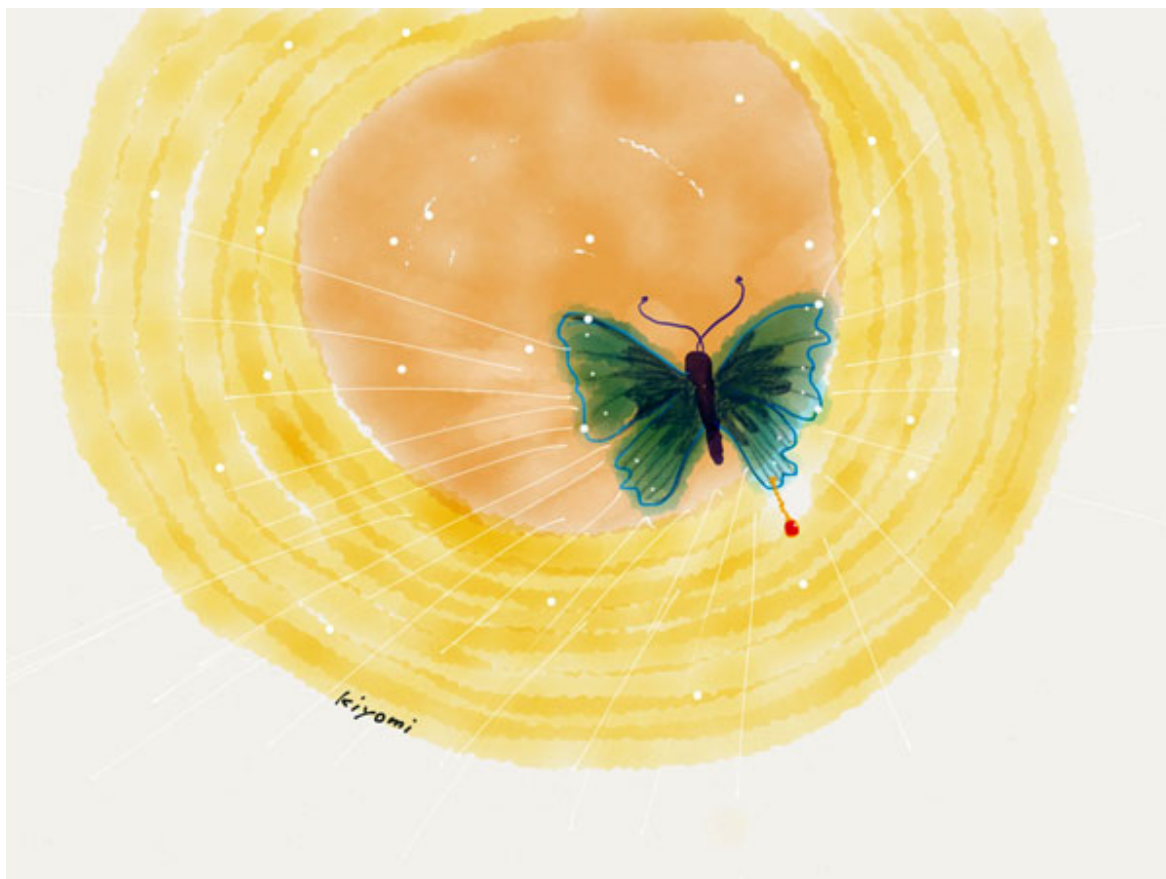
結局、ペーターはそんな精神的に自立した私を望んでいたのであろう、二人の仲は以前にも増して良くなっていった。

「結婚しよう！」と彼がプロポーズしてくれたのは、それから間もなくであった。

10年来待っていた言葉である。

私は、結婚はそれほど重要とは思わなかったが、外国人の私にとって、結婚することでスイスから出る必要もなくなり、仕事も探せるというメリットがあったのだ。

もっと早く結婚できていれば、いろんな意味で楽だったのと思うが、それはもう過ぎ去ったことだ。今では良い思い出である。大変な事もあったが、全て私には必要な経験だったのだろう。



耳にピアス

結婚に必要な書類がすべてそろった数ヶ月後、私とペーターは市役所に行き婚姻届を出した。

結婚式らしいものは何もしていないが、届けを出してから1ヶ月後、私はスイスのパスポートを受け取り、晴れてスイス人となった。

スイスパスポートを受け取って間もなく、仕事を探していた私は、「家の掃除をしてくれる人を捜しています」という3家庭の記事を新聞の求人欄で見つけた。電話をしてみると、3家庭とも面接に来てくれと言う。

私のドイツ語はまだ片言だったが、掃除にかけては自信があった。

それぞれの場所の行き方をペーターに教えてもらい、私は一人で面接に出かけて行った。結果、私は3家庭から雇われた。

1件は両親とも仕事を持っているので掃除をする時間がないと言う家、もう1件は小さな子供がいて手が離せないで誰かの手助けが必要という家、そして最後の1件は、奥さんが秘書として家で仕事をしているが、掃除をする時間がないので助けが必要という家、この3家庭だった。

私はバスや電車を乗り継いで、それぞれの家庭を週に一回掃除に通った。

週に3回、一人で知らない街に出かけて行くのは楽しかった。

家で秘書として働いているスイスで有名な運送会社の奥さんと、小さな子供がいる若奥さんは、午後3時になると必ず私にお茶とクッキーのおやつを出してくれた。そしてお風呂場の金具までぴかぴかに磨き上げる私の仕事ぶりにいつも感謝してくれた。

私のドイツ語は未熟で、彼女達の英語も片言だったが、私たちの会話はなんとか成り立ち、楽しいおしゃべりのひとときだった。

両親とも働いている家庭では、学校から帰ってくる中学生の子供達の為に時々昼食を作る事もあった。家に入ると両親からノートが残されており、こういう材料があるので何か作ってあげてくれ、と書かれているのだが、それがドイツ語の手書きなので最初は戸惑った。学校から帰って来た子供達に何と書いているのかと尋ねた事もある。洗濯機を回してくれ、と書かれているときもあった。時には週2回来てくれと頼まれる事もあった。両親とも病院で仕事をしているため、夕方になってしか帰ってこない。私はできる限り彼等の希望に応えるようにした。

3件ともあの当時（1980年代）で時給20～25スイスフラン（2千5百円前後）も支払ってくれたのだから、いい賃金だったと思う。

自分でお金を稼げることは、私にとって大きな意味があった。

ある日、掃除が終わって帰宅する途中、私は大きな街にある宝石店へ入り、耳にピアスの穴を開けた。

ずっと希望していた事で、一人でやり遂げられたことが嬉しかった。

耳にピアスの穴を開けたとペーターに自慢したところ、それから1週間後、「友達が宝石店をやっているから、ちょっと見に行ってみよう」とペーターが私を誘った。

街の宝石店に入ると、既に話がついていたようで、ペーターの友達であるオーナーがピアスを二つ手にして私たちの方へやってきた。

一つは、2cmほどの細い金の鎖の先にドロップ型のルビーが付いているものだった。

もう一つは、しっかりした金の台にハート形のクリスタルが付いていた。

私にとって最初のピアスだ。目の前に置かれた二つのピアスは光り輝いていた。

私に喜んでもらおうと内緒で注文していたペーターの気持ちが嬉しかった。

とにかく、私が自立した行動をする度にペーターは機嫌が良くなった。

以前の私は何をするにもペーターの後を付いていくだけだったのだから、彼にしてみれば重荷だったのかもしれない。

女性はだまって男性を讃え支えていくもの、という日本の古い環境の中で育った私は、そのままがヨーロッパでも通じると思っていたが、それは間違いだったようだ。

こちらの女性は自分の意思をしっかりと主張する。そんな女性に慣れているペーターは、私にも同じような自立を望んでいたのかもしれない。

ペーターが早く結婚さえしてくれていたら、私は仕事を探してもっと速く自立できたのにとともに思うが、まあ、それはもう過ぎ去ったことである。

ペーターは警備員の仕事、私は3家庭の掃除の仕事を続け、私たちの生活は少しずつ安定していった。

そんな時、私は妊娠した。

今まで子供はいらないと言い続けていたペーターが、この時は大喜びした。

反対に、初めて子供を産んでもいい状況になった私はそれほどの感動を受けなかった。

「このままペーターと家庭を築いて行くのだろうか」

漠然とそう思っていた。

ところが、その漠然とした思いが妄想で終わってしまう事件が、その後起こった。

ある日、私は瞑想を指導しているセラピストから瞑想センターのパーティーに招待された。

ペーターと一緒にではなく私一人だけの招待だったので、多分、いつもペーターにくっついて私を彼から解放してやろう、と思っていた事だったのかもしれない。

しかし私は、どちらかと言うと一人で、又は気心の知れた人と静かに過ごすのが好みだ。

パーティー等参加した事がなかった。

どうしていいのか判らず、私は直ぐに返事ができなかった。

ところが、セラピストは一人でペーターのところへ行き、私をパーティーに連れて行く承諾を勝手に取ってしまった。

「ペーターがパーティーに行ってもいいと言っているよ」とセラピストから言われた私は、行く決心をした。

ただ、ペーターが承諾した事が信じられなかった。彼が私を一人で外出させた事は今までになかったからである。

きっと、尊敬していたセラピストから頼まれて、嫌だとは言えなかったのだろう。

パーティーが開催される日の午後、センターで瞑想を終えた私はシャワーを浴びて着替えをし、一人で帰る支度をしているペーターに「行ってきます。ひょっとしたら最終電車で、もしくは明日早朝に帰るから」と告げた。

ペーターは少し淋しそうな顔をし、「バイバイ」と手でジェスチャーをした。

私はそんなペーターが少し気になったが、ペーターが勧めてくれたのだからと思い直し、待っているセラピストと一緒に瞑想センターを出た。

パーティー会場は瞑想センターで働く人たちのアパートだった。私とセラピストが到着すると、センターのメンバー達が、既にパーティーの準備を始めていた。

センターで顔見知りになった女性が私に気がつき、ハローと気軽に挨拶をしてくれたが、私は一人で知らない人たちの中にいる事が少々落ち着かなかった。

元来、人見知りの私である。こういう時に何をしゃべったらいいのか、何をしたらいいのか分からなくて、私は隅の方でそわそわしていた。

会場には30名ほどいたのだろうか、みんな楽しそうに話をし、パーティーの準備をしている。誰も、私の事など気にかける人はいない。

「何かお手伝いをしましょうか」と一言言えばいいのに、私の体は固まり、動けなかった。そんな自分が悔しかった。

そんな時、誰かが、「パーティーの準備を手伝ってくれないかしら」と私を誘ってくれた。

その言葉に私は救われた。私は「OK」と答えて、それからは簡単だった。

みんなと一緒に飾りをつけ、キッチンから料理を運び、飲み物を出し、私はすっかりその場に溶け込んでいった。

「やれば、出来るではないか・・・」

何かが、私の中ではじけた。

パーティーは沢山の料理と音楽と踊りで賑わった。音楽はカセットテープからだったが、陽気なリズムに合わせてみんな楽しそうに躍っている。私も負けずに躍った。

夜も更けて、パーティーも終盤になり、一人、二人と踊り疲れた人たちが座り始めた。

全員が車座になって座り、それぞれが隣の人と好き勝手に話し始めている。

みんなスイスドイツ語で話をしているので、私には何が話題なのか良く分からなかったが、それでも良かった。

新しい経験をしている自分が嬉しかった。

私の隣に瞑想の女性セラピストが座り、私にドイツ語は判るのかと訊いてきた。あまり判らないと答えると、彼女は英語で話してくれた。綺麗な顔立ちの彼女は、落ち着いた様子が美しかった。

私はその女性と瞑想について話をしていたのだと思う。・・・一瞬、彼女の手がそっと私の背中に置かれた。それを感じた途端、私の目から涙が溢れ出した。

私自身が驚いた。

「ああ、貴方はこんなにも涙を溜め込んで・・・」

セラピストは驚く様子もなく言った。

そして今度は彼女の手を私の胸の真ん中（心臓のあるところ）に移し変えて、そっと押した。

「うううー」

私はとうとう声を出して泣き始めた。

人の目など気にならなかった。そして、そんな私を特別に見る人は誰もいなかった。

「あら、あら、こんなに涙を溜め込んで、どうしたの。泣きたい時には泣かないと駄目よ。我慢しては駄目。ほら、こんなに涙が溜まっているでしょう」

女性セラピストはそう言いながら、しばらく私の胸に手を置いて、肩をやさしく抱いてくれた。

泣いたのは10分ほどだったが、泣き止んだ後は清々しい気分だった。

胸に手を置かれただけで泣けてしまうなんて、私には初めての経験だった。私はアルコールを一滴も飲んでいないので、夢を見ていたのではない事は確かだ。

信じられない事だったが、考えてみれば、私は泣きたくなると我慢をしてしまう事が多かった。

「涙を溜め込んでしまったかな・・・」

私は心臓のあるところをそっとなでてみた。

最終電車の時刻が迫っていたが、私は帰ろうとは思わなかった。

こんなに興味深い夜は、もう、いつやってくるのか分からない。

夜中の1時過ぎ、パーティーは終了し、話疲れたみんなはそれぞれの部屋に帰って行った。

私はセラピストが渡してくれた毛布を使い、リビングにあった長椅子に横になって、朝を迎えた。殆ど眠れなかったが、気分は冴えていた。私は直ぐに身支度をして、早朝の電車で家に向かった。

その日は日曜日で、ペーターは家にいた。

「ただいま！」

私は早くパーティーの様子を伝えたくてペーターに近づいて行った。

すると、彼は私を見ながら後ずさりをした。

「えっ!？」

一瞬、何が起きているのか判らなかった。私は気を取り直して、もう一度彼の方に歩いて行った。すると、彼は再び後ずさりをした。

そして引きずった顔で、

「僕に触らないでくれ、近づかないで」

と言いながら手の平を私に向けた。

「なに、それ!？」

彼の承諾を得て行ったパーティーなのに、帰りが翌日になったというだけで、私をけがわらしく扱う彼の態度は実に不愉快だった。

以前の私だったらそこで泣き始めたと思うが、この時は違っていた。

どうしてパーティーに行くことになったのか、そこではどんなことが起こったのか、私

は全てをペーターに話した。しかし、セラピストと出かけ、夜も帰ってこなかった私に嫉妬した彼は、私の言うことに耳を貸さなかった。

そして最悪な事には、お腹に授かっていた赤ん坊も、もういないと言い出した。

私は唾然とした。私の事を一体なんだと思っているのだろう。

ここで私はペーターに突っかかるべきだったのかもしれないが、私はこんなペーターに言うべき言葉が見つからず、黙り込んだ。

そうして1日が過ぎ、2日目も過ぎようとしたとき、ペーターは自分の行動が間違っていたと認め、私に謝罪した。

ただ、お腹に授かっていた子供は、もう生まれてくることを望まれていないことを私は悟った。

そうか、やはり子供を産んで二人で家庭を持つという話は夢でしかなかったのか……。それにしても子供が可哀想だ。私の身体も悲鳴を上げるだろう。

いや、もうこんなことは繰り返したくない、これを最後にしたい。

私は自分を守る為に、たまたま話に聞いていた不妊手術を受ける事に決めた。

これから先、私は別の人と結婚することはないだろうし、もう妊娠をすることもないだろう、そう思った。

ペーターに私の意思を伝えたと、彼は静かに了解した。

今までの中絶は小さなクリニックに行ったが、今回は住んでいる町にある大きな病院でやってくれることを知り、私は予約を取りにいった。

予約をした際に、同時に不妊手術もやってくれるようにお願いすると、病院の人は驚いた顔をした。

いろいろと理由を聞かれたが、私の説明を聞いた病院側は最終的に不妊手術を引き受けてくれた。

数週間後が手術の日だった。中絶だけではなく不妊手術もあるため、病院に数泊する必要がある。私はバッグに必要な物を詰め込んで準備をした。

ペーターはどんな気持ちでいたのか知らないが、何も言わずに仕事に出かけてしまった。

私は一人でバッグを提げてバスに乗り、病院に向かった。

到着した日はいろんな検査を受け、次の日が手術の日となった。

翌朝、朝から何も食べずに手術を待っていると、看護婦が私を呼びに病室へやって来た。

「先生達が話をしたいと言っています」

何だろうと思いながら、私は看護婦の後をついて行った。

案内されて部屋に入った私は驚いた。そこには私を直視する5～6人の先生達がずらりと立ち並んでいた。そして立ったままの私に、本当に不妊手術を望んでいるのかと訊いてきた。

「あなたはまだ若い。これから先、妊娠したいと思うことがあるのではないのでしょうか。今、手術をすると、あなたは将来、絶対に子供を授かることはありませんよ。もう一度考え直した方がいいのではないですか」

代表の先生が熱心に言ってくれたが、私の決心は固かった。

「是非、不妊手術をしてください」

私は先生達にお願いした。

数時間後、私の手術は無事に終わり、翌日が退院の日だった。

退院の日はペーターにも伝えていたが、彼は病院へ来ることはなかった。

ずいぶん前になるが、彼は血を見るのが怖いというようなことを私に言ったことがある。

彼の実家は肉屋で、ペーターも若い頃に家業を継ぐために専門学校へ行ったらしいが、血を見ることができなくて学校は中退し、家業も継がなかったらしい。

家業が継げなかったペーターは家を出て画家になり、食べるのも大変だった時でさえ、実家に泣きつくことはしなかったという。

ちなみに、彼の実家は大層なお金持ちで、両親は大きな家に住み、その後ろには広大な平野と森が広がっていることを、私はペーターと結婚した後、知った。

私とペーターがイタリアやスペインでお金がなくて苦勞をした時、私は彼の実家がお金持ちだということを知らされていなかったし、知った後でも、私たちは彼の実家にお金の援助をお願いしに行ったことはない。ペーターの意地だったのだろう。

とにかく、血が原因でペーターは病院に来なかったのかどうかは知らないが、私は一人で帰宅の準備をし、小さなバッグを下げて病院を出た。

手術と言ってもおへその所と下腹の所に2カ所小さな穴を開けるだけの方法なので、お腹に大きな傷跡は残らなかったが、それでも一歩歩く度に縫った所が吊られて痛く、身体を真っ直ぐにすることが出来なかった。そんな中腰の格好で私はバッグを提げてバス停に向かった。

迎えにくらい来てくれても良かったのに、と私はペーターのことを少し恨んだが、悲しくはなかった。一人で行動している私が嬉しかった。

私は一生懸命に足を踏ん張って、バス停まで歩いて行った。

コミュニケーション

子供のいる家庭を持つという夢が、ぷつぷつと切れてしまった私とペーターは、それからも以前と変わらない生活を送り続けた。

二人の仲は良かったが、しいて言えば夢のない毎日だった。

そんなある日、今住んでいるアパートを引き払って瞑想センターの人たちと一緒に住まないか、というアイデアをペーターが出してきた。瞑想センターの一員となり、皆と一緒に共同生活をしようというのである。

センターの人たちが一緒に住んでいるアパートは、私が一人でパーティーに参加したあのアパートだ。センターの人たちは、そこをコミュニケーションと呼んでいた。

私は沢山の人たちと共に過ごすのは苦手だ。パーティー等で数時間一緒に騒ぐのはいいが、毎日一緒に暮らしていくとなると話は別だった。私にできるのだろうか。

だが同時に、私たちは二人だけで暮らす生活に未練はなかった。

私たちはコミュニケーションの一員になる情報を得る為、ある日の午後、瞑想センターのオフィスに向かった。

日本の禅寺にも参禅という形で瞑想に興味を持った一般人が集まり、共同生活をしながら瞑想に励むという修行があるが、このコミュニケーションも瞑想に興味を持った人たちが集まり、一緒に瞑想センターを支えているところであった。

ただし、瞑想が中心である以外は、参禅とコミュニケーションは大きく違っていた。

一番大きな違いは、コミュニケーションには宗教がない事である。生活の中心は瞑想だが、仏教でもないし、その他の宗教でもない。毎日の生活に念仏もなければ、同じ時間に全員で瞑想をする日課もない。これをしなければならない、という約束事がなかった。とても自由なのだ。

義務と言えば、1日6時間の労働が全員に課されていた。働かざるもの食うべからず、である。

職種は、瞑想のセラピスト以外に、事務、買い出し係、掃除、洗濯、食堂のクック、アパートのメンテナンス、その他にコミュニケーションが街で経営しているレストランのウェイターやクック、コミュニケーションが請け負っている外の建設作業員、等と多種であった。

コミュニケーションに入ると、そこで必要とされている仕事を与えられる。与えられた仕事が嫌ならいつでも他の仕事に変える事ができた。仕事をする上でストレスがないのだ。

仕事に影響のない限り、それぞれが好きな瞑想を好きな時に行う事ができるが、仕事自体が瞑想なのだと教えられた。

掃除をしているとき、PCに向かっているとき、アイロンをかけているとき、そして仕事だけではなく、食事をしている時、シャワーを浴びているとき、歩いている時など、常に24時間が瞑想の時間なのだと。

掃除をしている時は掃除に集中する、アイロンをかけているときはそれに集中する、食事をしている時は他の事を考えずに口に入る食べ物を良く噛んで食べること、これが瞑想だという。

根本的には常に自分で自分自身を見つめる事がコミュニケーションでの瞑想なのだった。

だからといって、仕事中でも食事中でも静かにしていなければいけないという規則はなかった。

私たちが入った瞑想センターのオフィスでも、みんな底抜けに明るくて、そこに座っている私たちまで気持ちが明るくなっていくほどだった。

コミュニンの一員になり、そこで仕事をする事で、私たちはアパートの一部屋を与えられ、食事の心配もなくなる、いわば毎日の生活が保障されるわけだ。

コミュニンの一員になる為の資金は一切必要なかった。

また、コミュニンで仕事をしていても私たちに現金の報酬はない。

その代わり、コミュニン内では生活に必要な物が全て支給される。歯ブラシ等の小物は勿論、服や靴まで与えられるという。

説明を聞いた私とペーターはすっかり興味を持ってしまった。

沢山の人たちと一緒に暮らすことは私にとってチャレンジだったが、今の二人の状況ではコミュニンに入るのが一番の得策だと思えた。

一度考えてみますと一旦家に帰ったが、二人の考えは変わらなかった。

2日後、コミュニンの一員となることを決心し、二人は瞑想センターに申し込みに行った。そして私たちは直ぐに歓迎された。

住んでいたアパートの解約があり、私たちがコミュニンに移るのは2ヶ月後になった。

それに合わせて、ペーターは勤めていた警備員の仕事を退職し、私も掃除に通っていた3家庭の仕事を辞めることになった。3家庭の家族とは仲良くしていたので、もうこれから会う事はないと思うと寂しかった。

人生とは、こうして人に会い、そして別れる事なのだろう。白い雲がくつついたり離れたりしながら形を変えて行くように・・・。

1983年の春だった。たいした持ち物もなかった二人だが、一応大きめのトランクに洋服や私物を入れてコミュニンに運んだ。

私とペーターは小さいながらも個室を与えられた。シャワールームは他の人達と共有だ。ベジタリアンの食事は皆と一緒に食堂でする。

部屋の掃除、シャワールームの掃除、食堂の掃除等は、掃除担当の人がやってくれる。何もかも新しい生活スタイルが始まった。

私たちの個室が小さくて私物の全てを部屋に置く事ができず、私たちは服や靴を含めたほとんどの物をトランクに入れたまま、コミュニンの倉庫に保管した。

ある日、思い出したように私物を取りにいくと、私たちのトランクは何処かへ消えてしまっていた。

係の人に訊いてみると、数日前にコミュニンの人たちが間違ってトランクの中身を蚤の市で売ってしまったと言う。

私たちは何も聞いていなかったのが驚いたが、大して名残惜しい物も入っていなかったもので、それはそれで良かった。何か必要なものがあれば、コミュニン内で得ればいいのである。

コミュニンに入って間もなく、私はコミュニンが街で経営しているベジタリアンレストランのキッチンで働くことになった。

既にメインシェフの女性が活躍しており、彼女からメインディッシュの作り方を習った。料理が好きだった私には最適な仕事だった。

ペーターも私と同じキッチンで働くことになった。彼も度々料理をしていたので、キッチンで働くことは嫌ではなかったようだが、画家を目指していた彼に向いていたのかどうかは定かではない。勿論、彼は他の仕事を希望することもできたのだが、結局私と同じ場所に停まる事を望んだ。

彼はメインディッシュとソース係になった。
街の中にあるこのベジタリアンレストランは一般客用で、夕食の時間になると大変忙しくなった。
忙しくても注文された料理がスムーズに流れる日もあるし、そうでない日もある。
客を待たせるような日は、マネージャーから叱りの大声がキッチンに響いた。
ところが、コミュニンには上下関係というものが存在しないため、マネージャーの大声は気分を盛り上げる喝であって、それを悪く受け止めるキッチンスタッフは一人もいなかった。それが私にはとても新鮮に思えた。
レストランで働くようになった私とペーターは、コミュニン内のアパートを離れてレストランの上にあるアパートに移るように言われた。
レストランの従業員全員が同じアパートに住んでおり、みんな仲が良かった。
好きな料理をしながら、アパートに住めて、食事の心配もいらない。
お金の支給はなかったが、生活必需品は全てコミュニンから提供され、毎日の生活で困ることはいっさいなかった。
こんなにパーフェクトな場所が他にあるだろうか。
いや、こんな場所が世界中にあるべきだと私は思った。

数ヶ月後、メインシェフとして働いていた女性がコミュニンを出ることになり、私は彼女の跡を継いだ。
レストランは順調に繁盛し、私は毎日笑い声の絶えないキッチンで充実した日々を送っていた。
そんなある日、マネージャーが私を呼んだ。
「実は、ドイツのベルリンにもここと同じコミュニンがあるんだけど、そこのキッチンでクックを必要としているんですって。あなた、行ってみる気はない？」
突然の話だった。
「行きたくない」
と言うのが私の最初の気持ちだった。
やっとこのコミュニンの生活に慣れ、仕事も好きになり、回りにいる人たちとも仲良くやり始めた所なのに、今、又別の場所へ移動することは考えたくなかった。
恋人とはもう言えない仲だが、一応、結婚したペーターも側にいる。彼を置いて一人でベルリンへ行くのは心細かった。今まで私の側には常にペーターがいてくれたのだ。
ヨーロッパでひとりぼっちになる事を考えると不安が押し寄せた。
だが、マネージャーが再び私を誘って来たとき、私は行く決心をした。
「人見知りだった私はここで沢山の人たちとうまくやれたのだ。ベルリンでも出来ないことはないだろう。そして、この際、ペーターと少し離れてみるのも、私にはいいことかもしれない」
そう決心をしたら、事が進むのは早かった。
私は2週間でメイン料理を次の人に教え込み、翌週はもう出発の日だった。
キッチンスタッフと暖かい別れをし、ペーターとは少々感傷的な分かれをして、私は小さなスーツケースを一つ下げて、ベルリン行きの夜行列車に乗り込んだ。
1983年の10月。コミュニンに入ってから半年が経っていた。



ドイツの西ベルリンへ行く

あの当時、ベルリンにはまだ西と東を隔てる壁が立っていた。壁を飛び越える人たちは容赦なく射殺された時代だ。そんな町へ私は一人で行こうとしている。

どんなことが私を待っているのだろうか。揺られる夜行列車の中で、私はそんなことをぼーっと考えていた。

「ガタンッ！」

急に列車が止まった。

何だろうと思いながら窓にかかるカーテンの隙間から外を見た私は、心臓が止まりそうになった。

列車の横には、足を踏ん張り、今にも飛びかかりそうな勢いの大きなシェパード犬を引き連れたドイツ兵達が、ずらりと一列に立ち並んで列車の方を睨んでいた。

暗闇の中に立ち並ぶドイツ兵達の顔は帽子の陰で良く見えなかったが、険しい顔をしていることは確かだった。

まるで戦争映画のような情景に、私の心臓はドキドキ高鳴った。

何事が始まるのかと思っていると、どうやらここで出入国手続きがあるようだ。

私は正式なパスポートを持っているが、もし誰か、偽造のパスでも持っていたら、あのシェパード犬が飛びかかっていくのだろうか、それともドイツ兵が銃を発射するのだろうか。

列車の中はシーンとしていた。

「無駄な行動はしない方がいいぞ」

誰もがそう思っているように、みんな、それぞれの座席に無言で座っていた。

4～5人ほどのドイツ兵が銃を抱えて列車の中に入ってきた。

全員大きな身体で陰しい顔つきをしている。何も悪いことをしていないのに、私の心臓がパクパクと高鳴った。

「パス！」

ドイツ兵が鋭い声でパスポートを求め、乗客一人、一人をチェックしていく。

「怖い！怖いけれど、今が戦争中でなくて本当に良かった」

安堵と恐怖の混じった気持ちで、私はパスポートを両手に挟んでじっと座席に座っていた。

幸いなことに、乗っていた車両には偽造のパスポートを持っている人はいなかったが、それからかなり長い間、列車は止まっていた。

次の朝、私は寒い西ベルリン駅に到着した。

寒さと緊張で身体が小刻みに震えたが、コミュンから私を迎えにきてくれた男性の暖かいハグを受けて、ほっと暖かくなった。

到着したベルリンのコミュンはスイスのコミュンの3倍ほどだった。そこには200人ほどのいろんな国の人が一緒に生活していた。

ドイツ人の他に、沢山のイギリス人、そしてオランダ人、ブラジル人、フランス人、スペイン人。アジア人は私一人だった。コミュン内の共通言語は英語である。

男性が案内してくれた私の部屋は、3人が一緒に暮らす大部屋だった。

スイスのコミュンではペーターと一緒に個室が与えられていたので、これにはちょっと驚いたが、何事も経験だと思って受け入れた。

部屋に荷物を置くと、同じ男性がコミュン全体の案内をしようと言った。

まずは、コミュンスタッフ全員が住む建物内からだ。

がっしりした建物にはスタッフの部屋の他に、大きな食堂とキッチン、洗濯室、アイロン室、スタッフの為の洋服や靴、その他必需品を提供する部屋、歯科椅子もある医務室等があった。私たちは幅の広い階段を下りたり上ったりしながら見て回った。

最後に向かったのがオフィスだ。このコミュンは建築の仕事を外から請け負っているもので、オフィスは必要なポストなのだと男性が教えてくれた。入ってみるとみんな忙しそうだったが、でも雰囲気は明るく、楽しそうに仕事をしていた。

どの部屋も禅スタイルのようにシンプルで清潔だった。

建物内の見学が終わると、男性は私を外に誘い出した。どこへ行くのだろう・・・。

私たちはコミュン前の車道を歩き、いくつ目かの角を曲がった。すると突然、目の前に立派なディスコが現れた。

コミュンが経営している一般客用のディスコだと彼は言った。この辺りではかなり流行っているという。

コミュンメンバーは無料で入ることが出来るよと、彼は嬉しそうに教えてくれた。

先ほどのコミュンの建物に戻りながら、さあ、ここでどんな生活が始まるのだろうと考えたら、私は身震いがした。

身震いは、西ベルリンの10月の気温のせいだったのかもしれない。

コミュンを見学し終わった私たちは、いよいよ、これから私の仕事場となるキッチンへ向かった。コミュンスタッフ全員の食事をまかなう場所だ。

スイスのコミュンと同じように、ここ西ベルリンのキッチンにも素晴らしいシステムが備えられてあった。

既に働いているキッチンスタッフ達と挨拶をして、私の西ベルリン生活が始まった。

キッチンで作る料理は全てベジタリアンである。200人ほどのメンバー達に美味しい料理を食べさせる仕事は楽しかった。仕事というよりも、私には料理教室に通っているようだった。

料理は用意されているレシピ通りに作るのだが、スタッフのみんなは手先が器用で、キッチン内は笑い声が絶えなかった。

一人だけ不器用なイギリス人男性がいたが、彼はいつもジョークを言って、私を笑わせた。

キッチンの仕事には夜勤もあったが、そうでない普通の日、仕事が終わると1時間ほどの瞑想をした後、私は身支度をしてディスコへ出かけた。

ディスコはとても繁盛し、週末にはダンスフロアーでダンスが出来ないほどの人出がある。

それを避けるために、私は普通の日に出かけるようにした。特にディスコがオープンした後の時間帯は客が少なく、踊るには好都合だった。

ただ、私はディスコダンスを踊った経験がなかった。

小学校の低学年のときに日本舞踊を習ったことはあるが、それも高学年になると止めている。そしてそれから大人になるまで、内気な私はディスコに行ったこともない。

その反面、テレビや映画でダンスを観るのは大好きだった。ワルツ等の社交ダンスやジャズダンス、タップダンスにクラシックバレエ。何を観ても私の身体がつられて動いた。ディスコでどう踊っていいのかわからない私は、ただもう、気分任せて体を動かした。そうやって、音楽に乗り、好きなように踊った後は、一日の疲れが完全に消えていた。疲れだけではなく、たった一人で西ベルリンに来ている心細さや、ペーターをスイスに残してきた感傷的な感情も消え去った。

踊っているときは、踊りだけが存在し、私自身さえ消える、これこそ瞑想だった。

そんな頭の中が空っぽになる時間を私は好んだ。



ジョン・クロードとの出逢い

ベルリンのコミューンに来て以来、私は殆ど毎晩、ディスコに出かけていた。

この夜も、私は心の底からダンスを楽しみ、心軽やかにディスコを出た。

汗ばんだ身体に11月の冷たい空気が気持ち良い。

少し歩き始めた所で、「ハロー」という声が後ろから聞こえた。

「まさか私を呼んでいるわけがない」

そう思いながら歩き続けると、又、同じ調子で「ハロー」という声がした。

誰が誰を呼んでいるのだろうと私は気になり、ふっと振り返ってみると、細面の、ひげを生やした若い男性が、爽やかな笑顔で私を見ていた。

初めて見る男性だった。誰だろう、と私は一瞬身構えたが、彼の笑顔があまりに爽やかで、手にコムニオンメンバーのカードを持っているのを見て安心した。

彼は私の側に寄ってきて、私と肩を並べながら歩き出した。

「なんて名前なの？」

「清美。あなたの名前は？」

「JC（ジェイシー）」

「何処の国？」

「フランス人。君は日本人だね。もう部屋に帰るの？」

「イエス」

「一緒に帰ろうか」

「オッケー」

コムニオンまで、ほんの5～6分だ。

コムニオンに着き、部屋に真っすぐに行こうとすると、

「ちょっとお茶でも飲んでいかない？」

と彼が誘った。

コミュニンの食堂には24時間お茶が飲める設備が整っている。私は踊った後で喉も乾いていた。

二人で誰もいない食堂に行き、それぞれが好きなお茶を作ってテーブルに座った。

彼が話した。

「君のダンスは素晴らしいね」

「えーっ！踊り方を知らないから、好きなように踊っているだけなんだけど」

「いつも君の踊りを観ていたんだ。パワーがあふれていて、僕は大好きだよ」

以前から彼は私を気にかけていたようだ。

それにしても、私のパワーが気に入ったから声をかけたという、彼の言い方が面白しくて、私は気が楽になった。

話をし始めると、二人は同じ時期にベルリンにやってきた事が分かった。そんな事にも親しみを感じながら、お互いの背景を話した。

彼は優しい人だった。

初めて話をする人だが、波長が合うというのか、話をしていて全く緊張しない人だった。人見知りの強い私には、稀な人である。

時間を忘れるほど話に夢中になっていたが、ふっと時計を見ると、真夜中を過ぎていた。

「あっ、ずいぶん遅くなった。じゃあ、そろそろ・・・」

私は自分の部屋に行こうと立ち上がった。すると、

「今夜、僕と一緒に過ごさないかい」

と彼が訊いてきた。

「う～～～ん、そう来たか」

話をするのはいいが、そんな気には全くならなかった私は、実は私は結婚していて、スイスに旦那がいるのだ、というようなことを言って断った。

実際のところ、ペーターは旦那と呼ばれるような人ではなかったし、恋人とももう言えない、ただのルームメイトでしかなかったのだが、この若い男性の誘いを断る為にペーターの名前を使った私は、なんとも古風な女だった。

でも、それを聞いたジェイシーは、

「オッケー、ちょっと訊いてみただけだから。気にしないで」

ととてもジェントルマンらしく引き下がった。それが又爽やかだった。

そして彼は私を部屋の前まで送り届け、「グッナイ」と言って去っていった。

ジェイシーはコミュニンが請け負っている建築の仕事に携わっていた。毎回、私とジェイシーが会うのは夕方のディスコだった。

彼は私を見つけると直ぐに話しかけてきたし、私も、いつの間にか彼の姿を捜すようになっていた。

二人は会うと思いつき踊り、踊り疲れると一緒にコミュニンに帰っていった。

会う約束をするでもなく、偶然に会えば嬉しい、そんな小さな出会いが、私をワクワクさせた。

「ねえ、あなた、歳はいくつなの？」

別にどうでも良かったが、私は彼にちょっと訊いてみた。

「僕？28歳。君は？」

「私は33歳」

「ふーん」

それでこの会話は終わった。彼は5歳年下だが、私よりも大人なのだった。
会う度に優しく接してくれるジェイシーは、しかしあの日以来、私をベッドに誘うことはしなかった。

ジェイシーと知り合って3週間ほどが過ぎた頃だ。その夜も、いつものようにジェイシーと踊りまくり、一緒にコミュンへ帰っていった。
そして、いつものように彼は私を部屋の前まで送り届け、いつものように爽やかな笑顔で「グッナイ」、と言って去って行こうとした。

「ヘイ、ジェイシー！」

突然、私は彼を呼び止めた。

「実は私、今夜はあなたと一緒に過ごしたい気持ちなんだけど、どう思う？」

振り返った彼は、一瞬びっくりした顔をしたが、

「いいよ！」

と気持ちよく承諾してくれた。

「ただし、」私は続けた。

「ただし、私、今晚はセックスが出来ないけれど、それでも一緒にいてくれる？」

「勿論だよ、一緒にいるだけで十分だ」

ロマンティックにはほど遠い会話に二人で笑ってしまったが、それで私の緊張が解けた。
私は初めて、部屋に彼を招き入れた。

その夜から、私たちは毎日会うようになった。ジェイシーは仕事が終わると直ぐに私のいるキッチンへ会いにきた。

キッチンの奥で、ボーッと外の庭を眺めていると、彼は後ろからそっとやって来て私を優しく抱きしめてくれた。彼はどこかロマンティックなのだ。

夜勤のときは、彼が仕事へ行く前に、ベッドへ入る直前の私に会いにきた。

私たちはもう毎日毎夜、一緒だった。私たちはずいぶん昔からの知り合いのようで、一緒にいることが、ごく自然に感じられた。

そして彼と一緒にいるときの安らぎや喜びは、今まで感じたことのないほど大きなものだった。

キッチンでも通路でも何処でも、立って抱擁しているだけで二人の間にエネルギーがビュン、ビュンと通い合う感覚は、どう説明したらいいのだろう。

ペーターとは感じたことのなかった、全く新しいセンセーションだった。

ある日、私はジェイシーから小さな箱を手渡された。

開けてみると、中には5cmほどの細いシルバーの先にダイヤのようなガラスを散りばめたピアスが入っていた。持つと、キラキラと揺れた。

プレゼントをもらうことなど考えてもいなかった私は驚いた。

「どうやって買ったの？」

コミュンではお金の支給はなく、フランス人の彼が実家からお金を送って貰っていないことは知っていた。

「どうやって買ったのかは秘密」

とジェイシーは言っていたが、

「金券を貯めて、買ったんだ」

と少し経ってから教えてくれた。

コミュニオンで仕事をしているメンバー達は、現金の代わりにタバコ券とビール券、そしてお菓子などをかう金券が支給されていた。勿論、コミュニオン内だけで使えるものだ。コミュニオンは一般客用のキオスクと小さなブティックを経営しており、ブティックではエキゾチックな装飾品やバッグ、洋服を販売していた。一般客は現金で、コミュニオンメンバーは金券でそれらを買うことができた。

ビールは好まず煙草も吸わないジェイシーは、お菓子も買わずに金券を貯め、私にピアスを買ってくれたようだ。

「君にとっても似合うと思ったので、買ってきた」

ジェイシーは私を真っ直ぐ見ながら言った。

毎日一緒に過ごす二人は、それぞれが与えられていた3人部屋では少々落ち着かなくなっていた。コミュニオン生活も1年になる頃、私とジェイシーは自分たちの個室が欲しいとコミュニオンに願い出た。そして、その願いは叶えられた。

4畳ほどの小さな部屋だったが、誰もいない二人つきりになれる部屋で、私たちはいろんなことを話し、ジョークを言っては笑い転げた。

明日のことは誰にも分からない。今、一緒にいられることだけが本当で、その一瞬たりとも逃したくはなかった。

ジェイシーは私と出会う前に、いろんな国を旅行していた。

カナダには数回訪れたことがあり、果樹園でリンゴやチェリーなどの収穫をしながら数ヶ月暮らしたという。

果樹園のオーナーに山小屋をもらい、夜になると一人で満天の星空を見ながらギターを弾いて自分の歌を作ったことが、素晴らしい思い出になっていると言った。

又、大自然の中の湖でカヌーを漕いだことも強く記憶に残っているそうだ。カヌーを漕いでいた数日間、誰にも会わなかったらしい。

湖の水がそれは奇麗に透き通り、カヌーから直接すくってそのまま飲んだと言っていた。聴いているだけで私も雄大な風景の中を旅行しているようだった。

カナダを出た後はアメリカに入り、東コーストから南に下ってメキシコやグラタマールを訪問し、その後、西海岸を北上して、一度目はグレイハウンドという長距離バスで、2度目と3度目はヒッチハイクで、合計3度、アメリカを横断したという。

モロッコも良かったと言っていた。モロッコ人はとても親切で、一度詐欺にはあつたけれど、それは自分の落ち度だったとか。

ヨーロッパはスペイン、イタリア、イギリス、ギリシャ、オランダ等を旅行していた。そして初めてのインド旅行。そのときの冒険話は本になるほど面白いのである。

毎晩、驚くような体験談を次から次に聴かせてくれるので、私は夜になるのがとても楽しみだった。

同じように、彼が今までつき合ったという50人の女性の様子も毎晩聴かせてもらった。太った女の子からモデルのような女性までいたそうだが、どの女性も真心を込めてつき合ったと教えてくれる彼は、誠実な人だと思った。

日中、二人の空き時間があうと、自転車に乗って西ベルリンの町へ出かけていった。

私は大きなキッチンで二人分のサンドイッチを作り、それを持って、夏は大きな池がある公園でピクニックをした。

凍り付くような冬の夜でも、表通りを歩き、その通りに並ぶ菩提樹の下に置かれた、半分雪で覆われたベンチに腰掛けたりもした。

西ベルリンの冬は零下何度にもなる寒いところだが、二人一緒だとその寒さも感じなか

った。ただただ、一緒にいられることが嬉しくて、そして、その瞬間の、なんとロマンティックだったことか。

ある夜、私とジェイシーは手をつないで布団の上に横たわっていた。

二人とも寝てはいなかったが、深くリラックスしたスペースにいた事は確かだ。

突然、私の脳裏に、ある場面が浮かび上がった。サァーッと映画が始まったかのようだった。

そこには、私とジェイシーがいた。

時代は1900年代初期か、二人とも若いフランス人で、私は質素な長い裾のドレスを着て大きなエプロンを掛け、ジェイシーも質素なズボンとシャツを着ていた。

二人は若い夫婦のようだ。そして、ジェイシーは漁師のようだった。

場面は、今、正にジェイシーが漁に出ようとしているときで、私は石造りの小さな家の玄関先で彼を見送っているのだった。

私は小さな赤ん坊を抱えていたようにも思うが、その辺りは、はっきりとしない。

場所はブルターニュのようだ。海から切り立った崖の上に、私たち二人の小さな石造りの家があった。

海は白い波を立てて荒れ狂い、強い風が私の髪や長い裾を揺らしている。

ベッドに横たわりながら、私はその風を感じていた。

とその瞬間、脳裏に浮かんだ場面がものすごいスピードで早送りになり、次に、はっきりと見えてきたのは、石造りの家の前で荒れた海を見ながら、漁に出たまま帰ってこない夫のジェイシーを、ひたすら待ちわびる私だった。

目を閉じて横たわっていた私は強いショックを受け、急に現実に戻された。

目を開くと涙が頬を伝ってこぼれ落ちた。

夢ではなかった。寝てはいなかった。私は、はっきりとその情景を見た。思い出したと言った方がいいだろう。

横にいるジェイシーを見てみると、目は閉じているけれど寝てはいないようだった。

私は小さな声で彼に話しかけた。

「ねえ、今、急に見えたのだけど、どうも私たちは前世も一緒だったみたいよ」

「うん、僕も今そんな風に感じていたところだよ」

非現実的な話は全く信じないと言っていたジェイシーがそう言うので、私は少し驚いたが、それに勇気づけられて、私は話し続けた。

「前世に私たちは夫婦で、あなたは海が荒れた日に漁に出て、遭難してしまったみたい」

「そんな風な記憶が僕にももあるんだ」

「その時のあなたの名前は、確かジョンだったと思うの」

「うん。実は僕の名前の JC・ジェイシーは、正しく言うとジョン・クロードなんだ」

「えっ！そうなの？」

「そう。君の名前は、確かマリアだったと思う」

「あっ！実はね、スイスに住んでいるとき、キリスト教の洗礼を受けようと思ったことがあって、その時、神父さんにクリスチャンの名前を選ぶように言われて、私はマリアという名前を選んだことがあるのよ」

結局、私はクリスチャンにはならなかったのだが、なんと言う偶然だろう。

愛し合った二人が一緒に人生を全うすることが出来なくて、そのやり直しをするために生まれ変わり、再会する運命にあったのだろうか。

私は日本で生まれて少し遠回りをしてきたけれど、会うべき二人がやっこの西ベルリ

ンで再会したのか。

そういう事なのか？ そうだ、二人は会うべき運命だったのだ。

現実離れした話のようだが、あのとき見たものは決してイマジネーションではなかった。昔の記憶の一部が急に蘇ってきた、としか言いようがないものだった。

さーっと霧が晴れるように、私の意識がハッキリした。

ペーターが私を日本から誘い出してくれたのは、この為か。子供のある家族をペーターと持てなかったのも、ジョン・クロードに出逢う為だったのだろう。

ああ、なんてことだ・・・。

本当に二人がやり直しのために生まれてきたのなら、これから悔いのないように、ずっと一緒に楽しい毎日を過ごしていくようにしよう、と私は心に決めた。

「でも・・・、今世と一緒に全うしたら、もう来世は別々の人生を歩こうな」
何年も後になってからだが、時々、ジョン・クロードはこう言って私を笑わせる。



1985年の後半、西ベルリンのコミュン生活にも慣れた頃、悲しいニュースが飛び交った。

ドイツの警察が、ヨーロッパ国以外の外国人の国外追放令を発したのだ。

コムニンに在籍していた多数のブラジル人達はその対象で、スイスのパスポートを持っている私も、同じく対象者であった。

スイスは大きなヨーロッパ国の中心地にありながら、未だに EU 圏には入っていない。

出来る限り早くドイツを出るようと、コムニンから言われた。

せっかく馴染んだ場所を離れるのは悲しかったが、一番心が痛んだのはジョン・クロードと分かれることであった。

せっかく再会した二人なのに、又分かれなければいけないのか。

誰が造ったのか知らないが、国境線等という物があるばかりに、こんな馬鹿げたことに従わなければならない。不合理だ。

私とジョン・クロードは、近々やってくるだろう別れの日を思いながら、沈んだ気持ちで数日を過ごした。

ところがある日、ジョン・クロードが晴れやかな顔で私の所へやってきて言った。

「僕も君と一緒にドイツを出るよ！」

私はドイツを出たら、以前住んでいたチューリッヒのコミュニンに戻るつもりだった。

そこへジョン・クロードも一緒についてくるという。

チューリッヒのコミュニンに連絡を入れると、快く私とジョン・クロードを受け入れてくれた。

西ベルリンの生活も楽しかったが、住み慣れたチューリッヒへ帰るのはやはり嬉しかった。そして今度は一人旅ではなくジョン・クロードと一緒に旅である。

コミュニンの小型バスが私たちを送ってくれるというので、途中、ハンブルグとミュンヘンに寄っていくことにした。

その前に一つだけ見ておきたい物があった。それは、ベルリンを西と東に分ける壁である。コミュニンからずいぶん離れていた為、自分たちで観に行く事が出来なかった。

小型バスの運転手をお願いして、私とジョン・クロードは壁の近くまで連れて行ってもらった。バスから降りて壁の方向に向かって中心地を歩いて行くと、急に目の前に大きな灰色のコンクリートが立ちはだかった。

それがまさしく、街を真っ二つに分けている壁だった。

この壁の向こう側に、こちら側と同じドイツ人が住んでいるのかと思うと、切なくなった。

観光客用なのだろうか、西ベルリンの壁の前に一つ、東ドイツを覗き見出来るように、小さなステージのようなものが作られてあった。

私とジョン・クロードは10段ほどあるその階段をひとつひとつ踏みしめながら登っていった。最後の台の上に立つと、目の前に東ベルリンの町が広がった。

町の様子を見た私は息をのんだ。

古い建物の外壁には、機関銃で出来たのだろう、大小の穴が一面に広がっていた。

その前に停まっている車はアンティークのように古い型だ。走っている車の数は極端に少なく、歩いている人もほとんどいない。

1950年代が、そこでびたっと停まっていた。

悲しい灰色の空気がその町を包んでいた。

壁を越えようとして、兵隊から銃で撃たれて死んで行った人びとの声が聞こえてきそうだった。

私は暗い気持ちを吐き出すように、ハーッと大きなため息をひとつついた。

新たな始まり

数日後、私とジョン・クロードを乗せた小型バスはチューリッヒのコミュニオン前に到着した。

2年前に少々心細さを感じながらスーツケースを下げて出た玄関先に、今度はジョン・クロードと一緒に降り立った。

西ベルリンで過ごした時間が夢のように感じられたが、私の横に立っているジョン・クロードが、夢ではなかったことを証明した。

二人用の部屋に案内されながら、ペーターは何処にいるのだろうと私は考えていた。

ペーターは、以前と同じレストランで働いていた。そして、その上にある同じアパートに住んでいることも分かった。

彼に電話をしてみると、午後に瞑想センターへ行く予定だというので、その時間に合わせて私とジョン・クロードは瞑想センターへ出かけていった。

瞑想センターには大きなベランダがあり、お茶が飲めるようにテーブルや椅子が並んでいる。私とジョン・クロードはそこでペーターを待つことにした。

久しぶりに会うペーターである。私を見て、そして私と一緒にいるジョン・クロードを見て、彼はどんな反応を示すだろう。私は内心落ち着かなかった。

やがて懐かしい顔がベランダに現れた。

ペーターは私を見て懐かしそうに笑った。そしていつもの優雅な足取りで私の方へやってきて、優しくハグをしてくれた。

私は直ぐにジョン・クロードを紹介した。

ペーターは少し恥ずかしそうな顔をしたが、満面の笑顔のジョン・クロードにホッとしたのか、彼とも親しみのあるハグをし、ジョン・クロードもそれに答えた。

元カレと今カレの、平和な初対面である。

しばらく3人で話をしたが、途中でジョン・クロードが気を利かせて抜けてくれた為、私はペーターと本当に久しぶりに話を続けた。

ペーターは、私にボーイフレンドが出来ていることをコミュニオンの人から聞いて知っていた。

私とペーターは10年間一緒に暮らし、友達以上の感情はお互いに持っていたが、後半はルームメイト的な仲だっただけに、ペーターのジョン・クロードと私に対する感情は、嫁に行った娘の父親的な、ちょっと寂しいけれど幸せになってくれるのなら嬉しい、というポジティブなものであることが分かって、私は正直ホッとした。

彼とは苦しい事を沢山経験したが、こうして再会してみると、楽しかった事ばかりが思い出され、会話が弾んだ。

ふと、このままペーターと一緒に家に帰るのではないか、そんな錯覚もした。

しばらく話し込んでいたが、やがてジョン・クロードが戻り、ペーターとの懐かしい再会は終わりを向かえた。

穏やかな雰囲気の中で3人が再会出来た。コミュニオン内で再会出来て本当に良かった。

この後、ペーターはレストランの上のアパートに戻り、私はコミュニオン内のアパートに住んだ為、私たちが会う事はほとんどなかった。

チューリッヒのコミュニオンに戻った私は、以前のようにキッチンで働く事には興味がなく、

ジョン・クロードと一緒に建設現場で働くことにした。

建設に関して何も知らない私は、一番簡単な部署に入り、建設現場から持ち帰った玄関ドアのサンドペーパー掛けや色塗りなど、簡単な仕事をさせてもらった。

みんなの為に茶を入れるのも私の役目だった。私のお茶を飲んでホッとするみんなの顔が嬉しくて、私はこの時間を一番好んだ。

友達のような沢山の人たちと一緒に過ごす事で私自身が豊かになり、英語力も格段に良くなった私は、コミューンでの生活をこの上なく楽しんでた。

ただ頭の何処かで、ここでぬくぬくといつまでも過ごすのではなく、いつかは外の生活に戻らなければ、とも考えていた。

とくにジョン・クロードに出逢い、その意味が分かって以来、近いうちにここを出て二人の生活を始めたいという気持ちが強まっていた。

コミューンに住んでいる限り食事の心配はなく、寝る部屋もある。こんなに楽なところはないが、私はそれを返上してでも、ジョン・クロードと共に人生を歩んで行きたいと思った。

コミューンの外に出れば嫌な仕事もしなければいけないだろう、住む場所も必要だ、大変な事は分かっている。だが、ジョン・クロードと二人一緒なら何でも出来るという確信が私の何処かに強くあった。

ある日、私はその気持ちをそっとジョン・クロードに伝えてみた。友達が沢山回りにいる生活を好むジョン・クロードは、どう考えるだろう。

「いいよ、じゃあ、コミューンを出て、二人で生活しよう」

彼は驚くほど簡単に賛成した。

ジョン・クロードには怖いものなしのようだ。コミューン内で生活をしようが外で生活をしようが、大した違いはないと彼は思っている。勿論、コミューン内のようにみんなが友達のように接する生活は外では不可能だろう。だが、それも自分次第だと彼は考える。

環境の整ったコミューン内で暮らすのもいいが、容易ではない外の環境にチャレンジしながら暮らすのは心身ともに強くなるだろうと彼は言った。

これで私たちがコミューンを出る話は決まった。私たちは、早速、コミューンにその旨を届け出た。

どこへ行くかはまだ決まっていなかったが、まずは、旅行費を工面しなければいけなかった。私たちは現金を1セントも持っていなかったのだ。

私は、3歳のときからずっと一緒に遊んだ幼なじみに援助をお願いする手紙を出した。長い間連絡をとっていなかったが、彼女は速達で数万円を送ってくれた。

その後直ぐに、私とジョン・クロードが仕事をしていた建築現場から特別に現金を支給してもらえることになり、これで二人の電車賃が出ることになった。

とりあえず、私たちは南フランスに住むジョン・クロードのお姉さんのところへ行くことに決めた。一歩踏み出すと、何かが始まるだろう。

フランスへ行く事が決まり、私はウキウキした。先の事など、全く不安に感じなかった。

ジョン・クロードと一緒に旅行をすることがひたすら嬉しくて、彼と一緒になら何処へでも行けると思った。



フランス

3年間のコミューン生活を終え、ジョン・クロードのお姉さん家族が住んでいる南フランスへ行くことに決めた私たちは、その前に少し寄り道をする事にした。

スーツケースを一つずつ持った私たちは、チューリッヒ駅から先ずはパリへ向かった。大好きなジョン・クロードと憧れのパリへ行っていることが嬉しくて、私は列車の中で躍りだしたくなってムズムズした。

パリの街に到着した私たちは、市内のアパートマンに住んでいるジョン・クロードの友達の家泊めてもらえることになった。

オペラ歌手である友達の奥さんに、

「月曜日に家を離れるので週末だけ滞在してもいいわ」

と言われた私たちは、土曜日の朝、パリの街に飛び出していった。

ジョン・クロードはシャンゼリゼ近くに2年ほど住んだことがあると言い、パリの街には詳しかった。

私たちはエッフェル塔へ登り、シャンゼリゼを歩き、凱旋門を見上げてパリの街を楽しんだ。一休みするカフェで聞こえてくるフランス語が耳に心地良く、私の心を躍らせた。

私はパリの何もかもが好きになった。ドイツやスイスなど、他のヨーロッパの街では感じたことのない、とても身にしみる、やっと自分の土地に帰って来たような、そんな喜びを感じるのだった。

二人はあえてパリの細い通りを歩き回り、パリの雰囲気を楽しんだ。

週末は瞬く間に終わり、私は離れがたい気持ちを抑えながら、今度はパリから250km南方にあるテールの街へ向かった。列車で1時間ちょっとだ。

ロワール川はフランスで一番長い川である。その畔には古城が沢山点在し、川に沿って大きな街がいくつもある。ルイ 11 世紀時代にフランスの首都が置かれていたというテウールの街はその内の一つである。

そのテウールの街に、ジョン・クロードの両親が住んでいた。ジョン・クロードが育った家である。

ジョン・クロードは 10 人兄弟の真ん中で、3 部屋のアパートマンに、多いときはおじさん家族も含めて 15 人くらいが一緒に住んでいたという。

そんな家を早く出たくて、ジョン・クロードは 15 歳の時に寄宿舎に入り、それからは何度も旅行に出かけ、独り住まいをして、家族と一緒に住む事はあまりなかったらしい。

私たちが彼の家を訪ねた時は、子供達がすっかりいなくなったアパートマンに両親だけが住んでいた。

アパートマンは子供達が騒いでいたときとは違い、シーンと静まり返り、だだっ広く見えた。

10 人の子供達の食事を作り、洗濯をし、健康に育て上げたジョン・クロードのお母さんは、丸っこい身体に愛嬌のある笑顔の、元気で優しい女性だった。

お父さんは、昔は厳しい人で、子供達はいつもヒヤヒヤしていたらしいが、喉頭がんになり、医者から 2 年しか生きられないと宣告されたにもかかわらず、自分の努力で 20 年も生きて話も出来るようになった意志の強い人だそうで、初対面の私をキスとハグで優しく迎えてくれた。

私は極自然に、ジョン・クロードのお母さんを「マモ」、お父さんを「パパ」と呼んだ。

「「マモ」「パパ」と呼んでくれた、と両親が喜んでいたよ」

と後でジョン・クロードが教えてくれた。

数日後、ジョン・クロードの兄弟を訪ねたのだが、義理の嫁がジョン・クロードの両親を「マダム・デュモン」「ムッシュ・デュモン」と呼んでいるのを見て、私は目を丸くした。

テウールは幅広いロワール川を抱えるように広がっている大きな街である。

大聖堂や美術館、城もあり、フランスらしい良い雰囲気を醸し出している。

私たちは両親のアパートマンに数泊し、二人に余裕ができれば再訪問するからと約束して、ジョン・クロードのお姉さん家族が住むペルピニオンへ向かった。

到着したペルピニオンはスペイン国境近くにある街で、駅を出ると南国の雰囲気が漂っていた。

風が強かったが、それがこの街の特徴らしい。

駅前には、到着時間を連絡していたジョン・クロードのお姉さんのご主人である義兄が車で迎えにきてくれていた。

一人暮らしをしていた義兄のお母さんが怪我で入院した為、私たちは留守になる彼女のアパートマンにしばらく滞在することになった。

アパートマンの玄関を入ると、一人暮らしと言っていた割には部屋数があり、それぞれの部屋にはいろんな物があふれていた。キッチンの戸棚の中には 3 家族分ほどのアンティークな鍋や食器類がぎっしりと詰まっていて、不思議だった。

何もかもがアンティークだったが、それらがフレンチスタイルだと思うだけで私は楽しかった。

外に出てみると、回り中からフランス語が聞こえてきて、いよいよ新しい生活が始まるのだなと、気持ちが高ぶった。

フランス語が全く分からない私は、毎日ジョン・クロードと一緒に行動した。彼と一緒に買い物に出かけ、目新しい品物を覚え、それを買うときのフランス語を学んだ。そんな毎日は私は楽しくて仕方がなかった。ジョン・クロードのお姉さん家族とも仲良くなり、少しずつフランスの生活に馴染んでいった。数ヶ月後、入院していた義兄のお母さんが病院を出ることになり、私とジョン・クロードは、お姉さん夫婦の援助を得て、小さなアパートに移り住むことにした。義兄と一緒にアパートを見に行った私たちは、フランスの賃貸アパートには何も入っていない事を、その時知った。家具は勿論、キッチンさえ入っていない。家具はなくてもどうにかなるが、毎日の食事をまかなうキッチンには必要だ。私たちは、義兄の知り合いからセカンドハンドの流し台とガスコンロを買った。食器や鍋類は義兄のお母さんから分けてもらうことにした。戸棚に突っ込んでいるだけの食器や鍋類は、好きなだけ持って行ったらいいと言われた。ベッドは、マットレスだけを買って直接床に敷いた。シーツはジョン・クロードのお母さんからのプレゼントだ。洗濯物は小さなバスルームにあるシャワーブースの中で洗うようにした。ただ、ベッドシーツだけは大きすぎて、町にあるコインランドリーを使用した。必要最小限のものしかない、しかし全て揃っている、ママゴトみたいな二人の生活が始まった。

自分たちの小さなアパートに住み始めた頃、ジョン・クロードは、町の駅のレストランでウェイターとして働き始めていた。街で仕事を見つけるのは容易ではなかったが、彼は若い頃にウェイターの学校へ行っており、それが役に立った。ただ、一緒に仕事をするマネージャーや同僚達が友好的とは言えず、ジョン・クロードは辛い日々を送ることになる。みんなが友達というコミュニケーションの生活から、一気に上下関係のある職場で働くことは簡単なことではなかった。それでも、彼の安い給料に客からのチップが加わり、私たちの生活は次第に安定していった。お姉さん夫婦から借りたお金も順調に返済して行く事が出来た。援助を受けていなければ、ジョン・クロードは人間関係の良くないレストランの仕事は直ぐに辞めていたと思うが、援助金を全て返済するまでは責任があった。毎日レストランの仕事に出かけて行き、そして心身ともに疲れて帰ってくるジョン・クロードの顔を見る度に、私の心は痛んだ。彼をつらい目に遭わす為にコミュニケーションを出たのではない・・・。

そう思いながら、スイス人である私は仕事を探すこともできず、無力だった。そんな私たちの気晴らしになったのは、週に一度の彼の休日だ。ちょうど夏の時期で、私たちはヒッチハイクをしながら半時間ほどの所にある海に出かけていった。あの当時、ヒッチハイカーに止まってくれる車は多かった。「いつもは絶対に人を乗せないのだけど、今日は特別よ」と言う女性もいた。その内、ジョン・クロードのお父さんが自分のスクーターを電車で運んで私たちにプレゼントしてくれたので、それからはそれに乗って海まで出かけた。

あの当時、ヘルメットはかぶらず、泳いだ後の濡れた髪をなびかせてスクーターを走らせたことを思い出す。

映画「ローマの休日」の中の、アン王女と新聞記者のようだな、と思いながら私はジョン・クロードの腰にしがみついていた。

この頃、私とジョン・クロードは、フランスで結婚する為に必要な情報を集め始めていた。結婚ということにあまり興味がない私たちだが、フランスに長期滞在する為、そして仕事をする為には必要なのだ。厄介な作業だがしかたがない。

「ジョン・クロードと結婚する必要があるので、離婚をしてほしい」という内容の手紙をペーターに書いたのは、それから間もなくである。

ペーターからは直ぐに返事が届き、離婚の承諾をしてくれた。

「離婚の理由の欄には、君が別の男性の所へ行ったから、と書いていいかい」と手紙の中でペーターが訊いていた。

「勿論」

と書いて私は返送した。

更に、お互いの理解の上での離婚、ということで、どちら側からも金銭のやり取りはないことにした。

そしてペーターは、一人で裁判所の予約を取りに行ってくれた。

それから約10日後、離婚調停の予約が取れたと連絡を受けた私は、ペルピニオンからスイスのチューリッヒへ向かって列車に乗った。

結婚するのは簡単だが、離婚となると、どうしてこんなにも面倒なことになるのだろうか。誰かが、離婚の邪魔をしているようにしか思えない。

チューリッヒ駅に到着し、列車から降りると、ホームの脇にペーターが立っているのが見えた。

彼は私の到着を心待ちにしているようで、微笑みを浮かべながら少しスウイングしている。私たちが出会った頃の優しい彼を思い出した。

ペーターに近寄って行くと、彼は温かいハグで迎えてくれた。

彼は、私も良く知っている昔からの友達と一緒にアパートを借りて住んでいると言った。離婚調停の間、私もそのアパートに滞在出来ることになり、私とペーターはトラムを乗り継いでそこへ向かった。

アパートに着いてみると、共用リビングルームに私の寝具が綺麗に用意されていて、感激した。私はペーターと友達に心から感謝した。

その夜、私はペーターや友達と一緒に食事をし、久しぶりに昔の思い出を語りあった。

西ベルリンのコミューンの様子を話しだすと、みんな身を乗り出して聴いていた。

突然、ペーターが私の顔を覗き込んだ。

「目がキラキラしているよ。昔よりもずっと綺麗だ」

びっくりした顔で彼は言った。

ペーターの知らない新しい私が、そこにいた。

スイスに到着して2日目、離婚調停の日だ。

裁判所へ向かいながら、私とペーターは久しぶりの再会に会話が止まらなかった。

ふと気がつくと、二人は手をつないで裁判所に入ろうとしていた。

「離婚をしにきているのに、仲良く手をつないで入るのは良くないだろう」

ペーターがそう言って、二人で笑った。

昔はよくこうして二人で手をつないで歩いたものだ。私の手を包み込む彼の大きな手の温もりを覚えている。

裁判所の受け付けに行き名前を告げると、私たちが調停を受ける部屋の番号を教えられた。私たちは予約された部屋を目指して重い雰囲気のある廊下を静かに歩いていった。

部屋を見つけて重いドアを開けると、テレビや映画で見るとような立派な法廷が目の前に現れた。それはそれで、私はちょっと感激してしまった。

目の前の少し高い位置には、裁判官が3人座っている。一人は女性だ。

こんな私たちの離婚調停に、こんなに立派な法廷を使うのかと驚きもした。

傍聴席も大きかったが、勿論、誰も座ってはいない。

「では離婚調停を行います」

裁判官の一人がドイツ語で宣言した。調停は、全てドイツ語だった。

離婚の理由は何ですか、どうしてそうなったのですか、そのときあなたは何処にいましたか等、事件の裁判でも受けているようだな、と思うほどいろんな質問をされた。

私は、大して上手でもなかったドイツ語で裁判官達の言う事を理解し、それに答えていった。どうしても分からない時は、ペーターに助けを求めた。

ペーターは私の敵ではないのだから助けを求めてもいいだろうと思ったし、裁判官は、それに対して何も言わなかった。

どのくらいの時間が経ったのだろうか、裁判官が木槌でトン、トン、トンとテーブルを3回打ち鳴らし、長く感じられた離婚調停が終わった。

離婚調停というよりも、ドイツ語の試験を受けたようで私は汗をかいてしまったが、これで離婚は成立した。

ただし、私はこのままスイスパスポートの保持を希望したので、パスポート上の私の名字はペーターの名字から変わらなかった。

裁判所を出る前に、私たちはこの簡単な離婚調停に約5万円の請求書を受け取った。

結婚は金がなくても出来るが、離婚は金がないと出来ないのだ。

離婚証明書は数日後に届くと言われた。

裁判所を出ると、私とペーターは再び手をつないで歩き出した。

「どうもありがとう」

私はペーターにお礼を言った。

「どういたしまして」

彼は丁寧に答えてくれた。

彼には本当に感謝しなければいけない。

彼と一緒に過ごした10年間を振り返ると、中絶という心身的に辛かった記憶が先ず蘇るが、それでも楽しかった日々は沢山あるし、条件なしに優しくしてくれた彼も思い出す。少々気持ちにムラがある人なので、彼が落ち込んだ時は側に寄れないほど厳しかったが、平和で充実した時間も沢山あった。

そして何よりも、彼に会わなかったら、私はこうしてヨーロッパにいたことは出来なかったし、ジョン・クロードに会うこともなかったのだ。

ペーターとの10年間は、ジョン・クロードに会うまでの寄り道だったようにも思えるが、その10年間に経験したことは、何事にも変えられない貴重なものであった。

日本から私を引っ張り出してくれた彼に、心から感謝したい。

スイスからフランスへ戻って来て直ぐに、ジョン・クロードが体を壊した。

疲れていた身体に、マネージャーや同僚達とのストレスが重なったらしい。

彼は口内炎が出来、高い熱を出して寝込んだ。

2日目になっても起き上がることができず、私はそれをマネージャーに伝える為に町まで歩いていくことになった。

私は未だフランス語を話すことは出来なかったが、家に電話がないため、ジョン・クロードは自分で伝えることが出来ない。私が直接駅に行き、身振り手振りでマネージャーに伝えるしか方法がなかった。

マネージャーに伝えるべきフランス語をジョン・クロードに教えてもらい、私は家を出た。

30分ほど歩いて駅のレストランに着くと、マネージャーとウェイターが2人、カウンター内で気だるそうに談笑していた。

私は彼等の前に行き、ジョン・クロードに教えてもらったフランス語を話した。

「ジョン・クロードが病気で、口内炎が出来て、熱も高い」

ところが、マネージャーは、

「へっ、やつが病気だってさ。歩けないんだってさ（というようなことを言っている事が私には分かった）」

と隣に立っているウェイターに言い、そして周りにいる同僚達と、「ウワッハハハハ」と笑い始めた。

私はムッとした。下品な笑い顔のマネージャーを睨み返すと、

「彼はヒューマンビーイングだから、病気にもなるんです！」

と、一応フランス語で強く言い、くるっと後ろを向いて、そのまま駅を後にした。

あんな嫌な人間と一緒にだと誰でも病気になるわ、と憤慨しながら私は道の上にあった石を蹴っ飛ばした。

1週間が経ち、ジョン・クロードの具合は良くなったが、彼はレストランの仕事場には戻らなかった。

それからの毎日、彼は新聞を見たり、直接町へ出かけていったりして職を探したが、見つけるのは本当に難しかった。

ようやく、あるホテルのパートタイマーとしてレセプションで働く仕事を見つけてきた。

そしてその直後、私はペーターから手紙を受け取った。

ペーターと一緒に住んでいた友達カップルが長期旅行へ行く為、今働いているベジタリアンレストランを辞めると言う。

彼女の方はキッチンでメインシェフとして働いていたが、彼女が辞めたら、その仕事を私に継いでもらえないだろうか、という内容だった。

うん、私にできる仕事があるのなら、何処へでも行こう。ジョン・クロードも、スイスで仕事を探せばいいのである。

私はペーターに電話をして、「仕事は直ぐに引き継ぎます」と伝えた。

数週間後、私はスイス行きの列車に乗る為、スーツケースを持ってペルピニオンの駅に立っていた。

ジョン・クロードは、私たちが借りていたアパートの解約や揃えた生活用品を処分する為に、一人で後に残ることになった。片付けが終わり次第、スイスに行くからと彼は約束した。

2ヶ月ほど前に離婚調停でスイスへ行ったばかりの私である。又しばらくジョン・クロードと別れて暮らすのは辛かった。

「今度はいつ会えるのだろう・・・」
一人旅には慣れているはずなのに、私の胸は張り裂けそうだった。
「必ずスイスに向かうから」
「待っているね」
電車がスーッとホームに入ってきた。
私たちはキスを交わし、固く抱き合った。
「ジュテーム（愛しているよ）」
「ジュテーム・オシ（私も愛しているわ）」
何度言っても、言い足りない。
遂に、私はスーツケースを持ち上げ、スッと電車の中に入っていった。
座席に座り、窓の外のジョン・クロードを見上げると、彼は涙を流して泣いていた。
泣くまいと我慢していたのに、私の目から涙が溢れ出た。
私たちは窓ガラスの外側と内側から手を重ねて、「又ね!」「また直ぐに!」と言いつたが、彼の声は聞こえなかった。
ガタンッ、と何のアナウンスもなく電車は動き出し、すぐにジョン・クロードが見えなくなった。

スイスで再出発

チューリッヒに到着した私は、翌日、早速ベジタリアンレストランへ働きにいった。少々心配顔のオーナーと挨拶をし、私は女友達のいるキッチンへ入って行った。女友達は私にメニューを教えながら、1週間ほど一緒に仕事をした後、辞めていった。しばらくの間、私はペーターと友達が住んでいるアパートの居間に住まわせてもらうことにした。レストランの仕事を辞めた友達カップルは、旅行へ行く準備が出来次第、アパートを出て行くと言っていたからだ。いつまで、このアパートに住むことになるのか私には予想もつかなかったが、ペーターは私に新しい滞在先が見つかるまでいたらいい、と言ってくれた。この時期、私には何も予想がつかず、先が見えない状態だった。これだけ先がまったく見えないと、心配する種がないので反って穏やかな心境になる。与えられた1日を大事に生きて行く、それだけだ。

ある日、私はレストランの昼食メニューとして「カレー・カシミヤ」を作った。カレーソースに、バナナやリンゴ、キーウイ等のフルーを加えて作るカレーだ。その日、レストランのオーナーが客に混じり昼食を食べていることを知らなかった私は、オーナーが急にキッチンへ飛び込んできたのに驚いた。オーナーの勢いはかなりのもので、キッチンにいた全員が彼の方を振り向いた。彼は普段から感情をあまり表に出さず、気軽に話せるタイプではなかったが、そんな彼が、またしても真面目な顔でキッチンの中央に立ちはだかった。「今日のカレー・カシミヤを作ったのは、誰？」にこりともせずには彼はキッチンスタッフの全員を見回した。私はドキッ、とした。何だろう、何を、言われるのだろう……。メイン料理を作るのは私しかいないのだから、隠れようがない。「作ったのは私ですが、何か……？」怒鳴られるかもしれないと思いながら、私は彼の前に進み出た。「いや～、このカレーは……、美味しいよ！ほんと、美味しい！ブラボーだよ」オーナーはそう言うと言いつつ私の手を握り、ニッと笑って、キッチンから出て行った。「ふう～～っ、何だと思ったら、美味しかったんだ。良かった……」新しく雇ったものの、私がレストランで出せるほどの料理を作るのかどうかオーナーも心配だったのだろう。ホッとしながら私は大鍋に入ったカレー・カシミヤを見つめた。喜びがじわりと込み上げてきた。

1986年も後2ヶ月足らずで終わろうとしているある日、約1ヶ月遅れでジョン・クロードがチューリッヒ駅に到着した。何処から手に入れたのか、彼は私が入れそうなほどの大きなスーツケースを抱えていた。中には、二人がフランスで過ごしたママゴトのような生活の残り品が入っていた。スーツケース1個分で二人は生活していたのだ。身軽だった。ジョン・クロードがスイスに到着してまもなく、フランス人の彼がスイスで働けるように、私とジョン・クロードは結婚の準備を始めた。私たちがフランスに住んでいた時、既に私の住民票を得る為の結婚を考えており、書類などを集めて準備は始めていたが、フランスでは結婚出来るまでに1年はかかると言われて

いた。

フランスで取り寄せていた書類を持ってチューリッヒ市役所に行ったところ、1ヶ月後に結婚出来ることになった。スイスではイタリア語、ドイツ語、ロマン語に加えてフランス語も母国語の一つなので便利だ。

スイスでは、結婚申込書を市役所に持っていくと、その申込書が市役所の玄関先に1ヶ月間、張り出される。

この結婚に反対する者がいないかどうかを見る為であるが、中世の時代から繰り返された習慣が未だに実行されているのには驚く。

当たり前だが、私たちの結婚に反対する者は誰も現れず、私たちの結婚は1987年、正月明け直ぐの、1月5日と決まった。

結婚式には興味のない二人だが、市役所で市長さんの元、結婚の誓いを立てなければいけないらしい。立会人も二人必要だと言われて、私たちは男友達と女友達一人ずつに立ち会ってもらったことにした。

ペーターと結婚したときも同じ条件だったのかと思うが、その時のことは私の記憶からすっぱりと抜けてしまっている。

立会人として来てくれた友人二人ともラフな格好だったが、それに負けないくらい、私とジョン・クロードは、ごく普通の服装で市役所に向かった。

結婚の誓いは、ジョン・クロードがフランス人である為、全てフランス語で進められた。立会人である友人二人ともフランス語に長けていたが、結婚する本人の私は全く理解出来ないでいた。

結局、「ウイ」と返事をしなければいけない時は、ジョン・クロードが私の腕を突いてサインをしてくれることになった。

盛装で結婚セレモニーを行ってくれるチューリッヒ市長の元、私は何度かジョン・クロードに腕を突かれて「ウイ」と返事をしたが、どの項目に「ウイ」と賛同したのか、私は今もって知らないし、興味もないのである。

指輪の交換もない市役所の結婚セレモニーは無事に終わり、二人は晴れて「夫婦」となった。

市役所を出た私たち4人は、チューリッヒで有名なティールーム「シュプリングリ」へ向かい、コーヒーとケーキでその日を祝った。

1月5日という真冬なのに、素晴らしい晴天だった。

「晴れて夫婦」になり労働許可を得たジョン・クロードは、早速、仕事を探し始め、間もなく、新しく出来た大型ショッピングセンターに職を見つけた。

スイスに来て間もないジョン・クロードはドイツ語が殆ど話せなかったが、それでも面接でパスしてしまった。

彼が置かれたのは日曜大工製品コーナーで、訪れる客は本当に少なかったようだ。

そんな時、偶然にも若い日本女性とスイス男性のカップルが、日本へ行っている間の1年間、彼等のアパートに住んでくれる人を捜しているのを知った。

何も持っていない私たちには、全て揃っているアパートに住むのは当面都合が良かった。私たちは早速、彼らに連絡を取り、チューリッヒから電車で40分ほどの郊外にある彼等のアパートに向かった。

若いカップルは明るくて気持ちが良く、私たちが支払うのは家賃と光熱費で、アパートにある生活用品は全て使ってくれたらいいと言ってくれた。

アパートの家賃は私たち二人が支払える金額だった。スイスにやって来て4ヶ月後、私た

ちはペーターのアパートを出て、このチューリッヒ郊外のアパートに移った。

チューリッヒ郊外のアパートで10ヶ月ほど経った頃。

ジョン・クロードは大型ショッピングセンターから、ロイズバンクというイギリスの銀行に職を変えた。彼は若い頃に経済を学んだことがあり、それが役に立った。

私もベジタリアンレストランで1年ほど働いた後、オフィスの仕事を探し始めていた。

私は新聞の求人広告で、日系のY証券、N証券、そしてF銀行が求人していることを知り、それぞれ3社へ電話を入れ、面接に行った。

F銀行は少人数の社員で経営している小さな支店だった。社長の秘書が妊娠で辞めることになった為、その代わりを探していた。

面接をしてくれたのは人事部のスイス女性だったが、数名の日本人社員もスイス人社員も物腰が柔らかく感じが良かった。

次のY証券では、どちらも日本人の営業部長と人事部長が面接をしてくれた。

楽しく和気あいあいの雰囲気の中で、仕事の内容もよく説明していただき、私は、自分がベジタリアンであること、「そのおかげで、おならが臭くなくなった」などと言うことを1時間ほど話して、笑いの中、面接が終わった。

最後に向かったのは、N証券だった。

大きなテーブルを挟んで、私の前に3名の日本人面接官が座り、その中のひとりが会社概要や仕事内容を話してくれたのだが、誰一人として、私の目を見る人はいなかった。

ただ、ぼそぼそ、と下を向いて話をするのだ。

外国に進出してきた日本では大きな会社が、未だにこんな対応をするのかと私は呆れた。

N証券の退屈な面接を受けながら、ここには勤めない、と私は決めていた。

少し前になるが、N証券では仕事中に話をするとうるしき音が飛んでくる、と言うことを聞いた事がある。

日本で成功した会社の原点はこの辺りにあるのかと思ったが、私はうるしき音が飛んでくるような会社には自分の時間を捧げたくはない。

スイスで求職の面接に行くと、人事部長から仕事内容が伝えられ、そして、勿論、その仕事にあった人なのかどうか、こちら側の状態、状況も、いろいろと質問をされる。

そして、最後にされる質問は、「給料は、どのくらい希望されますか？」である。

あまり高く言うと雇ってもらえないし、安く言うと、その金額で雇われるので後で後悔することになる。

面接に行く時には、その仕事に対しての給料の相場を知っておかなければいけない。

3社に面接に行った数日後、私はまず、F銀行に電話を入れた。

「ええ、もう是非、来ていただきたいと思っております」

うれしい返事をもらって安堵した。更に、

「お給料は、ご希望された金額に少しプラスして、xxxxx スイスフランにいたします」

と言われて、よし、ここへ行こう、と私は決めた。

さて、面接に行った他社に、連絡を入れなければいけない。

まずは、対応が気に入らなかったN証券に電話をした。

「先日、そちらのお仕事の件で面接をしていただいた者ですが、別の銀行に就職することになりましたので、ご連絡いたします」

「えっ！、実は、当社もあなたを採用しようと思っていたのですが、何がいけなかったのか、よろしければ教えていただけないでしょうか」

戸惑うような声が電話の向こうでした。

一瞬、正直に言ったものかどうか躊躇したが、

「面接官3名の態度を拝見して、そちらへの信頼感が失せました」

と私は正直に伝えた。

「はぁ・・・、そうですか・・・」

電話の相手は私の言っていることが良く理解出来ないでいるようだったが、私は、面接ありがとうございました、と言って電話を切った。

次はY証券である。

こういう断りの電話をするのは気が進まないが、何事もきちんとしておかなければいけない。

私は受話器を取った。

「そちらのお仕事の件で面接をしていただいた者ですが、他社に採用していただいたので、ご連絡いたします」

「えっ、いや、当社もあなたを採用しようと、もう決めていたのですよ。どうして、他社を選ばれたのですか？」

「正直、貴社も大変に魅力があって、どちらにしようかと迷ったのですが、実は、他社の方が、そちらに比べてお給料が少し高いのです」

「いくらなのですか？」

「私の希望額よりも多くて、xxxxxスイスフランまで出していただけるそうです」

「ああ、その金額なら、当社も出しますよ。是非、当社に来てください!」

気持ちのこもった声で強く説得されてしまい、結局、私はその押しが気に入り、Y証券に勤めることになった。

Y証券の社員は日本人とスイス人が半々で、その時のスイス支社は未だ小さな規模の家庭的な雰囲気が溢れているところだった。

1年間の約束で借りて住んでいたアパートの持ち主が日本から帰ってくる時期になり、私たちは新しいアパートを探すことになった。

スイスでは仕事を持っているとアパートが見つけやすい。反対に、仕事を持っていないとアパートを貸してくれる所は先ずない。

私とジョン・クロードは、チューリッヒ市内からトラムで行ける場所に、入居者を募集中の真新しいアパートを見つけた。

アパートは2階建てで、1階にリビングとキッチン、バスルームがあり、バスルームには洗濯機と乾燥機がついていた。テラスの前には椅子とテーブルが出せる手頃な庭もついている。2階には寝室が2部屋と別のバスルームがあった。

アパート内の床や階段全てにカーペットが敷かれ、床暖房で真冬でもアパートの中はポカポカと暖かい。

このモダンなアパートが二人ともすっかり気に入ってしまい、直ぐにアパートの賃貸会社に連絡を入れ、そして貸してもらえるかどうかの返事待ちとなった。

数日後、ジョン・クロードが会社に行ってみると、賃貸会社から電話があったよ、と人事部長が教えてくれたそうだ。

ジョン・クロードが確かにこの会社で働いているのかどうか、賃貸会社は確かめたのだ。

「うまいこと言っておいたから、きっとアパートは借りられるよ」

と人事部長が言ってくれた通り、私たちは超モダンなアパートに住めることになった。

Y証券で働き始めて数ヶ月後、日本ではボーナスの時期になり、スイスの支店でも全員にボーナスが支給された。スイス企業には、そのようなシステムはない。

働き始めて数ヶ月にしかない私にも、「はいっ」と営業部長から分厚い封筒を手渡された。トイレに入ってそっと開けてみると、中には何十枚も100フラン（約1万円）が並んでいて驚いた。

私はさっそくジョン・クロードに連絡を入れ、就業後の夕方、レストランで落ち合った。隅のテーブルに座席を取り、二人で一緒に封筒の中を覗いた。

人目を避けて、現金は封筒の中に入れたまま数えてみると、入っている札の数が20枚もあって驚いた。

「2000フラン？お～ほっ、ほっ、ほっ、ほっ・・・」

二人の笑いが止まらなかった。初めて手にした大金だ。

パソコンが普及していなかった時代なので日本情勢に全く疎かった私は、これが日本のバブル時期だったのだと後で知った。

それから半年後、Y証券は銀行やブティックが立ち並ぶチューリッヒ・メイン通りの一等地に会社を移動し、名前も証券から銀行に変更した。

初めて貰ったボーナスで、私たちはプチバケーションに出かけた。

選んだ行き先は、イタリアのベローナである。

ボーナスをもらったというのに、電車は2等車を利用した。

ベローナは古い町で、スイスでは見られないがっしりとした石造りの建物が並び、街の中心地に古代ローマ劇場が雄々しく建っていた。

私はジョン・クロードと二人でプチバケーションをしていることが嬉しくて、幸せだった。

2泊3日のプチバケーションは、しかし終わるのが早い。最終日の正午過ぎ、私たちはスイス行きの電車に乗る為、ベローナの駅に向かった。

駅のホームで私たちが乗る電車を待っていると、

「2等車の切符を1等車に変更して、ゆったりと帰ろうよ」

とジョン・クロードが言い出した。

電車は、いつ着てもおかしくない時間である。

「早くしないと乗り遅れるよ！」

と言う私の声を背中で聞きながら、ジョン・クロードは切符を変更する為に階段を走り下りて行った。

しばらくすると、私たちの電車がホームにやってきた。ホームで待てば良かったのだが、私は電車に乗り込んで座席に座った。

「ジョン・クロード、早く戻ってこないかな・・・」

じり、じり、しながら私はホームを見ていたが、彼の姿はなかなか現れない。

ベローナは観光客が多い為か、乗り込んだ電車はかなり長い時間停車していた。

だが突然、ホームを見ている私の目の前で、電車のドアがスーッと閉まった。

「えっ！」

私は驚いて立ち上がった。と同時にホームを駆け上がってくるジョン・クロードの姿が目に入った。

しまった！、という顔をしてジョン・クロードは私を見た。

私はドアの所に駆け寄ったが、扉は手で開くことが出来ず、電車は彼をホームに置いたまま動き出してしまった。

二人は、言葉を交わす事も出来ず、次第に遠くなっていくお互いの顔を呆然と見ているし

かなかった。

あの当時、携帯電話など普及していなかった。いや、普及していたのかもしれないが、私たちは持っていなかった。

お互いに連絡を取る方法は全くなかった。

「えっ、どうなるんだろう・・・」

私の頭の中は真っ白になった。

どうしよう、どうしよう、と思っている所に、車掌が改札にやってきた。

私は覚えている限りのイタリア語で一通りの出来事を説明し、切符を持っていない事を伝えた。

「切符がないのなら、次の駅で降りるしかないでしょう」

車掌は冷たく言い放し、私は次の大きな駅で降ろされた。

電車を降りた私は、すぐに、駅のインフォメーションオフィスを探し始めた。

どうにかしてこの駅にいることをジョン・クロードに伝えなければ・・・。

混雑したホームを私は急ぎ足で通り抜けて行った。

階段を降りて少し歩いた右手に、インフォメーションオフィスのサインが見えた。

彼に連絡する手段が見つかりますようにと祈りながら、私はオフィスに入って行った。

他に客がいないことにホッとしながら、私は若い女性に英語で事情を話した。

「ああ、だいじょうぶ、だいじょうぶ。いま直ぐ、電車に乗った駅に連絡を入れて、あなたがここにいる事をご主人に伝えますから。まあ、落ち着いて。座って待っていてください」

女性は親切に私に言い、入り口近くにある椅子を指差した。

私は少し安堵しながら入り口の壁の前に置かれた椅子に向かった。しかし、その椅子はあまりにも汚れていて、私は座る気分にはならなかった。

立ったまま駅の構内の混雑ぶりを見ていると、再度、オフィスの女性に

「座って、落ち着いて。ちゃんと連絡したから」

と言われてしまった。

そうだ、落ち着かないと。私は再び椅子に近づいていったが、アイスクリームの汚れなのか、チューインガムがくっついたのか、椅子の汚れは私の座る気持ちをすっかり失わせた。立っている方がましだ。私はオフィスの入り口に行き、先ほどと同じように、浮かない気持ちで構内を眺め始めた。

・・・と突然、ジョン・クロードの姿が私の目の前を横切った。浮かない顔をして、構内を横切ろうとしている。

「えっ・・・！」

私は一瞬何を見たのか信じられなかった。だが、次の瞬間、

「ジョン・クロード！」

私は構内に響くほどの声で彼の名前を叫んでいた。

私の声が聞こえたジョン・クロードは、びっくりして私の方を振り向いた。

「あああ・・・、会えた、会えた！！良かったー」

二人が同じ駅で出会えたことは、殆ど奇跡だった。

電車を逃したジョン・クロードは、直ぐに駅員を捕まえてアドバイスを求めたらしい。すると、

「あそこの発車しようとしている電車に乗ると、次の駅には、逃した電車より先に到着するから、そこで逃した電車を捕まえればいい」

と教えてくれたそうだ。

ジョン・クロードは電車の停まっているホームに走り、言われた電車に飛び乗った。

ところが、この駅に着くと、逃した電車は既に出た後だったという。

こうなると、ジョン・クロードもどうしたらいいのか分からず、とぼとぼ、と構内を歩いていた、と言うことだったらしい。

私は、もしオフィスの女性に勧められた椅子が綺麗であったならば、きっと座っていただろう。ところが椅子は入り口を背にしていたので、私は通りがかったジョン・クロードを見逃していたことになる。

偶然が、偶然を呼んだ。

「いやあ、良く会えたよねー」

あれだけ混雑した駅の構内で二人が出会えたことを私たちは未だに信じられないでいる。



初めてのインド

翌年の1988年2月、私とジョン・クロードは3週間の休暇を取りインドへ行った。

目的地はプーナ（今のプネー）にある、瞑想センターだ。

ジョン・クロードは既に2回訪れたことがあるが、私には初めてのインドだった。

チューリッヒ空港からスイスエアーで出発し、ボンベイ（今のムンバイ）空港に着いたのは真夜中だった。

到着した飛行機から外に出た途端、古いトイレに入ったような臭いが私の鼻を突いた。

「臭うねえ」

「うん、これがインドの臭いさ・・・」

トイレの臭いに、その臭いを消そうとするナフタリンの臭い、そこへスパイスの香りが入り交じり、一種独特な臭いが空港全体に漂っていた。

その頃のボンベイ空港は、ヨーロッパの空港に比べると20年ほど時代遅れをしていたような気がする。何処を見ても、すすけて、みすぼらしかった。

空港関係者の男性達は色あせたベージュ色の制服を着、女性達は同じ色のサリーの制服を着ていた。サリーだけがインドらしかった。

みんな褐色のやせた顔に目だけがギラギラと光り、むっつり顔で到着客たちを監視している。インドのカラフルなスパイスの色やサリーの明るい雰囲気は、空港内の何処にもなかった。

目的地プーナの町は、ボンベイから更にタクシーで3時間あまりのところにある。

プーナへ向けてタクシーに乗る前に、私は空港内にあるトイレへ行っておくことにした。

インドのトイレには紙がない、と聞いていた私は、ティッシュを持って入った。
トイレは便器をまたいで用を足す床式で、案の定、紙はなかったが、目の前に水道の蛇口と水を入れるプラスチックの容器があった。
それらをどうやって使うのか知る由もない私は、持参したティッシュを使ったが、それを便器に入れて流してしまうとボンベイ空港の水洗システムを破壊してしまうかもしれないと心配になり、横に備え付けられていたゴミ箱に捨てた。
インドへようこそ！と誰かに言われた気がした。
この先、どんなことが待っているのだろうか。私には想像さえつかなかった。
タクシーに乗るために到着出口を出た私たちは、まずそこで驚かされた。
真夜中だというのに、沢山の人が空港の出口一杯にあふれているのだ。
全員が誰かを迎えに来ているとは思えない。夕涼みにでも来ているのか、それとも外国人を見に来ているのか、目的はよくわからないが、こんな遅い時間に、大人も子供も出口付近に群がり、ワイワイと大声でしゃべっている。犬もうろうろしている。
そんな人ごみをかき分けながら、私たちはタクシー乗り場へ向かった。
正規のタクシー乗り場へ行くまでに、「タクシー？」と何人もの客引きから声をかけられる。個人タクシーと言うものだが、そんなタクシーに乗ると、どれだけタクシー料金を請求されるか分からないし、最悪な場合は、目的地に到着しない可能性もある。
とにかく、ものすごい人ごみと騒音の中を、私たちは荷物を抱えてひたすら正規のタクシー乗り場まで進んだ。
通常、プーナまではアンバサドルという、どっしりとした丸みのあるアンティーク風の英国タクシーが往復している。
私たちもその一つに乗り込み、プーナまでの料金を車中で交渉し、やっとボンベイの空港を出発した。
インドに降り立って、初めて一息ついた瞬間だった。

長旅で疲れていた私は、きっとタクシーの中で眠ってしまうだろうと思ったが、インドのタクシーの中で眠れるものではなかった。
乗ったタクシーの座席は硬く、あちらこちらが切れ、剥がれ、スイスから来たばかりの私にはショックの始まりだった。
それだけではない。窓の外に見えるインドの街は不思議さに溢れ、寝てなどいられないのだ。わたしの神経はピンと張り、目は見開いていた。
私たちが乗ったタクシーは空港を迂回しながら町の方角へ向かい、次第にボンベイの中心地へ入っていった。
薄暗い空港周辺と違い、街の中心地はネオンでギラギラに光り輝いていた。
ホテルの建物の飾り、店の飾り、寺院の飾り、出来る限りの場所に豆電球が飾られ、それが夜の町を昼間のように照らし出しているのだ。
真夜中だが、ものすごい数のインド人やリキショー（三輪車のタクシー）で道は混雑し、そこに殆ど雑音のような音楽がガンガンと鳴り響いて、「眠らない町」が息づいていた。
そんな街の中を、私たちを乗せたタクシーは海を右に見ながらゆっくりと進んで行った。
私たちはしばらく市内を走っていたが、その内、静かな眠った町をいくつも通り過ぎるようになった。
眠った町のメイン通りを通りながら、私は不思議なものを見始めた。
ドアを閉め切った家や店の前に荷台のようなものが停めてあり、その上に、ぼろ切れをかぶせた何かがゴロンと転がっているのである。同じものが道の両端にずっと続いていた。

とても不思議だった。何かのおまじないなのか？

正体が知りたくて、タクシーの窓の外に目を凝らしていると、

「ああ、あれはね、人が眠っているんだよ。家の中よりも外の方が涼しいからね。蚊に刺されないようにああやって布切れを頭からかぶっているんだ。僕も、初めてインドを旅行した時は、あんな風にして道ばたに寝たことがあるよ」

と、ジョン・クロードが私に説明してくれた。

私の目は更に外の暗闇に釘付けになった。

ボンベイの町を通り過ぎると、やがて標高600mのプーナを目指してタクシーは山を登り始める。

道路の端に立つ街灯は弱々しくオレンジ色を発する電球で、数メートル先はもうはっきり見えない。

道は未舗装で、道路の端には車止めもない。そのまま崖っぷち、という所も少なくなかった。道はジグザグに続き、そんな道をタクシーの運転手はかなり荒っぽい運転で進んでいった。

ボンベイとプーナ間の道路では車の事故が非常に多いということを私はジョン・クロードから聞いていたが、実際に自分でその道を通ってみて納得できた。

山を登り続けた私たちのタクシーは、やがて開けた平野の横を走っていた。

明け方だったが、外はまだ薄暗く、朝もやが濃くかかっていた。それだけで神秘的なのだ。そんな風景をタクシーの中からボーッと見ていた私は、道路からさほど離れていない平野の中に、なにやら人がうずくまっているのを見つけた。

それも、一人、二人ではなく、かなりの人数が、あちらこちらに散らばりながら表情のない顔でうずくまっている。

中には、小さな空き缶を前にして座り込んでいる人も幾人かいた。

「ねえ、ねえ、こんな早朝から平野に人が集まって座っているけど、なにをしているの・・・」

私は外を見ながらジョン・クロードに尋ねた。

「ああ、あれはね、オープントイレだよ」

「オープントイレ・・・？」

インドの田舎にはトイレのない家が多く、そんな家に住んでいる人たちは、朝起きると平野へ出て行き、そこで用を足すらしい。

大にしても、小にしても、日中の太陽の熱で全てカラカラに乾燥してしまうので、反って清潔だという。

トイレットペーパーを使う人などおらず、空き缶に水を入れて持参し、それでお尻などを洗うのだそうだ。

この辺りから、少しずつ私の胸が騒ぎ始めていた。

山を越えた私たちのタクシーは、朝陽の中、いくつもの貧しい町並みを通過し始めていた。ある町に架かっている大きな橋を渡っている時である。

橋のたもとや欄干の根元に、木とぼろ布で作られた祠（ほくら）のようなものが並んでいるのを私は目にした。少々大きめの犬小屋のようだ。

旅の疲れか、私の思考力はかなり落ちていたが、そんな頭で、これは何だろうと見てみると、その小さな祠の入り口の前で、若い女性が地面に座り込んで小さな赤ん坊をあやして

いた。

別の祠の前では、女性が竹の箒で地面を掃除している。

「はっ！、これは祠じゃなくて、この人達の家なんだ！」

私は急に理解し、そしてショックを受けた。

彼女達が着ているサリーや子供達が着ている服は、泥色でぼろぼろだった。

そして祠のように見えた彼らの家は、正に泥で固められたもので、ヨーロッパでは犬でもこんな小屋に住まないだろう。

そんながれきの積み重ねの中に、彼らは生活している。これが、この人たちの家なのだ。私たちが家の玄関先を掃除するように、がれきの積み重ねに住んでいる女性も、その入り口前を奇麗に掃除している。

そして、この環境の中で赤ちゃんを産み、育てている。そんな若いお母さんも、小さな赤ちゃんも、泥の中に座りながら笑顔で笑っていた。

そこには、彼らの人生があった。

それを見た瞬間、私はドーンッと身体の中を突き抜けるようなカルチャーショックを受けた。初めてのセンセーションに私は驚いた。

胸がわなわなと震え、不安や恐怖が覆い被さり、身体も小刻みに震えて虚脱した状態になってしまった。

カルチャーショックという言葉は以前聞いたことはあったが、それを自分で受けることになろうとは思ひもしなかった。

こんなに貧しい人を見ているのに、自分は何も出来ない。

同じ人間なのに、金持ちと金のまったくない人たちの、ものすごい差。

この現実が、今、確かに起こっているのだと言う、信じがたい、真実。

それを見ている私は、決して金持ちではないが、何不自由なく暮らしている。

こんなことがあって、いいのか？ あまりにも不公平ではないか？

私はタクシーの座席に身を沈めながら初めて経験する胸の震えに耐えていた。

そんな私の様子に気がついたのだろう、ジョン・クロードがゆっくりとある話をしてくれた。

インドでは、人のカルマ（因果）が深く信じられており、現世を真面目に生きる事によって、来世は必ず現世よりも良い状況の中に生まれてくる、と考えられているそうだ。

今は貧しくても、汚くしていても、来世は今よりも必ず良い生活が送れる、とみんな信じており、ぼろ切れの家に住もうが、辛かろうが、それで悲観的になる人は少ないという。

みんな、来世を信じて楽観的に生きているのだ。

私が見た、幼い赤ちゃんをあやしている若い母親の笑顔は、その辺りから来ているのだろうか。

ジョン・クロードの話を聞いて、私の気持ちは少し落ち着いたが、消化不良のような重い気分はそれから数日続いた。

プーナの街についてこう書かれている。

「2010年の都市的地域の人口は493万人であり、世界第60位、同国では第8位である。海拔600メートルの高原にあるため、大都市の富裕層の避暑地として発達した。金融と経済の中心であるムンバイの南170kmに位置し、インド国内の各主要都市と空路・鉄道・陸路で結ばれている。町の40%が緑に覆われ、インドでもっとも緑の多い街の一つであり、インドで最も安全な都市とも言われている」

私たちが向かった郊外の瞑想センターのある地域にも、古いが大きな屋敷が建ち並び、広

い庭には大小の木々が茂って静かな雰囲気を漂わせていた。

タクシーでの長い旅を終えてプーナに到着した私たちは、予約をしていた小綺麗なホテルの1室に落ち着いた。

インドの安宿ではベッドや部屋の中にゴキブリや蚤を見つける可能性が大きく、またバスルームに水が出ないことも普通なので、初めてインドを訪問する私の為もあり、ジョン・クロードがヨーロッパ水準のホテルを予約してくれていた。

私たちは毎日、ホテルからリキショーを使ってプーナのOsho瞑想センターに通った。

Osho瞑想センターでは各種の瞑想が出来ることは勿論、マッサージやセラピスト、太極拳、ヨガ等の取得コースもあり、世界各国から人々が集まって来っていた。

センターには、衛生管理が行き届いたレストランやカフェテリアがあり、ブックショップ、ブティック、診療所なども揃っており、一つの小さなビレッジのようであった。

ジュリア・ロバーツ主演の映画「Eat, Pray, Love」に出てくるインドのアシュラムよりも、ずっとモダンで大きかった。

センター内で安心して食事が出来ることもあり、私たちは1日のほとんどを、この木陰の多い、静かな雰囲気のセンターで過ごした。

朝一番の瞑想をした後、レストランで朝食をとり、それから別の瞑想をしてもいいし、木陰で本を読んでもいい。ここでは全てが自由であった。

こうしなければいけない、という決められたルールは一切ないのだ。

この瞑想センターのインド人マスターOshoは、夜の講話の時にジョークを沢山盛り込み、ウトウトし始める人たちを笑いで目覚めさせるというお茶目な所があった。

外見的にも内面的にも、大変に魅力的で人を引きつけるマスターである。

インド滞在1週間後には私の受けたカルチャーショックもすっかり抜け、インドの異国文化を楽しむ余裕が出来てきた。

工事現場で砕いた石などを頭に乗せて運んでいるインド人女性達は、そんな場でもサリーを身につけ、耳にはピアス、腕にはジャラジャラと安物だが沢山のブレスレットをして、埃にまみれながらも、本当に女性的であった。

頭に物を乗せて歩く女性達は、歩く姿が本当に美しい。インド女性、アフリカ女性、タイ女性、・・・。

彼女達は、頭の上の物が落ちないように、頭は動かさず腰で歩く。

ファッションモデル達がキャッツウオークをするような姿とでもいおうか、それはエレガントな動きである。

プーナの郊外からリキショーで20分ほど走ったところに、エムジーロードという大きな街がある。

街の道路は、普通車、リキショー、物売りの荷台、バイク、自転車、そして牛で埋め尽くされ、そんな混雑した道路を横断しようとする人達も沢山いる。

初めて見ると、ものすごいカオスである。

それでも、インド人達はのんびりしている。ヒステリックになる人は、先ずいない。

渋滞している車の間に別の車が入り込んできても、「こらっ！」と怒る人もいなければ、神経質な態度を示す人もいない。

反って、見ているこちらの方が、ハラハラ、ドキドキ、カツンと頭に来たりする。

一つのスクーターに家族が3人から4人一緒に乗っているのは当たり前姿だ。

座席にお父さんが座り、その前に小さな息子、お父さんの後ろに小さな娘、そして最後に奥さんが座っている。その中の誰一人としてヘルメットを被っている人はいない。そんな

バイクが渋滞の道路を何台も走っている。

牛はインドでは神聖な動物とされているので、人々は決してたたいたり蹴ったりはしない。牛が車道に出てきて歩いていると、牛を追い出す代わりに自動車やバイクの方が避けて走る。そう言う時にも、誰一人として牛に罵声を飛ばす人はいない。

せかせかと歩く日常に慣れている私たちには、インド人は呆れるほどのんびりしている。

ただし、道路でクラクションを鳴らすインド人は非常に多い。

「ほら、ほら、気をつけろよ!」「そこ、どいて!」「俺様が通るよ!」

というのを全てクラクションでやるので、インドの道路はうるさい。

しかし、インドは癖になる所だ。

インド人には失礼だが、インドの町はどこもゴミ箱のように汚い。しかし、そんな中を色鮮やかなサリーが行き交い、白いターバンの男性が立派なひげを蓄えて歩き、赤や青の原色に塗られた寺院には生花が飾られ線香の煙が漂っている。本当に魅力的である。

特に、朝もやの中に見るインドは神秘的としか言いようがない。

瞑想が生活の中に染み込んでいるインドならではの景色だ。

プーナは標高600mの所にあるので、空気がいい事で知られている。それを求めてプーナ郊外には沢山のお金持ちが大きな別荘を建てて住んでいる。

昔は森だったと言う瞑想センターの回りにも、そう言った塀の高い大きな別荘がいくつか建っているが、鬱蒼とした中、いつも静かなたたずまいを見せていた。

森の名残だろうか、そんな別荘の間に延びる道の両端に、樹齢何百年という大きな木々が立ち並んでいる。その木々からは太い幹がいくつも道路上に張り出していた。

驚いてしまうのは、その張り出した幹から沢山の細い根が、水分を得ようとしているのであろう、まるでカーテンのように地面を目指してぶら下がって伸びていることである。

早朝、この辺りへ散歩に行ったことがあるが、この大きな木々が朝もやの中に白く浮かぶ情景は正に神秘的で、まるで夢の中にいるようだった。

又、戻ってきたいと思わせる魅力が、インドにはある。

ほんの少しだがインドの魅力に触れ、瞑想も満喫した3週間の休暇は、あっという間に過ぎていった。



ジョン・クロードと初めての1年間旅行

3週間のインド旅行から帰って来た私たちは、これからまた会社勤めに力が入ると思っていたところ、反して、二人の中に眠っていた風来坊の根に火がついたようで、再び旅行に飛び立ちたいという気持ちが日増しに大きくなっていった。

会社で貰える短い休暇ではなく、長期の旅行である。

若い頃から旅行に飛び回っているジョン・クロードは勿論、23歳で日本を出てからいろんな国に住んできた私も、子供を持ってない身になったからでもあるが、ファミリーライフがそれほど重要とは思わなくなっていた。毎日、平和であればそれで良かった。

短い人生、生きている間に精一杯楽しみたい、そこに生きる意味がある、二人ともそう思っている。

そんな二人なので、同じ会社に何十年も勤めて家を建てることや昇進することにはまったく願望がないのである。

働いて資金が溜まると、旅行に出かけたくなる、いろんな経験をしてみたくなる。歳を取ったときのこと等、考えたこともない。

後1、2年頑張ってみよう。そしてまとまったお金が貯まったら期限なしの旅行に出よう。まもなくジョン・クロードがそう提案し、私は直ぐに賛成した。

住み始めたスイスでは、馴染めない習慣がいくつかあった。

1980年代、スイス人は簡単に外国人に心を開こうとしなかった。特に中年から高年の人たちが外国人を忌み嫌った人は多い。

その昔、スイスアルプスの山奥に住む村人は、他県からやってきたスイス人を嫌い、いじめたと言う。外国人ならなおさらだろう。

私がスイス人に嫌がらせを受けた経験はほとんどないが、一度だけ、びっくりしたことがある。

チューリッヒ市内の交差点で私は信号が青になるのを待っていた。お昼を過ぎた頃で数名が私と同じように待っていた。

信号が黄から青に変わり、私はみんなと一緒に横断歩道を渡り始めた。向こう側からも数人が渡って来たが、私の真向かいに中年女性に腕を支えてもらいながらゆっくりと歩いてくる身綺麗にした高齢女性がいた。

私はその女性に接触しないようにと気をつけながら行き過ぎようとしたのだが、その瞬間、私は横腹をキューっつつねられて、飛び上がるほど驚いた。

痛みはさほどなかったが、日中の路上で誰かにつねられたことがとてもショックだった。

えっ！何だったのだ今のは？

直ぐに立ち止まって回りを振り返ってみると、私の目に入ったのは、何もなかったようにゆっくりと歩き去っていく高齢女性の後ろ姿だった。

私の横腹をつねる事が出来たのはこの高齢女性しかいない。それが更にショックだった。

アジア系の顔をした私は、このか弱そうな高齢女性にも嫌われてしまったようだ。

会社で知り合ったメキシコ人やラテン系の、特に女性達は、スイス人と結婚しているにも関わらず、外で何度も何度もいじわるを受けたと言っていた。

最初に住んでいたアパートで、夜の10時過ぎにシャワーを浴びると苦情の電話が鳴った。夜の10時はまだ遅い時間ではない。だが、10時を5分でも過ぎると途端に電話が鳴る。注意をしていたのだが、ある週末、私たちは仲間内のパーティーから帰り、夜10時過ぎにシャワーを浴びることになった。

週末だし、サッと短く浴びれば大丈夫だろうと思い、先ずジョン・クロードがシャワーを浴びた。

途端に、玄関のベルが激しくなった。

びっくりしてドアを開けてみると、20代後半と見える若いカップルが怒った顔で立っていた。電話で苦情を言い続けてきたが、今回はとうとう怒りが爆発して我がアパートに駆けつけて来た、と言う風体だ。

私の顔を見て、この外国人が、とでも思ったのだろうか、若いカップルは更に怒りを込めた声で私たちに怒鳴りかかって来た。

私たちが驚いたのは、このカップルがあまりにも若かったことだ。中年や高年のスイス人が苦情を言うのには慣れていたが、こんなに若いカップルが、夜10時過ぎにシャワーを浴びたことでこんなに怒鳴ってくるのが信じられなかった。

そんなスイス人も1990年代からずいぶんと変わった。パーソナルコンピューターが普及し、世界への視野が広がったためだろう、外国人への理解と寛容がずいぶんと大きくなった。

現在では、いろんな国の人たちが混在するインターナショナルの国となっている。

「どの国も住めば都」になる私とジョン・クロードには、コンピューターの普及は素晴らしい革命である。

1989年の春、私たちはいよいよ長期旅行へ出発する計画を組んだ。出発は半年後の秋と決まった。二人で初めて一緒にする大きな旅行である。

目的地は、先ずインド。ひょっとしたら日本へ寄るかもしれない、そんなアバウトな計画だった。

スイスでは、会社の辞表やアパートの解約は3ヶ月前に出す約束になっている。
私たちは旅行出発3ヶ月前の6月、会社に辞表を出し、アパート会社に解約の連絡を入れた。
私たちが持っていた古い家具等は、ちょうど長期旅行から帰って来た友達に安く譲ることになった。その他の小物はフリーマーケットでタダ同然で売り払った。

自分の誕生日や会社を辞職する時、自分でケーキなどを用意して同僚達に振る舞うのがスイススタイルである。日本のように友達や同僚達が気を利かして祝ってくれる事はない。
私は2年間働いた日系の証券会社を辞める時、ベジタリアン・レストランのシェフをしている友達にベジタリアン・フードのケータリングをお願いした。
会社勤め最終日の午後4時頃、肉なし魚なしのベジタリアン・フードが、どんどん会社内に届けられた。他の部署も入れた同僚達は全員で70人余いたのだろうか。私は自分でも寿司を作り、サングリアの飲み物を用意した。
通常、誕生日や辞職の場合は赤と白のワインに簡単なつまみを用意する人が多いのだが、私は色とりどりのベジタリアン・フードを社内に運ばせて、同僚達を驚かせた。
どうせ何かをするなら、面白い方がいい。
金曜日の就業間近でもあり、早速、サングリアで顔を赤くしている人も出てきて、私のバイバイパーティーは大盛況だった。
同じ日、ジョン・クロードも彼の会社で私と同じようにバイバイパーティーを開いたので、ケータリングをやってくれた友達は、忙しかったはずだ。
1989年9月、私たちは1年間のオープンチケットを購入し、インドへ旅立った。
二人は大きめなリュックサック式の荷物を背負い、ジョン・クロードは片手にギターを抱えていた。

インドの火葬

滞在許可6ヶ月のビザを手にして、私たちはムンバイ空港に降り立った。

今回は、ムンバイ空港から直ぐにタクシーでブンへ向かったが、この時は、近くにある5星のホテル「リーラパレス・ケンピンスキー」へ向かうことにした。

豪華なこのホテルで一晩過ごし、日が明けてから出発しようと思ったのである。

部屋を取るのではなく、ロビーにあるソファでゆっくりする魂胆だ。

ホテルにはインド料理は勿論、日本料理、中国料理等のレストランが揃っているので便利だと、以前リーラパレス・ケンピンスキーで一晩過ごした友達から聞いていた。

リキショーに乗って、私たちがホテルの前に着くと、王朝時代の服装をしたドアマンが優雅な動きでドアを開いてくれた。

中に入ると、その豪華さに一瞬目がくらんだ。まるでインドのおとぎ話の中に出てくる宮殿のようだ。

私とジョン・クロードはレセプションを横に見ながら、奥にある豪華なソファへと真っ直ぐ向かった。荷物を足元に置くと、柔らかいソファに身を預けて、ホッと一息ついた。私たちが着いたのは真夜中である。ロビーを歩いている客は少ないが、それでも時々、裕福なインド人男性や女性達が目の前を通り過ぎて行く。

男性も女性もうっとりするほど彫りの深い美しい顔立ちをし、女性達が着ている豪華なサリーは目が覚めるようであった。

私たちは、ソファに座りながらインドのお茶を頼んでみた。

制服に身を包み白い手袋をつけたウェイターが、うやうやしく紅茶を運んで来てくれる。カップも素晴らしいが、シーバーや砂糖壺が銀色で、インドの古き良き時代を垣間見る気分だ。

ただし、トイレだけは駄目だった。

5星のホテルなのに、トイレにアブラムシでも出るのか、ナフタリンの固まりがあちらこちらに置かれ、その臭いが鼻を突いた。今でもナフタリンの臭いを嗅ぐと、インドを思い出す。

私たちは座り心地のいいソファで仮眠をし、日が昇った頃にアンバサダールのタクシーに乗りブンへ向かった。

初めてインドを訪れたときはホテルに滞在した私とジョン・クロードだが、長期滞在のこの時は瞑想センターから少し離れた場所にあるアパートを借りた。壁も床もセメントがむき出しの、綺麗とはいえないアパートだったが、お湯の出るバスルームが整っているのが気に入った。

インドのバスルームは広々と作られているので気持ちがいい。広さは3畳ほどで、壁はタイルが貼られているが、床はセメント張り。そこにシャワーがあり、トイレが設置されている。

シャワーの回りにカーテンなどなく、シャワーノズルの直ぐ近くにトイレが取り付けられているので、シャワーを浴びると床は勿論、トイレも水浸しになる。

そのため、シャワーを浴びた後は自分でスクイズを使い、水を排水溝に流して綺麗にするようになっている。

これで数分後には床もトイレも乾燥し、足を濡らすことなくトイレに行ける按配だ。

私はインドのアパートをいくつか見てきたが、全てこのシステムだった。

だが、この広いオープンシャワーがまたいいのである。シャワーを浴びながら踊れるくら

いで、いくら泡を飛ばしても、いくら水しぶきを上げて大丈夫。後は、スクイーズが待っている。

インドのシャワーシステムに慣れてしまうと、ヨーロッパの小さなシャワーブースでシャワーを浴びるのが窮屈でしょうがない。

インド滞在中、私は一人のインド人テーラーを見つけた。

ヨーロッパにはない色柄の高級な絹や綿がインドでは安く手に入るの、私はつい買ってしまうのだが、それを自分で仕立てるのは大変である。

見つけたこのインド人テーラーは40代の男性で、小さな店を持っていた。

1階に3畳ほどの板間があり、そこで彼は客と接待し、生地を切る。梯子を登った2階で、若い男性（男の子？）がミシンを踏んでいた。窓も何もない場所だ。

服のデザインを紙に書いて持って行くと、彼は私の身体のサイズを測り、何メートルの生地が必要だ、と教えてくれる。生地を買って持って行くと、2週間後には、デザインと全く同じ服が出来上がっていた。ブラウス、ズボン、ジャケット、何でも造った。

店の隅で試着し、「ここが小さい」と言えば、そこにチャックを付け足し、「大きすぎる」と言えば、ぴったりの大きさに造り直してくれた。

インド人テーラーは服のコピーを造るのがうまいが、私の見つけた無口で笑顔のテーラーは特別だった。その彼は、数年前に亡くなったと聞いた。

1990年1月、私たちが行っている瞑想センターのスピリチュアルマスター**Osho**が亡くなった。

彼の葬儀に参加した私は、初めてインドの火葬を目にした。

母が亡くなった時に日本の火葬場へは行ったが、インドのそれは雰囲気が随分と違っていた。

火葬場へ行く時間になり、木の板に載せられた**Osho**が頭から足元まで色とりどりの花で飾られて出て来た。

横たわっている**Osho**の顔は、まるで寝ているようだった。

10名ほどの男性が花で埋め尽くされた木の板を支え上げ、長い道のりを火葬場まで歩き始めた。その後ろを親族や友人達が歩き、私とジョン・クロードもそれに続いた。

インドの火葬場は川の横にあり、そこには大きなセメントの床が広がっている。**Osho**を乗せた木板はその床に直接置かれ、その回りを、親族が薪で囲み始めた。

丁寧に、丁寧に、薪を遺体の回りに積み上げて行く様は、神聖な儀式のようである。

最後に顔の上にも薪が置かれると、薪の高さは2m近くにもなっていた。

燃えやすいように薪に少し油をたらし、親族の一人が火をつけた。

下の方からメラメラと燃え始めた火は、黒い煙を出しながら、どんどんと上に燃え広がって行く。そしてとうとう積み上げた薪全体に火が回ると、ものすごい炎の固まりとなって燃え上がった。

人の火葬を見ているとは信じがたいほど、炎は大きく美しかった。完璧な浄化を目の前にして、悲しみはその場から消えていた。

私たちは、全ての薪が完全に灰になる朝方まで火葬場に残っていた。

陽がうっすらと昇り始めた頃、夜中燃え上がる炎を見ていた私も燃え尽きていた。

私はジョン・クロードと一緒に一旦アパートへ戻り、数時間眠った後、瞑想センターに向かってみた。センター内のオフィスでボランティアとして働いていた私は、**Osho**が亡くなった今、瞑想センターはどんな状態だろうと心配していた。みんな泣き崩れているのだ

ろうか。

ところがそんな心配は無用だった。みんな普段通りに仕事をし、生活をしているのだ。私は感動してしまった。

Osho の教えはみんなの心の中に生きている。

翌日は火葬場から灰を運んでくるので、**Osho** 瞑想センター挙げてのお祭りだった。

バラの花びらが道を埋め尽くし、笛や太鼓、ギターの音がセンター中に鳴り響き、そのリズムに乗って、瞑想センターに来ていた何百人という人びとが笑顔で踊り、歌い、**Osho** の旅立ちを祝った。素晴らしい、素晴らしい、セレブレーションだった。

私も死んだ時には、こんな風に祝ってもらえると幸せだ。



シンガポールでシャル・ウイ・ダンス！

1990年3月、インドのビザが間もなく切れることになり、私たちは以前考えていた通り、日本へ行くことに決めた。

同じ時期、ジョン・クロードがオーストラリア在住のフランス人と知り合いになり、オーストラリアの魅力を大いに知ることになった私たちは、急遽、日本訪問の後にオーストラリアの旅を付け加えることにした。

日本に1ヶ月滞在し、広大なオーストラリアは半年ほどかけて旅行する計画だ。

旅行に行くとなるといろんな情報が入ってくるもので、私たちはシドニーの街の一角にセコンドハンドの車を売っている通りがあることを知った。キャンピングカーも出ているらしい。

オーストラリアの広大な自然の中を旅行するにはキャンピングカーが一番だ。はっきりした住所は分からなかったが、シドニーに到着次第、直ぐにこの通りへ行ってみることにした。

Osho 瞑想センターの近くにインド人が経営している旅行会社があり、オーナーと親しくなっていた私たちは、シンガポール経由成田行きの切符をそこで購入した。

オーストラリア往復の切符はシンガポールで購入した方がいいと言われ、彼の言うことを聞くことにする。

日本へ行くには必ずシンガポールで1泊することになっているので、どうせ通過するならば、シンガポールにも1週間滞在することにした。

4月の初旬、私たちはシンガポールのチャンギ国際空港に降り立った。

以前はチャイナタウンにある安宿を空港で予約して行った私だが、今回は二人で少しましなホテルに宿泊したかった。

タクシーで街の中へ入っていった私たちは、まもなくホテル「ウェスティンプラザ」を目にした。豪華な玄関の奥に広いレセプションが見え、初めての高級ホテルにドギマギした

二人だが、一旦入ってみるとスタッフは非常に親切で、気軽に滞在出来るホテルだった。

シンガポール滞在中に私は40歳の誕生日を迎えることになった。何か誕生日祝いをしたいと思いながら街の中を歩いていると、貸衣装屋が並んでいる通りに出くわした。

「そうだ、ドレスを借りて素敵なレストランでお祝いをしようじゃないか」

「ああ、それはいい考えだ」

私はジョン・クロードのアイデアに飛びついた。

一件ずつ貸衣装屋を覗き歩いていると、古着を貸してくれる店と新品を貸してくれる店があることを知った。私たちは迷うことなく新品の衣装を貸してくれる店に入って行った。私は、黒色の、裾がふんわりと床まで届くお姫様ドレスを借り、ジョン・クロードはタキシードジャケットを借りることにした。

ズボンの貸しはないと言われたので、私たちはそこを出て、別のブティックで彼のズボンとシャツと蝶ネクタイ、そして私のハイヒールとクラッチバッグを買った。

お祝いをするレストランは、シンガポール高層ビルの最上階にある The Pinnacle Restaurantだ。特別な夜になるからと、ホテルのコンシェルジュが勧めてくれた。

誕生日の夜、盛装した私たちはホテルのスタッフに笑顔で送られながら、迎えにきたタクシーに乗り込み、予約をしたレストランへ向かった。フワフワのドレスを着てタクシーに座っていると、なんだか二人で夜の結婚式に出るようだなと思えて面白かった。

高層ビルの前でタクシーを降りた私たちは、入り口の赤いカーペットに導かれながらエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが停まってドアが開くと、そこが最上階のレストランだった。

広いレストランはカクテルバーのような雰囲気、光が落とされ、高級感があふれている。受付の男性に名前を告げると、私たちは窓際の席に案内された。

席の横は足元まで総ガラスで、ナイトライトに輝くシンガポールの町が目の下に広がっていた。

こんなに盛装をしたのも、こんな高級レストランに来たのも初めての二人は、お互いの顔を見ては、クッ、クッ、クッと笑いが止まらなかった。

突然、私たちの目の前に、シャンペンが入ったグラスがふたつ並べられた。

注文はしなかったのに驚いていると、

「私はレストランの給仕長です。今晚はお二人が一番素敵なカップルなので、これはマネージャーからのオファーです」

と笑顔の男性が言った。

「オオ、サンキュー！」

そのシャンペンの美味しかった事。私たちはその後の食事にも同じシャンペンを選んだ。大きなレストランを眺めてみると、真ん中はダンスホールになっているようだ。テーブルに座っている客は結構いるのだが、踊っている人は誰もいない。

「シャル・ウィ・ダンス？」

ジョン・クロードが私に腕を差し出した。

私は彼の腕をとり、二人でダンスホールの中へ入っていった。

BGMは常に流れている。その音楽に合わせて私たちは踊り、静かに流れていくこの特別な宵を心の底から楽しんだ。

「ハッピーバースデー、きよみ！」

日本、父と温泉に行く

シンガポールのホテル・ウェスティンプラザで1週間を満喫した私たちは、次の目的地、日本へ向けて出発した。

1980年に一度スペインから帰国した私は、10年ぶりの日本訪問になる。

各国を旅行しているジョン・クロードには、初めての日本だ。

日本の桜は素晴らしいから、と4月に日本へ行く案を出したのは私である。

成田空港に到着した私たちは、バスと電車を乗り継いで父と弟家族が住む京都の八幡市へ向かった。

一軒家を買ったと連絡が来ていたので、どんな家だろうと思っていたら、一応、瓦屋根のついた一軒家だが、その小さなサイズに驚いた。なんだか、おもちゃのような家だった。玄関に入って、つまずいたら居間にいた、という感じである。

ヨーロッパ人は体格がいいからか、ヨーロッパの家は玄関も部屋も広い間取りになっている。そういう広い家に住み始めると、日本の家が小さく見えてしまう。ジョン・クロードも日本の家の狭さには驚いた様子だった。

小さな家の急な階段を上った2階の一部屋に父が住んでいた。母の仏壇もあり、自分の部屋は自分で掃除をしていると、押し入れに入った掃除機まで見せてくれたが、その部屋を父は私たちの為にあけてくれた。

俺は同じ2階にある孫達の部屋で寝るから大丈夫だと言って。そして、私たちがやってくると知り、新しい布団一式を用意してくれていた。父の気持ちは本当に嬉しかったが、この家にはほんの1週間しか滞在しないと分かっていた私は、申し訳ない気持ちになった。嬉しかったのは、父が初めて会ったジョン・クロードを大変気に入ってくれたことだ。初めてアメリカへ経つときに紹介しようと思って連れて行ったペーターに会うことを拒んだ父が、ジョン・クロードにはそれは親しく上機嫌で接している。ジョン・クロードも、そんな父を相手に手振り身振りで話をしていた。

10年ぶりに見る弟の息子達も大きくなり、家族全員で私たちを歓迎してくれたが、面白かったのは、弟家族が、私とジョン・クロードをほとんど毎晩違った銭湯に連れて行ってくれたことだ。ジョン・クロードは父や弟と一緒に入る初めての銭湯を面白がり、私は義妹と背中越しの流し合いをしては、ちりちりと肌に熱いお湯につかってホッとした。正に日本独特、裸の付き合いである。

日中は観光、夜は宴会のような家族団らんの1週間が過ぎた頃、そろそろ二人で日本散策に出かける時だと思った私とジョン・クロードは、大分の別府温泉に行く計画を立てた。大分には母方の祖父母がいた所で、別府温泉にも家族で良く行っていた。

「お父さんも誘ってみようか」

久しぶりの別府温泉を父が喜ぶかもしれないと思った私は、ジョン・クロードの意見を求めてみた。ジョン・クロードは直ぐに賛成してくれた。

「お父さん！、私たちと一緒に別府温泉に行く？」

「そうやなあ・・・、一緒に行こうか！」

一緒に行くという嬉しそうな父の返事を聞いて、私も嬉しくなった。

翌日、別府温泉に向かうため、3人は連れ立って最寄りの駅へ向かった。

電車で別府駅まで行き、そこで適当な温泉宿を見つけた私たちは、駅前のタクシーに乗って宿に向かった。

私は静かな宿を選んだのだが、父は、もう少し華やかな雰囲気のある、宿の浴衣を着て下

駄を履き、そぞろ歩きの出来る町の中の宿が良かったようだ。

昔、家族でしたように、3人でそぞろ歩きがしたかったのかもしれない。

浴衣ではないが、宿の外にも面白い温泉があるというので、私は父を誘って歩いていくことにした。

一つは混浴だった。滝湯や湯の小川があり、他に温泉客がいないのをいい事に、私たち3人はそこら中を歩き回った。

温泉から出て脱衣所にいると、父が私にそつと言った。

「おまえ、前くらい、タオルで隠しなさいよ」

「えっ！」

唐突な父の言葉に私は笑ってしまったが、そうか、ちょっと堂々と歩きすぎたかな、と反省した。父親でも大人になった娘の裸を見るのは恥ずかしいのかもしれない。

ヨーロッパの温泉では、大人も子供も（女も男も）水着を着て一緒に入る。

裸で入るのは日本だけの様な気がするが、ただ、あまり恥じらいのない、私のような行動はいけなかったようだ。

温泉を出た後、外のレストランで食事をしていると、また父が私にささやいた。

「おまえ、化粧はしないのか？」

「ん？」

化粧と言う言葉を、私は久しぶりに聞いた。そうかあ、日本女性は必ずお化粧をするのか。男性の父が言うくらいだから、日本で女性が化粧をしないのは失礼になるのだろうか。

私は、日本を出てから化粧は全くしなくなっていた。

アメリカでもヨーロッパでも、若い人たちで化粧をしている人は、先ずいない。

特に、肌色を隠すファンデーションは、かなりの歳にならないと女性でも付けない。

それに感化された私も化粧をしなくなったが、父の言葉で、日本と外国の習慣の違いを改めて認識させられた。

「俺は明日、ひとりで家に帰るから、お前達は二人でゆっくりしてきたらいい」

宿泊3日目に、父が言った。

一緒に温泉巡りをし、楽しく食事をして3人で和気あいあいに過ごしているときだった。

きっと、ずっと一緒では邪魔になるだろうと父は気を使ったのだろう。

もう少し一緒にいたいな、と思ったのは私の方である。

翌日、私たちは父を別府の駅まで送っていった。

父の顔は清々しかった。温泉巡りに誘って良かった、と私はつくづく思った。

ここでいいから、と父が言うので、私たちは改札口で別れる事にした。

これでお別れである。次はいつ会えるのか誰にも分からない。

「気をつけて帰ってね」

「ああ、心配ない。・・・あのね、彼は本当にいい人だよ。大事にするんだよ。いつまでも仲良くしなさいよ」

「うん、分かった。ありがとう」

駅の階段を上っていく父を見送っていると、涙が出て来た。

ジョン・クロードが優しく私の肩を抱いてくれた。

日本、クレジットカードが使えない

父と別れた後、私たちは別府市でレンタカーをし、阿蘇山を超えようと試みたが、霧のため断念。私たちは諦めて引き返し、日本の田園風景の中を走り回った。田んぼの緑がとても美しかった。

ただ、天気だけは予想外に悪かった。

桜が綺麗だからとやってきた4月なのに、私たちは殆ど毎日、雨に降られた。途中の小さな町で見つけたガタピシと引き戸を開けて入る小さな店で、私たちは店番のおばあさんからポンチョと雨靴を買った。

この時に日本で撮った私たちの写真は、ほとんどが傘をさしている。

そんな雨の中でも、私たちは新幹線を使って東京に住む友達を訪ね、宇都宮に住んでいる幼なじみを訪ねて、日本を満喫した。

一つだけ残念だったのは、私たちのクレジットカードが、ほとんどの場所で使えなかったことだ。

新幹線の、あの高い切符も買えなかったときはがっかりした。

新幹線の窓口では、ジョン・クロードが切れた。

「この時代にクレジットカードが使えないとは、どうなっているんですか？旅行者は多額の現金を持ち歩かないのが普通です。こんなに高い切符をどうしてクレジットカードでは購入出来ないのですか？」

私は、翻訳して窓口の男性に伝えたが、男性はしら一つとした顔で、何も言わない。

それを見たジョン・クロードが怒りだした。私はあわてて、

「ちょっと落ち着いて。窓口の人に言っても、どうしようもないんだから」

「いや、こういう事は、ちゃんと言わないと、改善されないものなんだよ」

窓口の男性は英語が全く理解出来なかったのか、それとも、知らん顔作戦をやり通したのか、みごとに、ジョン・クロードの抗議を無表情、無口で通した。

現金の持ち合わせがなかった二人は、窓口を離れるしかなかった。

ある日、弟の家に滞在させてもらったお礼に、私たちは家族全員をレストランに招待した。総勢11人で、弟達が行きつけの日本レストランに向かったのである。お店は、老舗のようで感じが良かった。

楽しく食べて、飲んで、お会計を支払おうと、クレジットカードを取り出した途端、

「ああ、すんまへん。うちは現金だけにさせてもらってます。カードは使えまへん。」

「えええ・・・？こんなに沢山の金額なのに、カードは使えないんですか？」

「へえ、すんまへん」

「他のお客さん達は、皆さん、いつも沢山の現金を用意されているんですか？」

「へえ・・・」

「・・・・」

「ねえ、龍ちゃん、あなた、現金、持ってる？ 貸して頂戴。後で、返すから」

おごると言っておきながら恥ずかしかったが、私は弟にお金を借りることになってしまった。そんな弟は、他のお客さん同様、沢山の現金を財布に入れていた。

日本訪問2回目のときだが、私たちは弟の一番小さな7歳になる息子を連れて京都へ遊びに行ったことがある。7歳の甥っ子は学校があったのだが、早朝、おじちゃんとおばちゃんと一緒に遊ぶんだと言って私たちの寝床に入ってきて出ようとしないう。言いなだめてい

た両親は根負けし、甥っ子は私たちと出かけることになった。
私たちは現金の持ち合わせがいつものように少なかったが、どこかの銀行でおろせばいいと考えていた。
3人は京都をさんざん歩き回り、お昼も食べて、さあ、帰ろうとなった時、私たちの財布にはほんのわずかしき現金が残っていない事に気がついた。
3人分の帰りの電車賃が出ない。
私は、甥っ子とジョン・クロードを近くの喫茶店に置いて銀行へ走った。
運の悪い事に銀行はちょうど閉まった所だったが、私は慌ててドアの外にある電話で行員を呼び、中へ入れてもらった。
良かった一、と一瞬ホッとしたが、結局、私の持っている外国作成のカードでは現金を引き出す事が出来なかった。私はパスポートも持参していたのだが・・・。
どうしたものかと思案をしながら私は2人を残してきた喫茶店に戻った。
とにかく外に出よう。私はテーブルの上に置かれた伝票の上に現金を乗せ、「お金はテーブルの上に置いてありますから」とヨーロッパ式に喫茶店を出た。
後になってからだが、消費税を足して支払うのだという事を、私は甥っ子から教えられた。
「京都駅まで行って、弟に電話をしよう。それから、どうするかを考えよう」
京都駅までは遠かった。私は通りかかったタクシーを止めた。
「京都駅までお願いします」
タクシーが走り始めると、私は直ぐに口を開いた。
「あの一、すみません。私たち、現金を持っていないのです。銀行で引き出せなくて・・・。
1000円しかないのです、メーターが1000円になったら、そこで降ろしていただけますか？」
「ええっ！お金、ないのですか？ あの一、少々やったら、僕、お貸ししますよ」
「いえいえ、とんでもない。ご親切に、どうもありがとうございます。駅から弟に電話をして、なんとかしますので、ご心配なく。ありがとうございます」
京都の都会の中で、見ず知らずの私たちにお金をお貸ししましょうか、と言ってくださる親切なタクシーの運転手がいる事に、私とジョン・クロードは感動した。
結局、この若い運転手は私たちを京都駅まで送り届けてくれ、「代金はいいですから」と言って走り去った。
私とジョン・クロードは感謝の気持ちを込めて、タクシーが見えなくなるまで見送った。
京都駅に入り電話を探していると、ふと目の前に「外国紙幣を換金します」という張り紙が目に入った。
「あっ、これだー！」
私は2階に駆け上がり、財布に入っていた100スイスフラン（約一万円）を換金して、無事、現金を手にすることができた。
親切なタクシーの運転手さんに出会えたのは嬉しかったが、テクノロジーでは先端を走っている日本で、クレジットカードがこんなにも遅れていることを知った私たちは、少し残念だったのである。
それにしても、日本は本当に平和な国です。

宇都宮に住んでいる幼なじみを訪問した私たちは、シンガポールへ出発する前夜、東京市内のホテルに宿泊した。
日本を出る前にもう一度実家に度寄るかもしれない、と特に父に期待を持たせて出て来た私たちは、それが出来なくて申し訳ないと、ホテルから電話を入れた。

「うん、それはしかたがないな。元気でね。これからもジョン・クロードと仲良くしなさいよ」

また、父から言われてしまった。父はよほどジョン・クロードのことが気に入ったようだ。翌日、シンガポールへ出発する飛行機の時間に合わせて、私たちは早朝の東京駅に向かった。

駅の構内に入った途端、二人は人の洪水に目を丸くした。

「しまったあ！ラッシュアワーがあるのを忘れていた・・・」

突かれるような人ごみにまぎれながら、私たちは一応ホームに上がったが、どの電車も満員で、私たちの入る余地はない。

やってくる電車は瞬く間に満員になり、いくつかの電車を見送ったが、どの電車も同じ状態だった。

とうとう意を決した二人は、なにがなんでも次の電車に乗る事にした。

その時、二人とも旅行中に買ったキャリーバッグを持ち、そしてジョン・クロードは片手にギター、私はシンガポールで買った電子オルガンを抱えていた。

飛行機の時間さえ迫っていなければ時間を遅らせて電車に乗ったのに、と悔やまれたがしかたがない。通勤族の波に身を任せながら、私たちは電車の中に入ってしまった。

「すみません、すみません」

キャリーバッグと楽器を引っ張りながら、二人はそう言い続けた。

満員電車は本当にギュー、ギュー詰めで、私たちは入り口付近に停まろうと思ったが、入ってくる乗客たちに押されてどンドンと中へ入って行った。

私たちのキャリーバッグが沢山の人の邪魔になっている事は間違いない、だが、誰も何も言わず、顔色さえ変えない。

私たち二人は声も出せず、身動きさえしなかった。

いよいよ私たちが降りる駅に近づいた。

「降りまーす、降りまーす」

再び二人で大きな声を上げ、キャリーバッグを必死で引っばって出口に向かった。

誰かの足を引っかけているに違いない、誰かの足の上を輪が転がったことだろう。

「ごめんなさい、ごめんなさい」と私たちは言い続けた。

電車から転がるように出てきた二人は、やっと一息つきながら、「すごいねー」と顔を見合わせた。電車の混み具合も大変なものだったが、乗客の平静な態度に驚いたのだ。

私たちの荷物で迷惑を被った人は多かっただろうに、誰一人顔色を変える人はいなかったし、文句を言う人もいなかった。

日本人の我慢強さ、親切さ、寛大さには世界中が負けると思う。



オーストラリアの冒険

日本からシンガポールに戻ってきた私たちは、直ぐにオーストラリア往復航空券を手に入れることにした。

以前も滞在したウェスティンプラザホテルに部屋を取った私たちは、そこからほど近い小さな旅行会社に入った。カウンターにいた女性に話をすると、少々無愛想ながらもてきぱきと手配を進め、まもなく私たちは1年間のオープンチケットを手にしていました。

シンガポールの観光は既に済ませている。長居は無用だ。

シンガポール滞在3日後、私たちはオーストラリアへ出発する為、意気揚々とチャンギ空港へ向かった。

「いよいよオーストラリアだ！！」

どんな冒険が待っているのだろう。

空港に到着した二人は躍るような足取りでチェックインカウンターに向かった。

客は少なく、直ぐに私たちの番になった。二人分の荷物をベルトに載せ、航空券とパスポートを提出した。

心は既にオーストラリアだ。

ところが、パスポートをパラパラとめくっていたカウンターの女性が

「オーストラリア行きのビザがパスポートに見当たりませんね。チェックインは出来ませんよ」

と驚く事を言った。

「ビザ・・・？」

「はい、オーストラリアに行くにはビザが必要です」

「ええええええ、知らなかったあ・・・」

私とジョン・クロードは顔を見合わせた。そして、

「航空券を発行してくれた旅行会社の女性も、ビザについては何も言ってくれなかったのですが・・・」

とカウンターの女性にすがりついた。

「・・・ええっと、お二人には、このままチェックインをして、オーストラリアへ飛んでいただいても、私はかまいません。でも、オーストラリアで送り返されますよ」

「・・・・・・・・」

オーストラリアへ飛んでいた二人の心は、一気にしぼんでしまった。

私たちはチェックインカウンターを離れ、すっかり力の抜けた身体をタクシーに放り込み、今、出て来たばかりの町へ引き返した。

オーストラリア大使館を捜し出し、ビザを習得してオーストラリアに飛んだのは、それから1週間後だった。

私たちはようやくオーストラリア大都市の一つ、シドニーに降り立った。

高層ビルが建つシドニーの中心地は大都市の風貌を醸し出しているものの、街のはずれは低いビルや建物が建ち並び、開放的で歩きやすい街だ。

近代的な街角で、アボリジニの男性が裸に白い模様を塗って楽器を演奏していることもあり、オーストラリアのワイルドな雰囲気もそこにあった。

私たちは小さなホテルに部屋を取り、早速、街へ飛び出した。

オーストラリアをキャンピングカーで旅行しようと考えていた私たちは、「セカンドハンドの車が並んでいる」と言う通りを探したかったのだ。

通りの名前が分からないので探すのに苦労したが、通りがかりの人に何度も尋ねながら、とうとうその通りを探し当てた。

辿り着いた通りを見て、私たちはちょっと拍子抜けした。

そこは住宅街の前にある普通の道路だった。売りたい車を持って来た人たちが勝手に路上駐車させているのだ。ただし、売りに出されている車は数十メートル先までずっと並んでいた。

面白いことに、この通りは駐車禁止になっているらしく、たまに交通規制をする巡査が回ってくると、駐車している車が一斉に動きだした。

私たちは目当てのキャンピングカーを探して車の列を見て回ったが、残念なことに適した車は見つからなかった。

気に入るキャンピングカーが見つかるまで、ここで何日も待つわけにはいかない。私たちはキオスクでセカンドハンド関連の新聞を買い、今度はそこからキャンピングカーを探し始めた。

幸いに興味のあるアナウンスが見つかり、早速、電話をしてみると、直ぐに見に来てくれと言う。掘り出し物でありますようにと祈りながら、私たちはその場所へ向かった。

訪ねて行った家は、シドニー周辺にあるボンダイビーチの直ぐ近くだった。回りは広々として、素晴らしい眺めの場所である。

家のドアをノックすると、出てきたのは想像以上に若いカップルだった。彼らも私たち同様、長期旅行に出かけるので彼らのキャンピングカーを売る事にしたいらしい。

若いカップルはニュージーランド出身なのだが、オーストラリアの方がより良い気候なので移り住んだと言っていた。

この二人は大変な倹約家のように、長期旅行にでると移動には必ず夜行列車を使い、ホテル代を浮かせていたと自慢をしていた。

簡単にお互いを紹介しあった後、私たちはさっそく彼らのキャンピングカーを見せてもらうことにした。

ガレージから出て来たのは、クリーム色をした VW（フォルクスワーゲン）の小型キャンピングカーだった。車はオートマチックで、中にはキッチン、冷蔵庫、ガスクックに必要な鍋やフライパン、食器などが全てそろっており、後方にはベッド、両脇には小さな戸棚、窓には可愛い手作りのカーテンまで下がっていた。今にも出発できる状態だ。

私たちは試乗させてもらうことにした。キャンピングカー独特の高い座席に二人で乗り込み近所をぐるっと回ってみたが、車は何の支障もなく快調に走り、二人は直ぐに気に入ってしまった。

料金を訊ねると、6000オーストラリアドルだという。私とジョン・クロードは少し相談をしたが、二人ともすでに買う気持ちでいたので、「買います」と若いカップルに返事をするのに数分もかからなかった。

商談決定の握手をした後、4人で近くの銀行へ行き、私たちは3000オーストラリアドルを引き出して若いカップルに手渡した。残りはキャンピングカーを受け取った時に渡すことにした。

私たち4人はその足で道路交通局へ行き、キャンピングカーのオーナー名の書き換えをし、更に保険の書き換えをすませると、それでもうキャンピングカーは私たちのものだった。この簡単さ、オーストラリアだからだろうか。

キャンピングカーから私物を取りだして、引き渡せるように用意しておくから、と若いカップルに言われた私たちは、その2日後、再び彼等の家を訪問した。

キャンピングカーは新しいオーナーである私たちを待っているかのように家の前に停まっていた。これから長い旅を一緒にする仲間である。

私たちは若いカップルに残りの料金を支払い、キャンピングカーの鍵を受け取ると、お互いに良い旅をと言いつつ別れた。

私たちの出発は明日だ。私たちはキャンピングカー用のベッドのマットレスとブランケットを新しく購入し、ホテルへ戻った。

その夜、

「バッテリーが上がった時に必要であるケーブルを渡し忘れたので、出かける前に私たちの郵便箱から持っていってくれ」

とカップルからホテルに連絡が入った。

翌朝、旅行の準備を全て整えた私たちは、キャンピングカーに乗り込み、若いカップルの家に向かった。

言われた通りに郵便箱を開けてみると、ケーブルと一緒に「15ドルです」と言うノートが入っていた。倅約家の二人らしいね、と私はジョン・クロードと笑い、15ドルを紙に包んで郵便箱に入れた。

さあ、いよいよ私たちのオーストラリア旅行の始まりだ。シドニー到着から2週間後だった。

「レッツ、ゴー！」

わき上がる期待感に心躍り、これから私たちと冒険を共にするキャンピングカーに飛び乗り、エンジンを噴かした。

座席が高いキャンピングカーからの眺めは素晴らしい。

バンダイビーチを横目に見ながら、キャンピングカーは快調に飛ばしていった。

ところがである、1kmほど走った所で急に勢いがなくなり、そして止まった。

「うん？」

「どうしたの？」

「分からない・・・」

まさか、走り出して直ぐに止まるとは思いもしなかった。

元々、車のメカニクの事など分からない二人だが、買ったばかりの車の事は更に分からない。

私たちは、あまり良く調べもせずに、この車を買ったのだが、何処かに欠陥でもあったのだろうか・・・？

こんな時は何処の修理屋に連絡を入れたらいいのだろう・・・。

弾んでいた気分が急にしぼみ、心細くなっていった。その時、

「ああ、なんだあ！ガソリンが無くなっているんだー」

ジョン・クロードが叫んだ。

あの若いカップルは、心底、儉約家というか根っからのケチのようで、私たちにキャンピングカーを渡す前に、車からガソリンを抜いてしまったらしい。

幸いに、私たちはまだ町からそれほど遠くへは来ていない。ジョン・クロードはガソリンを買いに町へ歩いて行った。

私たちはオーストラリアの東コースト（クィーンズランド州）を走り、北の果て（車が入れる限度まで）へ行く計画を立てた。

旅行を開始したのは5月の初旬で、オーストラリアは冬に向かっていて。

シドニーも肌寒かったが、北へ向かうに連れて雨も降り出し、寒さが身にしみるようになっていった。

観光ブックは持参しなかったが、キャンプ場情報の本だけは購入し、夜になると私たちは近場のキャンピング場に車を止めて水を補給し、シャワーを浴び、料理をし、洗濯をした。

雨がしとしと降る夜は寒くて、「早く、北上しよう」と二人はそればかりを口にした。

そんな風に愚痴を言っている時に、「ケークケケケケケ・・・」と外で誰かが笑っているような声が聞こえてきた。

「誰かが私たちの愚痴を笑っているよ」

調べてみると、クッカバラ（日本語でワライカワセミ）だった。

この鳥の笑い声には、何度もホッとさせられた。

かの有名なゴールドコーストを通りかかったが、やはりこの時期、長く延びるビーチには人っ子一人おらず、30分ほど滞在した後、私たちは北を目指して進んで行った。

冬に入っていたからか（それともオーストラリアが広大だからか）、道路はいつも空いていた。私たちはキャンピングカーのゆるりとしたスピードで小さな町を通り抜け、大きな自然の中を走り、また小さな町に出会うということを繰り返していた。

オーストラリアの自然はワイルドだ。申し訳ない程度にしか舗装されていない赤土の道を、ひたすら走り続けることになる。

私たちは途中でアメリカのグランドキャニオンに似た景色に遭遇した。世界の始まりはこうだったのかな、と思わせる景色に息が止まった。

広大なパイナップル畑に出くわしたときは、パイナップルがどうやって育つのかを初めて知った。

大自然の中にこつ然と蝶々パークが現れたこともある。入ってみると、ムッと蒸し暑い建物の中にカラフルで、大小いろんなサイズの蝶々が何千匹も自由に飛び回っていた。

バイロンベイの町は昔のヒッピーを思わせる、開放的で、平和で、明るい、小さな町だった。

そんな町にこじんまりとした日本レストランがあった。入ってみると、日本人スタッフはいなかったものの、食事は想像以上に美味しく、店員達がフレンドリーで、なんだか旅の途中でホッとしてしまった。

オーストラリア人は、総体的にフレンドリーだ。旅行者に慣れているのか、誰にでも親切に声をかける。

「Hi mate!」「Good day!」（オーストラリアではグッデイがグッダイになる）

私たちが旅行をしている間、キャンピングカーが4～5回ほどパンクしたが、車を脇に止めて修理をしていると、通りがかった車は必ず停まり、

「何かお手伝いしましょうか？」

と声をかけてくれた。

タイヤのビスはとても固くてジョン・クロードの手に負えないことが多く、身体の大きな（力の強い）オーストラリア人男性が手伝ってくれると、一瞬でタイヤの交換をすることが出来た。

バイロンベイで一度、銀行へ行く用事があった。

中に入ってみると、窓口に着ている男性が短パンにハイソックス姿だったので驚いた。

日本の銀行では許されない格好だが、オーストラリアの片田舎では普通なのだろう。

随分昔になるが、イタリアの銀行の窓口で、女性が煙草を吸いながら応対してくれたことがあったが、それに比べると、オーストラリアの短パンとハイソックスは可愛らしくて、ぐんと親しみがわいた。

インドで出会ったフランス人の友達は、ユーカリの林の中に木の家を建ててガールフレンドと一緒に住んでいた。

現地の生活に馴染んでみたくて、私たちは彼等の家に1週間ほど滞在させてもらった。

場所柄、彼等は自然の動物を沢山見るそうだが、私たちが滞在していたある夜も、バルコニーの柵の上に大きなフクロウが飛んできた。

友達が家の中の電気を全て消し、みんなでしばらく観察したが、フクロウは大きな目を、クルッ、クルッ、と回して可愛い動物だった。同じフクロウなのだろう、毎晩同じ時間にやってくるそうだ。

沢山のコアラも、この辺りに住みついていると言っていた。

コアラが繁殖期にはいると、「ブルルルルルンンン!!、ブルルルルルンンン!!」と大きなモーターバイクのような音を発すると、フランス人の友達が教えてくれた。

雄のコアラが雌のコアラを誘う音らしいが、ぬいぐるみのように可愛いコアラからは想像も出来ない。

この友達の庭で、ある夕方、知人が20名ほど集まってパーティーが開かれた。

簡単な食事に飲み物、大きな焚き火、そしてギターの音楽。それさえあれば十分だった。

アルコールは飲まないし人見知りでもある私は、そんなゆるい雰囲気のパーティーを端の方で見ながら結構楽しんでいた。

バイロンベイの小さな町は、「みんなが友達」という雰囲気で溢れ、それは居心地が良かった。出来れば、そこに住みつきたいくらいだった。実際に、私たちは森の中に建てられた売り家を見に行ったことがあるが、ビザ取得が難しいと言われ、結局諦めている。



バイロンベイから更に北へ北へと車を走らせていると、空気が少しずつ暖かくなっていくのを感じた。グレート・バリア・リーフの始まりだった。2600kmにも及ぶ、世界最大の珊瑚礁地帯。海が透き通る蒼色に変わった。

暖かい空気を肌を感じながらキャンピングカーを走らせていると、船で渡るリゾート島の看板が目に入った。この辺りには珊瑚礁を楽しめる島がたくさんあると書いてある。

それは大陸を走り続けていた私たちの興味をそそった。

私たちはガイドブックを持っていないので何処に何があるのか分からなかったが、行き当たりばったりで、先ずはヘロン島へ行くことになった。珊瑚礁の真ん中に浮かぶ島で、珊瑚や熱帯魚が近場で楽しめるらしい。鶴に似た首の長い鳥がヘロンという名で、この島にはその鳥が沢山いるようだ。

私たちは看板を辿りながらグラッドストーン・マリーナと言う小さな港に入ってしまった。そこから船に乗り込んでヘロン島へ向かうらしい。ヘロン島は日帰りの観光客を認めておらず、私たちは2泊3日の予定で島へ向かった。

雨模様だった天気が晴天に変わり、私たちは久しぶりにキャンピングカーを離れて船の旅を楽しんだ。

約2時間後、海の色が蒼色からパステルカラーの水色に変わったところで、いよいよヘロン島が見えてきた。島の真っ白な砂と緑の森が青空に映え、遥か遠くまで眺められる海は波もなく静かに漂っている。

私とジョン・クロードはその美しさにノックアウトされた。写真などで見る南国の海と島、いやそれ以上の、正に夢見る南国のパラダイスが目の前にあった。

船がシンプルな栈橋に到着すると、そこからはリゾートのスタッフ数名が乗船客を迎えてくれる。

予約した部屋に入る前に、グレート・バリア・リーフは世界遺産である。滞在中は貝や珊瑚など何も取らないようにと、スタッフから注意事項が伝えられ、そして私たちはそれぞれ

れのバンガローに案内された。

木の栈橋を渡りきると靴はもういらぬ。細かい白い砂が島中どこまでも続いているからだ。

シンプルだが気持ちの良いバンガローに案内された私たちは、荷物を置くと直ぐに海へ飛び出した。

青く透き通った南国の海を目の前にすると、その中に身を投げ出したいと言う気持ちが身体の中からむくむくとわき上がって来た。何が何でも先ずは海に飛び込もう！

太陽は輝いていたがまだ肌寒かったその日、私たちはボディースーツを借りてスノーケリングをした。

海は何処まで歩いても水位が腰の高さまでしかこない遠浅。輝く太陽の下、足元まで透き通って見える綺麗な海の中を歩いていると、私は感動で気を失いそうだった。

150mほど歩いた所で海の底が切れ、そこから急に崖っぷちのような地形になった。

スノーケルをつけ海の中に頭を突っ込んでみると、目の前にはいろんな熱帯魚が泳いでいた。

「こんなところに、もう熱帯魚が・・・」

その時の写真が手元にあるが、私たちの、はち切れんばかりの笑顔が、その時の喜びをものに表している。写真を見ているだけで、あの時の天にも昇るような気持ちが蘇ってくる。白い砂浜には私たち以外に人は見当たらず、何羽かのヘロン鳥がビーチ脇の緑の中を静かに歩き回っていた。ああ、パラダイス。

私たちは白い砂浜と青い空を心一杯楽しんで、ヘロン島を後にした。

1週間ほど曇り空が続き、うんざりしながら走っていたある日、私たちはヘイマン島へ行くフェリーの乗り場にさしかかった。いつものごとく、私たちはヘイマン島について全く知識がなかったが、悪天候が続いていたこともあり、島へでも渡って気分を変えてみようかということになった。

ヘイマン島へ行ってみたいのですが明日からの天気はどうでしょうか、とジョン・クロードがフェリーの切符を売っている女性に尋ねた。

「どうやら、ここ3日ほど、晴天と言う予想が出ていますよ」

と天気予報を調べながら女性が言うではないか。

「どうしよう、彼女の天気予報に賭けてみようか？」

「多分、いいお天気が続くんじゃないですか？！」

と窓口の女性は私たちの背中を押す。

OK、じゃあ、彼女の言葉に掛けてみよう。私たちは、すぐにフェリーの切符を手に入れた。

どこからフェリーに乗ったのか、乗っている時間はどのくらいだったのかももう覚えていないが（多分、フェリーに乗っている時間や回りの景色が美しすぎて時間の経つのを忘れたのだと思う）、私たちは美しいリゾートの港に到着した。

そこは、ヘロン島に次いで二つ目の、それも高級パラダイスだった。

島全体がリゾート地で、どこからどこまでも、ぴっかぴかだった。

ヘロン島がナチュラル主義者用であれば、ヘイマン島は高級指向者用だ。

ここが世界で1、2を争う、5星のリゾート地だと言う事は到着して知った。

建物全体が薄いピンクに塗られ、巨大スイミングプールがその回りを囲っている。

私たちが案内されたのは、これも薄いピンク色をした客室だった。パステルピンクの壁に白い縁取りの窓やドアがキュート。

パステルピンク地のベッドの前には、ウエルカムのシャンペンボトルが氷に浸かっていた。
「ウワォ！」

この島にはダイビング教室もあったが、もっと魅力的だったのは、リゾートでピクニックの用意をしてもらい、ヘリコプターで孤島まで飛んで、そこで二人だけで1日を過ごすというプランだった。

私たちは直ぐにでも飛んで行きたかったが、私たちが滞在した2日間は風が強く、残念なことにヘリコプターは飛んでくれなかった。

ダイビング教室の方は、私たちの滞在日数が足らず諦めた。

滞在中は予想外にいい天気だったのだが、風が冷たすぎて海やプールで泳ぐ事ができず、私たちはリゾート内を歩き回り、ゴルフ場に出てゴルフの真似などをして遊んだ。

少し時期外れだったのは残念だったが、旅行客が少なく、高級リゾート地の落ち着いた雰囲気、ほとんど独り占めで味わうことが出来た私たちは十分幸せだった。

ヘイマン島に2泊した後、私たちは本土に戻った。



私たちは更に北上し、クイーンズランド州最北部の中心地、ケアンズを目指した。

珊瑚礁のグレート・バリア・リーフは勿論、熱帯雨林が広がる地域だ。

ここまでやって来ると、すっかり夏らしい気候になり、旅行者も増えてきた。

空は青く晴れ上がり、キャンピングカーに座っていても心がおどる。

私たちはカセットテープから流れてくるトラヴェリング・ウィルベリーズ（ジョージ・ハリスン、トム・ペティ、ロイ・オービソン、ジェフ・リン、ボブ・ディランの覆面バンド）の軽快な音楽を聴きながら、時にはリズムに合わせて体を揺すり、時には大声で一緒に歌を歌い、オーストラリアの空の下を走り抜けて行った。

今でも、あの時聴いていた音楽を聴くと、楽しかったオーストラリアの旅を思い出す。
輝く太陽の中、私たちはケアンズに到着した。
高層ビルがなく、平屋のような店やレストランが軒を並べて建っているケアンズの町は、
フレンドリーで非常に歩きやすい町だった。
オーストラリア物産店も多く、のぞいているとすっかり時間を忘れてしまうのである。

私たちの毎日の食事はキャンピングカーについているキッチンでまかなっていたが、たまに外で買って食べることがあった。

よく行ったのは、街のいたるところにあるサンドイッチの屋台である。
屋台の上はガラス張りになっており、そこにはパンと多種のトッピングが並んでいる。客は自分の好きなトッピングを伝えてサンドイッチを作ってもらう。
ベジタリアンの私たちは、サラダを中心にアボカド、チーズ、スプラウト、キューリ、トマトなどを指摘。

「ベジマイトは？それから塩、胡椒はしますか」

と店員に訊かれ、「はい」と答えるとサンドイッチの出来上がりである。
ベジマイトとは、ほとんど真っ黒い色をした塩辛いペースト状の食品である。私たちもオーストラリアのサンドイッチ店でその存在を初めて知り、恐る恐る食べてみたのだが、少し醤油に似た塩つけがサンドイッチに良く合い、それからはサンドイッチを食べる度にベジマイトを塗っていた。オーストラリアでは国民食とまで言われるポピュラーな食品のようである。

たまにだが、フィッシュ&チップスも買って食べた。これも店頭で受け取って食べる形だ。キャンピングカーでは揚げ物ができないので、たまに食べるフィッシュ&チップスは私たちにとってごちそうだった。そして、それはどの町へ行っても毎回美味しかった。
私たちがレストランへ行ったのは、キャンピングカーを手に入れる前のシドニーで数回、途中ストップしたバイロンベイ、そして2ヶ月滞在した東北部の海岸沿いにあるポートダグラスくらいである。

ケアンズの町は私たちが滞在するには大きすぎた。もう少し素朴で小さな町がいいと、私たちは更に北上していった。

70kmほど走って行き着いたのはポートダグラスという名の町だった。
キャンピングカーで行けるのはこの町までのようで、そろそろダイビング教室にも行きたいと思い始めていた私たちは、この小さな町に降りてみることにした。
ポートダグラスはモダンな田舎町と言う風情で、太陽の輝きの中に静かに明るく照らされていた。あちらこちらに咲いた色とりどりの花がその町に色を添えて、そこにいるだけで元気で平和な気持ちになる所だった。珊瑚礁の海が直ぐ目の前でもある。
私たちはポートダグラスがいっぺんに気に入ってしまい、この町にしばらく滞在し、ダイビング教室もここで探すことにした。

長期滞在するには、キャンピングカーは少し狭い。私たちは不動産屋に行きコテージを借りた。

キャンピングカーも楽しいが、長く乗っていると、時々、窮屈さを感じてしまうことがある。私たちは旅行中も、たまにこうしてホテルやバンガローに数泊し、足を伸ばしたものである。

ポートダグラスのコテージは、緑色に塗られ、長屋のような形で並んでいた。
小さいながらも、リビングルーム、キッチン、寝室、バスルームがあり、簡単なテーブル

や椅子、鍋や食器などのキッチングッズ、そして寝室にはマットレスが揃っていた。私たちのような旅行者には最適である。裏にはバスルームから抜けて出られる庭までついていた。洗濯物を干すには格好の場所だった。

回りには小さな店やスーパーマーケットもあり、ポートダグラスはしばらく滞在するには最適なところだった。

コテージに落ち着いたところで、私たちはさっそく夢見ていたダイビング教室を探し始めた。

先ずケアンズで探してみたが、大きな所では1クラスに20～30人もいる教室ばかりで、私たちはそんな大勢の中でダイビングを習う気持ちにはなれなかった。

ポートダグラスに戻って探してみると、個人会社でやっている小さなクラスが見つかり、さっそく予約を入れた。

約束の日に行ってみると、私たちの他に若い男性二人と女性一人のドイツ人グループが既に参加しており、結局、私たち5人が一クラスとなった。

グラハムという若くてフレンドリーな男性が私たちのインストラクターだ。

グラハムは先ず5人全員の、「パディ」という名のダイビング認定書用の写真を撮り、私たちは書類に必要事項を書き込んで署名した。

それが終わると、みんなの自己紹介が始まった。教室は始めから笑いの絶えない雰囲気、少々緊張していた私も落ち着いて来た。

自己紹介が終わると、ダイビングをしようと思った理由を教えてください、とグラハムが話した。

他の4人はそれぞれに思い思いのことを言っている。私は何と答えようかと考えていたら、私の番になった。

とっさに私はこう答えていた。

私「海の深い所が怖いので、その恐怖を取り除きたいからです」

グ「でも、少しは泳げるの？」

私「はい、少しだったら泳げます」

グ「OK、それじゃあ、大丈夫」

そうなのだ、私は海で泳いでいて、足の届かない所に行くと怖くなる。

正直、私はダイビングが怖いのだ。その恐怖を取り除きたいから挑戦したのだ。

とっさに出た理由だったが、それが私の本音だった。

そして、インストラクターから「大丈夫」と言ってもらい、私は随分と気が楽になった。

生徒5名の気心が知れたところで、私たちはいよいよプールに向かった。

プールは深さ5mあり、それを見ただけで私は身震いがした。

しかし、初日はセオリーだけで、海の事、ダイビングの事、そしてその他諸々を習った。

次の日も午前中はセオリーだけ、そして午後からいよいよプールだ。

教室に用意されているボディースーツの中から自分のサイズにあうものを選んで身につけると、マスクはつけなくてスノーケルだけで泳ぐように、とグラハムが指示を出した。

「マスクがないと、水がもろに鼻の穴に入る・・・」

これは、鼻で息をせず口だけで息をする訓練らしい。

その格好で、プールを往復するようにとグラハムは言う。

鼻に水が入ると私はパニックになるのは分かっている。パニックになっても深さが5mもあるプールでは立つ事も出来ない。

こうなったら、パニックにならないように、しっかり口で息をするだけだ、と私は心臓がぱくぱくしている自分に言い聞かせてプールに入った。

「落ち着いて、落ち着いて・・・、鼻は使わない、口だけで息をする・・・」

私はそれだけに集中してフィンを蹴った。気がつくと、私はプールを往復していた。その往復を何度かやらされ、往復する度に私の身体から緊張が抜けていった。

その後プールから出て、腕や指で出す OK サインの作り方、海の入り方、マスククリア（水の中で、マスク内に入った水を鼻から息を吐いて出す）の方法、相方のタンクに空気がなくなった時に、自分のマウスピースを共有しながら海の上に出る方法（バディブリージング）などを勉強して、その日は終わった。



3日目、いよいよ背中にタンクを背負ってプールの中での訓練だ。

私の足は微妙に震えていた。緊張の為、この3晩、私は殆ど眠ていない。

プールに入る前に、まずはタンク内の酸素のチェック、水深をはかるメモリのチェック、口にくわえるマウスピースのチェックの仕方をグラハムから教えられる。

そして、ダイビングはバディと言って、必ず誰かと一緒に潜るようにと言われた。

チェックが終わると、ボディースーツの上に浮き輪になるベストを着込み、タンクを背負い、フィンを足につけ、マスクをする。そしてマウスピースを口にくわえたら水に飛び込む準備完了である。

一人ずつ「ザブンッ」とプールに飛び込み、指で OK サインを出してインストラクターに合図をする。それからベストの空気を抜いて、ゆっくりとプールの底に沈んで行く。

昨日習ったマスククリアを、今日は深さ 5m のプールの中で実践するのだ。

全員がプールの底に膝をついたところで、インストラクターのグラハムがマスククリアをやってみせた。

先ず顔につけているマスクを手で完全に取り去り、その後、又マスクを顔につける。

顔につけたマスクには勿論水が一杯入っているが、そのマスクの上部を手で押さえながら、

鼻で「フンッ！」と勢い良く息を吐くと、驚くことにマスクから完全に水が抜けているのだ。

それでは一人ずつやってみるようとグラハムは水の中で私たちに指図する。

私は水の中でマスクを完全に取ってしまうのがこわかった。パニックになると、鼻から、口から、水を吸ってしまう。

ダイビングで一番大事なことは、落ち着く事である、と私は理解した。

私の番がやって来た。パニックにだけはならないようにと、私はゆっくりとマスクを外した。鼻の穴にも目の中にも水が入ってくる。

「大丈夫、大丈夫、落ち着いて、必ず出来るから」

私はそればかりを自分に言い聞かせながら、今度は、外したマスクを顔に装着した。

そして、マスクの上部を手で軽く抑えて、鼻で勢い良く息を吐いてみた。

「フンッ！」

・・・あっ、私のマスクの中の水は完全になくなっている。「出来た！」

グラハムを見ると、彼は親指を立てて「OK」サインを出してくれた。

自分ながら、この方法には感心してしまった。

次は、相方の空気がなくなったという設定で、マウスピースをシェアしながら上昇して行く訓練バディブリージングだ。

マウスピースから2回大きく息を吸うと、それを外して相方に渡す。

相方が2回大きく息を吸うと、また私にマウスピースを返してくれる。

その繰り返しを行いながら、少しずつ相方と一緒に上昇して行くのである。

簡単だったが、一つ注意が必要だった。

相方から受け取ったマウスピースで息を吸う時、マウスピースの入り口には水が少し入っているの、それを空気とともに吸わないように、中心にあるボタン（バージボタン）を必ず押さなければいけなかった。

相方とマウスピースを交換しながらゆっくりと上昇して行く事に気を取られてしまった私は、それを忘れた。

水が勢い良くのど元に入り、私はむせた、むせた、むせた。

むせた後、息を吸わないと息が続かない、だが、パニックになった私はもうマウスピースから息を吸うことも考えず、必死でフィンを蹴ってプールの表面に顔を出した。

グラハムが直ぐに上昇して「大丈夫か？」と心配してくれたが、深さ5mのプールだったからまだ良かったものの、実際に10mほどの海に入っていたならどうなっていたかと思うと私は不安になった。

さて4日目、遂に海へ潜る日がやって来た。

もう4晩も寝ていない私は緊張の絶頂にいた。同じグループにいるドイツ人の若い女性と話をすると、彼女も教室が始まって以来眠れない日が続いているという。それを聞いて私は少し安心した。

グラハムを先頭に私たち5人の生徒はポートダグラスの港から教室専用のボートに乗り、沖へ出た。

私は、もうこうなれば何でも来い、と言う気持ちだった。とくにグレートバリアリーフの素晴らしい海を見ると、恐怖よりも、早く海の中に潜ってみたいという好奇心の方が強くなっていた。

この日は快晴で波もなく、ダイビングにはもってこいの日和だった。

生徒5人は船の上で少し緊張し興奮していた。そして口数少なくボディースーツを着用し、タンクなどのチェックを済ませて、次々に海へ飛び込んでいった。

腕で頭の上に大きな丸を作って OK サインを出し、ベストの空気を抜いて海に入って行く。私の足が着いたのは、プールと同じ 5m の深さのところだった。太陽の光がさんさんと注ぎ込み、その辺りの珊瑚や熱帯魚を鮮明に照らし出していた。

私は膝をついて腕を組み、回りを見渡した。

全くの静寂。

「ブク、ブク、ブク、・・・」

という自分の吐く息の泡の音しか聞こえない。

可愛い熱帯魚が、目の前をゆっくりと泳いでいく。

「ああ・・・、こんな夢のような場所があるなんて・・・」

私は珊瑚礁の海にすっかり魅せられてしまった。その魅力は、海に対する恐怖よりもずっと強かった。

全員が集まり車座になると、プールで講習した事を改めて実践した。

マスククリアは全員が簡単に出来た。

バディブリージング（マウスピースの共有訓練）も難なくやれるだろう、と思ってやり始めた途端、私の横にいたドイツ人の若い女性がむせた。彼女も私と同様、息を吸う時にバージボタンを押し忘れたようだ。

グループ全員に緊張が走り、グラハムが慌てて彼女の所に駆け寄った（泳ぎ寄った）。幸い彼女は私のようにパニックになって急上昇することはなく、グラハムの助けで直ぐに息が出来るようになったが、海の中では落ち着いて行動することが一番大事だと改めて思い知らされた。

一通りの訓練が終わると、グラハムは私たちを更に深い場所に誘っていった。生徒の私たちは金魚の糞のように彼の後ろに続いた。

海の中が一番綺麗に見えるのは深さ 5-10m の所だそう。

そこから更に深くなると、太陽の光が届きにくくなり、珊瑚礁などの色も綺麗に発色しないという。

グラハムの後を追いながら、私たちは素晴らしい珊瑚礁の海を堪能した。

カラフルな珊瑚礁の絶壁、色とりどりの熱帯魚、穴から上半身を出したウツボ、虹色の身体を持つパッパガイフィッシュ、触ると「シュッ！」と殻を閉じる 1m もある大きな貝、海の名ズ？、等など、グラハムが一つ一つ示してくれる。

それらを見ながら、ダイビングをやった良かったと私は心から思った。

しかし、ダイビング教室はまだ終わったわけではなかった。

最後の日となる 5 日目は、ダイビング認定書がもらえるかどうかの試験日である。

その日も良く晴れた日だった。

インストラクターのグラハムと私たちは 4 日目と同じように沖へ出て海へ潜り、一人ずつマスククリアやバディブリージングを行った。そして生徒 5 名全員、難なくやり遂げることが出来た。

だが試験はさらに続いた。グラハムは、海の中で相方が怪我をして動けなくなったと言う想定で、その相方の身体を支えながら船に向かって泳ぐようにと指示を出した。

あまり難しそうではなかったが、その日は潮の流れが激しく、私は相方の足を持ち一生懸命にフィンを蹴って泳いだが、息が切れてくるばかりで船に向かって 1m も進む事が出来なかった。

グループ内の男性達も同じように手こずり、これで生徒全員、試験には通らないのだろうか心配したが、船に上がり、グラハムから「全員、OK」の判定を貰ったときはみんな

でホッとした。

結局、グループの5人全員がパディの認定書を受け取り、みんなで食事に行き祝杯をあげた。

ダイビング認定書を取った私とジョン・クロードは、ポートダグラスの港から出ているクイックシルバーというアウターリーフクルーズの高速カタマラン船を利用して、自分たちでダイビングを楽しんだ。

こういう船を利用して行くと、教室で連れて行ってもらった所よりも更に遠くへ連れて行ってくれるので、又違った珊瑚礁の自然が見られる。

珊瑚やカラフルな熱帯魚は勿論、海の中をゆっくりと行進しているバラクーダの集団、カーテンのように目の前を遮る魚の群れ、後をつけて行けるほどゆっくりと泳いで行く大きな亀、そして巨大マンタレイ。

私たちが遭遇した巨大マンタレイは、私たちの横を泳ぎ去ったと思ったとたん、Uターンをして華麗な姿をゆっくりと見せてくれた。

一緒に泳いでいた私とジョン・クロードは、海のあまりの美しさに、はっと気がつくとき水深25m以上も深く滑っていた事がある。初級者は水深約15mまでと言われていたので、慌てて少し戻ったが、それほど、珊瑚礁の海は素晴らしくて我を忘れてしまう。

海から浮上してクイックシルバーの船に戻ると、「どうだった？」とクルーズのスタッフが訊いてくれた。

私はマスクを取りながら「パラダイス！」と答えた。それ以上の言葉は見つからなかった。

ポートダグラスの近くに日帰りで行ける島がある。

高速カタマランで片道45分、島の回りに白いビーチが広がり、スノーケリングでも簡単に珊瑚礁を楽しむ事が出来る小さな島、グリーン島だ。

近場なので私たちも行ってみた。

グリーン島は、ヘロン島やヘイマン島と同じく、蒼色と水色の海の中にぽっかりと浮かんでいた。船が栈橋に到着すると、乗船客の私たちは島までその長い木の橋を歩いていく。空気が美味しく、微風が肌に心地よい。

何処でスノーケリングをするのだろうと思いながら橋の上を歩いていた私は、橋の下に沢山の熱帯魚がいるのを見つけた。こんな島の近くに熱帯魚がいるのだ。

島に着くやいなや、ジョン・クロードは沖までスノーケリングに行ってしまったが、私は橋の下にいた熱帯魚が見たくて、スノーケルをつけて橋から伸びている梯子を使って海の中に入って行った。

そこには、橋の下だからとバカに出来ないほどのカラフルな熱帯魚が沢山いた。

水面にボーッと浮いていると、人間慣れしているのか熱帯魚が私の回りにスイスイとやって来る。可愛いのでわたしはパンをやってみる事にした。

橋の上においていた私の荷物の中から持参していたパンをちぎり、水の中に戻ると、いや、それはすごかった！えさ付けとでも思ったのか、魚達が一斉にわたしの手元をめがけてやって来た。

カラフルな熱帯魚なので美しいのだが、あまりに一斉にやってこられると、指まで食べられてしまうのではないかと心配になる。私の回りには5・60匹の魚がいたはずだ。

パクパクパクと魚達はうまい具合に私の手からパンを食べ、なくなってしまうと好き勝手な方向に泳ぎ去って行った。急に一人になった私も少し橋から離れてみることにした。

スノーケリングをしながらゆっくり泳いでいると、橋から50mほど離れたところに岩の固まりが見えた。

あの岩の向こう側に行ってみようと、泳ぐスピードを速めた途端、岩の影にじっとしているサメの子供を見つけた。

私はドキッとして体が硬直した。子供のサメでも変に怒らせると襲ってくるのではないか。私は一人だ。回りには誰もいない。

私はサメに気づかれないように、そっとUターンをしてその場を離れた。離れながらも、サメが後をついてきていないだろうかどドキドキした。

橋の下ではカーテンのような魚の群れの中をくぐる経験もし、私は近場で精一杯楽しませてもらった。

グリーン島はポートダグラスからアクセスしやすいため、私とジョン・クロードは5・6回訪問している。

ポートダグラス周辺は、熱帯雨林でも有名である。

キャンピングカーでは行ける場所が限られていたので、私たちは4輪駆動の車を借りて北上出来る所まで行ってみた。

たどり着いたのは、世界遺産である森「デイントゥリー」だった。

この熱帯雨林も、又特別な場所である。

うっそうとした湿地帯の森に入ると、何もかもが大きく、自分がとても小さく思えてしまう。何億年も前からある森だと言う。

大きくそびえる木の幹は私の背よりも高く、平べったい形でそこら中に張り出している。シダは私の頭を覆い被さるほど大きく育ち、見た事もない植物がさらにその上を覆い茂っている。何もかもが大きく、太陽の光が森の中まで届かず鬱蒼としている。その中を歩いている私たちは正に小人だった。

綺麗な水の流れる小川を見つけ、私たちはそれにそって歩いたりもした。

森の中には何か大きな力が満ちあふれているようで、何処まで歩いても私たちは疲れを感じなかった。

その夜、私たちは森の中にあるエコ・ロッジに1泊した。

テラスから熱帯雨林が見渡せる、というよりも熱帯雨林の中に建っている、鳥の声しか聞こえないロッジである。夜になると回りは真っ暗になった。

熱帯雨林を体験し、ダイビングも堪能した後、私たちは7 km もあるフォーマイルビーチで日光浴などをして過ごしていたが、そろそろシドニーに帰る時がやってきた。

約2ヶ月間滞在した平和で明るいポートダグラスの町とコテージに別れを告げ、私たちはやって来た時と同じ道を今度は南下していった。

北上した時にゆっくり観ていった町や村は一気に通り過ぎていった。ただ時々、ホテルや素敵なロッジに宿泊して足を伸ばし、途中でもう一度友達の住むバイロンベイへ寄り、今度はホテルに宿泊してダイビングを楽しんだ。

それから一気に南下し、私たちはポートダグラスを離れて約2週間後、シドニーへ到着した。約6ヶ月ぶりに見るシドニーは、なんだかとても懐かしかった。

ホテルに落ち着くやいなや、私たちには旅の締めくくりとしてキャンピングカーを売る仕事 awaited 。

約6ヶ月間も冒険を一緒にしてきたキャンピングカーを手放すのは寂しかったが、ヨーロッパに持って行くことはできない。

旅の始めにキャンピングカーを探した例のセカンドハンドの車通りへ、私たちは自分たちのキャンピングカーを運転して行った。

適当な場所を見つけて車を駐車し、そこで買い手を待った。直ぐに買い手が見つかるというのだが、見つからなければ、見つかるまで何週間でも待たなければいけない。

出来るだけ早く見つかりますようにと祈りながら待っていたが、初日は誰も興味を示してくれる人はいなかった。

2日目、私たちは同じ道路にキャンピングカーを駐車し、再び買い手を待った。

午前中は見てくれる人さえいなかったが、その日の午後、イギリスからやってきた若者3人組が私たちのキャンピングカーに興味を持ってくれた。私たちは彼等にキャンピングカーの全てを見てもらい、そして私たちのオーストラリア冒険話しをした。

最後に、私たちが新しく買ったマットレスやブランケットも添えて、「料金は5000オーストラリアドル」と言うと、3人で何やら相談していたが、間もなく「OK」の返事が出た。

「やったー！」

正直、こんなに早く売れるとは二人とも思っていなかった。ああ、これでヨーロッパに帰ることができる。

6000オーストラリアドルで買ったキャンピングカーが5000オーストラリアドルで売れた。私たちは1000オーストラリアドルで6ヶ月近くのオーストラリア旅行を楽しんだ計算になる。悪くはない。

私たちは若者3人と一緒に銀行へ行き、彼らからお金を受け取ると、道路交通局で車の名前の書き換えをし、保険の書き換えも済ませるとキャンピングカーは彼らのものになった。この簡潔さ。

キャンピングカーを売って身軽になった私たちは、早速、旅行会社へ出向いた。

オープンチケットを持っていた私たちは、ヨーロッパへ出発する日を予約するだけだ。

そして、私たちの出発は1週間後となった。

出発まで日があるので、私たちは改めてシドニーの観光に出かけた。

シドニー水族館やオペラハウスを訪れて建物の美しさに感動し、市中のモノレールに乗ってシドニーの町を上からも眺めてみた。しかし、市内観光は数日で十分だった。

私たちは普通車を借りて、友達がいるバイロンベイまで飛ばすことにした。

だが、飛ばし過ぎて、スピード違反で捕まってしまった。

私たちの車がピューンと道路を走り降りて来た所で、取り締まりをしていた警察官に停まるように指示を出された。ジョン・クロードはややスピード狂なので、理由は直ぐに分かった。

警官「時速何キロで走っていたか、知っていますか？」

ジョン「ええと、130kmだったかな？」

警官「時速150kmです。40kmオーバーですよ。スピード違反の切符を切りますが、お二人は旅行者ですか？」

ジョン「はい。3日後、ヨーロッパに向けて出発します」

警官「ふん、まあ、スピード違反の切符はヨーロッパまで追いかけて行きませんか、ここで支払わなくてもいいですが、これからはスピードリミットに気をつけてくださいね」
そう言いながら若い警察官は一応切符を切ったが、見逃してくれた形になった。

オーストラリアでは警察官もフレンドリーだ。特にあの時の警察官はナイスガイだった。

スイスへ戻って来たものの・・

1990年11月初旬、私たちは1年と2ヶ月間の旅行を終えてスイスのチューリッヒ空港に到着した。

スイス到着前に友達と連絡を取り合い、私たちの住む場所はすでに決まっていた。

まずは時差ぼけから回復しようと、私たちは空港近くのホテルに数泊し、その後、少しだが私物を預けていた友達の所へ行って荷物を受け取り、そして向かったのはチューリッヒ郊外の閑静な住宅街に建つ大きな一軒家（WG）だった。

WGはドイツ語で **Wohngemeinschaft** と言い、大きな一軒家に知らない人や友達同士が一緒に住むところである。

そのWGに友達数名と一緒に住んでおり、その中の1カップルが出る事になっていた。私たちは旅行から帰ってきたままの格好で、彼らの後に入居した。

同居人は5人で、私たちの知っている人ばかりだ。

一人又はカップルがそれぞれ一部屋を借り、キッチンと2つのバスルームを共同に使う。私とジョン・クロードに必要なのはベッドだけだ。一応キッチングッズは共同使用だったが、それに加えて、私に必要なキッチングッズを別に購入した。

共同に生活することで、安い家賃で素晴らしい一軒家に住むことが出来る。スイスの若者達には人気のある生活スタイルだ。

一軒家に落ち着いた私たちは、早速、仕事を探し始めた。

いつもなら、まずは新聞を買い、求人欄を丁寧に調べることから始めるのだが、私の頭には辞めてきたY銀行があった。

「仕事が必要な時は、いつでも戻ってきてください」と私は言われていたのである。

試しに電話を入れてみると、私の上司だった営業部長と話をすることが出来、トントン拍子に以前と同じ職場に戻れることが決まってしまった。

仕事があると何もかもが楽になる。旅行から帰って来たばかりの私たちには良い出だしだった。

ところが、突然ジョン・クロードが驚く事を言い出した。

これから又直ぐに一人でインドへ行きたい、と言うのだ。

1年間の長期旅行から帰ってきたばかりの二人だ。なぜ又一人で旅行に行きたいのか。

私は彼が理解出来なくて何度も訊いてみたが、ジョン・クロードは「どうしても一人で行きたい」を繰り返すばかりだった。

私の事が嫌いになった訳ではないと言う。ただ、ただ、彼は一人で行動したかったらしい。考えてみれば、以前の彼はいつも一人で世界中を旅行していた。そんな彼が1年間以上も毎日、私と行動を共にしたのである。息が詰まることがあったのかもしれない。一人になる時間が欲しいと思ったことがあるのかもしれない。

私は一人で旅行に出たいジョン・クロードの気持ちが100%理解出来た訳ではなかったが、彼は私の持ち物ではない、彼のしたいことを辞めさせる権利などないということは理解していた。結果、私は彼の希望を受け入れた。

彼はインドに半年間滞在する予定だと言う。その間、私が一人で困らないようにと彼は私の身の回りを整え、そして一人でも寂しくならないようにと部屋にミュージックシステムを取り付け、早起きをする時に使う目覚まし時計の音は、「起きる時間だよ。さあ、さあ、起きなさい」という彼の声をフランス語で吹き込んでくれた。彼のいない半年間、私は毎

朝、彼の声で目覚めたのだ。

そうやって出来る限り私の世話をした後、ジョン・クロードはインドへ旅立っていった。私の勤務先の同僚は顔見知り、家の同居人も知り合いだ。だが、こんなに寂しい毎日を送ったのは、私の人生でこの時を除いて他にない。仕事をしていても、家にいても、何かが欠けているようで私はいつも寂しかった。

多分、彼の気持ちを100%理解できていなかったせいだろう。理解出来ていれば「いってらっしゃい！」と私は笑顔で送り出せたはずだ。

そして、寂しい毎日を送る代わりに、一人生活を有意義に楽しめたはずだと思うと、彼がインドへ行っていた半年間を、私は本当にもったいなく過ごしてしまったと今更ながらに後悔する。

だが、これもいい経験だ。重要なのは、同じ間違いを繰り返さないことである。

彼がスイスに帰ってくる前に、私は3週間の休暇を取りインドにいる彼を訪問している。

彼はいつものように温かく私を迎えてくれて、楽しい3週間を一緒に過ごした。

1991年4月、ジョン・クロードがインドから戻ってきた。

「一人でインドに行かせてくれてありがとう」

清々しい笑顔で空港に到着したジョン・クロードは、先ず私にそう言った。

失業保険をもらう間もなく、彼はアメリカのCバンクに仕事を見つけた。記憶が良く、数字に強いジョン・クロードにぴったりの経理の仕事である。

仕事を持っていると、スイスでは簡単にアパートを借りることができる

同年10月、私とジョン・クロードは友達と一緒に住んでいたWGを出て、メゾネットのアパートに移り住んだ。

私たちはIKEAに行き、必要な家具を揃えた。私たち二人だけの静かな生活が再び始まった。

一人では仕事量が多すぎて大変だ、と言う理由でジョン・クロードはCバンクに雇われたのだが、彼が仕事の全てを把握し始めた頃、彼に仕事を教えていた同僚が辞めてしまった。今度はジョン・クロードが一人で仕事をこなすことになった。

真面目なジョン・クロードは一人で仕事をやりきれるように頑張っていたが、次第に仕事量が異常ではなくなってきた。

元々、一人ではこなしきれない仕事の量なのだ。その為にジョン・クロードは雇われたのである。

「一人では絶対に無理だ。もう一人誰かを入れてほしい」

ジョン・クロードは毎日上司や人事課に要請したが、いくら待っても事情は全く変わらなかった。

それから数ヶ月が過ぎ、いつもは明るいジョン・クロードが毎日疲れた顔をして帰ってくるようになった。

結局1年半近く一人で仕事をやり続けていた彼は、遂に病気になって寝込んでしまった。高い熱を出し、口内炎が出来た。医者に行くと数日休養が必要だと診断された。

5日ほど休んだ後、ジョン・クロードは医者からの診断書を持って会社へ行った。

診断書を見せながら、「もう一人同僚を増やして欲しい」と上司と人事課に訴えたが、その場で却下されてしまったそうだ。

だが、この時はジョン・クロードが黙ってはいなかった。

彼は、彼の今までの仕事状態を紙に書き出し、「これは非人道的である」とタイトルを付

け、それをコピーして全員が出勤する前にそれぞれのテーブルの上に配ったのだ。
これを知った上司と人事課は大怒り。

「会社に謝りを入れるか、もしくは即、辞めてもらう！」

とジョン・クロードを威圧した。

だが、謝る気持ちはこれっぽっちも持っていなかったジョン・クロードは、これから先3ヶ月分の給料を保証してもらうよう会社に談判し、そしてさっさと辞めて出てきた。

その日の午前中、私の勤め先に彼から電話があった。

「今、会社を辞めてきたよ。スッキリした。そのお祝いに、腕時計を買ったよ！」

「あっ、そうなの！良かったわね。お祝いに食事にでも行こう。腕時計、家に帰ったら見せてね」

アメリカの会社はワーカホリックで有名だと聞いていたが、想像以上らしい。

そんな所を出られたのだから、お祝いもしたくなるというものだ。

会社から離れたジョン・クロードは精神的にも身体的にも癒され、それからの半年間、初めて失業保険を貰って生活した。

結局、私も2年半勤めた会社を辞め、ジョン・クロードと一緒に再びインドへ旅立つ計画を立てた。

何処かに行ってしばらくゆっくりしたい、と思うときはインドが一番だ。

滞在費が安い上、瞑想とともに生活している人びとの中に身を置くだけで気持ちが落ち着いてくる。

再びインドへ行く前に

インドの長期滞在を決めた私たちは再度アパートを引き払うことになり、家財道具一式を売り払うことにした。

絵や装飾品などの小さなものは、チューリッヒ市内で毎月開かれるフリーマーケットに出店し、タダ同然で売った。

残ったテーブルや椅子、ソファ、ベッドなど、大きな家具はどう処理しようかと私たちは考えた。

一つずつ売るのではなく全部一緒に処理することが出来れば申し分ない。私たちは新聞広告を出してみる事にした。

「引っ越しの為、全ての家具を2000スイスフラン（約20万円）で売ります」

簡単なメッセージと私たちの電話番号を乗せた。

間もなく、ユーゴスラビア人の男性から「興味がある」との連絡が入った。

ユーゴスラビア人はスイスに移民としてやってきた人たちで、小さな仕事は見つかるが、経済的に苦しい生活をしている人が多かった。

翌日、アパートに私たちの家具を見にやって来たユーゴスラビア人の男性は、家具を見る前にまず料金を値切り始めた。

「全部使った家具だし、2000フランは多すぎやしないか？」

「いや、いや、これ以上は安く出来ない。先ずは家具を見てちょうだい」

私たちは男性をアパート内に案内し、2000フランで受け渡すことになる家具のすべてを見てもらった。

新品同様の家具に加えて、鍋や皿などのキッチングッズ全て、そして大小の観葉植物も全部あげると言うので彼はびっくりしてしまい、少し考えていたが、じゃあ2000スイスフランにもう少し足して支払うよ、と言い始めた。

「広告に2000フランと書いたのだから、2000フランで十分だよ」と言うと、男性はさも嬉しそうな様子で、用意してきたトラックに私たちの生活用品全てを詰め込んで走り去って行った。私たちのアパートは綺麗さっぱり空になった。

私たちが持っていたVWの車ゴルフも、同じように新聞広告に載せた。

事故も起こさず、綺麗に使っていたので何処にも傷はなかったが、前タイヤの上部部分に一カ所だけ色が剥けている箇所があった。

うまい具合にタイヤの回りを黒く縁取るフレームのような飾りを店で見つけ、それを両タイヤにつけてみると剥げた部分がすっかり隠れて見えなくなり、その上、ボルドー色の車体に黒いフレームがシャープさを加えて以前よりも格好いい車に仕上がった。

新聞に広告を出した数日後、中年ご夫婦が見にやってきた。車の隅から隅までチェックを入れた後、試乗をし、そして買ってくれた。

ドイツ車はエンジンが強く人気があるので売るのは簡単である。

家具も車も売り払ってしまった私たちは、旅行に出発する日まで空港からほど近い町のホテルに滞在し、そこからバスを使ってアパートの掃除に通った。

スイスでアパートを借りると、最初に家賃の1ヶ月から3ヶ月分を敷金として支払う義務がある。

そしてアパートを引き払う時、アパートが綺麗に掃除されていなければこの敷金は100%戻ってこない。これは、どの国でも同じ条件かもしれない。

スイスにはプロの掃除屋がいる。プロの掃除屋にアパートの掃除を任せると、「掃除完了」

と言う証明書を出してくれる。それを家主に見せるとアパートの引き継ぎは全て終わりである。敷金は100%戻ってくる。

自分で掃除をする人もいる。私たちはそちらの方だ。その場合、アパートが綺麗に掃除出来ているかどうかを家主にチェックしてもらう必要がある。

家主がアパートをチェックしにやってくる日は少しドキドキする。

アパートのカーペットは必ずカーペット洗浄機で洗い、その時に借りた洗浄機の領収書を見せることになっている。

家主がドアの木枠の上に指をさっと走らせて埃が溜まっているかどうかをチェックするのは当たり前。

普段、目に見えない場所、例えば食器洗い機の底などは、手鏡で写しながらチェックをする。そこまではるかかと最初は驚いた。

自分たちでアパートの掃除をするのは、家主に挑戦しているようなものである。

最初の頃は、ここが綺麗ではない、この掃除を忘れている等と指摘されていたが、何度も引っ越しをしている間に私たちも掃除のテクニックを覚え、最終的には「大変によろしい」という評価を家主からもらえるようになった。

1993年4月、私たちはインドへ向かった。

行く先はいつもと同じ、プーナにある Osho 瞑想センターである。

インド到着後の数日間は、時差もあるがヨーロッパとのギャップの大きさに、しばし、ぼーっと放心状態になる。それを乗り越えていよいよ行動開始となる。

この年、私は瞑想センターのチェックインデスクでボランティアとして働き、ジョン・クロードはこのセンターのウェブサイト製作に関わった。

日本語と英語を話す私は、チェックインデスクの仕事以外に、日本人向けの各種瞑想グループやマッサージコース等に通訳として呼ばれることもあった。

ある日、

「日本から有名な人たちがやってきたので、彼らの滞在中、通訳をしながら世話をしてくれないか」

とセンターのマネージャーから頼まれた。

出迎えたのは、沖縄のミュージシャンとそのグループ10名ほどだった。

私はこの時まで、彼らの事は全く知らなかった。沖縄に行ったことがない私は、沖縄の人に出会うのも初めてだった。

ミュージシャンとそのグループの人達は、髪も眉毛も濃く、活気があった。

滞在中、彼等は2度、瞑想センターでミニコンサートを開いてくれた。

私は沖縄の音楽を聴くのは初めてだったが、三味線の音に合わせて頭から抜けるような

「アイーヤ、イヤ、イヤ、」と歌う女性達のかけ声はリズムカルで耳に残り、踊る踊りも軽快で、私を含めて会場にいる人たちを大いに楽しませてくれた。

彼等は瞑想センターの客室に1週間滞在し、いくつかの瞑想にも参加した後、日本へ帰って行った。

インドで信頼を深める

瞑想センターに通い始めて半年が経った頃、ボランティアの仕事を楽しんでいた私とジョン・クロードに、意味深いある事件が起こった。

働いていたチェックインデスクには、私を含めて10名近くのスタッフがいた。

インド人、アメリカ人、ドイツ人、ブラジル人等、世界各国から集まっていたが、その中に一人、背の高いエレガントなイギリス人男性がいた。

彼は昔からセンターにいる人で、知らない人はいないというほど有名な男性である。

50代前半の彼は、イギリス人らしい優雅な動きで仕事をする一方、イギリス特有のジョークを飛ばす愉快的な人でもあった。

私は彼と一緒に半年ほど仕事をしていたので彼の人柄は分かっていたが、彼があまりに有名な人だったからだろうか、さほど彼に親近感を覚えることはなかった。

ある日の正午、私はチェックインデスクの仕事を終えて昼食に行こうとしていた。

突然、このイギリス人男性が私の目の前にやってきて、こう言った。

「君と一緒に夜を過ごしたい・・・」

びっくり仰天とはこの事である。どうしてまた私に？

私はジョン・クロードとこの上なく幸せにしている。知らない男性と一緒に一夜を過ごすなど考えたこともなかった。

私は即座に「NO」と返事をし、イギリス人男性は「それじゃあ、また」と言って明るく去って行った。

その場はそれで終わったが、私はこのイギリス人男性と毎日仕事で一緒になる。

男性は二度と私を誘うことはなかったが、私を見ては笑いかけてくる。

私は誘われた事は考えまいと仕事だけに集中していたが、考えまいとすればするほど、私の頭は彼に誘われた事で占領されていった。

イギリス人男性が特別気になったのではない。誘われたこと自体が私には刺激だったようだ。

それからの毎日、私は仕事をしていても食事をしていても、男性に誘われたことが頭をよぎって仕方がなかった。彼は私に催眠術でもかけたのだろうかと思うほどだった。

一番辛かったのは、ジョン・クロードの目の前に座っているというのに、頭の中は別の男性のことを考えていることだった。

これはジョン・クロードに対して大変失礼なことである。

しかし、妄想から目覚めようとすればするほど妄想は広がるばかりで、どうすることも出来ない。

私を誘ったことは、イギリス人男性にとって一種の遊びだったのかもしれないが、わたしには苦痛でしかなかった。

そんな日が数日続き、すっかり疲れ果ててしまった私は、この状態をジョン・クロードに正直に伝えることにした。伝えない限り、この男性のことを忘れる方法はない、ジョン・クロードの元に戻る方法はないと思った。

ある昼下がり、ジョン・クロードと一緒に禅ガーデンに座っている時、私は話し出した。イギリス人男性から誘われた事、私はその男性に何の感情もないが、どうしてなのか私の頭からその事が離れないこと。

ジョン・クロードと一緒にいても、度々、私の頭は別の所に飛んでいる、それがとても辛い事、そして自分ではどうにもコントロールが出来ないこと。

そして、この妄想から抜け出すには思い切って行動してみることにしよう、彼の誘いに乗

ってみることだと思うと伝えた。

ジョン・クロードはじっと聞いていたが、

「そんな事をし始めたら、僕たちの仲は終わってしまうよ」

と悲しげに言った。

「そんな事はない、私のジョン・クロードへの愛は決して変わらない。これを最初で最後にしたいから、その為にも、私は行く必要があると思う。彼と一緒にいっても楽しい事はないと分かっている。けれど、一度行動を起こさない限り、私はこの妄想から自由になることは出来ない」

私は精魂込めて、ジョン・クロードに私の気持ちを伝えた。

「分かったよ。それで君の気持ちがスッキリするのなら、行っておいで」

ジョン・クロードは私を信じて、そう言ってくれた。

出来ることなら、私は行きたくなかった、だが、行かなければ私の頭を支配している妄想を理解し、そしてそこから抜け出すことは出来ないと分かっていた。

翌日、イギリス人の男性と一緒にいくことを約束し、ジョン・クロードの所に戻って言った。

「今晚、行ってくる。明日の朝、朝食のレストランで会おうね」

「うん、待っているよ」

私は後ろ髪を引かれる思いでジョン・クロードと別れた。何をしているんだ私は、と思ったが、引き返すことは出来なかった。

案内された男性のアパートは綺麗に整頓され、彼はキャンドルに火を灯し、集めている彫刻や絵画を沢山見せてくれたが、私はリラックスすることが出来なかった。

私の頭はジョン・クロードの事ばかりを考え、胸が痛んだ。

夜がやって来て、イギリス人男性は礼儀正しく優しくだったが、想像していた通り私は楽しくとも何ともなかった。

しかし、私は行かなければならなかった。そして、行って良かった。

この経験で、愛を感じない男性と外泊する事は、ただのうすっぺらい妄想でしかない事を、そしてそれが、どれだけ馬鹿げていることかを私は心の底から理解することができた。

理解出来た以上、私は、もう決して同じ行動を繰り返すことはないだろう。

翌日の早朝、私は冷たい水でシャワーを浴び、景色が白くかすんで見える朝靄の中、ジョン・クロードと会う約束をした朝食のレストランへ足早に向かった。

「ジョン・クロードは待っているだろうか・・・」

通りの少し先にレストランが見えてきた。私は目でジョン・クロードを探した。

あっ、いた！、ジョン・クロードがレストランの表に出された椅子の一つに座っていた。

足を組み、両手を膝の上に重ねて、顔は少しうつむき加減で地面の遠くを見ている。

その姿を見た途端、私の目から涙が溢れ出た。

昨晩は苦しい時間を過ごさせてしまったのに、彼は私を信じて待っていてくれた。

私は彼が愛おしくて、涙が止まらなかった。

私は彼の側に行き、「ジョン・クロード」と囁いた。

彼は顔を上げて、そして私を強く抱きしめた。

私は彼の膝の上に座り、そのままの姿勢で二人は黙って抱擁していた。

「行かせてくれて、ありがとう」

「全て解決したの？」

「うん、終わった。ジョン・クロードへの愛が今まで以上に大きくなったよ」

お互いへの信頼が、確実に大きくなった日だった。

この日を境に、私たちは今まで以上に何でも話し合うようになった。

私が言いたいことを言えずに黙っていると、ジョン・クロードは私が話しだすまで放っておかない。

「別にいいから」

「いやいや、いい事はない。何かあるはずだ。そうでなければ、君がそんな態度をとるはずがない」

彼は私が話しだすまで我慢強く側にいてくれる。そして、問題が解決するまで、とことん話し合う。

ジョン・クロードが時々間違っただけを言ったり、意味もなく怒ったりする時は、私が彼にその間違いを指摘する。

時々彼は自分の間違いを認めようとしない時もあるが、少し経つと、

「ごめん、君の言う事は正しい。僕が間違っていた。こんな間違いを何度もしないように努力したいので、これからも、僕が間違っていると分かったら、どんどん指摘してほしい」と謝ってくるのには、本当に感心する。

たまにだが、私は彼の言葉に傷ついて泣くことがあった。

キッチンや寝室に行って静かに泣いていると、彼がそっと私の側にやってくる。

何も言わずに横でじっとしているので、ふと彼の顔を見ると、彼も涙を流して泣いている。

「あなたが泣く事ないでしょう。きつく言われたのは私なんだから、私が泣くのは分かるけど」

「いや、君を傷つけた僕が情けなくて、自分で泣けてくる」

「じゃあ、もう同じ行動を起こさないように気をつけてね」

「うん、悪かった」

そして、お互いの涙顔を見ながら、二人で笑ってしまう。

他人同士と一緒に生活をしていくには、話し合うことがとても大切だと言う事を私は学んだ。話し合いさえすれば、問題は二人で解決して行く事が出来る。

そしてそこに、二人と一緒に生きていく意味がある。

ティオマン島とラッフルズホテル

インド大使館にビザを申請すると、通常3ヶ月または6ヶ月が発行される。

今回、私たちは6ヶ月のビザを発行されていたが、その有効期限が切れる為、一旦インドを出る必要があった。

インドさえ出れば行き先は何処でも良かったのだが、インドのビザ再申請をするにはシンガポールが最適だと聞いた私たちは、観光も兼ねてシンガポールへ行くことにした。

ビザが切れる数日前、私とジョン・クロードはプーナからタクシーで3時間かけてボンベイ空港まで行き、そこからシンガポール航空で約6時間後、チャンギ空港に到着した。チャンギ空港は綺麗なことで有名だが、特にインドから行くとその清潔さが目と心にしみる。

私たちは先ずメリディアンホテルに落ち着き、その足でインド領事館に向かった。

ビザの申請をすると、受理まで数日待つことになった。

市内観光には興味のなかった私たちは、待っている間はホテル三昧でもしようかと、メリディアンホテルから今度はオリエンタルなマンダリンホテルへ移った。

インドに長く住んでいると、こういう高級ホテルの清潔さが嬉しくて仕方がない。

ところがそのホテルで偶然、古い友達カップルに出会い、東シナ海に浮かぶティオマン島が素晴らしいよと聞かされた。

マレーシアの島だが、シンガポールからでも簡単に行けるという。

海が大好きな私たちは、彼等の話を聞けば聞くほどティオマン島に興味をわいて来た。

結局、私たちはホテル三昧を変更して島へ行くことにした。

友達が滞在したと言うティオマン島にあるコテージに予約を入れると、船がシンガポールの本土に迎えに行くと言う。

私たちは小さな荷物を持って船着き場に向かった。

聞いていた住所を頼りに着いたのは小さな船着き場だった。どんな船が迎えに来るのかと待っていると、木彫りのような小さな船がやってきたので驚いた。

ゆらゆら揺れる船にジョン・クロードが先頭で座り、その後ろに私が座った。荷物を隙間に押し込んで船頭が後方のエンジン前に陣取ると、それで小さな船は一杯になった。腕を伸ばすと海に手が届く。

そんな船でも、エンジンを吹かして勢い良く走り、波があるとドンッと飛んだ。乗っている私たちも一緒に飛んだ。荷物が飛ばないように必死で押さえた。

1時間ほど乗っていたのだろうか、島が近づき、いくつもの大きな柔らかい岩が海辺に見えてきた。

私たちの船はその奥にある島の小さな入り江に入って行った。海から見上げる島はジャングルだ。

砂浜に到着した船から降りた私たちは、右にあるレセプションと書かれた小屋でチェックインを済ませ、それから左側の岩の上にある、3・4件ほどの木で作られた素朴なコテージの一つに案内された。コテージまで岩肌に作られた階段を登って行くのでスリルがある。

コテージの中もまた素朴だった。木のベッドと、側に小さなテーブルと椅子があるだけだ。シャワー室は水しか出ない。それもちょろちょろだ。トイレがあるだけでもマシだった。

素晴らしいよと友達が言っていたのはこれなのか、と少々驚いたが、孤島に移り住んだと

思えばこれも又楽しいものだ。何より、目の前に広がる南国の海とジャングルの自然は言葉にできないほどの美しさだった。

ベッドの上の天井にヤモリがいた。

ヤモリは「ケッ、ケッ、ケッ、ケッ、・・・」と大きな声で鳴くので直ぐに分かる。

夜になると、私たちはベッドに寝そべってヤモリの動きを観察した。

いつもはじっと天井に張り付いているヤモリだが、虫を見つけると、サッサッと素早く動いて、パクッといく。

蛾や蚊を食べてくれるヤモリがいて、こんな自然の中でも落ち着いて寝ることができる。

コテージの回りには何もなかったが、山沿いの細い道を歩いて行くと小さな村に出た。

私たちはこの村でフルーツやパン等の食品を手に入れ、コテージで簡単な食事をした。

村には1軒だけレストランがあり、私たちも一度だけ食事をしたことがあるが、とにかくどこまでも素朴な村だった。

この村では、女性はもちろんだが、男性が「サロン」と言う布一枚を腰に巻いて生活している。

インドでもそうだが、暑い地域ではズボンの代わりに、これがとても心地よい。

ジョン・クロードもティオマン島に滞在中は、このサロンを利用していた。

なんにもないティオマン島だったが、私たちは透き通る海で泳ぎ、白い砂浜に寝転び、美しい夕陽に感激し、手つかずの自然に心を癒された。良い所だと言っていた友達の言葉通りの島だった。

ティオマン島から1週間ぶりに本土へ戻ってきた私たちは、早速ビザを申請していたインド大使館へ向かった。

6ヶ月以上のビザを希望していたが、実際には5年間のビザが発行されていて驚いた。

お祝いをしようと、シンガポール最後の日にはラッフルズホテルに宿泊することにした。

100%コロニアル様式を残した、過去にチャップリンなどのセレブ達が宿泊したと言われる有名なホテルである。

この当方で、1泊1000シンガポールドルだったが、これも人生経験である。

ラッフルズホテルの全ての部屋はスイートルームで、リビングルーム、ベッドルーム、そしてバスルームからなっている。それぞれの部屋が広い。

置かれている全ての家具は英国スタイルでどっしりと落ち着き、ティオマン島の素朴な木のコテージから帰って来たばかりの私たちには眩しかった。

ティオマン島では水しか出なかったバスルームが、ここでは、水道など全ての金具部分が金色でピカピカしてお湯が溢れている。ただバスタブが小さいS字型で、身体を伸ばして入れないのには意味があるのかと不思議だった。

知らなかったのだが、それぞれのスイートルームに執事が一人ついていて、何をお願いしてもいいらしい。

靴もドアの外に出しておくとして綺麗に磨いて戻ってくると書かれている。

残念なことに私たちはバスケットシューズしか履いていなかったのもので、靴磨きは利用する事が出来なかった。

さて、何をお願いしようかと考えてみたが、たった1泊しかない私たちには何も思いつかない。

結局、アパートの前にあるテラスに夕食を用意してもらうことにした。

電話をかけると、執事は快く引き受けてくれた。

夕食の時間が近づくと、テラスのテーブルには真っ白なテーブルクロスが掛けられ、可愛い花とキャンドルが飾られた。

私たちがテーブルにつくと、まもなく執事が、ガラガラ、と食事の乗ったワゴンを引いてやってきた。執事の笑顔が気持ちいい。

温かいものは温かく、冷たいものは冷たく、シャンペンの温度もほど良く保たれ、テーブルの上には素晴らしい（ベジタリアンの）食事が用意された。

テラスの前には、東シナ海の夕陽の代わりにライトに照らされた南国の庭が広がっている。キャンドルライトの中で静かな食事をしながら、ふっと、この静けさはティオマン島もラッフルズホテルも同じだと思った。



ボンベイ発チューリッヒ、ファーストクラス

5年のビザをもらった私たちは意気揚々とインドへ戻ったが、考えてみると、この先5年間もインドで生活する気持ちは二人ともなかった。

それに、私たちの旅行資金も底をついてきていた。

結局、インドの滞在が1年になった頃、私たちはスイスへ帰る事にした。

この時点で、私たちの銀行口座には2000フラン（約20万円）残っていた。

スイスに帰ると、又一から生活を始めなければいけない。少しはお金がある内に戻った方がいい。

そんな時、ジョン・クロードがまた突拍子もない話を持ってきた。

「仲良くなった旅行会社のインド人オーナーから聞いたんだけど、スイスまでファーストクラスで行ける航空券があるらしいよ」

「ファーストクラス？そんな航空券、高いでしょう！？」

「二人で片道4000フランだって」

「4000フランのお金、私たちにはないでしょう？」

「クレジットカードで少しずつ支払って行く方法があるよ」

ファーストクラスか……。降って湧いたような話だ。しかし、考えようによってはたったの4000フランで飛行機のファーストクラスが楽しめるなんて、滅多にある話ではない。今このチャンスを逃すと、多分、私たちはこの先ファーストクラスを楽しむことはないだろう。せっかくの人生経験をこのまま逃してはもったいないのではないか。

スイスに帰ると又仕事を探して働けばいいのだ。

そう思った私は、ファーストクラス飛行にOKを出した。

数週間後、私たちは初めてのファーストクラス航空券を手に入っていた。

ムンバイ空港に到着すると、二人は真っすぐファーストクラスのチェックインカウンターに向かった。並んでいる客は誰もいない。

チェックインを始めると直ぐに、ウォーキートーキーを持った女性がやってきた。

「どうぞこちらへ」と彼女は私たちをファーストクラスのラウンジへ案内してくれた。

そこには既にインド人を含めた4・5人の乗客がくつろいでいた。

私たちがソファに座ると、間もなくお茶とお菓子がサービスされて、さすがファーストクラスだと感激した。

出されたお茶を飲んでいると、「パスポートをお願いします」と先ほどの女性が近寄って来た。

「今、ここでパスポート？」

二人はちょっと慌ててしまったが、どうして必要なのか分からないまま、バッグから自分たちのパスポートを取り出して女性に渡した。

「これで先に出国手続きを済ませておきます。お客様には、ラウンジからこのまま機内へ入っていただきます」

女性にそう言われて、へえええ、ファーストクラスというのは、こんな便利な事もしてくれるのかあ、と又二人で感動してしまった。

搭乗時間になり、ファーストクラスの搭乗客は先ほどの女性に誘導されて飛行機に向かった。誰もいない通路を歩いて機内に入るのだ。

飛行機はスイス航空だった。座席に座ると、回りのスペースがやけに広い。足を上に伸ばしてみると前の座席につま先も届かなかった。

離陸したのがいつだったのか分からない内に、ベルトサインが消え、私たちは機上の人となっていた。

スチュワーデスがやってきて「**Mr & Mrs** デュモン、お飲物は何になさいますか？」と訊いてきた。

「**Mr & Mrs** デュモン、お食事は何になさいますか？」

「**Mr & Mrs** デュモン、映画はご覧になりますか？」

ファーストクラスでは、乗客の一人ずつが、名前と呼ばれるのだ！

一番前に座っていた初老のインド人夫妻は、離陸してベルトサインが消えた途端、座席を倒してベッドのように平らにし（本当に真っ平らになるのである）奥様を先に寝かせてブランケットをかけてあげ、その後、ご主人が横になると、スイス到着まで食事や飲み物も一切摂らないまま、ずっと眠り続けておられた。

私たちの横にいた男性一人は、食事の希望メニューを訊かれた際、「チーズ少しとクルミとぶどうを持ってきて」と言い、飛行中、ワインを飲みながらそれだけを食べていた。

「フム・・・、ファーストクラスを利用し慣れた人たちだな」

私たちは眠るどころか、興奮して目がぱっちり開き、ファーストクラスで楽しめるものは全て楽しんでみよう、と気合いが入っていた。

私たちはベジタリアンなので肉は食べないけれど、後は何でも食べますから、とスチュワーデスに伝え、前菜から一つずつ、陶器のお皿に乗って食事が運ばれてきた。

飲み物にはシャンペンを頼んだが、ファーストクラスでは無料なのだ。

おいしい食事だった。

映画の選択も沢山あった。日本の時代劇映画もあったので、私は是非見たいと思ったのだが、それは日本往復の飛行機でしか観られないと言われて至極残念に思ったことを覚えている。

私たちは機内で観られる映画は全て観たのではないだろうか。

疲れると立ち上がって歩き、スチュワーデスと世間話をし、広いトイレでゆっくりと手を洗い、顔を洗い（外で待っている客がいないので気が楽だ）、初めてで最後かもしれないファーストクラスを堪能した。

「間もなくチューリッヒ空港に到着いたします」と言う機内アナウンスを聞いて、「もっと乗っていたい」と思ったのは、この時が初めてだ。

少し無理をしてでも、ファーストクラスにして本当に良かった。

たったの4000フランで、ひょっとしたら最初で最後になるかもしれない経験をする事が出来た。

これも、いつも目の前に現れたチャンス逃さないジョン・クロードのお陰である。

「お金はカレンシーと言ひ、回り巡ってくるものだ。溜めると腐るが、使えば回り回って又戻ってくるのだ」

これはジョン・クロードの理論である。私たち二人はその考えで今までの人生を楽しんできた。そしてこれからも、私たちは同じ理論に基づいたライフスタイルで人生を楽しんで行く。

スイスライフ

1994年4月、私たちは1年間の旅行を終えてスイスへ戻って来た。

インド滞在中に出会った友達から「スイスに戻って来た時は私の家に滞在して」と声をかけられていたので、私たちはひとまず郊外に住む彼女の家に落ち着いた。

旅行から帰って来た時に一時滞在出来る場所があるのは本当にラッキーだ。

私たちは早速アパートを探す為、行動に出た。

間もなく、チューリッヒ湖畔のクスナクトと言う町に、5～6人の若者が一緒に住んでいる一軒家（WG）があるという情報が耳に入った。

クスナクトの町はお金持ちの町と言われており、チューリッヒ湖を目の前にした家が多く建っている。

その3階建ての一軒家に、まだ一部屋が空いていると聞いた私たちは、直ぐ電車に乗って見に行った。

目的の一軒家は閑静な通りにあり、緑の庭が家の周りを囲っていた。

同居人の若者達は、それぞれが仕事を持ち、朝出かけて夕方帰ってくるまで会うことはないが、その代わり、夕方にみんなでワイワイやるのがいいらしい。みんな気楽で親切だ。私たちに見せてくれた部屋は最上階にあった。小さかったが、部屋から湖を眺められるのが気に入った。

私たちはこの部屋に長く住むつもりはなかった。

ただ、仕事を探すには住所が必要だし、まずは落ち着く場所が欲しかったのだ。それにはここは最適な場所だった。

直ぐに入居し、次は仕事探しである。新聞の求人欄から適当な所をマークし、電話をしてみる。

その方法で、今回も私たちは直ぐに仕事を見つけた。私はU銀行というスイス銀行、ジョン・クロードはスペイン銀行に勤めることになった。

正直、私は銀行勤めが好きではない。ただ、過去に銀行勤めの経験があると、必然的に次も銀行の仕事が見つかりやすい。

スイスでは、仕事が変わる度に給料が上がるシステムだ。他社から経験を積んできたと見なされるからである。

その為、若い人たちは3・4年毎に会社を変える。一度就職すると定年まで同じ会社に勤めようとする人は殆どいない。

金融関係に勤める若い人たちは、出来る限り専門学校へ行き、そしていろんな資格を取っては出世を狙っている。

この時、23歳で初めて銀行に勤める若者の初任給が4000フラン（約40万円）と聞いて私は驚いた事がある。

そんなことを言う私も、今回は月5000フランほどの給与で雇ってもらった。ジョン・クロードはもっと良い給与だった。

スイスで金融関係の会社に勤めるとお金は貯まる。

スイスの税金は給料の1ヶ月分なので、ドイツの6ヶ月分などに比べるとずっと少なく、物価は少々高いが、仕事さえ持っていればスイスは楽に暮らせる国だ。

仕事を見つけて少しお金が貯まり次第、すぐに自分たちのアパートを探そうと思っていた私たちが、居心地が良かったのか、クスナクトのWGに結局1年住んでしまった。

1年が過ぎた頃、この家の契約が切れる事になり住居者全員でこの家を出る事になった。

私たちはすでにチューリッヒのかなり郊外に素敵に一軒家を見つけていた。
郊外の斜面に建てられた家で、家の半分が地面に入った形の家だ。
家の前の広いグリーンを抜けると玄関先になり、その回りにはハーブやチェリーの木が植わっていた。
玄関を入ると、後ろ半分が地面に埋まった形の地下室が二つあった。
一つは空き部屋で、一つは洗濯場となっており洗濯機が設置されていた。
玄関横の階段を登って上に行くと、右に陽がさんさんとするキッチンとダイニングスペース、左に大きなリビングルームが広がっている。突き当たりはトイレ。
リビングから外に出ると、裏庭だった。
リビングには初めて見るスウェーデンオープンが立っていた。このオープンでピッツアを何度も焼いたことがある。
階段が更に上に続き、日本で言う3階に寝室が二つ左右にあり、トイレとバスルームはその突き当たりにあった。
階段を含めて家の中は全てカーペットが敷いてあり、広く、明るく、私たちの希望通りの家だった。というか、こんなに広い一軒家に自分たちだけで住んだ事がない私たちには夢のような家だった。
一つだけ不思議だったのは、リビングから出られる裏庭に、3mはあろうかと思われる背の高い壁がそそり立っていた事だ。
家を見せてくれた賃貸会社の人に聞いてみると、以前住んでいた女性が建てたとの事。嫌なら、彼女に取り払ってもらいますけど、と賃貸会社の人に言われて、そうしてくださいとお願いして、私たちは契約を取り交わした。
家賃はひと月3000スイスフランだった。少々高いかと思ったが、しばらくは旅行にも出かけないだろうし、こんな素敵な家だったら、何処にも出かけなくていいだろうと二人は考えた。

数週間後に鍵をもらった私たちは、キッチングッズや家具を買いに、スウェーデンの店IKEAに通った。
この店は安くてモダンな家具があり、組み立ても簡単なので私たちは度々お世話になっている。
旅行へ行く前に家財道具全てを売っているの、それこそ私たちは一から買わなければいけなかったが、新しい住居に新しい家具を入れるのは楽しい。
それに、スイスのアパートには必ず冷蔵庫、食器洗い機、洗濯機が設置されているので、これは非常に助かる。
リビングの庭にあった背の高い壁も取り払われていた。部屋の中は以前よりずっと明るくなり、外には農家とスイスの森の風景が眺められた。改めて、どうして女性が壁をたてたのか不思議だった。

玄関から入って直ぐの所にある大きな地下の一つは、ホーム・レコーディング・スタジオにするとジョン・クロードが言いだした。
一軒家の地下では好きなだけボリュームが出せるのもってこいである。
音楽製作が大好きだったジョン・クロードが初めて手にするスタジオだ。嬉しそうに準備をしていた。
彼は自分の銀行でローンを組み、楽器屋へ通っては、いろいろと買い揃えてきた。
キーボード、コンピューター・セクエンサー、ギター等々、そしてマイケル・ジャクソン

も使っていると言うマイク2本を集めて、ホーム・レコーディング・スタジオは出来上がった。

マイケル・ジャクソンが使っているマイクが1本9万円もすると聞いた私は驚いたものだ。ジョン・クロードは毎日会社から帰ってくると直ぐに地下へ降り、夕食を食べ終わると又地下へ向かっていった。

一度、私は声をかけずにスタジオを覗いてみたことがある。ジョン・クロードが自分の作ったメロディーを聴きながら嬉しそうに身体をスイングしているのを見て、私まで幸せな気持ちになってしまった。

あの当時、彼は沢山の歌を制作し、全てカセットテープに収めていたが、数年後には、それをCDに作り替えている。

彼に頼まれて、私も何曲か一緒に歌うことがあった。

歌が好きなので口ずさむことはあったが、マイクの前に立って歌うことなどなかったので、最初は緊張して声が出なかった。この当時、カラオケ等はまだなかった時代だ。

納得出来るまで、何度も、何度も歌ったが、腹から声を出して歌うという事が、こんなにも楽しいもの、こんなにも気持ちがいいものとは知らなかった。

いい経験をさせてもらった。

何事もあきらめない

住み始めたチューリッヒ郊外の家の回りには自然がいっぱいだった。
牛が放し飼いにされている平野や森が近く、お天気の良い週末には、良く散歩に行った。
我が家の直ぐ裏手には大きな農家があった。
住んでいるのは中年夫婦と、そして、そのどちらかのご両親だった。
農作業をしているのを見た事がないので、どちらもリタイヤしていたのだろう。
私たちが通りかかると、良く話しかけてきた。

「最近、引っ越してきたばかりだね」

「そうなんです、いろいろとする事があって、昨日はカーテン掛けをしていて・・・」

「ああ、黄色いカーテンね。見ていたわ」

「あっ、見ていました？」

「そう、主人と二人で見ていたのよ」

「・・・」

ある週末、私たちが住んでいる裏庭が結構広いので、禅ガーデンを作ろうという事になり、小さな池を掘り始めた。

例の裏手の農家の前を通りかかると、

「あの穴ねえ。あれね、あまり大きくすると、うちの前の道が崩れるんじゃないかと、旦那と二人で思ってたんだけどさ・・・」

奥さんが言った。

「見ていたんだ・・・」

どうもこのご夫婦、何もする事がないので隣家を覗くのが趣味のようである。

とにかく私たちがする事の全てを把握していた。

そうか、私たちの前の住人が3mの壁を裏庭に立てた理由はこれだったのか、とやっと私たちは理解した。

その日から、私たちは出来るだけ裏庭に出ないようにした。

リビングのカーテンを2重にし、昼間でも透けて見えないように気をつけた。

家の前にも小さいけれど庭があり、チェリーなどの木もあったので、夏はもっぱらそこで過ごすことにした。

そして、勿論、裏手の農家の前を通らないようにしたのは言うまでもない。

秋が来て、冬がやってきた。郊外は雪で真っ白になった。

スイスの冬は寒くて長い、家の中はポカポカと暖かく、ジョン・クロードは地下のホームスタジオを楽しんでいた。

ただ、さすがに勤務先であるチューリッヒ市内からは遠かった。

住んでいる村からチューリッヒ市内へ行く電車は1時間に1・2本しか出ていないので、私たちはチューリッヒ市内に駐車場を借りて、二人で一緒に車で通勤していた。だが、チューリッヒ市内に入る直前の所で、毎朝、渋滞に巻き込まれるのだった。

また、チューリッヒ市内の駐車場料金が1ヶ月1000フランというのも少々高すぎた。
新しく年が変わろうとした頃、私たちはもう少し市内に近い所に住もうと考え始めていた。
しばらくは行かないだろうと思った旅行も、数年後の2000年にはまた出かけたと思うようになっていた。その為にはもっと安いアパートに住み貯金をしなければいけない。
そう考えてアパートを探し始めた時、うまい具合にチューリッヒ湖近辺の町に手頃なアパ

ートが借りに出されているのを、勤めていた銀行内のアナウンスで知った。住んでいた同じ銀行内の行員が別のアパートに移るので、新しい借り手を捜していたのだ。

この町からだとチューリッヒ市内まで急行で15分、その後トラムに乗り換えて10分ほどで二人の会社にたどり着く。

早速この行員に連絡を付け、アパートを見に行った。

チューリッヒ湖の直ぐ前にあるヘーリベルグという駅で降り、少し坂を上ったところの静かな住宅街にこのアパートはあった。6件入っているだけの小さなアパートの裏には、小学校の校庭が広がっていた。アパートのリビングの外はこの校庭なのだ。

週末は学校が休みなので私たちが学生を見ることはないが、静まり返る緑の濃い校庭に若々しいエネルギーがあふれているようで、こちらまで元気になるようだった。

アパートから降りた坂の下にはチューリッヒ湖が見える。泳ぎに来る人も多いらしい。

同じ銀行の行員同士と言う事で、私たちは直ぐにこのアパートを借りる事ができた。

家賃は1ヶ月1200フラン。一軒家の3000フランに比べると半分以下だ。

残念ながら新しいアパートにはジョン・クロードのホームスタジオを入れる地下はなかったが、代わりに彼は別の町にガレージを借り、そこに楽器全てを移し替えて車で通って音楽製作を続けていた。以前のような便宜さはなかったが、全てを手に入れる事は難しい。

ジョン・クロードの勤めるスペイン銀行は、人事部長を覗くと殆どがスペイン人だった。

ジョン・クロードは管理部門に所属し、その管理部長もまたスペイン人である。

管理部長が何州の出身なのか知らなかったが、彼はものすごいスピードでスペイン語を話した。

彼が口を開くと、「ペラペラペラペラペラペラ……」としか言っていないように聞こえる。私はスペインに3年ほど住んだことがあるが、彼のスペイン語は理解不可能だった。スペインやメキシコを数ヶ月旅行し、かなりのスペイン語を話していたジョン・クロードでさえ、最初は、彼の話す事が良く聞き取れなかったと言っていた。

そんなジョン・クロードも、数ヶ月後には上司の話すことが全て理解出来たというのだから驚く。

さて、このスペイン人管理部長、仕事はものすごく出来る人で、社長よりも目立った存在だったが、同時に、食べる、飲む、騒ぐ事が大好きな人でもあった。

ジョン・クロードはこの上司から、度々、昼食に誘われたという。

連れて行かれた（ほとんどがスペイン系の）レストランでは、まだ午後から仕事があると言うのに、しっかりと食べ、しっかりとワインを飲んだそうだ。

こういう所は本当にラテン系で、四角四面のスイス人には想像もつかないだろう。

食事から帰ってくると、満腹の上にワインが回り始めて仕事が手につかなかった事が何度もあるとジョン・クロードは言っていた。

上司はタバコもスパスパ吸った人である。

この当時、会社内で喫煙するのは普通で、煙草を吸わないジョン・クロードには、タバコの煙が充満している職場内で仕事をするのは苦痛だったらしい。

それでも1年ほど我慢したジョン・クロードだが、私たちが休暇に出る前日、ジョン・クロードは管理部長と人事部長に「室内での禁煙」をメールで訴え、社員のデスク上にも同じ内容の紙を置いて出てきた。

休暇から戻ってみると、「会社内では禁煙」の指令が出ていたとジョン・クロードは大喜びしていた。

何事も諦めずにやってみるものである。

この会社の別の部署に、それこそ、四角四面のスイス人部長がいた。
彼は管理部長の真逆を行く上司で、普段から食事管理をし、アルコールは飲まない、煙草は吸わない、ジムに定期的に通い、ボート漕ぎを夏は湖で、冬は屋内でやり続けている、
言わば、健康オタクと現代では呼ぶのだろうか、そのモデルのような生活をしてきた人である。
そのモデルがある日、心臓発作で倒れた。
幸い、命に関わることはなかったが、飲む、食う大好きな管理部長が倒れたのであれば理解出来たのだが、健康オタクが倒れたと聞いて、社内みんなは驚いたそうだ。
飲み助の管理部長だけが、誇らしげな顔をしていたという。

人生、今だけ

ジョン・クロードの会社が入っているビルには60歳近くの管理人がいた。

このビルの持ち主である。

大変な金持ちらしいが、彼を見ると、つい500円くらいあげたくなるような、いつもみすばらしい格好をしていたとジョン・クロードは言っていた。

ジョン・クロードは誰とでも仲良くなれる人で、この管理人とも親しく話をしていらしい。

ある日、管理人はジョン・クロードに彼のガレージを見せてくれたそうだ。そこには、ベンツを始めとする高級車が数台、そして有名なオートバイが数台並んでいたという。

だが、持ち主の管理人がこの車やバイクに乗ることはほとんどなかった。

彼は高級車を手に入れることが趣味で、後は大事にとっておくのである。

株も沢山持っているらしく、とにかく、銀行には山のような金があるのだが、管理人は使おうとしなかったそうだ。

ある日、ジョン・クロードが自分の冒険旅行を管理人に話したらしい。

「僕はいろんな国を旅して回ったよ」

「行きたいなあ、でも、私は旅行をした事がないから、一人で行けないよ」

「僕と一緒に行ってあげるよ。銀行口座にたくさん金を持っていても、使わなかったら何も意味がないでしょう。行きたい所があれば僕が全て手配するから。あんただったら、世界中をファーストクラスで旅行出来るよ」

そう誘ってみたそうだ。

だが結局、管理人は話に乗ってこなかったという。

「テレビが壊れた。新しいのを買わないといけないよ」

ある昼休み、管理人が愚痴を言いながら買いに出かけた。

どんなテレビを買ってくるのかとジョン・クロードが楽しみにしていると、夕方、管理人が見せてくれたのは、一番小さなサイズの、それも白黒のテレビだったのでびっくりしたと言っていた。

それからしばらくした後、管理人に癌が見つかり、2ヶ月後に亡くなってしまった。

随分前に離婚した奥さんも大金持ちらしく、管理人には身寄りがなかった。

彼が貯めに貯め込んだ、銀行口座に残った大金はどこへ行くのだろう……。

金の使い方を知らなかったとはいえ、人生を楽しむ事もなく逝ってしまった管理人が不憫である。

スイスの企業は、始まるのが早い。

朝8時には、会社に入っていなければいけない。

私は朝6時に起き、朝食の準備をして食べると7時過ぎには家を出ていた。

ジョン・クロードは私よりも30分遅れて起きだし、私の用意した朝食を食べて会社に行った。

だが、夕方仕事が終わると、私たちはほとんど毎日同じ電車で帰った。乗る場所も決まっていた。

あの日も、私はいつものようにホームの同じ場所に立ち、電車とジョン・クロードがくるのを待っていた。

電車は時間通りにやってきたが、ジョン・クロードが来ない。

急な仕事でも入ったのかな、と思いながら私は一人電車で揺られて帰宅した。
夕食の準備を始めたが、ジョン・クロードはなかなか帰ってこない。
連絡の電話もないし、こうなると、少し心配になる。
夕食も殆ど整った時、「ただいまー！」と元気にジョン・クロードが帰って来た。

「どうしたの？」

ホッとしながらキッチンから出て行くと、彼は大きな紙袋を私の目の前に持ち上げた。

「何を買ったの？」

ジョン・クロードは、ニコッと笑いながら、その紙袋を私に「はい！」と渡してくれた。

「えっ、何？、こんなに大きな紙袋……。ええっ！ルイ・ヴィトン店の袋？！」

何が入っているのか予想もつかず、私は大きな紙袋を開けた。

中には更に紙袋があった。何が出てくるのか……。ガシャ、ガシャ、ガシャ……。

「ああああ……。！、以前欲しいと言っていたバッグ……」

あれは、仕事を終えてジョン・クロードと一緒に電車を待っている時だった。

「ほら見て、あの女性が持っているバッグ。ルイ・ヴィトンのバッグなのだけど、私も、もう少し歳を取ったら、あのバッグが欲しいと思っているの。ううん、今はまだいい。もう少し経って、お金が貯まったら買うわ」

私は彼にそう言ったのだ。

正に、その時のバッグを彼は買ってきていた。

「もう少し歳をとってからって言ったけど、気に入ったのなら、どうして今使わないの。待っていてもしょうがないでしょう。そう思って、今日買ってきた」

「ああ、優しい人だ……」

私は胸が一杯になった。

「ありがとう、ありがとう」

涙が溢れて来て、ジョン・クロードの首根っこに抱きつきながら、私は声を出して泣いた。
子供のように泣く私を見て、ジョン・クロードは可笑しそうに笑った。

私はジョン・クロードから沢山のプレゼントをもらっているが、これほど気持ちを揺さぶられた事はない。

もう少し年月が経ってから買うわ、と言った私だが、正直な所、今直ぐにでも欲しかった私の気持ちを、ジョン・クロードは察してくれていた。

「将来の事なんて気にしないで、今、この瞬間が楽しければ、それで十分。将来というのは、今という瞬間が続いて出来るものだから、今を楽しく生きれば、将来も楽しくなるものだ」

ジョン・クロードの理論だ。

確かに、こう考えると、とても楽である。

将来の事を、ああだ、こうだ、と考えても、どうなる事でもない。

どうにもならない事に力を注ぐより、今、やっている事を精一杯やり、そしてその瞬間を楽しんでいればいいのだ。

今が楽しければ、必然的に将来も楽しくなる。これは、いい。元々心配性である私の、お気に入りの理論になった。

忘れていた時も多いが、思い出す度に、「今を楽しんでいるかい？」と私は自分に問いかけている。

ドイツ語と肺炎

私は、スイスのU銀行に勤めていたが、部門は銀行業務と言うより株の方だった。新しいビジネスだったようで、株を借りたり貸したりしながら顧客間で利益をもうけるというビジネスである。

私はその中でアジア株の決済を担当していた。仕事上、日本はもちろんシンガポールや香港の取引先の行員達と話をする機会が多く、やりがいのある仕事だった。

会社内では、全員が、アンドレア、スーザン、キヨミなどと名前で呼び合う。

上司が私たちを呼ぶときは勿論、私たちが上司を呼ぶときも、「マルティン！」と名前を呼び捨てにする。

そうすることで、上下関係の片苦しさがなくなり親密感が出てくるのだが、スイス企業ではどこも同じだ。

この部署の最高責任者がとても日本人びいきで、私にも大変親切にしてくれた。

面接を受けに行った時も、この最高責任者が面接をしてくれた。

「ここはインターナショナルの仕事をしている部門で、みんな英語を話すから、ドイツ語の心配はしなくていいよ」

と言ってくれたのが、この仕事を引き受けた理由の一つである。

しかし、いざ職場に入ってみると、私の部門では英語が飛び交うのだが、内線で受ける電話は、ほとんどがドイツ語（正確にはスイスドイツ語）だった。

スイス生活も長くなった私は、一応ドイツ語を話したが、職場で使うビジネス用語が出てこなくて苦労した。

それを見かねた最高責任者が、私にドイツ語学校へ行くように勧めてくれた。

いくつかのクラスがあり、検定試験に受かると世界的に認められている合格証明書がもらえるという。

「試験に受かると学費は全て会社が負担する、もし受からなければ、半額は自分負担」と言われた。

さっそく、会社の近くにある語学学校へ面接に行き、簡単な筆記と口頭でのレベルチェックを受け、クラス配置を決められた。

クラスは初級から、A1、A2、B1、B2、C1、C2、とあり、私はB2のクラスになった。

私は残業が嫌いなので、仕事の後に学校へ行くようなこともしたくない。

仕事が終われば、直ぐに家へ飛んで帰りたいのである。

そこで、週に2回、昼休みを2時間として授業を受けることにした。

1授業は45分で、間に15分ほどの休憩があり次の授業に入る。

昼食のサンドイッチを食べる時間もほとんどなかったし、授業が午後に食い込む事もあったが、会社の勤務時間はフレキシブルだったので、これは問題なかった。

その分、別の日の昼食を半時間にしてみたり、たまには1時間ほどの残業をして調節した。教室は生徒5人ほどのクラスで、それぞれの生徒に先生の目が行き届き、他の生徒の質問も刺激になって、義務教育の学校以来、何年ぶりの授業は楽しかった。

そうやって半年ほど通った学校の検定試験が、ある日、別の町で開かれた。

ゲーテ・インスティテュート主催による検定試験だ。試験は筆記試験、リスニング試験、そして口頭試験の3種目で行われた。

ドイツ語学校の授業料が20万円だったのか30万円だったのかもう覚えていないが、私は試験を目の前にしながら、試験に受からないと会社が授業料を全額払ってくれない、とそれだけを心配していた。

筆記試験は、答えがいくつか並んでおり、その中から正しい答えを一つ選ばば良かったので簡単だったが、リスニングと口頭試験はかなりの集中力を要した。

そしてその試験の結果は後日郵便で知らせてきた。届いた大きな封筒の中に「ゲーテ・インスティテュート合格証明書」が入っているのを見た時はホッとした。

証明書の裏面には試験の成績も書かれており、私は合格ラインの少し上をクリアしていた。誇らしげに持って行くほどの成績ではなかったが、会社に授業料を全額支払ってもらう為、私は最高責任者の所へ合格証明書を見せに行った。

「おおおー、よく頑張ったなあ！」

試験を受けるように勧めてくれた彼は責任を感じていたのか、大げさに喜んでくれた。

私も責任を果たせて嬉しかった。

あれは、帰宅する為にチューリッヒ駅から乗った電車の中だった。

時期は冬で、コホン、コホン、と咳をする人も幾人かいた。

電車内は暖房でモーッとし、空気が少々重いなあと思いながら私は座席に座って窓の外を眺めていた。

身体的位置を変えようと大きな息をひとつしたその瞬間だった。目に見えない重い何かが、口の中を通して肺の中にすーっと入り込むのを感じた。

途端に、私は気分が悪くなった。しまった、風邪のウイルスに入られたとすぐ思った。

数分前までは元気だった身体が、急に熱っぽく、だるく、座っているのも億劫になった。

威勢のいいウイルスらしい。

自分の駅に着き、家までの上り坂を私は必死で歩いて帰った。

悪い事が続いた。

私が帰宅した直後に、ジョン・クロードも「気分が悪い・・・」と帰って来た。

二人で一緒にベッドへ倒れ込んだ。

普段から風邪を引かず、引いても熱が出ない私も、この時はジョン・クロードと一緒に高い熱を出した。

翌朝、それぞれの会社に「休みます」と電話を入れ、赤い顔で死んだように横たわっていた。

それでも何か食べないと回復しない。私は料理をする気力もなく、ジョン・クロードもフラフラしていたが買い物に行ってくれた。

彼も相当に気分が悪かったのだろう、普段は買わないようなものを買って来ていて、二人で苦笑した。

それから数日経っても私の熱が下がらず、町にある医院へ行ってみた。

「肺炎を患っていますよ」

「へっ、肺炎？私が・・・？」

「抗生物質を飲まないといけませんね」

「ああ先生、私、抗生物質は、出来れば飲みたくないのですが・・・」

「いいですか、医者は患者の身体に良くない物を渡したりはしません。今、あなたが抗生物質を飲まないで、熱は下がらないし、症状がもっと悪くなりますよ」

医者から脅かされた形で、私は人生で初めて抗生物質を飲んだ。

良かったのか、悪かったのか、熱は下がったが、それからの1ヶ月間、私は便秘で苦しんだ。

医者から、2週間は家で静養するようと言われていたが、仕事が気になり、午前中だけだったら大丈夫だろうと欠勤6日目に重い身体を引きずって出勤した。

その時の私の上司は、私よりもずっと若いスイス人女性だった。
彼女は数カ国語をすらすらと話し、誰に対しても威勢が良かった。
女性と言う事で、私は彼女に親しみを感じ、仕事以外のことでも親しく話をしていた。
私は医者からもらった診断書を彼女に見せ、ここ数日は午前中だけ仕事をして帰りますと
伝えた。
診断書を受け取った彼女は、書面をじっと見ていたが、電話に手をかけながら、
「この診断書が正しいものかどうか、ちょっと、医院に電話で確かめるわね」
と言いながら、私の目の前で診断書に書かれている電話番号を押しだした。
彼女のしている行動が信じられなかった。
今まで親しい付き合いをし、私の真面目な仕事ぶりも見てくれていると思ったのに、彼女
は私が偽の診断書を持って来たとも思っているようだ。
「はい、OK。診断書の正しい事が分かったわ。これも、職務なのよ」
電話をし終わった彼女は笑顔でそう言ったが、私は笑えなかった。
予定通り午前中で仕事を終わり、彼女に「これから帰ります」と伝え、と、「えっ、もう
帰るの?」と言われた時は、ぐったりしてしまった。

盲腸で入院

普段からあまり病気になる事はないし、風邪を引くのも稀な私だ。

ところが、この会社に勤めている間、肺炎以外にもう一度病気になった事がある。

あれはクリスマスが近づいていたときである。

私と一緒に仕事をしていた女の子が、クリスマス休暇を2週間続けて取った。

12月は新年の前に仕事を済ませておきたい顧客が多く、とても忙しくなる月だ。

しかし、休暇を取るのは彼女の自由。

「いい休暇を過ごしてねー」、と私は彼女を送り出した。

ところが、クリスマス1週間前から、月末でも経験した事がない程の忙しさになった。

海外からの伝票がひっきりなしにデスクの上に放り込まれてくる。

残業はできるだけ避けたい私は、朝から夕方まで、必死にデスクに向かって仕事をした。

昼食を食べに行かなかった日もある。

夕方、最高責任者のマルティンが通りかかり、

「今日、昼食を食べなかっただろう。知っているよ。忙しいだろうけど、身体に気をつけろよ」

と声をかけてくれた。

その日、12月24日も、私は目が回るほど忙しい仕事を済ませて帰宅した。

私とジョン・クロードはクリスチャンではないので、我が家でクリスマスを祝う事はなく、

24日の夜もごく普通のベジタリアンの食事をし、ソファでくつろいでいた。

夕方遅くなった頃、私の腹部が突然痛くなった。その痛みは急激に増して行った。

痛くて、痛くて、立ってもいられない、椅子にも座れない、ましてやベッドに横になる事も出来ないほどだった。

私は身体をくの字に曲げながら、壁にもたれて痛みを耐えた。

「もう少し様子を見てみよう。明け方になっても痛みが引かないなら救急病院に連れて行くから」

ジョン・クロードが心配そうに言った。

私はベッドに腰掛け上半身を壁にもたせかける格好で明け方を待ったが、腹部の痛みは引かなかった。

外が白々し始めたとき、ジョン・クロードは私を車に乗せ、チューリッヒの救急病院に走り込んだ。

シーンとした受け付けに行き、私の様子を伝えると、しばらく待たされたが、

まもなく一人の医師がやってきて、私とジョン・クロードを診察室に案内した。

私を診察台の上にさせると、医師は激痛がする私の腹を押しながらいろいろと質問をしてきた。

最初に「昨夜は何を食べましたか」と訊いてきた。

何しろクリスマス時期だ、普段と違うものを普段以上に食べてしまったのだろう。

「私はクリスマスだからと言って、特別なものは食べていません。ベジタリアンですから野菜中心の食事でした」

そう答えた。

更に、「便は出ましたか」などといくつかの質問をされた後、別の部屋に移動させられた。

医師からの質問はもちろん全てドイツ語で、専門用語を使った質問も中にはあり、「良くあれだけの質問に答えられたね」とジョン・クロードが感心していたが、必死の時にはどうにかなるようだ。

別の部屋には私だけが入り、医師はかなり長い時間、腹部のエコー検査をした。

しばらくすると、医師が何も言わずに診察室から出て行った。

私のお腹は表に出たまま、エコー検査でつかわれたジェリーでヌルヌルしている。

家で襲ってきた激痛は少し引いてはいたが、病院の診察台で腹を出したまま横になって待っているのは、あまり気分のいいものではない。

そこへ、今度は別の医師が部屋に入ってきた。そして、その医師は先ほどの医師と同じようにエコー検査を始めた。ヌルヌルと、私の腹部を探り回っている。

「失礼ですけど、先生。実は、先ほど別のお医者さんが、あなたと全く同じ事をして出て行かれたのですが・・・」

同じ診察を繰り返す医師が少し不安になった私は、思いきって言ってみた。

「あっ、先ほどの先生が、私にもチェックするように言ってきたのです」

二人目の医師は丁寧にそう言って、エコー検査をし続けた。

「あっ！あった、あった、見つけたぞ。これだ。実は、先ほどの先生が、盲腸が原因で痛みが襲ったのだろう、と思ったらしいのですが、それを確かめる為に、私にもエコー検査をお願いされたのです。はい、見つかりました。・・・って、直ぐに手術をする必要があります」

「直ぐって、いつですか？」

「1時間か、2時間後です」

「えっー！」

私は外で待っているジョン・クロードに伝え、着替えなどを持って来るようにお願いした。それから、同僚達が会社に出てくる時間を見計らって、チームリーダーに電話を入れた。チームリーダーは若い男の子だったが、私よりも先輩で、私の仕事を良く理解していた。同僚がクリスマス休暇を取っている為、私の出来なくなった仕事は彼にしてもらわなければいけない。彼も別の仕事で忙しくしていたはずだが、明るい声で引き受けてくれた。病室のベッドの上で2時間ほど待っていると、私は本当にそのまま手術室に連れて行かれた。

手術室へ運ばれるベッドの上で、「ジョン・クロードと話がしたかったな」と少し思った。運ばれた手術室には数名の医師がおり、軽い音楽がかかっていた。医師達の雰囲気は穏やかで、私の緊張も少し解けた。

ベッドから手術台に移ると、看護婦がてきぱきと準備をし、麻酔担当医が私の横に立った。

「名前は？」

「キヨミです」

「オッケー、キヨミさん、じゃあ、行くよー」と軽い乗りで言い、私の腕に麻酔注射をし、口にもマスクを付けた。

手術執刀医達が、「オッケー、それでは、行ってみようかー」と冗談のように言っているのが聞こえて、それから私の記憶はなくなった。

「デゥモンさん、デゥモンさん、分かりますか？」という声で私は目を覚ました。

手術後、まだ意識がはっきりと戻らない私に、看護婦がそう呼びかけている。

「手術はうまく終わりましたよ。盲腸だと言う事でしたが、実は盲腸ではありませんでした。右の卵管の外側に液が流れていて、それが原因だったようです。液を調べましたが、別に菌もついてなくて、大丈夫でした」

盲腸ではなかった。

2人の医師が長い時間をかけてエコー検査をした結果、盲腸と誤診し、私のお腹にメスを入れた。スイスの病院でも、こんな間違いがあるのかと驚いた。

後で分かった事だが、激痛はどうもストレスが原因だったらしい。忙しい時期に二人分の仕事を一人でやっていたのがストレスになったようだ。

ストレスはいろんな病気を引き起こす。心の病でもあり、怖いな、気をつけないといけな
いな、とつくづく考えさせられた。

術後3・4日たった夜だった。寝返りを打った拍子に、腕に刺していた点滴の針がとれて
しまった。

私はナースコールを押して、看護婦を呼んだ。

看護婦は直ぐにやってきたが、針を刺し直しすとさっさと行ってしまった。

ホッとして点滴の管を見ていた私は、カッーと身体が熱くなった。管の中に空気の泡が一
つ入っていたのだ。

その空気の泡は、点滴の液が少しずつ血管の中に入る度に、針が刺さっている手首の方へ
と近づいて行く。

少しでも空気が血管の中に入ると、それが心臓まで達して死に至る、と聞いた事がある。

私は血の気が引いた。慌てて、又ナースコールのボタンを押した。

看護婦が、はい、はい、と言うようにゆっくりとやって来た。

「見てください、管に空気が入っていて、身体に入ろうとしています」

「ああ、そんな小さな空気の泡では死なないわよ。心配しないで」

そう言うと、看護婦は行ってしまった！

「ええええ・・・ちょっと待って・・・」

私は空気の泡が次第に手首に近づいていくのを見ているしか術がなかった。

ひょっとしたら死ぬかもしれない。その恐怖に、身体は熱くなり、血の気が引き、耳の中
がウワン、ウワンと唸りだした。

そこへ突然、先ほどの看護婦がやってきて

「まあ、心配みたいだから、抜いてあげるわよ」

と言いながら、空気の泡が殆ど手首に入ろうとした直前で、プシュッ、と水道の栓をひね
るように抜いてくれた。

私は身体の力が抜けた。

ストレスで痛みを覚えてただけなのに、それを盲腸だと誤診されてメスを入れられ、点滴で
間違って空気が身体に入り、ひょっとしたら私は死んで病院を出てきたかもしれない。

「いつか又病気になっても、絶対に病院には運ばないでね」

後日、私はジョン・クロードにそうお願いした。

人生、いつ、何が起こるか分からない。

結局、私は2週間病院生活を送り、すっかり元気になって退院した。



プチバカンス

1997年頃、ジョン・クロード一人の給与で二人が十分に暮らして行けるようになり、私の給与は全て貯金した。

その間、大きな旅行には行かなかったが、年20日間ある休暇に土曜日と日曜日を加えて、数週間のプチバカンスを2・3度楽しんでいた。

一度、昔3年間住んでいたイタリアのサルディニア島の漁村へ行ってみるようになった。20年ぶりの再訪になる。

車でチューリッヒを出発してイタリアに入り、チヴィタアヴェッキアからフェリーでサルディニア島のカリヤリの港に着き、そこから一気にヴィラシミウスという漁村を目指して南下する。

20年前はバスを使ってたどり着いた所を、今度は自分たちの車で向かっていることに年月の経過を感じた。

力強い太陽の下、車はくねくねと海岸線を走り続け、道路から見える真っ青な海と透き通った碧色の海に、二人は何度も歓喜と驚きの声を上げた。

海の美しさは、20年前と殆ど変わっていなかった。

あっという間に着いた漁村ヴィラシミウスは、中心広場の変化はあまり見られなかったものの、海際にカラフルなホテルや民宿、レストランが沢山建ち並び、町の雰囲気は変貌していた。

私たちはキャンプ場に滞在するつもりで、スイスから大きなテントを用意してきていた。そのキャンプ場も昔は存在しなかったものだ。

「昔住んでいた古い家を見に行こう。まだ存在するのかどうか見てみたい」

テント生活2日後、私は待ちきれなくなりジョン・クロードを誘った。

町の広場から出発し、記憶をたどりながら古い家の方向へ歩いて行った。

20年前、何度となく通った道が目の前に広がり懐かしくなった。

昔、道の左にあったレストランがそのままあり、偶然なことに、その入り口に、その時のオーナーが立っていて驚いた。

少し歳を取っているが、顔は忘れない。

オーナーも私を見た途端「あっ・・・！」という顔をし、にこーっと笑ってくれた。

昔の私はペーターの後ろばかりを歩き、人と話をする機会もなく殆ど目立たなかった存在だと思っていたのに、オーナーはちゃんと私を覚えていてくれたようだ。

道の途中で別の若い男性に会った。彼も又私を見て、「あっ！」と言う表情をし、ニコッと笑ってくれた。

彼は小さい男の子だったはずなのに、覚えているのだろうか。

私の気分はだんだんと高揚してきた。

更に遠い記憶をフル活動して前に進んで行った。

「ここを右に曲がって、少し行くと、そこを左のはず・・・、ああああっ、あった！」

低い壁の向こうに、3年間住んだ小さな家が見えてきた。

私の胸は懐かしさで一杯になった。

「あれが寝室で、その横に、窓がない真っ暗なキッチン、その向こう側に暖炉があり、その横が後に私の寝室になった部屋。これが、後でくっつけたシャワールーム。

ほら、ほら、目の前にある洗濯石、ここで私はいつも洗濯をしたのよ。この井戸から水を汲んで・・・」

親しくしていた隣の夫婦は、何処かへ移動してしまっただけで、家が荒廃していた。

いろんな事が頭に浮かび、あれや、これや、とジョン・クロードに説明していると、急に誰かが私の名前を呼んだ。

聞き間違いだろうか。周りをキョロ、キョロと見回していると、今度は上の方から声がしてきた。

見上げてみると、なんと、この小さな家を貸してくれた家主のマリアが、一杯の笑顔で私の方を見ているではないか。

信じられなかった。まさか彼女に再会出来るとは・・・。

彼女は直ぐに私たちを彼女の家に招待してくれた。

「私の事が分かったの？」

「当たり前よ、すぐに分かったわよ。キヨミの横にいる人は、旦那さん？」

「そう、ペーターとはあれから5年後に別れて、それからずっとこの彼と一緒になの」

「ああ、ペーターと別れたとは、いいことをしたわ。キヨミが一人だったら、もっとお友達になれたのに、ペーターがいたばかりに、あまり親しくなれなくて残念だったのよ。今一緒にいる彼は、優しいよね」

「そう、とっても優しい人なの」

「うん、見れば直ぐに分かるわ」

ペーターはどんな人とでもうまくやっているとと思っていたが、思ったほど好感を持たれていなかったのかもしれない。

画家気質が災いしたかな、と私は思う。

それからマリアは、直ぐ隣に住む、昔、友達だったジョバンナに連絡を入れ、そして瞬く間に、大きな歓迎会のようなものが開かれてしまった。

昔住んでいた小さな家の半分は、今はアパートとして旅行者に貸していた。

私たちがキャンプ場にテントを張っていると言うと、すぐに、このアパートに移りなさい、

とマリアに言われてしまい、キャンプ場も楽しかったが、せっかくのご好意なので彼女のアパートに移ることにした。

それからの数日間、あちら、こちらで、私の事を覚えてくれている人がいて、正直驚いた。20年ぶりの漁村は賑やかな旅行地に変化はしていたが、人びとは昔のまま素朴で、暖かった。

イタリア人でさえ、「サルディニア島の住民は、本土のイタリア人とは違い、難しい所がある」と言うが、私の接触したサルディニアの人たちは、温かいハートを持った、大変に親切で、楽しい人たちばかりである。

サルディニア島は、私の人生に大きな印象を残した場所の一つである事は確かだ。

イタリア本土へ戻る前に、私たちはサルディニア島を縦断して北上し、有名だと聞いていたリゾート地コスタ・ズメラルダに行ってみた。

リゾート地らしく素晴らしい環境だったが、周りの海が汚れていたのにはがっかりした。観光地として繁栄するのはいいが、それに比例して海が汚れて行くのは悲しいことである。ヴィラシミアスもそうおならないように願っている。

休暇では、ジョン・クロードの故郷であるフランスへも度々行った。

パリなどの観光地の他に、彼の生まれた町トゥールへは、何度も行っている。

トゥールはロワール川が町の真ん中を横切る、大きな町である。

ここロワール地方は、15世紀に政治や文化の中心となった地で、王侯貴族たちが競うようにして建てた大小さまざまな城がある事で有名だ。

私もジョン・クロードの両親を訪ねて行った際には、必ず、有名な城巡りに連れて行ってもらった。

シャンボール城、ブロワ城、シュヴェルニー城、アンボワーズ城、シュノンソー城、ヴィランドリー城、ロシュ城などはトゥールの町から近い。

旅行者が殆ど来ない、小さな村にある城も魅力的だ。

ロワール地方に貴族が多かった事から、この地域に住む人たちがフランスの中で一番美しいフランス語を話すらしい。

初めてジョン・クロードの両親に会ったとき、私はごく普通に義母を「マモ」、義父を「パパ」と呼んだ。

後日、「キヨミが自分たちの事を「お母さん」「お父さん」と呼んでくれて嬉しかった」と両親が喜んでいたよ、とジョン・クロードから教えてもらった。

私にはごく普通の事だけど、それでは、フランスでは義理の両親をなんと呼ぶのだろうか。その答えをある日見つけた。ジョン・クロードの弟家族の家へジョン・クロードの両親と一緒に行った時である。

ジョン・クロードの弟の奥さんは、義理の両親を「マダム・デュモン」「ムッシュ・デュモン」（デュモンはジョン・クロードの名字である）と呼んだのである。

なんて他人行儀な呼び方ではないか。

ジョン・クロードの弟夫婦は結婚して数年が経ち、子供もいる。

それなのに、未だに名字で呼びかけている。

それこそ、初対面の私から「お母さん」「お父さん」と呼ばれたジョン・クロードの両親は、さぞ面食らったことであろう。

父と弟のスイス訪問

チューリッヒ湖近くのアパートに住んでいる年、父と弟と一緒にスイスへ遊びにやってきた。

父からは何度か手紙をもらっており、「本当なら一人で行きたいのだが、龍夫（私の弟）と一緒に行くと言うので、しかたがない、二人で行きます」と書かれていた。

父と弟は、昔から相性が悪かった。

弟は母っこで、母にはとても甘えていたが、外に出ると学友を殴って泣かせる困った子で、度々、母は手みやげを持って謝りに行き、父からは水をかけられたり、平手打ちをされたりとお仕置きをされていた。

弟は、勉強が嫌いな代わりに、小さい頃から手先が器用で、飛行機や車などの模型を買ってもらっては綺麗に組み立て、出来上がれば、今度はそれをバラバラにしていくのが好きだった。

勉強が嫌いなので、高校へは行かずに車の修理工場で働きたいと願ったが、父から反対され、仕方なしに M 電器へ勤めた。

その後、M 電器を辞め、K 製作所へ勤めて営業部長にまでなったようだが、弟の願い通りにさせておけば、30か40代で修理工場の一つや二つは持っていたかもしれないと思うと、父のエゴでやりたかった事を諦めさせられた弟が可哀想になる。

そんな事もあり、父と弟はあまり仲が良くなかった。

二人が来ると言うので、私とジョン・クロードもその日に会わせて休暇を取り、あちらこちらを見せてあげようと計画を立てた。

弟の都合で、たった1週間しか休暇を取っておらず、正味5日間の滞在だった。

二人が到着した日は素晴らしい晴天で、到着して直ぐだったが、私たちは二人をアルプスに連れて行った。なにしろスイスの天気は変わりやすい。行けるときに行っておいた方がいい。

グリンデルワルドに到着してホテルに荷物を置いた後、ケーブルカーで山に登り、そこから目の前にあるアイガーの北壁を見てもらった。

山の雄大さ、人の少なさ、空気の良さ、山の街の可愛い雰囲気二人とも感激し、すっかりリラックスしてくれたようだった。

その日はグリンデルワルドの小さなホテルに宿泊したのだが、翌朝、二人の部屋に行ってみると、二人ともドアに鍵をかけずに爆睡していた。弟の方はドアも少し開いた状態で、貴重品の入ったバッグが枕元においてあった。

日本は平和だからこんな事が出来るけど、外国では気をつけてね、と二人に後で伝えた。

休暇3日目、アルプスから家に帰って来た翌日、会社に電話を入れていた弟が

「仕事が忙しそうだから早めに帰ろうかと思うんだけど」

と言いだした。

「たった1週間しか休暇を取っていないのに、早く帰ろうなんて、バカなことを言わないの！」と私は弟をたしなめた。

弟はしばらく考えていたが、そのまま休暇を続ける事にしてくれた。

それならば、と直ぐに又みんなで出かけた。

この日は、ドイツに隣接するシャフハウゼン州にあるラインの滝を見に行った。

この滝はライン川の源流になり、大きさもすごいけれど、その流れ落ちる水の音は遠くからでも聞こえてくるほどの爆音である。

滝の直ぐ近くにテラスが張り出ており、そこに立つと滝の水しぶきをもろに受ける。

父も弟も水しぶきを受けながら大喜びだった。
そんな二人を見て、私も喜んでいただけ、昼食後、二人の様子がおかしくなった。
歩きながら、二人が言い合いをしているのである。
最初は放っておいたが、その内に、ジョン・クロードも気がつくほどの言い争いになった。
スイスに来てまで、喧嘩をするとは……。私は頭にカチンと来た。
言い争いをしている二人のところに行き、言った。
「どうして二人で喧嘩をするの！ジョン・クロードまで気まづくなっているじゃないの。
ジョン・クロードだって毎日仕事に行って、やっと取った休暇なのよ。その休暇を二人の
為に使っているんじゃないの。そんなに喧嘩をするのなら、スイスに来てほしくなかった
わ！」
私のきつい言葉を聞いた二人は、急に静かになった。
「ごめん、ごめん」「わるかったなあ」
弟も父も謝ってきた。
「せっかく二人で一緒に来たのに、喧嘩しないでよ。スイスに来てくれて、私も嬉しいん
だから。やっと家族が揃ったんじゃないの」
と今度は優しく二人に言った。
それから二人の態度が急変した。言い合いをしていたのが嘘だったように、とても仲が良
くなった。優しくお互いに話しかけ、冗談を言い、笑いあっている。
そうそうこの調子。なんと言っても、昔は家族4人で仲良く過ごしてきたのだ。
男同士で見栄があり、つい、我を通したくなることもあるのだろうが、親子の絆は強いのだ。
ひょっとしたら、二人のまとめ役であった優しい母が亡くなってしまい、二人とも寂しか
ったのかもしれないと、ふと思った。
休暇の後半は、チューリッヒを含め、いくつかの市内を案内し、日本の家族への土産を買
ってもらった。
あれから父と弟はずっと仲良くしている。日本に帰ってもこのままでいてほしい。
いよいよ明日は出発、という夕方、弟が「煙草を吸ってくる」とアパートの外に出て行っ
た。
春後半から夏にかけてスイスの夕方はいつまでも明るい。
しばらく帰ってこないで、様子を見に行ってみると、弟は近くのベンチに座って煙草を
吹かしながら、ぼーっと遠くの景色を見ていた。
近寄って行くと、
「ああ、ここは静かでいいなあ。ものすごくリラックスするよ。こんな所に住みたいな
あ……」
とポツリと言った。
仕事の為に、早く日本へ帰さなくて良かった。
弟が外国旅行をしたのは、しかし、これが最初で最後になった。

次の年、父が又スイスへ行きたいと言ってきた。
弟は仕事があり、一緒に行けないらしい。
それでは、ツアーを利用してくればいい。ツアー客と一緒にチューリッヒ空港まで来てく
れれば、後は私たちが迎えに行き、そして帰国するときは、スイスでもフランスでも、出
発の空港まで私たちが送って行くからと伝えた。
年金をもらっているので、お金はあると思ったが、私は初めて父に20万円を送金し、こ

れで航空券を買うようにと伝えた。

間もなくして父から手紙が届き、父が80歳を過ぎている為、一人旅では航空券を売って
くれないと書かれていた。

娘が空港まで迎えに来てくれると言っても駄目だったらしい。

残念だった。父の歳からして、これが外国へ出かけられる最後のチャンスだったかもしれ
ないのに、彼の夢は叶えられなかった。

しかたがない、送ったお金は好きなように使ってくれたらいいからと手紙に書いて出した。
父は自分の趣味である釣り用具に少しは使ったようだが、残りは、殆ど孫達に使ってしま
ったらしい。

新しい人生への出発

1998年後半、私たちは新しい人生計画をたてていた。それは、イギリスに住むことである。イギリス西部の町で各種のコンファレンスをオルガナイズする会社がスタートすることになり、私たちもその企画に参加しようと思ったのである。

住む場所はすでに決まり、それに向けて準備をしていた。

今度は大好きな英語圏である。言葉の問題がなくなると喜んだ。

1999年の春、その計画が達成近くになった為、私たちは再び会社に退職願を出すことにした。

3ヶ月後の6月末が退職日になった。

ジョン・クロードが例の豪快な管理部長に退職願を持って行くと、管理部長はとても残念がったようだ。

「僕も来年は定年退職だ。その後釜を是非、君に引き継いでもらおうと考えていたんだけどな」

管理部長になれば給料もグンッと上がったはずだが、ジョン・クロードはそんな事にちっとも興味がないのだった。

さて、私の場合、退職願を持って行く前に、一つする事があった。

それは、私の上司に、面と向かって一言、言うことであった。

1年ほど前、私は部署を変わり、上司も若い男性に変わっていた。

この上司、私よりも若かった。私の方が年上なので、上司にしてみれば扱いにくい部下だったのかもしれないが（いや、そうではないと思う）、とにかく、彼と私の波長は合わなかった。だが、これは性格の違いでどうしようもない。

ただ、新しい部署で、私が毎月末作成した報告書を、彼が自分で作成したようにトップ管理者達に報告し続けたことは理解し難いことだった。これが会社のやり方だとは分かっている、私の気持ちは治まらなかった。

そんな彼の理解出来ない部分を、私は休憩や昼食時になると友達と一緒に陰口を叩いていたのである。

それだけではない、家に帰るとジョン・クロードにもぼやいていたのだ。

「嫌な気持ちにされた本人に直接訴えないで、友達と陰口を叩いていても何も解決しない。会社を辞める前に、はっきりと上司に君が理解出来なかった気持ちを伝えてスッキリするべきだ。それをやるまで、辞めちゃいけない」

半分冗談だったのか、いや、本気だったのだろう、ジョン・クロードはそう言った。

ジョン・クロードの言う事が正しいのは良く分かっていた。

私だって上司に直接言いたい気持ちはいつもあった、ただ、やはり直接言うのは怖かった。しかし、いったい何が怖かったのだろう・・・？

スッキリと会社を退職する為に、私は上司と話をする機会をうかがっていた。

そして、その日が急にやってきた。ある昼食前、気がつけば、部屋には上司と私しかいなかった。

今だ、このチャンスをつかまなければ。

急にドキドキし始めた。本当に、何が怖くてこんなに動揺するのやら・・・。

「この恐怖（動揺）を乗り越えないで、辞められるものか」

私は、さっと上司の方向に身体を向け、「ちょっといいですか」と話し始めた。

心臓がドキ、ドキ、と高鳴り身体が震えたが、最初の言葉を押し出した。

上司の嫌だったところを一つずつ言ってもしょうがない、きっとそれが彼の性格だったのだらうから。しかし、私の仕事を彼の仕事のように報告し続けていた事だけは、どうしても許せなかったのもので、それをゆっくりと説明した。

上司はびっくりした顔をしながら聞いていた。

そして、私の話が終わると、こう言った。

「いやあ、君がそんな風に思っていたなんて、気がつかなかった。申し訳ない事をした。君の名前を書かないで報告した事は本当に悪かった。ごめんなさい」

素直に謝られて、ちょっと拍子抜けした。

「よしっ、これで辞められるぞ！」

ジョン・クロードから遅れて数週間後、私は退職願を出した。

退職してしまえば、一度イギリスに渡り、下見をした後、全てを片付けてイギリスへ移り住む予定であった。

住んでいたスイスのアパートも、すでに賃貸解約届けを出していた。

ところが、急に納得できないことが見つかり、退職直前、「イギリスに移り住む計画」に片足を入れた所でキャンセルを入れてしまった。

さあ、どうしよう。イギリス行きの計画が無くなってしまった。

正直、二人ともすっかり気が抜けてしまい、1週間ほど殆ど口もきけなかった。

二人の人生で、本当に大きな転換になったかもしれない計画が、すばっと目の前から消えてしまったのである。

心を落ち着ける時間が必要だった。

先ずは退職してしまおう。そして、一度、インドへ行き、そこでどうするかを考えよう。

1年半ほど私の給与全てを貯金してきたので、銀行口座には1000万円近くある。

しばらくは、ゆっくりできるだろう。

その前に、日本行きの航空券をすでに購入していたので、先ずは日本行きだった。何もかも忘れるのには、ちょうど良い小旅行になる。

6月末でアパートを引き払い、ジョン・クロードが音楽製作の為に借りていたガレージにいくつかの家具や（殆どの家具や食器などは、次に入る人に格安で売り渡した）持ち物を運び込んで、日本へ飛び立つまでの間、友達の家数泊した。

1999年7月、私たちは日本3週間の旅へ飛び立った。

日本に到着し、最初に父と弟家族が住む家を訪問した。

前回と違い、雨にも降られず、家族全員であじさいの綺麗な花を堪能した事を覚えている。いつものように、家族には大歓迎されて、有り難かった。

数日後、私とジョン・クロードが幼なじみの住む宇都宮へ向けて出発するとき、今まで泣いた事がなかった弟が初めて泣いた。

「お姉ちゃん、又会えるかな」

見ると、大きな身体をした弟の顔が涙でくしゃくしゃになっている。

「又会えるわよ」

そう言いながら私は弟をハグしたが、まさか、これが弟を見る最後の日になるとは、思いもしなかった。

宇都宮に住む幼なじみの家を訪問するのは、私もジョン・クロードも2回目だった。

訪問2日目に、ジョン・クロードが、次の目的地、修善寺に一人で行きたいと言い出した。

「君は幼なじみともう少しゆっくりしたらいい。数日後、修善寺で会おう」

ジョン・クロードを一人で行かせるのは少々心配だったが、若いときは一人で、それこそ世界中を旅しているジョン・クロードである。宇都宮から修善寺までの一人旅も、日本語は出来ないけれど心配はないだろうと送り出した。

後で聞くと、宇都宮の駅で切符を買う所から駅員さんに助けてもらい、電車の中では、おばあさんに降りる駅を教えてもらったりして、難なく目的地に着いたらしい。

数日後、私が修善寺の駅に着くと、彼が車で迎えにきていた。

「もう修善寺の事は何でも知っているよ」

そう言いながら、彼は修善寺の温泉地や見事な竹やぶなどの案内をしてくれた。旅慣れた人だ。

それから数日間、修善寺を車で堪能した後、私たちは大阪から飛び立つ前に京都へ寄った。京都は二人とも大好きな町である。

京都観光も終わり、いよいよ日本を出る日がやってきた。

弟の家を出るとき、父に、もう一度寄るから、と言ったのだが、それが出来なくて、関西空港近くのホテルから電話を入れた。

「ごめんね、寄ると言っておきながら寄れなくて。又、会おうね」

「そうかい、残念だけど、しょうがないね。あのね、ジョン・クロードはとってもいい人だから、喧嘩しないで、いつまでも仲良くするんだよ。分かった？」

父の優しい気持ちが嬉しくて涙が溢れ出した。私は父との約束を守り続けている。

スイスに帰り、自分たちの荷物を保管しているガレージに車を持って行った。

一旦インドへ出発すると、帰ってくるのがいつになるのか分からない。車のバッテリーを抜く事にした。

修理工場の人に教えてもらった通りにバッテリーを抜いてみると、ヒューン、と小さく唸って車が眠った。あっ、すごい！

このまま、私たちが帰ってくるまで眠り続けてね、私たちの相棒、日産プリメーラ。

また会う日まで！

インドで知った弟の死

1999年8月、私たちはインドへ出発した。
インドのプーナ瞑想センターに到着すると、私の為にボランティアの仕事がすでに決まっていた。行くことを伝えていた友達が、勝手に決めたいらしい。
私はチェックインカウンターの責任者の仕事を任されることになった。
責任者などと言う柄ではない事を私自身が一番知っていたが、回り中から「適職だ」と言われて、それではと挑戦してみることにした。
私は小さい頃から、沢山の子供たちの中で遊ぶ事がなかった。いつも一人、もしくは幼なじみと二人だけで遊ぶ事を好んだ。社交的ではなかったのである。
沢山の人の人中にいるのも苦手だった。それは大人になってからも同じである。
チェックインカウンターの責任者になると、働きたいと言ってくる人たちの面接をしなければいけない、働いている人の愚痴を聞いてあげなければいけない、各部門の責任者達とミーティングをし、毎日、誰か彼かと会わなければいけない。正直、面倒な役である。
むしろ一人静かに庭の何処かに座り、ぼーっとしているのが私の性にあっている。
だが、挑戦が目の前にやってくれば、一応は受けてみたい。うまくいけばいいし、うまくいかなければ引けばいいのだ。
責任者の仕事を引き受ける代わりに、私はセンター内のアパートを提供された。
センター内に住むと、自分たちの洗濯物はセンターのランドリーに出すようになっている。衣類の一つずつに名前を付けて出すのだが、洗濯された衣服が毎回ちゃんと私の元に戻ってくるのには驚かされる。
ジョン・クロードは、以前もこのセンターのサイト作りに関わっていたことがあるが、この時は、更に PC のプログラミングの仕事にがっつりと取り組むことになり、後になって、この時の彼の経験が二人の生活に多いに役に立つことになる。

私がチェックインカウンターの責任者になってから3ヶ月が経った頃。
責任者の仕事など出来るのだろうかと心配をしていた私は、思いのほか、他のメンバー達と一緒にこの仕事を楽しんでた。そんなある日、デスクに座っている私のところに、センター内の郵便配達人が電報を持ってきた。
小さい頃に両親が電報を受け取るのは見たことがあるが、私自身が電報を受け取るのは初めてだ。なんだか悪い予感がした。
父が危篤なのか、と一瞬思った。
ところが、電報を開いてみると、「タツオ キトク スグ カエレ」とある。
私はなぜかよく理解出来ず、何度も読み返した。そしてやっと、弟が危篤なのだと言う事が分かった。
反射的に、私は直ぐに日本へ飛ぼうと考えた。その前に、先ずは家に電話だ。
弟は数年前、長男の結婚式の翌日にくも膜下出血で倒れている。幸い、後遺症もなく無事に復帰したが、医者から酒と煙草を控えるようにと言われていたらしい。
しかし、仕事柄それを実行するのは難しかったようだ。
私たちが6月に遊びに行った時、
「お姉さん、龍夫にお酒と煙草を控えるように言ってくださいよ」
と私は義妹からお願いされている。
電話に出た義妹が言うには、1週間前、弟が「頭が痛い」と言いながら帰宅したという。
「前回の事もあるから、早く医者に行った方がいいよ」

と義妹が言ったが、弟は、商談が沢山詰まっているから、そうもいかないと言い、3日間、頭痛を抱えながら会社に行ったそう。

そして、4日目の午後早く、弟が帰宅した。

「頭がどうも痛くて早退してきた。明日の朝、病院に行くわ」

そう言って彼は布団にもぐり込んだ。

夜になり、義妹が布団に近づいてみると、弟が普通ではないいびきをかいている。びっくりして電気をつけてみると、弟は半目を開いて、もう意識がなかったそう。

直ぐに救急車で病院に連れて行ったが、くも膜下出血で、あれから意識が戻っていない、と電話口で義妹が泣きながら説明してくれた。

受話器を持ちながら、私も泣いた。

ほんの5ヶ月前に日本で会った時は元気でいたのに、まだ47歳と言う若さで、家族を置いて死んで行く弟が不憫でしかたがなかった。

自分の節制が足らなかったと言えばそれまでだが、それにしても、会社の為に自分の命を失くすとは、なんてバカな事を、と私は悔しくて泣けた。

いつでも家族と話が出来るようにと、私はセンターに事情を話して部屋に電話機を取り付けてもらった。

私は毎日家族に電話をし、義妹や父とも話をしたが、医者と言うには、弟の心臓が強いのでまだ生きてはいるが、意識はもう戻らないだろうとの事だった。

それを聞いて私は決心した。日本へ行くのは辞めよう。

今から行っても、私は弟と話せない。ただ泣き続ける家族達の顔を見るだけのことだ。わざわざインドから飛んで行く意味があるとは思えない。

父がなんと言うか怖くて躊躇したが、決心して父に電話をした。

「龍ちゃんとはもう話せないようなので、日本へ行かない事にした。近ければ直ぐに行ったんだけど、なにしろインドから日本は遠いから。ごめんね。その代わり、お父さんが病気になったときは直ぐに飛んで行くから。約束する」

父は想像もしなかったほど優しく、私の気持ちを理解してくれた。

義妹に電話を変えてもらい、同じ事を伝えたが、彼女はあまり良くは受け取ってくれなかった。

「日本には行けないけど、龍ちゃんの事はいつも心の中で思っているから。様態が急変したら直ぐに電話してね」

私は義妹にそう言って、電話を切った。

それから4日経っても連絡がなく、私は電話を入れてみた。

「龍ちゃんの調子はどう？」

「ああ、実は2日前に亡くなりました。お姉さんに連絡しようと思ったんですけど、バタバタしていて・・・」

義妹にそう言われて、私は胸をグサリと突かれたようだった。

更に、義妹は続けた。

「実はですね、もうお父さん（弟）が亡くなったので、これからはおじいちゃん（父）のことは、お姉さんが面倒見てくれないかと思っているんですけど」

「えっ・・・！、龍夫が亡くなったばかりで、そんな悲しいこと、言わないでよ。今まで一緒に住んで来たのに、80歳半ばの父をその家から追い出そうと考えているの？」

龍夫が聞いたら、きっと泣くわよ。彼、すごく親思いで、昔から、両親とは一緒に住むんだと言っていたんだから。それはあなたも知っているでしょう。

私が引き取れるなら引き取って一緒に住みたいわよ。でも、80歳半ばの父を日本語が通

じなくて、環境も食べ物も全く違う国に住ませるなんて可哀想で出来ない。
おじいちゃん子だった孫達はなんて言っているの？きっとおじいちゃんを追い出すなんて考えてもいないと思っただけ。
あなたの今の言葉を聞いて、私、悲しいわ。自分の言った事をちょっと考えてみてちょうだい」

私が弟の奥さんである義妹に会ったのは、同じ年の6月にジョン・クロードと一緒に日本へ行ったときが初めてだった。

弟は3回離婚しており、義妹とは4度目の結婚だった。最初の奥さんは、初めてのガールフレンドだった女の子で、私もまだ日本に住んでいる時に会っている。2人目の奥さんには会った事がない。3人目の奥さんは、戦争があるからと言われて私がスペインから日本へ帰った時に会った人だ。そして、4人目の義妹。

どうして弟がこんなに奥さんを変えたのか、女性に何を求めていたのか、私は訊ねる機会がなかったので分からない。

義妹にルイ・ヴィトンの財布を買ってきてあげてよ、と弟が言うので、チューリッヒにあるルイ・ヴィトン店へジョン・クロードと一緒に出かけ、私自身も買った事のない財布を、義妹と彼女の連れ子である20歳代の長女に土産として買って行ったことがある。

おとなしい感じの義妹は喜んでくれたが、後で父が私に「いつも病気がちの女で・・・」と苦々しく言っていた。

父と義妹の仲はそれほど良くないと察したが、そういえば私のおかあさんも身体が弱いほうだったな、と私は思い出していた。

そんな義妹と彼女の長女、そして孫4人と一緒に弟のいない家でこれから生活していく父が心配ではあった。

幸いな事に、3人の孫達は既に会社勤めをするほど大きくなっており、いつも「おじいちゃん、おじいちゃん」とまとわりついていたので、きっと大事にしてくれるだろうと思った。

それに、父は80歳を過ぎてスクーターの免許を取っており、それで頻繁に親戚回りをし、おしゃべりを楽しんでいたと聞いているので、まったく孤立することはないはずだ。日本人の全くいない外国で生活するより何倍も幸せだろう。

日本から30年以上も離れている私は、完全な部外者である。父のことは心配だが、弟の残して行った家族がこれからどんな風に生活して行くのか、見ざる、聞かざる、言わざるである。

あれから、義妹からの連絡はない。

新プロジェクト

私がチェックインカウンターで働き始めて半年ほどが過ぎた頃、センター側から、ウエルカムセンターに加えてブックショップとブティックの責任者にもなってくれないかと打診された。

正確には、チェックインカウンターの責任者の仕事は他の人に任せ、私はチェックインカウンターとブックショップ、そしてブティックの総合責任者になるわけだ。

仕事は現場から離れて、オフィスの一角に座ることになる。

とんでもない話だ。

チェックインカウンターの仕事は挑戦だと思って引き受けたが、他の2部署も合わせた総合責任者になるなんて、そこまで私は器用ではない。

何度も頼まれたが、気が乗らないものは引き受けられない。

ああ、面倒くさい。この際、ボランティアの仕事など一切辞めて、一人の瞑想者に戻ろう、と思い始めたその矢先だった。ジョン・クロードが面白い話を持ってきた。

以前、私たちがスイスへ帰る時にファーストクラスの航空券を買った旅行会社が、今、ビジネスクラスで一人当たり約4000スイスフランの世界旅行航空券を販売しているというのである。

航空券は1年のオープンチケットだった。

イギリス行きの話が無くなり、急に目の前に大きな穴が出来た私たちだ。この際、何もかも忘れて世界旅行をするのもいいかもしれない、それもビジネスクラスでなんて、素敵すぎるではないか。

今なら銀行口座に、ある程度のお金がある。今だからできる旅行かもしれない。

このチャンスを逃すと、この先、多分、同じ旅行をするチャンスは巡ってこないだろう。

よし、この話に乗った。

気をよくした私は、総合責任者の仕事も引き受けた。

慣れない管理職の仕事を終えた後は、どこへ旅行をしようかと、ジョン・クロードと話し合うのが楽しくてしかたがなかった。

行き先はこう決まった。

まず、インドからシンガポールに飛び、そこからバリ島へ、次にオーストラリアのシドニーへ向かい、購入する航空券には含まれていないフィジ島行きの航空券を手に入れフィジ島へ、再びシドニーに戻り、そこからハワイ滞在、ハワイを経ってサンフランシスコに入り、その後、もう一度見たかったニューヨークへ飛んで、最後に私たちの荷物を置いているスイスのチューリッヒへ戻る。

1年のオープンチケットなので、好きな時に目的地へ入り、好きな時に出発出来る自由な旅である。

それぞれの目的地では、あらかじめ1週間の宿泊先を決めて行くが、気に入ればバリ島やハワイなどには1ヶ月は滞在したい。

私たちは航空券を購入し、出発は2000年の4月になった。

2000年の2月末か3月初旬だった。

PCの仕事関係から、ジョン・クロードはドイツ生まれのパトリックとオーストリア生まれのアンドレアスのプログラマー2人と親しくなった。

3人で話をしているうちに、自分たちでウェブデザインの会社を作らないかという話になった。

パトリックとアンドレアスは、既に、それぞれの国でプログラマー、そしてデザイナーとして働いていた経験がある。二人ともインド旅行が終わった後は、それぞれの国へ戻り仕事を探す予定だったらしい。

先の予定がない私たちと彼らにとって、この話は正に最適な時期に最適なアイデアだった。私も話し合いに加わり、アイデアは急速にまとまっていった。

会社は何処に作ろうか、これも全員一致でイタリアのトスカーナに決まった。

誰一人としてトスカーナに知り合いがいる訳ではなかったが、気候が良く、明るい雰囲気
のトスカーナが4人とも大のお気に入りだった。

話は現実味を帯びていき、直ぐにでも全員でトスカーナに飛んで行きたいところだった。

ただ、それぞれ4人には、すでに先の予定が入っていた。

先ずは各々の予定をクリアーするのが先決だ。それが終わったら、改めて再会しようということになった。

再会の日時は、6月15日12時。場所は、トスカーナのフィレンツェにあるピッティ宮
殿前の会場と決まった。

私たちが予定していた1年間の世界旅行は、急遽、2ヶ月間に短縮することになってしま
うが、まあ、それもいいか。目の前にやってきたチャンスだ。捕まえておこう。

何かいいことがあるだろう。



北インドのタージ・マハル

世界旅行に出発する前に、是非、観ておきたいものがあつた。それは、北インドのアーグラにあるタージ・マハルだ。

インドには何度も来ている私たちだが、滞在するのはいつもプーナ瞑想センターがあるプーンである。

ジョン・クロードは若い頃に一人でインド各地を回っているが、私はプーンしか知らない。プーンでも十分インドを楽しむ事が出来るので、他の町へ行きたいと思った事はないが、あの有名なタージ・マハルだけはインドを離れる前に観ておきたかった。

タージ・マハルを観に行くと言うと、ドイツ生まれのパトリックも一緒に行きたいと言い出した。

プーンからアーグラまではインドの縦半分を北上する事になる。到着まで1・2日はかかるだろう。私たちは飛行機で飛ぶ事にしたが、パトリックは、金ももったいないと言い、2日前に列車で出発した。

私たちは予約を入れたアーグラのホテルで落ち合うことにした。

当日、私たちはプーンの小さな空港からニューデリーまで飛び、そこで乗り換えてアーグラまで行った。

アーグラの空港に到着してみると、なんと、私たちの荷物が出てこない。

インドでこんなトラブルに会うと、うまい具合に解決しないのが常だ。無くなった荷物が出てくるのは、ほとんど不可能に近い。

諦めるしかないなと思ったが、一応係員に荷物が出てこない事を伝えた。すると係員は、ニューデリーの空港で荷物のチェックをしたかと訊いた。

するはずがない。だって、プーン空港を出る時に、荷物はアーグラ空港まで行くようにと手配し、私たちはその荷物のタグも貰っているのである。

しかし、空港側の話を良く聞いていると、どうもミスをしたのは私たちのようだった。

プーン空港で載せた荷物は、乗り換えであるニューデリーの空港で一旦降ろされ、滑走路の脇に並ぶのだそうだ。

そう言えば、私たちが乗り換えの飛行機へ向かって歩いていく時に、一列に並んだ荷物を見た覚えがある。

乗客達は、並んだ荷物の中に自分の物を見つけ、側にいる係員に「これが私の荷物です」と伝え、改めてその荷物が乗り換えの飛行機に運ばれるシステムらしい。

それを知らなかった私たちは、荷物の横を素通りしてしまったのである。

幸いな事に、出てこなかった荷物は、翌日、私たちが宿泊しているホテルに無事に届けられたが、無事に届けば届いたで、また驚いてしまうのがインドである。

私たちがホテルに到着すると、パトリックはすでに到着していた。

私たちはバッグからカメラを抜き出し、早速、3人でタージ・マハルへ向かった。

タージ・マハルの回りは入車禁止になっている。幸いに私たちが泊まったホテルからタージ・マハルまで、さほど遠くはない。私たち3人は賑やかなインド街をテクテクと歩いて行った。

しばらくすると、赤いレンガ色の大きな門と壁が見えてきた。タージ・マハルはその中にあるようだ。

門の外で入場券を買い、さて、門をくぐって中に入ろうかとしたその瞬間、門の遥か向こうに真っ白なタージ・マハルの姿が目の中に飛び込んできた。その眺望に私たち3人は息を飲んだ。

吸い込まれるように門をくぐると、そこは、別世界だった。高貴な雰囲気にも包まれたタージ・マハルが目の前にそびえ立ち、その美しさに誰もが一瞬棒立ちになってしまう。

私には、タージ・マハルが地中からムクムクと盛り上がってきたように見えた。

門の前からタージ・マハルまで100mはある噴水が真っ直ぐ続いている。

出産後に様態が悪くなって亡くなった愛するお妃（ムムターズ・マハル）の為に作った墓廊というタージ・マハル。

私も雑誌やテレビで見た事はあったが、これほどの胸を打つ建築物の情熱、美しさは、実際に見てみるまで分からなかった。この優美さは私の知っている言葉では言い表せない。

噴水の横を歩いてタージ・マハルの足元にたどり着くと、そこからは、靴を脱いで階段を上って行くようになっている。

小学校にあったような扉のない靴箱がいくつか並んでいるが、そこは大抵一杯で、訪問客達は入り口前の床に、靴やサンダルを脱ぎ散らかしていく。その数のなんと多いこと。

こんな所に良い靴を脱いで行くと、帰って来た時にはきつと無くなっているだろう。無くならなかったとしても、あれだけ数多い靴やサンダルの中から、自分のものを見つけるのは大変な仕事である。

私たち3人は履いていたサンダルをナイロン袋に入れ、それをリュックサックに仕舞った。ひんやりとした大理石は気持ちよかったが、足の裏は、瞬く間に埃で真っ黒になった。階段を上ったところでタージ・マハルを見上げてみると、建物の天井から柱まで隙間のないほどに彫刻や宝石が埋め込まれているのが良く分かる。その建築様式（芸術）には圧倒されるばかりである。人間業とは思えないほどだ。

墓廊を中心に造られたテラスを一回りし、更に、今では皇帝と一緒に並んで置かれているお妃の石棺がある内部を見て回った。

何処を見ても素晴らしいの一言につきる。それ以外に言葉がない。

タージ・マハルは、世界中の人びとを魅了し感動させるモニュメントであることは確かだ。



アーグラの2日目、アメリカからクリントン大統領が来るらしく、人びとは道端に花や木々を飾って忙しく働いていた。

こんな日はタージ・マハルが一般客には開かれない可能性がある、そう聞いた私たちは、早朝6時にタージ・マハルへ向かってみた。幸いに難なく入門する事が出来た。

旅行者がまだ来ていない静かな雰囲気の中、私たちは、白い大理石のタージ・マハルが朝日に反射して、ピンクやオレンジ色に変化して行く様子を見ていた。

まさに亡くなったお妃がうっすらと薄化粧をしたような、それは、それは美しい姿だった。その夜は満月でもあった。満月を背にしたタージ・マハルはどれほど美しいだろうと、私たちは改めて夕方に入門してみたが、残念なことに陽が沈んでしまうと門は閉められてしまった。

するとパトリックが、タージ・マハルの後ろに広がる川の向こう側からタージ・マハルを見るのはどうだろう、と言いだした。グッドアイデアだ！3人は直ぐに通りがかったタクシーを拾った。

「タージ・マハルが最も美しく見える場所へ言ってくれ」

私たちはタクシードライバーに英語で伝えた。

ドライバーがそんな場所を知っていたのかどうか分からないが、彼はものすごいスピードで川向こうに向かって走り出した。

川の上に懸かる石の橋を渡って向こう側に出ると、そこからは小さな村の中に入り込み、細い路地をくねくねと進んで行った。車の中から住民が食事をする姿が見えた。

長い間走っていたが、明かりのない村はずれのような場所で車が急に止まった。

「ここなのか？」

訊いても運転手は首を縦横（知っていても、知らなくても、どちらにも使える便利なインド人独特の動き）に振るだけだ。

私たちは車から出てみたが、長い道のりを走って来たにしては、たいした風景ではなかった。確かにタージ・マハルが川向こうに見えるが、その姿はとても小さく、川はカラカラに乾燥していた。

こんなものか、と諦めて帰りかけた時、私たちの前にインド人の男二人が現れた。

「バクシーシ、バクシーシ」

とドスのきいた声で言っている。

インドで道を歩いていると、貧しい子供達や子供を抱えた女性が、「お恵みを」という意味で「バクシーシ」と言いながら汚れた手を出しながら寄ってくる。下手に金などをやると、数十人の子供達が集まってきて大変な事になるのだが、この時の男二人はちょっと雰

囲気が違った。

話している言葉は分からなかったが、どうも、ここは普段入れない場所だから、入ったからには金を置いて行け、というようなことを言っているようだった。

「バクシーシ」には、賄賂と言う意味もある。

真っ暗闇の中、ぎらつく目の男二人に言い寄られ、少々気味が悪かったが、結局、私たちは男に少額を渡して、去ることができた。

ひょっとすると、タクシードライバーと、この男二人はグルだったのではないかと、後になって思ったが、まあ、こう言う事はインドでは頻繁にあることなので、大して驚きもしなかった。

私たちはアーグラに3泊し、それからプーンに戻った。

ワールドツアー

バリ島

タージ・マハル見学からインドへ戻って1ヶ月後、私たちはいよいよ世界旅行へ出かける準備が整った。

時期は2000年4月。4月は私の誕生日であり、そしてちょうど50歳になる年だった。

「この世界旅行は君への誕生日プレゼントだ」

ジョン・クロードが宣言してくれた。

私が40歳の誕生日を迎えた時も、私たちはシンガポールと日本、そして5ヶ月間に渡るオーストラリアの旅行をしている。

偶然、私の大台の誕生日と大きな旅行が重なっただけなのだが、これらの旅行は忘れられない誕生日プレゼントになっている。

さて、私たちの世界旅行は、先ず、ブリティッシュ・エアウエイズでシンガポールに飛ぶ事から始まった。

宿泊先はウエスティン・ホテル。インドの超簡素な生活を送った後は、シンガポールの素晴らしいホテルで寛ぐのが楽しみである。

シンガポールのモダンライフを数日楽しんだ後、私たちは次の目的地バリ島へ向かった。

バリのデンパサール空港に到着した私たちは、タクシーを拾い、前もってネットで予約をしていたリゾートホテルへ向かった。

到着したホテルは海の真ん前だった。周りには高層ビルがなく、ホッとする。

ホテルの門を入ると、そこには壁のない広々としたオープンスタイルのレセプションが広がっていた。バリ風の衣装を来たレセプショニストが胸の前で手を合わせて挨拶をしてくれる。彼女達の笑顔が素晴らしい。

チェックインを済ませ、レセプションを抜けて広い敷地に出ると、そこに私たちが宿泊するバリ風のバンガローが建ち並んでいた。

木をメインにして造られたバンガローは、ヤシの木の葉で造られた屋根が張られ、見るからに涼しそうだ。

中に入ると、ベッドの上に花が飾られ、真っ白い蚊帳が飾りのように垂れ下がっていた。

夢のバリ島、その雰囲気思わず頬が緩む。

バンガローの外には小さな庭もあり、そこには、2つ目のシャワーとバスタブが備え付けられていた。そんなことにも私たちは感動した。

ホテルの前にあるビーチに出てみた。真っ青な空とエメラルド色の海が眩しく目に飛び込んでくる。

地元の女性数名が、「マッサージ、マッサージ」と言いながら、オイルとタオルを手にし、ビーチチェアーに寝そべる旅行者達の間を回っている。

毎日、昼過ぎになると、ハイビスカスに似た花が大きな木から沢山砂浜に落ちてきた。どういう訳か、どの花も同じ方向を向いて着地していた。

朝食と昼食のレストランは蓮池の前だが、シェフがフランス人という夕食のレストランは海の真ん前にあった。テーブルが砂浜の上に直接置かれているのがバリ島らしい。

外が薄暗くなった頃、ドレスアップした客達が冷なくなった砂を踏みながらキャンドルライトの輝くテーブルにやってくる。そして足元は、みんな素足だ。その抜け感が私は大い

に気に入った。

ある夜、このレストランの前でケチャダンスが披露された。

上半身裸で腰布を巻いた数十人の男性が、幾重にも重なった円陣を組んであぐら座りをし、「ケチャケチャケチャケチャ」と早口で言いながら上半身を大きく動かしながら踊る踊りである。

真っ黒な海を背景に、両脇に置かれたたいまつが燃え上がり、異様なエネルギーを醸し出す踊りだった。

ある朝、一人で散歩に出ていたジョン・クロードが、男の子のようなキラキラする目で、バンガローに帰って来た。

「明日の朝、朝日を見に船で沖に出よう！」

バンガローに入るなり、彼は弾んだ声でそう言った。

ジョン・クロードが砂浜にたたずんでいたところ、小さな船が旅行者二人を送ってきたのを目にしたらしい。こんな早朝に、どこへ行ったのかと訊いてみると、朝日を見るために沖に出たのだと言う。

送ってきた船の持ち主に、明日、僕たちも連れて行ってくれるかと訊いたところ、OKの返事をもらった、と彼は興奮気味に説明してくれた。

翌朝5時、冷たい空気の中、私たちは朝日を見る為にビーチへ向かった。リゾートのスタッフさえまだ起きていない、静かな朝だった。

ビーチに近づくと船はすでに到着していた。地元の男性が一人で魚釣りに行く時に使うような小さな船だ。船の前に立つ船頭さんが、とても若い。

彼は20歳そこそこだったのだろうか。真っ黒に日焼けした顔に、にこーっと笑った時に見える大きくて真っ白な歯が印象的だった。

バリ島に行くと、人びとの笑顔がとても美しいのに気がつく。彼らが信仰深い所から来ているのだろうか。

バリ島の人たちは、朝、出かける前に花や米、線香を玄関先に供え、乗って行く車にも同じものを供える。会社でも供えものをして営業推進を願うそう。何処にでも神がいて、それを敬うのである。

そんな平和を願う気持ちが顔に出るのだろうか、私たちを沖に連れて行ってくれた若い男性も、屈託のない笑顔がそれは爽やかだった。

私たちが乗った小さな船はどんどん沖に向かって進んでいった。先ほど出てきたビーチが見えなくなった所で、いよいよ水平線に朝日が昇り始めた。

少し肌寒かった船の上だが、朝日が昇るに連れて、回りの空気も柔らかく温かくなっていた。

朝日はキラキラとオレンジ色に輝き始め、空と海にその色を投げかける。いくつ写真を撮っても撮りきれないほど、その美しさは一瞬ごとに変化していった。

二人がすっかり朝日に魅せられていると、

「この先にある岩の絶壁を観に行かないか」

と若い船頭が提案した。

「行こう、行こう！」

私たちは沖に出た勢いで言った。

真っ白な歯を見せながら若い船頭は笑い、エンジンを唸らせると水平線に向かって進み始めた。海の色が次第に濃青色に変化していく。

沖に行くに従って今まで静かだった海が少しずつうねり始め、そのうねりは次第に大きくなって行った。

はしゃいでいた私は、急に船酔いを感じた。気をまぎらせようと思ったが、目の前には海しかない。

せっかくここまで来たのだ、出来ることなら、このまま若い船頭が提案してくれた岩の絶壁まで行ってみたい、そう思って我慢をしていたが、海のうねりで船が上下し始めたら、もう駄目だった。

「ごめん、戻って！」

船頭は私の様子を見て直ぐに船を岸に向けた。うねりは少しずつ少なくなっていった。岩の絶壁は見られなかったが、初めて海上から見た朝日の美しさは、その時の静かな雰囲気とともに、いつまでも私の心に焼き付いている。

バリ島では、タクシーを呼んで島内の観光をした。

島内に入ると緑濃いジャングルがいくつも見えてくる。その横に米を栽培している緑の段々畑が広がり、背景には背の高いヤシの木が立ち並んでいる。走っても走ってもポストカードの風景が続き、そしてそこには、時代が少し取り残されたような雰囲気がある。ある日、絶壁の上にある寺院を訪問しようと、私はウエストを絞らないムームーのような服装で出かけた。

長い絶壁の階段を登りきり、寺院に入ろうとした直前、私は寺院の人から黄色い布を渡された。

えっ、何？と思っていると、

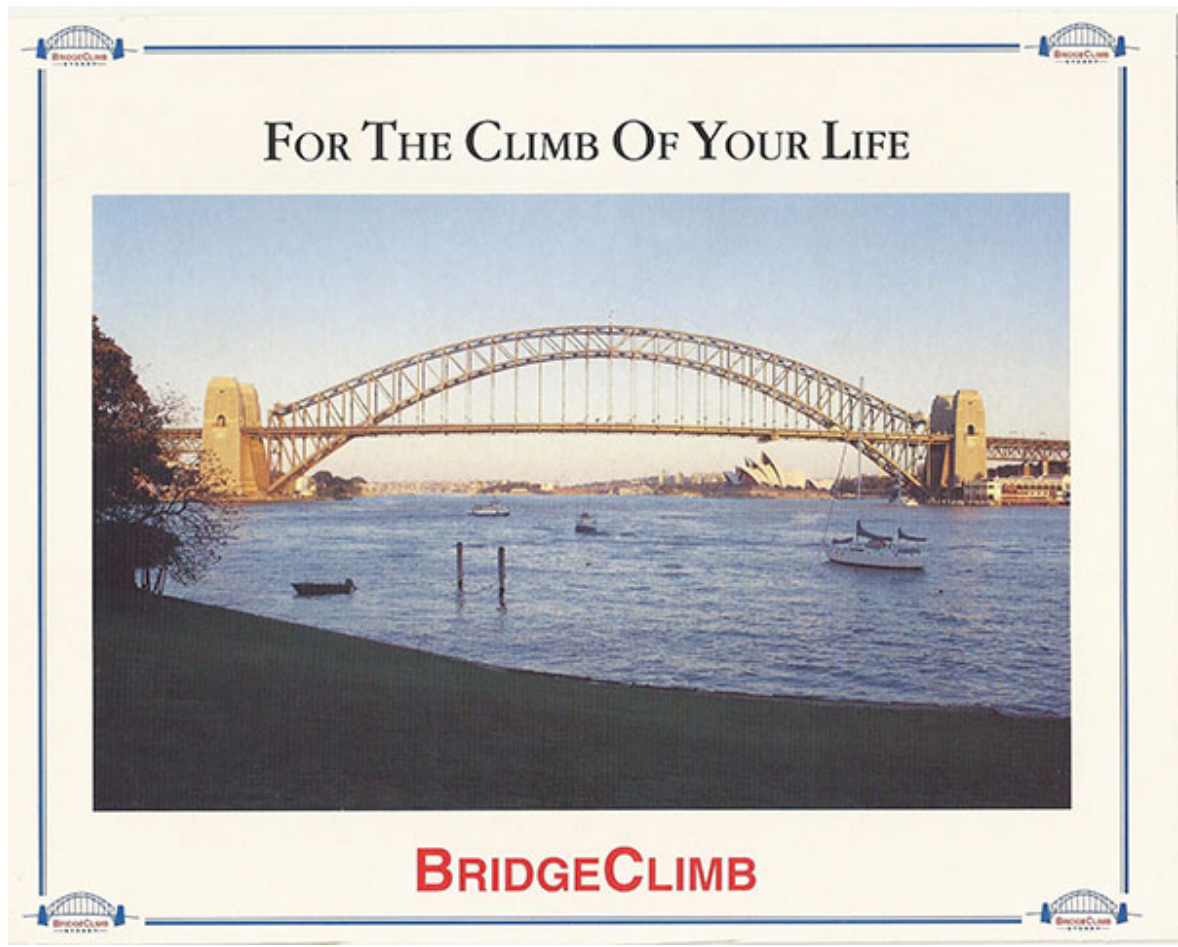
「寺院に入る前に、それを腰に巻き付けてください」

と言われて、私は急いでその黄色い布を腰に巻いた。

寺院を見終わりタクシーに戻った時、私は運転手にその黄色い布の意味を訊いてみた。

「何でもかまわないのです、革のベルトでも紐でもいい、何か腰に巻いていないと、寺院に対して失礼に当たるんですよ」

優しい顔の運転手は、微笑みながらそう教えてくれた。



オーストラリア・カンタス航空でシドニーへ

バリ島に2週間滞在した後、私たちは次の目的地、オーストラリアのシドニーへ向かった。今まで、ブリティッシュ・エアウエイズで飛んで来たが、ここからはカンタス航空である。今回の旅はビジネスクラスで飛んでいるのだが、ブリティッシュ・エアウエイズのビジネスクラスは記憶に全く残っていない。反対に、カンタス航空のビジネスクラスは今でも目に浮かぶ。

飛行機自体は少々古かったが（調べてみると世界で3番目に古い航空会社らしい。英語圏では最も古い会社だ）、しかしジェット機で飛び始めて以来、無事故という。

座席はもちろんだが、回りもゆったりしており、さすがビジネスクラスであった。

ビジネスクラスだけだったのかもしれないが、客室乗務員は一人の女性を除いて全員男性だった。彼等は仕事をきびきびとこなしながら、良く気がつき、親切過ぎでもなく不親切でもなく、オーストラリア人らしい人懐っこさで素晴らしいサービスを提供してくれた。

シドニーでは、インドで購入した1年間オープンチケットに含まれていなかったフィジ島行きのチケットを購入することになっていた。

フィジ島・・・随分昔から行きたかった島だ。行ける時に行っておきたかった。

シドニーでは立地条件がいいレージェント・ホテル（現在は、フォーシーズンズ・ホテルに変更）を予約していた。

ビジネスクラスで飛んでいたのも、ホテルもビジネスクラスにしたが、それが大当たりで、結構いい思いをした。

朝食や午後のスナックがビジネスクラス専用のレストランで静かに食べられるのも良かったが、私たちが一番喜んだのは、服のクリーニングだ。

全て無料だった。

そのサービスに甘えて、私たちは、ティーシャツやズボンだけではなく、今までの旅行で着続けたジャケットなども洗濯に出させてもらった。

旅行の途中でジャケットを洗濯することはまずなく、それも出した翌日に仕上がって来るのだから本当に助かる。

シドニーを訪れるのは2回目だが、歩いていると、あちらこちらに思い出があり懐かしくなった。前はここでセカンドハンドのキャンピングカーを探したのだった。今回はフィジ島行きの航空券だ。

滞在先のレージェント・ホテルには1週間の滞在予約を入れていた。時間はたっぷりある。私たちはゆっくりと旅行会社を探しに出かけた。

シドニーの中心地に入ると、高い建物が並ぶビジネス街が広がっている。観光客がうろろする海辺とまた違った雰囲気がある。

そんなビジネス街を歩いていると、いくつもの旅行会社が目についた。何処でもよかったのだが、その中でも大きな建物に入る1件の旅行会社が気に入って、私たちはそこに入って希望通りの航空券を手に入れた。

さあ、航空券が手に入ると、後は出発までゆっくり観光である。シドニー郊外まで出かけるほどの時間はないので、私たちは近場のオペラハウスや水族館を再訪し、日本レストランで久しぶりの美味しい日本料理を堪能してシドニーを楽しんだ。

ある日の朝、シドニー湾を横に見ながらそぞろ歩きをしていた私たちは、外壁一杯に派手な宣伝を施した観光案内所に出くわした。

面白そうなので入ってみると「シドニー湾にかかるハーバーブリッジに登ってみよう！」というパンフレットが目についた。

「ブリッジ・クライム」という名で、シドニー湾にかかる橋の鉄骨アーチ最上部134mの高さまで登れるらしい。

1990年にシドニーへ来た時は、キャンピングカーを探す事に夢中で、こういうアトラクションをやっている事には気がつかなかった。もっとも、始まったのが1989年らしいから、目立った宣伝はまだしていなかったのかもしれない。

興味を持った私たちは直ぐにその場所へ向かってみた。

今ではシドニー1のアトラクションになっているらしい「ブリッジ・クライム」の建物は立派だった。

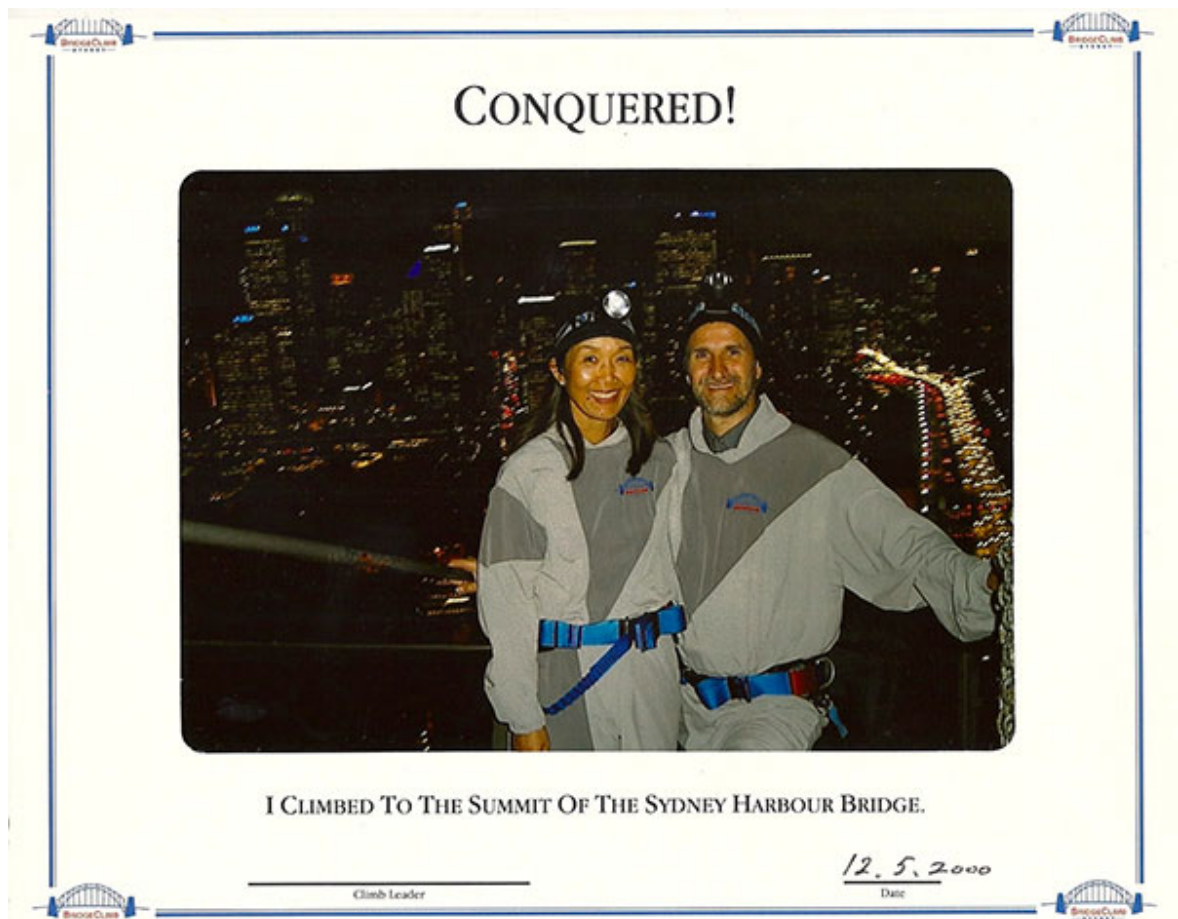
受付で尋ねると、橋に登るには予約が必要で、今日のクライムはすでにいっぱいだが、午後の「夕暮れクライム」だったら、まだ空きがあると言われた。

側にいた人が、

「夕暮れクライムをすると、素晴らしい夕焼けが見られるよ」

と教えてくれたので、私たちは直ぐに予約を入れた。

あの当時の料金は1人130オーストラリアドルだったように覚えているが、現在の料金を調べてみると、「夕暮れクライム・Twilight Climb」は1人300ドル以上となっているので、130ドルという私の記憶は定かではなくなった。ひょっとすると10年の間に料金が値上がりしたのかもしれない。



指定された時間に「ブリッジ・クライム」の建物に行ってみると、すでに「夕暮れクライム」に挑戦する人が10人ほど集まっていた。14人までが一つのグループになるらしい。私たちを含め、いろんな国の人がいた。

まずは全員、ロッカールームに案内された。

持参した荷物は全てロッカーに入れ、カメラも持って登れない。眼鏡をかけている人は、それを固定する特別な紐も貸してくれた。全て橋の上から物が落下する危険を避ける為の処置だ。

カメラを持って行けないのは残念だったが、クライムリーダーが写真を撮ってくれると言うので、納得した。

さて、身軽になった所で、今度は「ブリッジ・クライム」から提供される特性ブリッジスーツを着る事になる。ジャンプスーツのようなものだ。

それだけではない、私たちは夕暮れクライムをするので、頭には毛糸の帽子、そしてその上に、暗くなったら電気が点けられるようにヘッドライトも装着した。更に、安全の為に、腰にはブリッジの固定線に取り付けるスライダーを締める。

物々しいのであるが、これだけの安全体制を考えてくれている事で、鉄骨の橋の上を歩く不安がなくなり、料金が高いのも納得がいった。

さて、完璧な装備を身につけた私たちは、登る前に先ず予行練習があった。特に、安全スライダーの使い方に重点を置いた練習だ。

橋に登り始めると直ぐにスライダーの輪っかを橋の固定線に繋げる事になる。固定線は常に真っすぐという事はなく、時にはぐると輪を描いていたり、ジグザグになっていたりするので、その通し方が分からないと時間を取ってしまう。

予行練習をしていなければ、10人ほどのグループがスムーズに橋の上を進んで行く事は

難しいだろう。

30分ほどの予行練習が終わり、いよいよ私たちはブリッジ・クライムに出発する事になった。

シドニー・ハーバー・ブリッジの両端には高さ100m近い石造りの支柱が立ち、ここを支えに鉄のアーチがかかり、橋げたを吊り下げている。

「ブリッジ・クライム」の建物は、この支柱の一つに接して立てられているので、建物から出ると直ぐにアドベンチャーが始まった。

早速、安全スライダーを橋の固定線に繋げ、先ずは、石造りの支柱まで、高さ数十メートルの細い架け橋の上を歩く事になった。

一列になって歩く架け橋は、足元が鉄のグリルになっており、数十メートル下の様子がはっきり見える。グループにいた若い女性の家族が下から応援している声が聞こえ、それに誘われてひょっと下を見た私は、その高さに、足がすくんだ。

私は高所恐怖症ではないが、この時初めて、足がすくむ、と言う感覚を体験した。

長さ8メートルほどのグリル上を、私は下を見るなど自分に言い聞かせて、ただひたすら前を向いて歩いて行った。足が浮いて雲の上を歩いているようだった。

石の支柱まで行くと、こんどはその支柱の壁に垂直に取り付けられた鉄の梯子を登る事になる。

支柱の直ぐ横には鉄道線路が走っていた。私たちが梯子を登っていると、ちょうど電車が通り過ぎ、中の乗客たちが私たちを見ていた。

梯子を登りながら、前もってスライダーの使用練習をしていて本当に良かった、とつくづく思ったものだ。

梯子を登りきると、ぱーっと目の前が開けた。そこには、ゆっくりと上昇していく橋のアーチが伸びていた。さあ、いよいよブリッジ・クライムだ。

アーチの上を歩き始めると360度の展望が広がる。直ぐ側にはオペラハウスも見える。ここまで来ると、高い所を歩いていると言う恐怖感は吹っ飛んでいた。グループ全員の顔が輝き始めた。

あちらのスポット、こちらのスポットで、クライムリーダーが私たちの写真を撮ってくれる。

みんなカメラの前で「イエー——イ！！」と叫んで格好をつけている。

こんな所まで登ってきたと言う高揚感がものすごく、叫ばずにはいられない気持なのだ。少しずつ回りが暗くなり、私たちは頭のヘッドライトを点けた。

すっかり暗くなると、「あれが南十字星だよ」とリーダーが指を指しながら教えてくれた。南の空に、ひときわ輝く星があった。

そうだ、南十字星はここでしか見る事が出来ないのだ。しっかり目に焼き付けておこうと、私は輝く星をじっと見つめた。

夜空には星、目の下にはオレンジ色に輝くシドニーの町が広がり、なんだか宇宙から下を見ているような感覚だった。

アーチのてっぺんまで登ってしまうと、そこからは又同じ道を引き返す。

約3時間半のアドベンチャーは、チャレンジして良かったー、とつくづく思うものであった。

建物に戻り、ロッカー室で着替えをして出てくると、「シドニー・ハーバー・ブリッジを確かに制覇しました」と言う自分たちの名前入りの証明書とともに、クライムリーダー

が撮ってくれた写真が出来上がっていた。登った人たちは誇らしげな顔つきでそれらを受け取り、建物を後にした。



フィジ島

シドニーでフィジ島行きの航空券を手に入れた私たちは、1週間後にフィジ島へ飛んだ。予約していたバンガローへ向かうために空港で乗ったタクシーの運転手は、無口で、身長2mはありそうな厳つい体格をした、真っ黒な皮膚のフィジ人だった。怖そうだなと思ったが、ひょっと見るとズボンの代わりにサロン（布をスカートのように巻いたもの）を着けているのを見て、急激に親しみがわいた。

話をしてみると、至極、優しい男性で、眺めのいい場所や遺跡などがあると、車を脇に止めてガイド並みに説明をしてくれた。

私たちの乗ったタクシーは、背の高いヤシの木が立ち並ぶ風景の中を流れるように走り、ほとんど人を見かけない小さな村をいくつも通り過ぎながら進んでいった。

到着したバンガローは海の真ん前だった。素朴だが可愛い色使いのバンガローが並んでいる。

その一つに案内され、海を見ながら荷物をほどいていると、急にものすごいスコールがやってきた。

大きな雨粒が降ってきたと思った途端、ゴーッと言う音とともに激しい雨が降り出し、外の景色がグレー色に煙って、海も消えてしまった。バンガローも流されてしまうんじゃないかというほどの勢いだ。

びっくりしながら30分ほど見ていたが、バケツの水が切れたようにふっと止んで、太陽がさーっと照り始めた。

途端に、透き通った真っ青な海と空、細かい砂のビーチに面白い形のヤシの木、そんなポストカードの風景がバンガローの目の前に広がった。太陽の光で何もかもがキラキラしている。

ローシーズンだったのだろう、ビーチには客が少なく、私たちは毎日その静かなポストカードの中を散歩した。

夕方になると、夕焼けで海も空も真っ赤に染まった。今度は夕焼けのポストカードだ。私たちはカメラを向けては何度もシャッターを押した。

バンガローとビーチを1週間楽しんだ後、私たちは場所を変えてシェラトン・フィジ・リゾートに移った。

こちらは、ホテル内の施設が売り込みだったが、やはり魅力的なのは海である。ヤシの木が立ち並ぶワイルドなバンガローの海とは違ったが、何処までも続く長いビーチは、見ていだけで癒される。

このリゾートに滞在中、私たちはビーチで行われていた2組の結婚式を見た。

一組は若いカップルだった。家族や友人達がビーチ上に用意された30席ほどの白いカバーをかけた椅子に座り、結婚式に参加していた。

ウェディングドレスと白いタキシードに身を包んだ花嫁と花婿が前に立ち、とてもリラックスした雰囲気の中で指輪の交換をしている。開放的な雰囲気に、参加者全員も笑顔で幸せそうだった。

二組目は、偶然目にした中年カップルの結婚式だった。

二人は50歳前後だったのだろうか、白いアロハシャツとズボンに身を包んだ花婿が、フィジ人の神父と二人でビーチに立ち、花嫁を待っていた。

家族や友人達の姿はなく、側にいたのは神父の他にホテルの従業員数名だけだ。

花嫁は何処だろうと長いビーチを探してみると、100mほど先の波際を、頭に花輪を飾った白い衣装の花嫁が、6人の男性が担ぐ筏板の上に座って運ばれてきた。

潮風に花嫁の白いシンプルな衣装と髪が揺れ、映画のシーンのようだった。

ただ、筏の上の花嫁には笑顔がなかった。彼女は真剣な表情でじっと花婿の方を見ていた。二人の間にどんなドラマがあったのだろうか。やっと、出会うべき人に出会ったのだろうか、それとも2度目の結婚式なのだろうか。

波の音と潮風が二人を祝福していた。

フィジ島を離れる前に、私たちは1日クルーズに参加した。

集合場所の港へ向かうと、スーッと伸びた船体がエレガントな黒い帆船が停まっていた。予約客は到着次第、勝手に船の中へ乗り込んでいく。私たちも乗り込んで好きな場所に陣取ると、さっそくシャンペンが手渡された。前菜も用意されており、これから始まるクルーズの期待感が高まってくる。

全員が揃ったところでいよいよ帆船は出発だ。客は20名ほどだった。

走り出しはエンジンをかけたが、直ぐに大きな帆を膨らませ（帆の大きさを、私はこの時初めて知った）、風を受けた船は、鏡のように静かな蒼い海をスーッと沖へ向けて進んで行った。

みんなデッキに座り、心地よい風を受けながら、あれやこれやとおしゃべりに興じ始めていたが、その内、太陽が登るとともに日差しが強くなり、一人、二人とティーシャツとズボンを水着に着替え、サンクリームをバッグから取り出して顔や身体に塗り始めた。

いつもは船酔いしやすい私だが、この時の帆船は蒼い海の中を滑るように進んで行くので、船酔いどころか気分は最高だった。

この帆船の先端には、細い飛び込み台のような板が突き出ている。そこまで行くのが少々怖いのだが、行き着いて立って見ると、足下の蒼い海がものすごい勢いで後ろに流れていき、まるで自分が海の上を飛んでいるようなスリル感があった。

ジョン・クロードがやってきて私を後ろから支えるように立つと、まるで映画「タイタニック」の一場面だ。

一緒に乗船していた新婚旅行中の日本人カップルが「ジョンとヨーコみたいですね」と言って写真を撮ってくれた。

日焼けした顔にサングラスをかけ、水着姿でカメラに向かって微笑んでいる「ジョンとヨーコ」の写真は、この日以来、私のお気に入りである。

帆船は途中で孤島に停まり、そこでピクニックの昼食があった。食事の後はスノーケリングや島の散策など、それぞれが好きなように過ごす。

私たちはマスクとスノーケルを持って真っ直ぐ海へ向かった。孤島の海は驚くほど透き通り、スノーケリングをしないで帰るとバチが当たりそうだった。

しばらく美しい海の世界を堪能した私たちは、海から上がり、グループから少し離れてビーチに座った。その時である、私たちは長さ2m近くのイグアナを発見した。

発見したと言うより、私たちが座っている背後に、それがやってきたのである。

何か音がするので、ふっと振り向いてみると、世界最古というにふさわしい風貌のイグアナが、ゆっくり、ガクガク、歩いていた。

まるで何百年も生きている、この孤島の仙人、というようなぎこちない動きだ。

最初に見た時は、ぎょっとしたが、その鈍い動きを見て少し安心した。

イグアナも人間を恐れる様子はなく、しばらく止まって私たちの方を見ていたが、大して興味もないようで、また、ゆっくり、ガクガクしながら去って行った。

夕暮れが近くなった頃、私たちは帰途についた。

帰りの帆船は行きよりもスピードを上げ、ぐんぐんと進んで行く。

遠くの空と海が赤く染まり始めた。1日の疲れで椅子にけだるく座った乗客達は、黙ってその夕焼けを見つめていた。

フィジ島に2週間滞在した私たちは、再びシドニーへ戻った。

ハワイ

フィジ島からシドニーに戻った私たちは、2・3日泊した後、再びカンタス航空機で次の目的地ハワイへ向かった。

到着したのはオアフ島だ。六つの島の中で最も人口が多く、ホノルル、ワイキキビーチなどがある一番都会の島である。

空港の玄関を出て、私たちはいつもの通りタクシー乗り場へ向かった。到着便が重なったのか、タクシー乗り場は旅行者で一杯だ。

タクシーを捕まえるのに時間がかかりそうだな、とぼーっと目の前の旅行者を見ている私に、

「ここで待ってて」

とジョン・クロードが言い、荷物と私を置いて旅行者の中をかき分けながらタクシーを探しに行った。

タクシーは簡単に見つからないだろうと覚悟をしていたのだが、予想に反して、ジョン・クロードは直ぐに戻ってきた。

「タクシーを見つけたよ」

「あっ、そうなの。・・・どこ？」

「あっちの方。ちょっと歩くよ」

ジョン・クロードは荷物を抱え、さっさと歩き始めた。

大きなタクシー乗り場を横切った所で、「これだよ」とジョン・クロードが言った。

目の前に止まっていたのは、車体の長い白色のリムジンだった。

「これ？これにしたの？いやあー、いくらなんでも、これはちょっと高いでしょう」

私は声を少し潜めて言った。

「ううん、それが、普通のタクシーとあまり変わらないんだよ」

「ええ～・・・、本当に？」

「うん、だから、これに乗って行こう」

リムジンの料金がいくらなのか、私はもう彼に尋ねなかった。

運転手は女性だった。

私たちが乗り込むと、女性はバックミラーで私たちの方をチラッと見た。

行き先を言うと、女性はうなずき、リムジンはすーっと走り出した。

座ってみると、いやー、リムジンの中は広い！映画の中で見る通りだ。

座席がソファーのように向かいあっているの、ジョン・クロードがこちら側、私がこちら側に座ってみたが、座席があまりにも大きくて、車がカーブを曲がる度に私たちの体が左右に躍って落ち着かない。なんだか楽しくなって、二人でキャッキヤ、と笑ってしまった。

運転手の女性が、またバックミラーで私たちをチラッと見た。

結局、私たちは一つの座席にくっついて座ることにした。

座席が低く、前の座席とのスペースも広いので、足を投げ出して座れるのが、また良かった。

座席の横には、映画に出てくるように、シャンペンや洋酒のボトルがそのままあり、グラスもちゃんと備え付けられていた。中身は空だったが、シャンペンでも飲みたい気分だった。

ジョン・クロード様、リムジンに乗る事が出来たのも、あなたのお陰です。ありがとう。

私たちは予約していた「ヒルトン・ハワイアン・ビレッジ・ワイキキ・ビーチ・リゾート」に到着した。

ホテルは、一言でいうと、「ウワォ！」。その大きさ、そのゴージャスさ、アメリカスタイルまたはアメリカサイズとでも言おうか、正に「夢のパラダイスへようこそ」という華やかさに満ちあふれていた。

部屋にたどり着くまで、いくつのトロピカルガーデンを見ただろう。池や滝があり、本物のフラミンゴやペンギンまでいた。

プールはいくつあったのか、日本レストランを含めたレストランは何件あったのだろう、そしてショップ、ブティック、・・・。ホテル内にいるだけで、全て足りるようだ。

そして、かの有名なワイキキビーチは、ホテルにつながっているかのように直ぐ目の前だった。

私たちの部屋が何階だったのかも覚えていないが、かなり上階の部屋のバルコニーからはワイキキビーチと真っ青な海が眼下に見られ、目を上げると、遠くにはダイヤモンド・ヘッドが悠然と立っていた。

ハワイに来て一番驚いたのは海の色だ。ハワイは随分昔から有名な観光地である。きっと多くの旅行者で海は汚れているだろうと思っていたが、それは間違いだった。未だに青く透き通って綺麗なのには驚いた。

同じように透き通った海はバリ島でもフィジ島でも見てきたが、ハワイには他の島とは違うスコーンと抜けた明るさがあった。

「能天気」に何も考えなくていい、ただ楽しもう、という開放的な雰囲気に包まれているのだ。

オアフ島では日本語が氾濫していることにも驚いた。

ホテル内は勿論だが、ホテルの外へ出ても、どこからでも日本語が聞こえてくる。土産物屋の主、ブティックの従業員、レストランの呼び込みをする人、みんな流暢な日本語を話す。顔もアジア系なので、1時間も外にいと日本にいるような錯覚を覚えてしまう。

ハワイに日本人旅行者が多いのもうなずける。

私たちは1日だけマウイ島へ飛んだ。

マウイ島の小さな空港に降り立った私たちは、そこでレンタカーをして島内に入って行った。

マウイ島はオアフ島とは違い、自然がいっぱいだ。

本当は、この島の、この自然の中で1ヶ月間ほど過ごす予定だったのだが、インドで急に持ち上がったウェブデザイン会社設立の話の為、ハワイ滞在はほんの1週間程度になってしまった。

私たちはマウイ島を車で走り抜け、自然を満喫した。

マウイ島にはワイルドなビーチが沢山あり、若者達がサーフィンを楽しんでいる。

「ウェブデザイン会社設立の話もいいけど、この自然の中で1ヶ月間、生活してみたかったね」

温かい砂の上でピクニックをしながら、私たちは少し未練たらしく話をした。

車を走らせながら、森や小さな村の外れにある素朴なホテルを見つけると、

「ああいう所で1ヶ月間、過ごしたかったね」

などと言い合った。

1年間の予定だった世界旅行を2ヶ月間に絞ったのは自分たちだが、やはりもう少しゆっくり周りたかったなという気持ちは、心の何処かに残っている。

マウイ島の1日はあっという間に終わり、私たちは小さな空港から再びオアフ島へ戻った。自然環境から都会環境へ逆戻りである。

ハワイと言うと、ホノルル。

私たちはトロリー（路面電車風のバス）に乗って、ホノルル巡りをした。

ホノルルは都会といっても高いビルが建ち並ぶ様はなく、何処も敷地が広々とし、緑が多くてホッとする。

「常夏のハワイ」だから、いつも暑いのは当たり前だが、海からの風が空気を清々しくするのか、じっとりべっとり、という不快感を感じる事がない。

しかし、ホノルルの街のことはトロリーに乗った事くらいしか覚えていない。

やはり、ワイキキビーチとマウイ島の自然が強く印象に残っている。

ハワイの自然をじっくり堪能することが出来なくて残念だったが（ホエール・ウォッチングもできなかったな）、私たちは次の目的地、サンフランシスコへ向かった。



サンフランシスコ

2度目のサンフランシスコ。

到着したのが夜遅く、空港から乗ったタクシーの若い運転手が気さくで話し好きだったのを覚えている。生粋のアメリカ人だなあ、と思いながら私とジョン・クロードは彼の話に相づちを打っていた

予約していたヒルトン・フィッシャーマン・ワルフ・ホテルは海の側だった。フィッシャーマン・ワルフという名前の通り、漁港が近いのだ。

漁港の沿岸には蟹やエビなどを食べさせてくれる小さな屋台風のレストランが、ずらっと軒を並べて立っている。

昼食にしようとホテルを出た私たちは、ちょうどその前を通ることになった。

こういうところの蟹やエビは新鮮なんだろうなあ、と私は思ったが、私達二人は道路の反対側にある日本レストランへ向かった。

ジョン・クロードは、屋台風の店で食事をするのは昔から好まない人だった。シンガポールへ行った時も、夜になるとこういうレストランが道路脇にずらっと並ぶ所があるが、彼はそこでも食事をするのを嫌がった。インドの道端で眠ったこともある人が、屋台の食事を好まないなんて面白いところがある。

私たちが宿泊したホテルの近くにケーブルカーの発着場があった。私たちは毎日そこからケーブルカーに乗り、サンフランシスコの中心地へ遊びに行ったのだが、ケーブルカーが発着場に到着すると、中の運転手が降りてきて、彼が手動でケーブルカーの向きを360度変えるのである。これがちょっとしたアトラクションになっていて、ケーブルカーが到着する度に見物客の輪が出来た。

ケーブルカーは座って行くのもいいが、晴れの日であれば、入り口の所に立って風を受けながら行くのがお勧めだ。ケーブルカーに乗っている爽快感が沸々とわいて来て、つい笑顔が出てしまう。

ある日、私たちはケーブルカーの代わりにバスを使って、ゴールデンゲートブリッジを見に行った。

朱色の橋のたもとに立つと、6車線の車道と両端の歩道の大きさが胸を打つ。

私たちは切符を買い、他の旅行者達にまじってゆっくりと橋を歩きはじめた。

しばらく歩くと、右手の海にアルカトラズ島が見えて来る。滞在先のホテルに近い港からフェリーでこの島に行けるようだったが、私たちはそこまで興味がなかった。

その日は良く晴れ上がった素晴らしい日で、風を受けながら橋の上を歩くのは気持ち良かった。このまま歩いて3km先の向こう側まで行ってみればよかったのだが、私たちはそれにも興味がなく、しばらく歩いて引き返した。

1週間はいたのだろうか、サンフランシスコに滞在した日数はもう記憶にない。

1年間かけて訪問する予定だった国々を2ヶ月の駆け足でやってきた私たちは、この辺りで少々疲れていた。

そろそろ、ウェブデザイン会社設立の方に興味が行きかけていたのかもしれない。

ほとんど未練もなく、私たちはサンフランシスコを後にした。



ニューヨーク

最後の目的地であるニューヨークのケネディ空港に到着したのは夕方だった。ケネディ空港は1973年に私が初めて日本を出た時に到着した空港である。スイス人のペーターが空港で私を待っていてくれた。そこから更にオーバニーへ行く為に、グレイハウントの大きなバス乗り場へ急いだのだった。

あの頃、私は格好をつけて煙草を吸っていたが、アメリカへ行くと言うと、幼なじみがゴールド色のライターをプレゼントしてくれた。

「なくしちゃ駄目だよ」

と言われたのだが、グレイハウントのバス乗り場のカフェで休憩した時に、早速、忘れ

て来てしまった。バスに乗る前に気づき、直ぐにカフェへ戻ったのだが、私のライターはもう何処にもなかった。ウェイター達にも訊ねたが、みんな素っ気ない素振りで、知らない、と言うだけだった。

長旅で疲れた上に、異国に到着して興奮していたのだと思うが、

「ずっと持っていてね」

と言われたものをなくしてしまい、私はずいぶんと落込んだものだ。

そんな事を思い出しながら、私はジョン・クロードとケネディ空港を後にした。

ワールドツアーの最後の目的地にニューヨークを入れたのは、私もジョン・クロードも、もう一度観てみたいと思ったからである。

私は、ニューヨークは素通りだったし、ジョン・クロードは2週間ほど滞在した事があるそうだが、随分昔の事だった。

どうせサンフランシスコに行くのだから、ついでにニューヨークにも行っておこう、そんな感じで決まった。

空港からタクシーでニューヨーク市内にあるシェラトンホテルに向かったが、のんびりしたハワイからやって来た私は、高層ビルの風景に圧倒された。

到着したシェラトンホテルもバカでかかったが、回りのビルは全て同じように空へ向かって伸びていた。これがニューヨークか・・・。

シェラトンホテルの中に入って、その広さに又驚いた。

アメリカのアイスクリームやレストランで出される食事の大きさは人並みでないが、建物のサイズも正にアメリカンスタイルである。

その夜、私たちは眠ることができなかった。

ジェットラグのせいなのか、それとも疲れすぎているのか、目が冴えて眠くならないのだ。

寝返りを打ってみたり、二人で話をしたりしていたが、その内に外が白々と明るくなり始めた。

そのとき、窓辺できらっと何か光るものがあつた。私はベッドから飛び起きて、窓の側に走った。

「うわー！」

林立するビルの窓ガラスに朝日が反射して、回り中がオレンジ色に光輝いていた。

私たちの窓からは朝日がどの位置にあるのか分からないのだが、太陽の光はビルの窓から窓に反射し、ニューヨークの街に朝の到来を知らせていた。

暖かいオレンジ色が灰色のコンクリートの林を優しくしている。

ジョン・クロードも直ぐにやって来て、二人で写真を撮り続けた。

結局、ほとんど眠らずに、私たちのニューヨーク第1日目が始まった。

ニューヨークの第一日目だ、何処かへ出かけようと身支度は出来たものの、私たちはとても疲れていた。寝ていないからではない。

この2ヶ月間、いろんな国を移動して周り、体力的にも精神的にも一杯になっていた。

だが、急な変更は人生につきものである。ゆっくり行けばいいのだ、と私たちは気を取り直して出かけることにした。

まずはセントラルパークへ行ってみた。

太陽が輝くパーク内には、歩いている人やジョギングをしている人、ベンチに座ってくつ

ろいでいる人たちがいて、人種も各種で、正に映画で見る通りだ。ここはニューヨーカーと観光客の憩いの場所なのである。

私たちも映画の中の主人公のように、セントラルパークをゆっくりと歩いてみた。

19世紀の中頃に人工的に作られたパークとは思えないほど、公園は緑に溢れ、湖が心を癒し、素晴らしい自然の調和が雑踏のニューヨーク街にいることを忘れさせてくれる。

パークを歩いていると、背の高い「ザ・プラザ」ホテルが見えてくる。5星の、マンハッタンにある高級ホテルのうちの一つである。

映画「ホームアローン」に使われ、その影響で更に有名になったホテルだが、外見も威厳のある建物だ。

このホテルで「アフタヌーン・ティー」が楽しめるを知り、私たちは行ってみた。

レッドカーペットが引かれた階段を上がって中に入ると、内装はヨーロッパ風だった。

「アフタヌーン・ティーを楽しみたいのだけど」

とホテルマンに告げると、ステンドグラスの天井から光が差し込むレストランに案内してくれた。

高級なホテルだが、従業員はとてもフレンドリーだ。

ケーキとコーヒーを頼んだと思うのだが、もう覚えていない。

アフタヌーン・ティーと言えばシンガポールが有名で、そちらの方が記憶に強く残っている。

どちらにしても、アフタヌーン・ティーは言い訳で、本当は「ザ・プラザ」ホテルの中が観たかっただけなのである。

肝心の内装だが、私たちはよほど疲れていたのか、記憶にはほとんど残っていない。

数日後、地下鉄を使ってツインタワーへ出かけた。

午前10時くらいから大変に混むという話を聞いていた私たちは、8時半くらいには到着していたと思う。

そびえ立つシルバーメタルのツインタワーを下からずーっと上に眺めていると、あまりの高さに、私は後ろにひっくり返りそうになった。

建物に入り、直行エレベーターで一気に展望台に登る。

直行で一気に、と書いたが、建物が高いので、最上階までかなりの時間がかかった。

展望台に到着すると、そこから更に外へ出られる場所があった。出てみると急に視界が開け、ミニチュアのようなニューヨーク街の全貌が目飛び込んできて、思わず息をのむ。

同時にツインタワーの高さも身にしみた。

柔らかな風を受けながらニューヨーク市内やニューヨーク湾に浮かぶ自由の女神像を一望し、これでニューヨークは見たなという満足感を得た。

下に降りる前に、展望台の内部を見て回ることにした。土産物屋等が入っていたが、そこで面白い機械を見つけた。コインを入れると、それがツインタワーの記念コインになって出てくるようだ。

さっそく焦げ茶色をした1ペニーを入れてみた。ガタン、ゴトン、と音がした後、「ポトンッ」と小さなコインが出口から出て来た。

手に取ってみると、ツインタワーをかたどった、楕円形のコインになっていた。

いい思い出でになったと喜んだが、この日から1年と3ヶ月後の9月11日、私たちが登った時とほぼ同じ時刻にツインタワーは崩壊した。

ツインタワーを出た私たちは、ニューヨーク市内を歩いた。

フィフス・アベニューを散策したが、見上げた空がビルの谷間に四角く見えて、虚しく思えた。

コーヒーショップでは、どの国よりも高いコーヒーが白い発泡スチロールのような容器に入って出て来たのには興ざめした（私は陶器のカップで飲むほうがいい）。

夜のタイムズスクエアでは「眠らない街」を体験した。

そうして私たちのニューヨーク滞在1週間は終わっていった。

もう一度訪れてみたい、と希望して行ったニューヨークだったが、私たちが疲れすぎたのか、それともニューヨークが大きすぎたのか、なんだか馴染めないうちに滞在が終わってしまった。

1週間という短い期間でニューヨークを知ろうと思う方が無理なのかもしれない。

イタリアのトスカーナ



ワールドツアーを終えた6月初旬、私たちはニューヨークからスイスのチューリッヒへ向けて最後のビジネスクラス飛行を行った。インド滞在とワールドツアーを含めて1年2ヶ月ぶりの帰国である。

大きな旅行をやり遂げてホッとしたところだったが、私たちには、まだこれからイタリアへ向けて出発する計画が残っていた。

チューリッヒ空港に到着した私たちは、空港内のホテル・モーヴェンピックに部屋を取っ

た。帰る家がないというのは、なんだか足が宙に浮いたようで落ち着かない。
スーツケースをホテルに置くと直ぐに空港内から列車に乗り、旅行前に車や荷物を保管した貸しガレージに向かった。
チューリッヒ湖の前にある貸しガレージのオートマティックドアを開くと、その奥に私たちの日産プリメーラが静かに横たわっていた。
1年以上も前に外したバッテリーを繋げてやると、「ブルーーン」と一息ついて、車はすぐに生き返った。ロボットのような、とちょっと感動した。
それから、別の部屋に保管していた荷物の状態を調べてみた。
ガレージの分厚い壁の中に保管されていた家具や所有物は、埃をかぶることもなく、湿気によって損傷を受けることもなく、全て完璧に残っていた。
その中で、イタリアで使うことになるだろうテント一式を取り出して車に積んだ。
トスカーナにどれくらいの期間滞在することになるのか分からない。その期間中、ずっとホテル住まいをするわけにはいかない。
ホテルで2・3日ゆっくりした後、私たちはイタリアのトスカーナ州にあるフィレンツェへ向けて、日産プリメーラを走らせた。

スイスのチューリッヒからトスカーナまで約800kmある。
1年ぶりに車のハンドルを握るジョン・クロードは、ドライブを楽しんでいた。
飛行機の旅は遠い所へ行ける利点があるが、やはり車の旅は自由が利いていい。好きな時に、好きな所で停まることができる。
中でも、車でスイスを縦断する時に目の前に見えるアルプスや湖の風景の美しさは、上空を飛んでいる時に見える風景とは違った感動がある。
イタリア国に入ると、途端に家々が貧しい様相を表してくる。道路の具合も悪い。街中はもちろん、森の中まで綺麗に整頓するスイスからやってくるからか、その違いは歴然だ。
だが、南下していくにつれ、家も風景も整然としてくるのは面白い。
そして、そのまま走り続けてトスカーナ州に近づくと、間もなく、なだらかな丘陵と糸杉の風景が現れ、その間にレンガ色の屋根をつけた家々が見えてきて、ポストカードのような風景に長旅の疲れが癒されていった。

あの頃は、まだ車のナビゲーターがなく、私たちは地図を見ながらトスカーナの首都、フィレンツェへ入って行った。
予め目標としていたキャンプ場は、フィレンツェの直ぐ近くにある丘の上の小さな街フィエゾレにあった。
どうした訳か、私たちはフィエゾレに向かうのに、雑踏のフィレンツェの街中を突っ切っていた。
フィエゾレは、20年ほど前、イギリスで撮影された「眺めのいい部屋」という映画に使われた街で、その名の通り、街のはずれからフィレンツェの街が一望できた。
街の全ての屋根がレンガ色で統一され、他のヨーロッパでは観た事がない中世の雰囲気を感じ出していた。
夜になると、オレンジ色の電球に古都が浮き上がり、更に魅力的になった。
2ヶ月間、ビジネスクラスで飛び回り、高級ホテルに宿泊して来た私たちは、今度はキャンプ場でテント暮らしになったが、そのギャップも、また楽しかった。
テントの中で横になりながら、これから始まる未知の世界の事で二人はワクワクしていた。
さあ、又、新しい人生に突入だ。ジョン・クロードと一緒になら、何も怖くない。

フィエゾレの3日目、私たちは愛車日産プリメーラに乗り、フィレンツェの街を目指して、糸杉の間を縫う細い道を下って行った。

地図を見ると、一緒にウェブデザイン会社を作ろうと約束したパトリックとアンドレアスとのミーティング場所は、フィレンツェの中心地からアルノ川方面に歩き、更に川を渡った所にあるようだ。

私たちは車をアルノ川の横にある駐車場に停め、そこから川沿いに歩いて行った。

その日は6月15日で、フィレンツェは汗ばむほど暑かった。

盆地のフィレンツェは、夏は非常に暑く、冬は非常に寒くなると後で知った。

夏休み時期で旅行者が多く、私とジョン・クロードは車道と土産物屋の間に溢れた人びとをかき分けながら進んで行った。

「彼らは本当に来るかな・・・」

「来ると思うけど・・・」

来ていると思ったかったが、もしも来ていない時のショックを和らげるかのように、二人はそんな事を口にしながらかいた。

車に気をつけながら土産物屋の前を進んでいると、急にだだっ広い広場が目の前に現れた。ピッティ宮殿である。

この広場の前にある建物の中で、彼らは待っているはずだ。

ピッティ宮殿の前には昔の屋敷らしい建物が建ち並んでいるが、外壁が一つになっているので、何処から何処までが、どの家なのか、さっぱり分からない。

ドアの番号を知らないと、一つ、一つ、ドアをたたいて行く事になる。

幸い、私たちは目的の入り口をすぐに見つけた。暑い為、ドアは開きっぱなしになっている。広い玄関に入ると、そこから階段が上に延びていた。

「来ているだろうか、来ていないだろうか・・・」

早く知りたかったが、私たちは階段をゆっくりと上がって行った。

中は会館になっているようで、何かの講演をやっていた。

聴いている人たちは少なく、私とジョン・クロードはそこに座っている人たちの後ろ姿を一人ずつ見ていった。

そのとき、パトリックとアンドレアスが私たちの方を振り向いた。そして、私たちを見つけると、笑顔がはじけ、直ぐに席を立てて私たちの方へ歩いて来た。

嬉しい再会だった。

「ヘイ！、ちゃんと来られたんだ」

「勿論だよ。会えて嬉しいよ。実は、君たちが本当に来ているかどうか、ちょっと心配だったんだけどね」

4人全員が興奮していた。インドで別れてから2ヶ月ぶりの再会である。

しばらく立ち話をしていたが、オーストリア生まれのアンドレアスがフィレンツェに来た事があるというので、残り3人はヴェッキオ橋、ウフィツィ美術館、デウオモなどを案内してもらった。

「フィレンツェにはどっしりとした石造りの建物が多く、その建物の至る所に、有名な、または名も知られていない芸術家達が美しい創作を刻み込んでいる。そこには彼らの美に対する気持ちが満ちあふれている」

とガイドブックに書かれていたが、威厳はもちろんあるものの、私にはそこから中世の人びとの雑踏が聞こえてくるようだった。

ああ、イタリア、トスカーナ。

パトリックとアンドレアスは、トスカーナ郊外で知人が経営するアグリツーリズモに滞在していると言った。

アグリツーリズモは日本の民宿のようなもので、農業をしながら宿を提供している所である。オリーブオイルやワインを作り、羊を育ててチーズを作っている所もある。全部ではないが、宿でトスカーナの家庭料理を食べさせてくれるところもある。

これからの話し合いは、そこでしよう、という事になり、彼らは先に帰り、私とジョン・クロードはキャンプ場へ引き返した。

せっかく組み立てたテントだが、明日は畳んでしまわなければいけない。組み立てるのが大変なテントだけに、こんなに早く畳んでしまうのはちょっと残念だったが、何週間も使う必要がなかったのは、やはり嬉しかった。

翌日、私たちはトスカーナ郊外へ向けて出発した。

フィレンツェから「F・S」という、フィレンツェーシエナ間を結ぶスピードウェイ「アウトストラダ」に乗り、一路、トスカーナ郊外を目指す。

明るい太陽の下、空が右から左へ180度開き、アウトストラダに乗っていても、なだらかな丘陵の風景が左右に見られる。

丘の上に一件家がぽつんと建ち、そこまでのアプローチとして糸杉が並び、そしてぶどうとオリーブ畑がきれいな模様を見せて広がっている。ホッとさせられる景色である。特に私は空の大きさに感動した。

「アウトストラダ」を30分ほど走った後、私たちはそこから今度は郊外の道へ入っていった。

郊外の道はくねくねと続き、目的地まで随分時間がかかったが、私たちは無事、パトリックとアンドレアスがいるアグリツーリズモに辿り着いた。

海は見えなかったが、地中海にほど近い場所に、そのアグリツーリズモはあった。

トスカーナの平野に建つその建物は簡素ではあったが、糸杉の並ぶ静かな環境の中にあり、私たちの話し合いには最適な場所だった。

さっそく、私たちも部屋を確保した。

「さあ、これからどういう展開になるのだろう・・・」

その日は、アグリツーリズモで食事をし、夜まで彼らと雑談をして、部屋に戻った。

翌朝、早速、パトリックの部屋に4人で集まり、ウェブデザイン会社設立の話し合いが始まった。

会社が設立されれば、誰がどの仕事に就くのか、それは全員が既に了解していた。

問題は、何処に会社を設立するか、どこに住むか、であった。私たち4人はトスカーナに関して全く知識がなかった。

幸いなことに、パトリックにはトスカーナに住んでいるイタリア人夫婦の友達がいた。

イタリア語を話せない私たち4人には、彼らの助けが必要だ。

私たち4人は一緒に彼らの家を訪問した。

訪ねて行った若い夫婦は、私たちの目の前で夫婦喧嘩を始めるほど血の気の多いカップルだったが、オフィス探しの際には手伝ってくれるようお願いすると、二人とも快く引き受けてくれた。

会社は、出来れば郊外にある小さな街の方がいい。しかし、インターネット接続が良くなければ、PCは使えない。

若い夫婦が、古い街と新しい街があるコッレ・ディ・ヴァルデルザという、クリスタルグ

ラスで有名な街はどうかと提案してくれた。塔で有名な観光地サン・ジミニャーノの街に近いらしい。

さっそく私たち4人は日産プリメーラに乗り、その街を目指して郊外の道を走り出した。トスカーナ郊外の道はカーブが多く、それに加えて道が緩やかにアップダウンしている。慣れないと直ぐに車酔いをするが、4人の中で一番体の大きいドイツ人のパトリックがさっそく車酔いした。助手席に座っていた私は、後部座席のパトリックと席を変ったが、しばらく走ると慣れない私も気分が悪くなって来た。ここで私まで落ち込んで、新しい企画に心踊っている全員の気分を壊したくないと思った私は、車内にかかっていた音楽にあわせて大きな声で歌を歌ってみた。これがうまい具合に作用して、私の車酔いは抜けた。

丘の上に立つコッレ・ディ・ヴァルデルザは、中世に作られた石造りの街だった。

古い街は丘の上にあり、クリスタルグラスが有名なので、工房や店が狭い道を挟んでいくつもある。

新しい街はその麓に広がっていた。電車こそ通っていないが、バス停がいくつもあり、開けた街である。大きくもなく、小さくもない、トスカーナ郊外の雰囲気がまだ残るこの街が4人ともすぐに気に入った。

私たちは街を一通り見て回り、アグリツーリズモに戻った。

2日後、パトリックとアンドレアスが、もう一度コッレ・ディ・ヴァルデルザの街を観察したいと言いだした。私とジョン・クロードは、別の街も調べてみたいからと言って、アグリツーリズモに残った。

その日は6月の暑い日であった。

イタリアへ到着して以来、私とジョン・クロードはまだ一度も海を見ていなかった。

話し合いは海でも出来るからと、私たちは地図を持って初めて近く of 海へ出かけて行った。透き通った美しい海と長く続く浜辺に感動しながら、私たちは熱い砂の上にタオルを敷いて寝転がった。浜辺には数えるほどしか人がいない。

「トスカーナはいい所だね。ここに住めるようになったらいいね・・・」

青い空と海を見ながら、私とジョン・クロードはそんな話をした。スイスを出発して以来、初めてくつろいだ時間だった。

太陽を浴び、少し日焼けしてリラックスした私たちは、まもなくアグリツーリズモに戻って行った。

戻ってみると、パトリックとアンドレアスが既に宿に帰って来ていた。

私とジョン・クロードが二人に近づき、海が素晴らしかったことを伝えようと、パトリックが急に怒りだした。

「僕とアンドレアスは暑い中、街を歩き回ったというのに、君たちは海に行っていたなんて、許せない」

そんなことを言った。

いつも穏やかなジョン・クロードが、口を開いた。

「ヘイ、パトリック！注意して聞いてほしい。僕と君たちは、まだ会社も作っていないし、同僚でもない。いや、同僚になったとしても、君には僕たちの行動をコントロールする権利は一切ない」

と、きっぱりと言った。

パトリックは機嫌を損ねたらしく、最初は何も言わなかったが、その内ジョン・クロードの言うことを理解したのか機嫌がなおり、いつものように4人でミーティングを始めた。パトリックとアンドレアスは、コッレ・ディ・ヴァルデルザでオフィスに適した物件を見

つけてきたと報告した。不動産業者ともすでにコンタクトをとったらしい。
何とも早急な行動をとってきたなと私とジョン・クロードは思ったが、翌日、4人でその物件を見に行った。

オフィスにいいのではないか、という建物は既に空き家で、ガラス窓から部屋の中に光が充満していた。

場所的にも良く、私とジョン・クロードも気に入った。

「ここだったら働きやすいオフィスになりそうだね」

と私が言うと、

「実は、皆で住めるアパートも見つけたんだけど・・・」

とパトリックが言いだした。

私とジョン・クロードは驚いた。住む場所も彼らと一緒にだとは考えてもいなかった。

だが、何も知らない土地で生活をスタートするには便利でいいかもしれないと思い直した私たちは、パトリックの言うアパートを一緒に見に行った。

アパートといっても、昔の屋敷をいくつかに区切って造られたもので、建物は古かった。不動産業者の案内で中を見てみると、部屋数はあったが、小さなバスルームが一つだけ、というのがいけなかった。その上、それぞれの部屋が小さく、プライバシーがほとんどないアパートだった。

「これは無理だ」

と私とジョン・クロードはパトリックに伝えた。

「でも、パトリック、君が気に入ったのなら借りたらいいい。僕たちは別の場所を探すから」とも言った。

パトリックの頭には、4人が一緒に生活をしながら仕事をするというアイデアがあったらしい。その方が一人の負担する家賃が安くなる。

だが、私たちには仕事を離れてまで一緒に過ごすことは考えられなかった。

困った事に、パトリックとアンドレアスは会社設立を急いでいた。

とくに、アンドレアスはお金に困っており、直ぐにでも仕事を始めなければいけない状態だそうだ。

そして、不動産業者には物件の契約を迫られていた。

自分たちの生まれた国でもない場所で、知人も殆どいない状況の中、物事を早く解決しようと思う事自体が間違っている。

特に時間や期限の感覚が他のヨーロッパとは違ってスローなイタリアでは、何に関しても時間が必要なのだ。

もっとゆっくり時間をかけて探すべきだと私とジョン・クロードは言った。

もし、パトリックとアンドレアスが急いであのオフィスと住居を確保したいのであれば、契約はパトリックに結んでもらおう、とも言った。

一人で契約の責任を背負う事になったパトリックは、急に黙り込んだ。

一晩考えよう。4人は少し疲れた身体で、アグリツーリズモに帰っていった。

その夜、私とジョン・クロードはベッドの脇で話し合った。

先ず、パトリックが私たちの行動をコントロールしようとしたことは驚きだった。一緒に仕事をする事になったとしても、彼にはそんな権限はないことを分かってもらわなければいけない。

それから、パトリックとアンドレアスが何事も急ぎすぎるのは困ったものだ。

私たちは慎重に探したい、彼らは早急に見つけたい。お互いの波長や考え方が合わないではないか。そんな彼らとこの先、話し合いを続けることは無意味だろう。

私とジョン・クロードは、ウェブデザイン会社設立の件から抜けることを決心した。会社設立の為に1年間の旅行を2ヶ月間に短縮し、こうしてイタリアのトスカーナまでやって来た私たちだ。この話が無くなった後、どうするのか、どこへ行くのか、先の事は全く見えなかった。だが、だからといって、納得がいかないことに自分たちの人生を賭けるわけにはいかない。

明日の朝、パトリックとアンドレアスにこのことを伝えよう、と話して私たちはベッドに入った。

翌朝、朝食を食べる場所に行くと、パトリックがいなかった。

様子を見に行ったジョン・クロードが「パトリックが泣いている」と私に伝えに来たのは、朝食が終わった直ぐ後だった。

どうやら、彼はオフィスと住居の契約責任に重圧を感じたらしい。

4人はパトリックの部屋で車座になって話し合った。

目を泣きはらしているパトリックを目の前にして言うのは少々気が引けたが、私とジョン・クロードは、会社設立の件から抜けることを伝えた、意外にも、パトリックはホッとした様子を見せた。

アンドレアスも、物事がスムーズに進まないことを不安に感じていたらしく、直ぐにオーストリアに帰り、仕事を探すと言った。

そしてまもなく、パトリックとアンドレアスはそれぞれの国に帰っていった。

残った私たちは、帰る場所もない。それでもひとまず滞在していたアグリツーリズモを出る事にした。最悪の場合は、持っているテントに寝ればいいのか。

車に乗り、トスカーナ郊外の道を当てもなく走りながら、

「さて、何処へ行こうか」

と二人はお互いを見合った。一寸先も見えない状態では不安も押し寄せて来ない。

郊外の道を走り進んで行くうちに、この辺りで一番高い丘の上にある街ヴォルテッラにたどり着いた。

昔、「ブーヴェの恋人」という映画に使われた街だと後で知ったが、石造りの重厚な街は、歴史がエトルリア時代にまでさかのぼる古い街だった。

その時、ジョン・クロードが急に思い出した。

「そうだ、同じトスカーナに、チューリッヒで私たちの歯科医だった夫婦が、アグリツーリズモを経営しているはずだ」

電話番号は、別の友達からもらっていた。

6月も後半のパケーション時期だ。部屋が空いているかどうか不安だったが、電話を試みることにした。

「ハロー、僕たち、チューリッヒでそちらの歯科医院に通った者ですが、今晚、部屋は空いていますか」

「ああ、空いていますよ。でも、最低3泊してもらわないといけないんだけど」

「ああ、勿論、それでOKです」

聞くと、彼らのアグリツーリズモは、意外にも、ヴォルテッラの街から30分ほど走った所だった。

「今晚、寝る場所が見つかった！」

二人は躍るような気持ちで車を走らせた。

たどり着いたアグリツーリズモは、大きな農家を改造した家で、2階に彼らのアパートと宿泊客用の部屋が4つ、共同バスルームが2つ、そして、1階に宿泊客が自由に使える大きなキッチンがセットされていた。鍋からフライパン、食器類、オーブン、料理をするのに必要な物は全て揃っている。

驚いた事に、キッチンの横にはサウナまであった。

何もかも清潔で、さすがスイス人の家である。

昔、歯科医だった夫婦も気さくな人たちで、その夜は彼らと食事をし、ワインを飲みながら夜遅くまで話をした。

翌朝、私たちは朝食用のパンを買うために、2kmほど離れた近くの小さな町に行ってみた。

この町から15kmほど離れた所に地熱発電所があり、100年前に始めてそれを発見したのがフランス人のラルレデッルだったと知る。

そのラルレデッル氏の屋敷がこの町にあった。その屋敷を中心に、少しずつ大きくなったのがこの街らしい。

街の名前はボマランチェ。「柿とオレンジの町」という意味だそうだ。

街の中に入ってみると、想像以上に人が出ていて活気があった。見ていると、若い人も老いた人も素朴さがにじみ出ており、見るからに親切そうだ。

町の中には、言葉で言い表すことは難しいが、何か心に暖かい、癒しの雰囲気が漂っていた。

「わたし、この町に住みたい！」

思わず私は口に出していた。

アグリツーリズモに戻って朝食を食べた後、私とジョン・クロードは綺麗に手入れされた庭に回り、置いてあるベンチに座った。

「さあ、これからどうしよう。又、スイスに帰って仕事を探すか、それとも、ここで何かやってみる？」

「うむむむ〜、スイスでまた仕事探しをして、誰かの会社の為に働くのはもう十分だね」

「うん、出来れば、スイスにはもう戻りたくない」

「そうだね、スイスの人生は、もう終わったな。じゃあ、せっかくトスカーナにたどり着いたのだから、ここで何か自分たちでやってみようか」

「何かって、例えば、何をするの？」

「それはまだ分からないよ。でも、僕たちは、自分たちだけで絶対に何かやれるよ。僕はウェブサイトのアイデアがすでに頭にあるし・・・」

「うん、そうだね、やれるね。イタリアのトスカーナで、何かやってみようか」

「よし、決まった。ここで何かやってみよう。今度はトスカーナ人生だ」

二人は大きくハイタッチをした。

何も見えない先を考えると不安はあったが、私たち二人には必ず生き延びる力があると確信していた。

45歳と50歳の私たちだったが、元気だけが取り柄だ。二人一緒ならまた再出発出来る。今までだって貯金ゼロからスタートし、それでも、ちゃんとした職につき、アパートに住み、楽しく生活をして来たではないか。

勿論、これからは、会社勤めをしていた時のように毎月保証された収入が入ってくること

はないが、その代わりに、自分たちの自由が手に入る。
ワールドツアーでずいぶんお金を使ってしまったが、もうしばらくは大丈夫だろう。
よしっ、未来に賭けてみよう。まずは住居探しからだ！

2000年7月、私とジョン・クロードの新しいトスカーナ人生が始まった。
しかし、それはまた、別の話である。